小泉八雲全集別册

小泉八雲全集

別册

東京

第一書房

雑司ケ谷に於ける墓地

小泉八雲

著者　田部隆次

故小泉八雲氏の著作につきて

私が小泉八雲氏と相知るに到つたは、つい昨今といふさへもいかがと思ふほど、ほんの淺い淺い知合であるから、深く愛敬してゐた先輩であるにも係はらず、其の著書も二十種ほどあるうちて、僅か八九種しか知らず、其の噂さへも漸々此の頃中承知したといふ次第ゆゑ、さしあたつて批評らしいことは申しかねる。けふは只だほんの、其の以前同氏の著書を讀んだ時分の感じだけを述べませう。おひおひ讀み殘しの分をも讀む積りですから、或は將來の評は今日申す所と多少異なるかも知れません。

我が特殊なる風俗の紹介者、解釋者、回護者としての同氏の功勞は、今更改めて言ふまてもあるまい。餘りに溫い同情を以てひたすら我が風俗人情の美なる側面のみを拾ひ、醜い方面、厭な部分は目を塞いて通り過ぎたといふ風があるゆゑ、外國の人々は、同氏の著

書を讀んだ時と實際我が人情風俗に觸れた時と、感を異にすることも屢々ありませう、併し我々日本人は同氏の著書を讀むにつけて毎に慈母に對するやうな思ひがする。私なども時々は餘り贔負目過ぎて裏恥かしいやうなと思ひつつも、或は是れは餘り主觀的な見かたのやうだと思ひながらも坐ろに感謝の涙を催したことがあつた。氏が日本風俗論の幾分が正當で、幾分が主觀的解釋であるかなどいふ點も、大分趣味ある論點かと思ふが、今はそれを論ずべき折でもなく、且つ私は其の任でもないから、旁々今日は單に一種の短篇名家（スケツチライター）としての故人を評して見ませう。いや、評ではない、私の當初の感じのみを述べて見るのです。

私は世間の同氏愛敬者よりもはるかに後れて同氏の著書に觸れたので、しかも年代的には讀みませんでした。丸善で買求めた最初のは、たしか Shadowings 及び A Japanese Miscellany それからその次が In Ghostly Japan であつたかと思ひます。前者では「夢魔」のに關する推理と夢中の飛行に關する說明とを最も面白く讀みました。後者では、犬の吠える聲を殆ど耳元に聞くやうに叙した一節、又それに關する例の主觀的解釋及び At Yaidzu と題した一文——浪の音を物すごく寫し出した獨得の筆、それが今も尚忘れられぬ。總じて海邊の事を叙したのは佳いのがある。辭畫家（ウオドペインタア）といふ評は屢々名文家の上に下される所で、

小泉氏の如きも夙に此の褒稱を得てゐたらしいが、私はそれだけては足らぬやうに思つた。同氏の筆は頗る音樂的てある。平仄を整へるともなく、韻を踏むともなく、語調がおのづから其の物の聲になつて鳴響してゐる。近いところ英譯てダヌンチォの小説を讀んて原文の特質を想像した場合にも、小泉氏の名文を連想したことてあつた。

たしか其の次には Glimpses や Out of the East や Kokoro などいふ作を讀んだ。Glimpses を讀んだ時から個人としての同氏が慕はしくなつた。それまでは只だ名文家として愛讀してゐたに過ぎない。『グリムプセス』は日本にての著書中の最も古いものの一つだが、最初の感じが寫されてあるだけに一しほ味ひがある。かの出雲中學の教師としての日記の如きを讀んては、誰れしも愛敬の心を生ぜざるを得ない。如何にも深切な優しい人柄が浮上つて見える、如何に心性を直覺することに秀てた人て、如何に觀察が穿細てあるかが見える。就中「盆踊」の一章は絶妙てす、烏合會の連中にでも話して聾にかかせて見たい。

Out of the East の中にもいろいろ面白いのがあるが「柔術」と題したのは同氏得意の說であつたらしいから、讀まぬ人には是非讀んて貰ひたい、我が維新の大活動を柔術の極意に基くものと解し、通例悪しく見做す歐化熱を立派な意味に解し、さて日清戰爭に論じ

及ぶあたり、その論の當否はさておき、如何にも捉へかたが面白い。蓋し小泉氏の魔力は一に其の文にある、これは餘りに主觀的な說明のやうだと思ひながらも次第に引込まれて行かざるを得ないほどにチャーミングです。論でも話でも兎角枝に枝の花が咲いて、飛んだ脇路へ外れるが癖だが、その外れるのが本街道を行くよりも面白く、彌々外れて彌々愉快に感ぜしめる。かの Ghostly Japan のうちで或は薰物を論じ或は犬の上を語る間に恍惚として空想に耽るかとすれば、何時の間にか一種の哲學談へ融け込んでゆくのが何ともいはれなく面白かつたが、此の獨得の脈は多少濃淡を異にしてどの作をもどの作をも貫いてゐる。

Exotics and Retrospectives のうちでは、先づ「富士登山の記」が讀みものですが、それは題目を見て期待したほどではなかつた。時々白い雪が岩間に殘つて見えるのを同氏が曾て見た黑く燒けた女の頭蓋骨の齒のみ白かつたのに比したあたり、且つそれから例の瞑想に入つて總て人間の理想は正體に近づいて見れば皆かうしたものだと打眺めたあたりは流石に面白い。Retro. のうちに却つて味ひの深いのがある。「美の凄哀」を論じ、「碧色の心理」を論じ、空色の何故になつかしいかを論じたあたり、特質が見えて最も妙。此の篇中にも例の夢魘哲學の一片があり、又得意の輪廻論、遺傳論などもある。プレトーと佛

教とダアキンとスペンサアとを打つて一丸としようとする著者の哲學談は、論としての是非は格別の話だが、文章として見ると、如何にも神祕的彩色を帶んでゐて、何となく味ひが深い。The Eternal Haunter この小品がまた甚だ可憐です。ホーソオンのやうな筆附といつては言ひたらない、着想の上には彼れ以外、あくまでも十九世紀末のロマンチシストたる趣が見えてゐます。

「心」といふ作「骨董」『怪談』などいふ作も取々に見所があります。『心』の如きは東西文明是非論とも見做すべき箇所があるから二十前後のお人たちは兎も角も一讀なされるがよからう。

之れを要するに、故小泉氏の筆は、諸評家も已にいはれた如く、淸新で流麗であると同時に寂しみを特質とし、神祕の影を帶んでゐます。基督教臭味を拔き去つたホーソオンのやうなところもあり、怖しみを和らげたアランポーのやうな脈も見え、アーギングのやうに善良に深切に、アヂソンのやうに寧細に溫潤に、時々はロマンチシスト風の夢を見てゐるやうな朦朧とした悲觀的な骨脈も見え、それに十九世紀末らしい國體論やら、宗教論、哲學論、倫理論の綾絲が織入れられ、とりわけ一見相容れまじきやうにも思はれるダアキン一派の科學的精神が不思議にも調和を破らずに織入れられてあります。西洋最近の利己

的、功利的、機械的、繁文褥禮的の所謂物質的文明の大壓迫にえ堪へずして暫し東洋に隱れ家を求めた最も多感な最も多想像なファン・ド・シエークルの一天才の紀念だと思へば、故小泉氏の著書は長く東西に特筆すべきものでありませう。

坪内逍遙

序

余はヘルン先生と何等の關係あるものでもなく、また氏の著書に就て多く知るのでもない、されば余が氏の傳に關して何物かを書くといふのは自ら知らざるの謗を免れないであらう。たゞ友人田部君が公務の餘暇數年の勞を費して、その舊師の爲にこの傳記を完成せられたことを喜ぶの餘り、余も亦豫てヘルン氏の人と爲りや、その著作の或物、特に Retrospectives や Fantasies の中に收められた小論文に就て少なからぬ興味をもつて居るので、自ら量らずも茲に少しく氏の思想に就て述べて見ようと思ふのである。

ヘルン氏は萬象の背後に心靈の活動を見るといふ樣な一種深い神祕思想を抱いた文學者であつた。かれは我々の單純なる感覺や感情の奧に過去幾千年來の生の脈搏を感じたのみならず、肉體的表情の一々の上にも祖先以來幾世の靈の活動を見た。氏に從へば、我々人格は我々一代のものではなく、祖先以來幾代かの人格の復合體である、我々の肉の底には祖先以來の生命の流が波立つて居る、我々の肉體は無限の過去から現世に連るはてしなき心靈の柱のこなたの一端に過ぎない、この肉體は無限なる心靈の群衆の物質的標徵である。

斯くして、かれはメキシコ灣の雄大なる藍の色に、過去幾世の樂しき夏の日の碧空を想ひ、熱帶の夕、天を焦す深紅の光に、過去幾世の火山の爆發や林火の狂燄を感じ、面變りゆく我子の顏に亡き父母や祖父母の靈の私語を聞き、愛人と握手の frisson には幾世輪廻の因緣を偲んだ。氏の眼には、この世界は固定せる物體の世界ではない、過去の過去から未來の未來に亘る靈的進化の世界である、不變なる物と物との間に於ける所謂自然科學的法則といふ如きものは物の表面的關係に過ぎないので、その裏面には永遠の過去より永遠の未來に亘る靈的進化の力が働いて居るのである。斯くして氏にはこの平凡なる世界も濃い深い神祕の色を以てゑどられた、所謂詩人の空想なるものも氏には實在其物であつた。氏はその崇拜するゴーチエの Emaux et Camées の中から、三千年の昔希臘殿堂の破風の石となつて白き夢に互の心をかよはした二個の大理石が二人の愛人の白き肉となり、同じ母貝の中に育つて千尋の水底で人知れず囁きかはした二顆の眞珠が相思の齒となり、ボアブディール王の朝ゼネラリッフ宮殿の噴泉のしぶきの下で互に葉と葉でさゝめいた二本の薔薇の花が相思の唇となり、五月の夕べヴェニスの穹窿の上で一つの塒に宿つた二羽の鳩が相思の心臟となつて、昔の情火が新たに二人の間に燃えて居るといふ樣な、うつくしい話を譯して居るが、これらは能く氏の見方を現はして居ると思ふ。氏は好んで幽靈談を書いた、併

しそれは單純な幽靈談として興味を有つたのではなく。上述の如き幽遠深奥な背景の上に立つ所に興味を有つたのである。氏は此の如き見方を以て、我國の文化や種々の昔話を見た、而してそこに日本人自身すら曾て知らない深い魂を見出したのである。

ヘルン氏の考は哲學て云へば所謂物活論に近い考とも云へるてあらうが、所謂普通の物活論と同一視することはてきない、氏が萬象の奥底に見た精神の働きは一々人格的歴史を有つた心靈の活動てある。氏は此考をスペンサーから得たと云つて居るが、スペンサーの進化といふのは單に物質力の進化をいふので、有機體の諸能力が一樣より多樣に進み不統一から統一に進むといふ類に過ぎない。文學者的氣分に富める氏は之を靈的進化の意義に變じ佛教の輪廻說と結合することによつて、その考が著しく詩的色彩の宗教の香味とを帶ぶるに至つた、生物進化の論を精神的意義に解して、浪漫的色彩を帶びたものは前にニーチェがあつたが、ベルグソンも此種の人と見ることができるてあらう。ヘルン氏の考は後者に似た所もあるが單に感傷的で空想的なることはいふまでもない。

愛蘭生れの軍醫がアイオニヤ島て、希臘美人と熱烈なる戀に陷り、英人に對して烈しき反感を有する愛人の兄弟に要撃せられ、愛人によつて僅にその一命を贏ち得たといふ樣な兩親の子として、昔時サッフォーが身を投げたといふリューカディヤ島に生れ、佛蘭西て

育ち、米國に流浪し、終りに東洋の端なる日本の歸化人となつたヘルン氏の一生其物が既に一つのローマンスである。その兩親から受けた多情多感の性質は慘憺たる前半生の運命に鍛はれて、氏の如き感傷的な一文學者を作り上げたのであらう。氏は晩年に於てミスアンスロピックであつたといふが、それは著作にのみ專心沒頭した結果もあらうが、元來感傷的な人で久しく孤獨不遇の境遇に居れば、斯くなるのが寧ろ當然である。而して斯く一方に於て人間から遠ざかると共に、一方に於て本來の社交性は氏の如く廣く萬物に人間の愛を求める樣になつたのであると考へることもできる、氏が萬物の背後に靈の私語を聞いたのもかゝる心の要求に基いたのではなからうか。

數年前余が大久保に住みし頃、一日田部君に伴はれて氏の遺宅を訪れたことがあつた。氏の居室はその生時のまゝに保存せられ、藪に圍まれたる靜な庭に面し、堆き書籍に蔽はれた書齋、並はづれの高いテーブル、ふるぼけたインキ入、水入、不恰好なモノクル、積み重ねられた色々の煙管、坐ろに天才の面影が偲ばれて、景慕の念に堪へなかつたのである。田舍者なる余にはこれが短き東京の生活と共に、長く思出の種となることであらう。

大正三年三月

西田幾多郎

小泉八雲先生を懷ふ

小泉八雲先生の名を知りたるは僕が猶第二高等學校に學んだ時であつた。先輩土井晩翠君既に文科大學に在りて、最後の一年は先生の講筵に侍せられたのと、大谷繞石君第三高等學校より仙臺に轉學せられ、僕と共に「尚志會雜誌」を編輯する關係を生じたるが故に、僕は同君を通じて先生の面影を偲んだのであつた。

明治三十一年九月僕本郷臺の人となりて親しく先生の謦咳に接することを得た。僕は非常なる興味と熱心とを以て先生の講義を筆記した。當時第三年級に芳澤謙吉、大谷繞石、戸澤姑射、淺野和三郎の諸君あり、その選科には本傳の著者も見えてゐた。第二年級には小松原隆二君等がゐた。而して我が第一年級には森清、小日向定次郎、栗原基、米原弘、藤澤周次の諸君ありて、まづ多士濟々と稱して可なるものがあつた。

僕等初心の者にとりてはロセティの評論は餘りに幽邃微妙であつた。されど先生の清く澄んだ歌ふがごとき聲がかすかに微笑を湛ゆる口邊より洩るゝを聞く時は、その事自身が

一種の魔力であつた。僕等は續いてスキンバーンとブラウニングとの評論に心を躍らせた。先生の英文學史の講義は餘りに早口であつたが、趣味豊かなる材料と適切なる批評と、露淀みなく清水のごとく湧き出る華麗なる文字との片言隻句も書き漏らさじと僕等は右手の指頭をインキに汚すをものともせずしてペンを走らせた。

　先生の許にありて三星霜の教を受けしことは僕にとりて終生忘るべからざる追懐である。先生が僕等に遺したるものは文學的事實のみでない、一種の氣品である、情調である。これは實に尊いものである。僕は日本にゐる間はこの事を左程難有い事と氣付かなかつた。しかし歐米を遊歴して幾多の學者と雄辯家の前に立つた時、初めて僕は先生の僕等に遺されしものゝ如何に高貴なるかを理解し得たのであつた。

　僕等は教室以外に於ては先生に接近することを遠慮した。先生が來客を喜ばれぬといふことが誰れ言ふとなく傳つたからであつた。僕が先生を訪問したるは先生が歿せられし年の春であつたと記憶する。僕は高田學長の命を帶びて先生を早稻田の學苑に迎へんがための下相談をなさんがためであつた。當時先生は和服にて座布團の上に正座せられ、長い烟管にて烟草を吸はれた。懐より片目の近眼鏡を取り出されて、一二度僕の顔を眺められた。僕のふつゝかなる使命もどうやら果されて、帝國大學を辭せられたりし先生を番町に迎へ

得たのは僕の甘味な記憶である。

されど先生の稍門に來らるゝ何ぞ遲くして、その去るや何ぞしかく速かなりしぞ。先生一朝此世を棄てゝ早稲田幾百の健兒の眼に涙の玉が輝いた。

先生の未亡人はせめて先生の傳記を纏めて御子孫に遺されんと志された。同時に早稲田大學出版部にても此計畫を立てゝ小泉家との合意の上にこの重任を僕に托せられた。僕は到底その任に堪へぬことを知つた。されど種々なる周圍の事情は僕をしてこの任に當ざるを得ざからしめた。僕は先生の書齋より新聞切拔の材料を集めた。未亡人よりの追懷談を筆記した。兵庫縣知事服部一三氏を旅館に訪れたこともあつた。佐久間信恭氏に就いて先生の熊本時代の逸話を承はつたこともあつた。或夏は燒津に遊んで乙吉爺を音づれて先生の紀念の室に短かき夢を結んだこともあつた。宮の下にチャンバレン教授を訪問して其謦[illegible][illegible]の裡に先生に關する逸事を傾聽したこともあつた。されど先生の英國時代米國時代の事蹟を知るの材料を集むること難く、加ふるに僕の本業たる教育事業に忙殺せられしため、傳記の進捗は極めて遲々たるものがあつて、未亡人に對しても早稲田出版部に對しても汗顏に堪へなかつたのである。

明治四十一年春僕の英國留學の問題は突如として發生した。これは全く豫期せざりし事

件であつた。されどこの機會は容易に逸すべからざるものであつた。父漸く老いんとして、僕また而立の歳を過ぐること一二、將來海外行を斷念せばともかく、之を行はんとすれば、この時に於てせざるを得なかつたのである。而して最も僕の心を惱したるものはこの傳記の事であつた。僕は僕の後任者を見出さねばならなかつた。僕は再三熟考した結果として學習院教授田部隆次君を選擇したのであつた。同君に先生の教を受けし一人にして、ことに先生より課せられたる懸賞論文に於て再三當選の榮を擔はれし先生の愛弟子たりしことは第一の理由、同君は嘗て早稻田の文科に勉學せられしことは第二の理由、同君が偶然にも西大久保に住して小泉家と往復に便なることは第三の理由、最後同君の篤學は僕をして此傳記を完成するに最適任者と信頼せしめたることは第四の理由であつた。

僕は無理に此面倒なる事業を田部君に押しつけた。同君も僕の外遊に同意を表して止むなく承諾せられた。この一事に於て僕は常に同君に感謝の念を懷いてゐるのである

爾來約六年の間、田部君は公務の餘暇を獻げて專心本傳の完成に從事せられた。而して斯の如き名著を出現するに至つたのである。恐くは本書は明治大正に亙りて最も卓逸したる傳記文學である、主人公の天才と著者の勞作と相待ちて日本文學の一寶珠を得たるは僕の欣喜措く能はざる所である。

僕は歐米各邦の旅行に於て小泉先生の聲名の轟き渡れるかを見聞した。僕が先生の一弟子であつたことは多くの歐米人を羨望せしめた。先生の傳記としてはウェットモーア夫人、グールド博士、ケンナード夫人等の述作ありと雖も、是等の著述は大槪先生の日本時代が詳しからざるを惜しむ。然るに田部君のこの書は上記の諸書を參考綜合して該博なる材料を基礎とし、之に日本時代の精細なる記述を加へたるものなれば、既に現はれたる小泉八雲傳中の白眉と稱することが出來る。此書は必ず英譯せらるゝ價値を有するのである。先生もし今日ゐまし給はゞ、必ずやノーベル文藝賞金を得られしことゝ思ふ。先生は日本を戀ひたれども、終に片戀に歸した。僕はこの傳記の出版を機として日本政府が何等かの形式を以て先生の功績を表彰せんことを希望するのである。

大正三年三月二十九日

内ケ崎作三郎

自序

後歸化して夫人の姓と出雲に因んだ名を取つた小泉八雲 Lafcadio Hearn がその原名 Hearn を日本文字で表はしたのは悉く『ヘルン』であつた。好んで印章をつくらせ、この原名の分には種々の字體で文字をあてたが何れも『へるん』『ヘルン』『邊るん』『邊留云』等であつた。夫人もきまつて『ヘルン』と呼んで居られる。『鷺』の定紋を作つたのも『へロン』は『ヘルン』に通じたからであつた。『八雲』と『ハーン』とは關係がない、もしあつても偶然に過ぎない。發音から云へば『ヘルン』よりも『ハーン』の方が比較的正しいやうであるが、この理由で『ヘルン』と呼ぶ事にした。

明治三十七年九月早稻田大學在職中に歿くなつて後、畏友内ケ崎作三郎氏によつて早稻田大學から傳記を出す事になつてゐた。同氏が四十一年九月、三年間の英國留學のため出發せられる事になつて、當時上京して間もなき自分の方へその任務を托せられた。僭越の至りながらそれを引受けて、ヘルンの著書を讀み始め又は讀み直し、内ケ崎氏の集めたへ

ルン傳記に關する諸種の材料を讀んだ。傍らヘルンの文章を紹介せんがためにヘルンの著書を拔萃した物を三種編纂した（有朋堂發行）當時既にできてゐた傳記は、ウエットモーア夫人の物二冊とグールドの物であつた。これらの書籍や材料によつて一通りの事蹟を書いて居るうち『鳥の手紙』が出た。野口氏の物が出た。ケンナード夫人の物もそのうちに出た。エドワード・トマスの物、ヨセフ・ド・スメーの物が出た。『日本の手紙』が出た。一冊出る每に新事實を發見した。多少の訂正を加へ、或章を書き改めなどして遂に今日に到つたのである。近く出版になる物も一二種ある。出る事になつて居る遺稿もある。全集の出版も近づいて居る。それ等を待つて完成を期してゐたのでは『イソップ物語』の麥畑の雲雀の引越しと同じでいつになる事か分らない。ヘルン歿してまさに十年に近い。遺族、友人、弟子の記憶の未だ新しいうちに、ヘルンの傳記の材料を整理して置く事が必要である。まして、外國でできるヘルンの傳記には日本時代に關する分の誤りが甚だ多い。

すでに出た傳記、內ケ崎氏の集めた材料によつた外、松江時代では落合貞三郎氏、藤崎八三郎氏、大學就任當時の事情は故淸水彥五郎氏、大學を止めた頃から早稻田大學時代に到るまでの事情は同じく落合氏、內ケ崎氏に聞くところ多かつた。この外異母妹アトキンソン夫人、友人ウエットモーア夫人（これ等の人々に質問の手紙を出して返事を得るまで

に數ケ月を要する事がある―及びマックドーナルド氏から新事實を聞くところ甚だ多かつた。前後を通じて最も多く聞き、最後に嚴密なる校閲を受けたのは夫人からであつた。その外諸先輩友人の指導助言に負ふところ甚だ多い事をここに記して謹んで謝意を表する。夫人の『思ひ出の記』は夫人の手記にかかる。ウエットモーア夫人の『傳記及び書簡』のうちにある物はこの原文の幾分を落合貞三郎氏が英譯したのである。

南洋サモア島に病を養つてゐたスティヴンソンのやうに、絶東日本にゐて次第にその文名を高めたヘルンは世界の好奇心を惹いた。スティヴンソンと違つたのは、日本に於けるヘルンはその門を固く閉鎖して、遙かに海をこえて訪ね來る人を入れなかつた事である。かくてヘルンに關する幾多の誤りの傳說は傳へられたが、ヘルンはそれを訂さうとはしなかつた。或人はヘルンがかへつてこれを奬勵して居るとも云つた。又或時『ラフカディオ・ヘルンは行方不明になつた』と云ふ意味のアメリカ新聞の記事を見て、非常に喜んだ事もあつた。夫人への遺言のうちにも『自分の死んだあとは、そつと骨を三四錢の瓶に入れて、淋しい田舍の人の知らない寺に埋めてしまへ。もし人が尋ねたら、あれはもうとつくに死にましたと何氣なく答へられよ、これは決して常談でない』と云つた。ヘルンの歿後アメ

リカの現代人名辭書（フーズ・フー）から、毎年ヘルンの略傳の原稿を送つて校訂をもとめたが、一回もこれに答へなかつた事が發見された。

これには世間（ソサイテー）から遠ざかつて孤獨（ソリテユード）を求むる事が餘りに極端であつた事にも原因があらう。家族との話のうちにも偶然そこに及んだ時「そんな不快な話は止めよう」と云つた程、ヘルンに取つては過去の或部分は不幸の思ひ出であつた事にも原因があらう。

生前には謎であつたヘルンの生涯も、歿後發表されたその書簡（長らく各方面の友人親戚に向つて送つた書簡は、云ひ合せたやうに、保存されてゐた）遺稿のうちに發見された自傳の一部、英國にある三人の妹及びその他の親戚、アメリカにある一人の弟及び多くの友人、日本では遺族を始め、松江時代からの學生友人、それ等の談話報告から次第に正確なるヘルンの生涯は知られるやうになつた。

ヘルンの歿後、世界の重なる雜誌新聞にあらはれたる無數の記事を除いて、すでに一部の書籍となつた物について述べる。

一、エリザベス・ビスランド女史（ウヱツトモーア夫人）『傳記及び書簡集』二冊、（一九〇六年）

ヘルンの歿後、傳記編纂の計畫起つた時、女史はその任に當つて普くヘルンの友人弟子

からその手紙を集めて傳記の材料にしようとしたが、後、手紙を主にして傳記を内容とする事になつた。ヘルンの遺族及び友人側から出たヘルンの傳記である。

二、同じ人、『日本の手紙』（一九一〇年）

チェムバレン氏の手紙は前二冊にも少からず發表されて居るが、後々發見された物とメースン氏へ送つた物、及び燒津から留守宅の夫人へヘルンの日本文で書き送つた物の翻譯とを集めて、書簡集の第三冊『日本の手紙』と題して前二冊より後るる事四年、一九一〇年に出版になつた。

三、ヘンリー・ワトキン、『鳥の手紙』（一九〇八年）

シンシナーティ時代の老友ヘンリー・ワトキンに送つた手紙（シンシナーティ時代から日本の神戸時代に到る）及びシンシナーティを去つてニユ・オルリアンスに到り、オージアス・ミッドウィンターの名でシンシナーティの新聞に通信した文章數篇、及び同じくシンシナーティでヘルンが學問趣味のある或年長の婦人と交通した物が一束ワトキンの手にあつた物、以上を合せて出版した物である。『鳥』はヘルンが自らの風采をポーの『鳥（レーヴン）』にたとへて、自分の名の代りに使つたのであつた。

四、グールド、『ラフカディオ・ヘルンに關して』（一九〇八年）

ヘルンの著書を讀んで、ニユ・オルレアンス時代に賞讃の手紙を送つて友人となつたフイラデルフイヤの眼科醫グールドには『バイオグラフイカル・クリニツクス』その他文學に關する著述がある。一八八九年ヘルンが西印度から歸つて暫らくその家に滯在した事があつた。ヘルンがニユ・オルリアンスを出てから、藏書その他を初めはアルデン氏に托した。日本に出發した時さらにグールドに托したのであつた。ヘルンが日本に來た時グールドに八十弗の負債があつた。日本に到着して間もなくハーパー書肆と絶縁して一時困つて居た時グールドからこの催促を受けた。ヘルンは預けてある書籍を處分してくれと答へた。同時にヘルンはそのために藏書の全部を奪はれた物と斷念してゐた。ヘルンの歿後『死人に口なし』と思つたグールドは或は書簡に或は文章に（『リテラリー・ダイヂエスト』が一例）ヘルンを讒謗して到らざるところなく、又自らをヘルンの親友と名のり、ヘルンがアメリカを去つた時、書籍全部を自分に讓與したとまで書いたのであつた。ウエツトモーア夫人の傳記の出るに及んで、この書籍はヘルンの讓つた物でなく、かへつてヘルンが奪はれた物である事が偶然發見された。グールド氏の立場がなくなつた。ヘルンの技術を賞讚すると共に、その人物を誹謗し、併せて自分以外のヘルンの友人に對して惡聲を放つためにに書かれたのがこの傳記である。序文に『この書の出版實費を差引いて餘分のあつた時、

日本領事を經るか、その他の方法てヘルン夫人に送る筈」と書いて居る。ただこの書はこの動機から出て居るにも拘らず、ヘルンの文章、修養等に關して深い尊敬と感嘆を表して居るのである。ヘルンの友人ミッチヱル・マックドーナルド氏は怒つて遺族のために藏書その他を取りかへさうとして辯護士カメル氏を代理として訴訟に及んだ。その結果八十弗の賃金のために賣拂した殘りの藏書とフローベルの『聖アントニーの誘惑』の飜譯の原稿はかへつたが、ヘルン自身の創作飜譯の切拔帖その他は未だかへらない。この事件のため、グールドはその名聲を失し、フィラデルフィヤに於ける眼科の開業（一日五百弗の收入のあつた）を閉ぢて、ニユ・ヨークの郊外に退き、再びフィラデルフィヤに歸る事はなくなつた。

五、野口米次郎、『日本に於けるラフカディオ・ヘルン』（一九一〇年）

ヘルンの遺族友人からヘルンの逸事を聞き、自ら燒津を訪うて、ヘルンの宿をした山口乙吉と話しなどしてできたヘルンに同情のある優しい書物である。

六、ケンナード夫人、『ラフカディオ・ヘルン、傳記及び著書』（一九一二年）

ケンナード夫人は雜誌『十九世紀』に二回ヘルンの事を書いた事があつた。後ヘルンの異母妹ミンニー（アトキンソン夫人）と共に遺族訪問のために明治四十二年來朝した。へ

ルンがこのミンニーに送つた手紙の大部分が出て居るところ、及び英國の親戚側の記錄の多いところにこの書物の價値がある。ヘルンの幼時を記したところは自分もこの著書に負ふところ甚だ多い。しかしこの書物ばかりでないが、日本時代に於ける著しき事實の誤り、たとへば大學の俸給を年貳百圓と記した事、自分で會うてゐながら四人の子女の名を悉く間違つて記してある事、ミンニーから直接自分と共に聞いた事實にも往々誤りある事等を考へると日本時代以外の事實の正確も疑ひたくなるのである。

七、ヨセフ・ド・スメー、『ラフカディオ・ヘルン』（一九一一年）

佛人ド・スメーはヘルンの著書人物及び著述に興味を有するやうになつたのは、ヘルンの歿後獨逸のタウフニッツ版で出た物を讀み出してからであつた。一冊又一冊と追うて遂に全部を讀み終つた。書簡集を讀んだ。ヘルンに關する一切の物を涉つた。かくして二五〇ページに餘る賞讃的一大論文ができたのがこの書物である。マックドーナルド氏はこれをヘルンに關してこれまでに出た最もよい書物と云つて居る。ド・スメーは其後ヘルンの『骨董』を譯した。ついでに云ふがヘルンの佛譯のうちではマルク・ローチエの分最も多い。本間久雄譯『藝術の起源』の原著者ヒルンの夫人はフインランドに於けるヘルンの譯者である。

八、エドワード・トマス『ラフカディオ・ヘルン』（一九一二年）

傳記叢書のうちの一冊で、小冊子である。

その外、マーク・トウエーンの『ビブリオグラフィー』を書いたマール・ヂョンソンが近々にヘルンの『ビブリオグラフィー』を出す事になつて居る。ヘルンが智力的日本の代表と賞讃した雨森信成、英佛獨の三國語に精通し、ヘルンをして『何を聞いても知らぬ事のない雨森』と感ぜしめ、ヘルンの歿後『大西洋評論』にその妙文でヘルンの事を書いたその不思議な雨森と重に佛教について往復問答した時の手紙が雨森夫人から米ノ葉の手に渡つて整理されて出版されると云ふ噂もある。

ヘルンは飜譯に小說に紀行に論文に近世散文詩の一大家である。歿後發表された書簡はクーパー、フィッヂエラルド、メレディスの書簡と共に英文學に於て第一流と稱せられて居る。ヘルンの英或は米文學史に於ける地位は分類のうちに入れられない程一種特別な物（ユニーク）であらう。デクインシーやヂョージ・ボアローや或はエドワード・フィッヂエラルドにも幾分類似點が多からう。ヘルンは文人として白人の二大偏見、人種的及び宗教的の二大偏見に對してその他の異人種殊に日本人のために戰つた義俠なる戰士であつた。白人と同じ

く黒人にも黄人にも同じ人情、喜怒哀樂の存する事を教へた人道の僧侶であつた。ただ事蹟から見ても、英人を父とし、ギリシャ人を母とし、ギリシャに生れアイルランド、ウエルース、英國、佛國に育ち、米國に立身し、西印度に渡り、日本婦人を娶りて日本に歸化し、佛式を以て葬られたる第一の西洋人であつたと云ふ事が既に尋常と云へないではないか。その性格から云つてもボヘミヤンにしてピユリタン、最も人なつかしがりにて最も人を避け、退隱的にして奮鬪的、その修養は貧苦のうちに自ら成されたのであつた。かくの如き人の閲歷、心理は最も研究に値するではないか。

最後の十四年半を日本の紹介、辯護、說明のために捧げたヘルンの著書を疎外して今日世界に於ける日本の同情者の事を考へる事はできない。ヘルンの日本の記事は讀者をして平凡なる物にも新しい深い意味を見出す事を教へる。ヘルンの靈妙な筆に現れた日本の記事は世界の人々をして或は日本を愛せしめ、又時として畏れしむるに到つた。牧野男が以前日本びいきを以て名高い伊太利皇太后陛下に始めて拜謁した時、第一に聞かれたのはラフカディオ・ヘルンの事であつた。アメリカ合衆國前大統領ルーズウェルトの如きはヘルンの著書によつて日本人を研究し、その結果日本人の畏るべき所以を知つて排日の意見を抱くに到つたと云ふのは、（その說の正否はとにかく）歸一教會の席上で、故ドクトル・

グリーンの説くところであつたと云はれて居る。アメリカ海軍の當局者が、その出版の當時、將校以上に勸めてヘルンの『神國日本』を讀ましめた事も事實である。これ等の點からもヘルン研究の必要はなからうか。今日西大久保の遺族は故人の邸宅、書齋、墓地を見舞はんがために來る遠來の外人のために時として忙殺される事がある。

ヘルンは自分の恩師である。この傳記は一弟子の書いた恩師の傳記である。ヘルンはかくの如き一生を送り、かくの如く考へたと思ふところを、著書書簡その他の信ずべき材料によりて忠實に書いたに過ぎない。自分にそれだけの學殖や判斷がないからヘルンの考や行爲は批評しない。しかし同時に『引倒し』をしないやうに事實の正確を最も貴んだのである。ヘルンはカーライルの如く『うそつき』嫌ひであつた。入齒でさへも『うそつき』だから嫌ひ、左の眼の『星』を修飾しなかつたのも『うそつき』嫌ひからであつた。お世辭も大嫌ひ、幼時大叔母の前でお世辭を云つた人を罵倒した逸事がある。苟くも事實をまげて我佛貴くしようとしたら、クロムウェルのやうにヘルンから『そのまま描け』と大喝されたに相違ないのである。

この傳記の出版になる時坪内博士の序文を頂く事になつてゐたが、博士の目下の病勢は

遺憾ながら新しく稿を起される事を許さないので、以前ヘルンの歿後間もなく『新小説』に寄せられし物を博士の許しを得てのせる事にした。

自分は前後に只一回小泉先生を訪うた事があつた。それは小泉先生が大學を出た明治三十六年の夏自分が上京した時であつた。先生が大學を出た事を聞いて同情を表するために、もとより面會を豫期しないでただ玄關に名刺を殘して歸るつもりであつた。意外にも面會する事を得た。談先生の著述に及んで、自分は先生の『回顧』や『影』のうちの『幻想』を最も興味を以て讀んだ事をのべた時、先生は喜んであの論文は未だ廣く世間から認められないが、この頃フランスの批評界で注目するやうになつたと云はれた。事實サー・エドウィン・アーノルドが『異國情趣と回顧』を批評した時も前者を賞めたたへて後者には餘り論及しなかつたのであつた。自分は先生の筆にチャームされて最も愛する讀物の一として居るが、夢の中に飛ぶのは幾百萬年以前の鳥であつた時の記憶の再現であらうと云ふやうな論文は單に空想の美文としてではなく哲學科學としてはどれ程の價値があるかを知らなかつた。同じく小泉先生のこの種の論文に深い興味を有する西田博士からヘルンの哲學に關する論文を得て序文とする事を甚だ光榮として喜ぶのである。

再序、改版に際して

私が小泉先生の傳記を始めて出したのは大正三年四月であつた。その後小泉先生の書物は幾冊か續いて出た。先生に關する新しい評傳も現れた。先生の東京帝國大學文學部時代の講義筆記は幾冊か出版された。すでに米國で出版されたのは七冊、外に日本で出版の物もあるが、未發表の物もあるから今後も引續き出版される事と考へる。書簡もその後幾種類か外國の雜誌で現れたが、日本でも市河三喜博士の編纂にかかる書簡集が出版になつた。將來又意外の方面から現れないとも限らない。

先生の生前、單行本となつて出版された物、もしくは先生の計畫中であつたので歿後まもなく現れた物以外に、出版された物はつぎの通りであつた。

一『印象派作家の日記』　一九一一年
二『氣まぐれ、その外』　一九一四年
三『東西文學評論』　一九二三年

四『アメリカ雑纂』二冊　　一九二四年
五『西洋落穂』　二冊　　一九二五年
六『社說』　　　　　　　一九二六年
七『神戸クロニクル社說』

以上七種のうち一はフェリス・グリーンスレット氏の編纂、二と六はチャールス・バットスン氏の編纂、三四五はアルバート・モーデル氏、七は故マックドーナルド氏の編纂した物である。何れも雜誌新聞に發表されたままの物で、單行本にならうとは先生の夢にも思はなかつた物もある。これ等のうちに編纂者と苦肆が違ふために重複した物も少しはある。

もとより先生の記者生活時代が長かつたから先生の筆になつた物は未だ外に殘つて居る。

先生の飜譯も歿後になつて現れた。生前の物は『クレオパトラの一夜その他』『シルヴェストル・ボンナードの罪』の二部であつたが、歿後明治四十三年故マックドーナルド氏の好意によつて出版になつた『聖アンソニーの誘惑』の外に一九二四年にアルバート・モーデル氏が編纂出版したマウパッサンの短篇集『聖センソニーその他』がある。この種の飜譯は未だ外に出版になる豫定と聞いて居る。

それから一九二二年にハウトン・ミフリンから『ラフカディオ・ヘルン文集』が一部十

六冊となつて出版になつた。單行本全部の外にビスランド女史編纂の書簡集三冊と前記の『印象派作家の日記』及び『きまぐれその外』が加はつて居る。この文集出版のためにハウトン・ミフリン書肆は特に日本へ寫眞師バートン・ホームズ氏を派遣して先生及び先生の作品に關係のある寫眞を撮らせてその挿畫にした。

『ラフカディオ・ヘルン』の題で、小冊子ではあるがよく先生を理解した評傳を書いた英人エドワード・トマス氏（一八七八年――一九一七年）は、大戰に參加して佛蘭の戰場で戰死した。この人はオックスフォド大學出身の有望なる詩人評論家隨筆家であつた

それから一九二四年に『ラフカディオ・ヘルンのアメリカ時代』と題して先生のアメリカ時代だけを詳しく書いた大冊の傳記が出た。この著者ティンカー氏は先生の或點に關して或人々の辯護のために書いたのではないかと思はれる程、時々偏したやうなところがある。しかし私はこの書物を參考してアメリカ時代の記事を少し書き直した。それから先生と同行して日本に來た畫家ウェルドン氏の記憶畫及び先生が『デイリー・アイテム』のために描いた漫畫をいくつかこの書物から借りた。

日本に於て小泉先生に關係のある場所のうち、松江市北堀町鹽見繩手の先生の舊居は持主根岸磐井氏の特志によつて完全に保存され、先生のあとを訪れて來る人々に開放されて居る。なほこの松江市には先生を記念するための八雲會と云ふ名の會がある。小泉家ではここへ先生が生前いつも使用された机と椅子とを寄附された。

燒津には小學校内に記念碑がある。それから先生が滯在した家にも目標ができて居る。

先生の富久町時代の家は今は建てかはつて居る。

西大久保で今遺族の住居になつて居るところは、先生が邸宅購求の後建增をされた書齋(これも少し場所が變つて居る)の方で、もとからあつた建物はこはされて模様替になつた。大きな竹藪など、その外の舊態はもう見られない。

書齋にあつた先生の藏書はグールドの手から歸つたアメリカ時代の書籍を加へて、その後整理されて富山高等學校へ讓られた。この書物の卷末にあるヘルン文庫の書目はそれである。この書物の第一版に附した書目は、先生の歿後置いてあつたままに列記した物とアメリカから歸つた物とを別々にして出したのであつた。この二つを一緒にして重複した物の多數を除いて急いで杜撰な分類をしてできたのがヘルン文庫の目錄である。しかし少々

てはあるがヘルン文庫の冊數は先生の藏書よりも減じて居る。たとへばグールドから書物を取りかへした時など色々の世話になつた人々への御禮は先方の希望によつて先生の手澤本を使つた事などあるからである。

目下小泉先生に關する一切の文書典籍の最も多く集まつて居るところは東京帝國大學の圖書館である。大正十二年大震火災のあとで、アメリカ合衆國マサチユセツツ州ダウルトンのミス・クレーンと云ふ人（日本に遊んだ事はないがラフカディオ・ヘルンの作を通じて日本に同情をもつ人）が、ヘルンの記念として何か英文學その他に關する物を購求して圖書館復興の一端にあてて貰ひたいと云つて五百弗を寄附して來た時、結局それを基としてヘルンに關する物を集める事に決定して、市河博士がその任に當つて鋭意集めたのであつた。そのために費された資金は勿論その寄附額の數倍に上つたと聞いて居る。

卷末にある先生の燒津からの婦人の手紙は先生の二男京都帝國大學文學部出身の稻垣巖君の飜譯にかかる。

先生の著作それぞれに關する記事は凡て全集各卷の『あとがき』に讓つて、ここでは凡て省略する事にした。

昭和二年十二月五日

田部隆次

小泉八雲全集別册目次

小泉八雲

一　ギリシヤからアイルランドへ

挿繪目錄

小泉八雲

一　ギリシヤからアイルランドへ

ヘルンの履歴書――誕生――リユカディヤ――祖先――祖父――父――叔父――アイオニヤの驗援――母――ヘルンの血統――父母の結婚――ヘルンの幼名――歸國――ダブリン――母の性質――大叔母――父母の不和――離婚――父の再婚――父の死――當時の事情――父の妹の說明――ヘルンの解釋――ヘルンの父母の記憶――ヘルンの一生に通じたる母に對する同情

ヘルンの傳記の材料として信ずべき物の第一に、ヘルンが早稻田大學のために書いた簡單な履歷書がある。

小泉八雲（ラフカディオ・ヘルン）元英國臣民。一八五〇年、アイオニヤ列島リユカディヤ（サンタ・マウラ）に生る。アイルランド、英國、ウエールス、（及び一時

は佛國）にて成人す。一八六九年、アメリカに渡り、印刷人及び新聞記者となり、遂にニユ・オルリアンス新聞の文學部主筆となる。ニユ・オルリアンスにて當時ニユ・オルリアンス博覽會の事務官。後兵庫縣知事なる服部一三氏にあふ。一八八七年より一八八九年まで佛領西印度のマルティニークに滯在。一八九〇年、ハーパー兄弟書肆より日本に派遣せらる。當時の文部次官服部氏の好意により、出雲松江の尋常中學校に於て英語教師の地位を得。一八九一年の秋、熊本に赴き、第五高等中學校に教へて一八九四年に到る、一八九四年、神戸に赴き、暫時「神戸クロニクル」の記者となる。一八九五年、日本臣民となる。一八九六年、東京帝國大學に招かれて講師となり、一九〇三年まで英文學の講座を擔任す。――その間六年七ケ月。日本に關する著書十一部あり。

服部一三を文部次官としたのはヘルンの思ひ違ひで、實は普通學務局長

即ち、ヘルンは一八五〇年（嘉永三年ペルリ來朝と同年）六月二十七日、ギリシヤの西北アイオニヤ列島のうちの Santa Maura（サンタ・マウラ） 古への Leucadia（リユカディヤ） 近世ギリシヤ人が普通に云ふ Lefcada（レフカダ） 又は Leukas（リユカス） に生れた。

ヘルンが自ら家人に示したのはこの月日であるが、ヘルンの祖父がヘルンの兩親に與へた『バイブル』の白紙(フライリーフ)に、Patricio Lafcadio Tessima Carlos Hearn 一八五〇年、八月誕生と記入してあるとケンナード夫人は云ふ。云ふまでもなく誕生死亡の日附を『バイブル』に記入するのが西洋の習慣である。

この島はもとギリシヤ本土と陸續きになつてゐたのを、紀元前七百年の頃、コリンス人が切り離したのである。島は土地豐饒、山には深林あり、岡には葡萄畠や橄欖の林が繁つて居る。女詩人サッフォーが自殺したと傳へられて居るのもこの島。罪人の手足に無數の鳥を結んで輕く落つるやうに絶壁から投げ落したと云はれるアポロの殿堂のあるのもこの島。若きヘルンは傳說の多いこの島に生れたのであつた。

ヘルンの父はアイルランドの人、Charles(チャールス) Bush(ブッシュ) Hearn(ヘルン) と云ふ當時ギリシヤ駐在步兵ノッテインガムシャイア第四十五聯隊附の軍醫であつた。

少しく遡りてヘルンの祖先を尋ねて見る。一七三一年アイルランド總督ドルセット公附の牧師となつて英國から渡つたダニエル・ヂェームス・ヘルンは、ヘルンの曾祖父でアイルランドに於けるヘルン家の先祖であると信ぜられて居る。その以前の祖先は、ケルト人とサキソン人との混合人種で、英國の東北ノーザムバランド州フォードに居城を有してゐ

たサー・ヒユ・ド・ヘルン（スコツトの『マーミオン』中の一人物）は、その祖先の一族であると云はれて居る。『高處に昇らんとする鷺』（The Her n Seeks the Heights）の題目のある鷺がその紋章であつた。後年ヘルンが日本服の紋章に鷺を選んだのは同じ理由であつた。英國の或地方ではヘルンの性はヂプシー種族から出て居ると信ぜられて居る。ヘルン家の人々にも自分等の脈管にヂプシーの血が走つて居ると信じて居る者がある。ラフカディオ・ヘルンの叔母なる人の話にアイルランドの田舍道で、ヂプシーの一隊に遇つた時、そのうちの一老婦人が進んで、ミス・ヘルンの身の上を占ふと云ひ出してその手を見た。それから仔細らしく自分の指で、その手を撫でて『あなたは私共の仲間です、その證據はここにあります』と云つたと云ふ事である。

　總督附牧師ダニエル・ヂエームス・ヘルンの一族から、やがて幾多の軍人を出すに到つた。ヘルンの祖父及び祖父の多くの伯叔父はウエリント公に隨つて、スペインに戰つた。この祖父は戰爭中に累進して大佐となり、Vittoria（ヴイツトリヤ）の戰爭には第四十三聯隊長となつて奮戰した。後リチャード・ホームズの娘エリザベス・ホームズを娶つて男子二人女子四人をあげた。長子はヘルンの父、その父に倣つて一八四二年四月十五日軍籍に入りて軍醫となつたチャールス・ブッシユ・ヘルン。二男は畫家リチャード・ヘルン。女子は、アンニー、

ディス、リジー及びスーザンの四人であつた。リチャード・ヘルンは巴里で畫家となつた。ヂャン・フランソア・ミレーなどの畫家と親しく、アイルランド出身の畫家と呼ばれてかなり有名であつた。その性癖などラフカディオ・ヘルンに類したところがあつたと云はれて居る。ヘルンの祖母の一族ホームズ家の方にはアイルランドで名高い裁判官や文人を多く出して居る。詩人論文家として、及び教育に關する著述で日本にもその名を知られて居るエドモンド・ホームズ、『印度叛亂史』その他の歴史的著書で知られて居るその弟ライス・ホームズ、同じく著述家のその妹エルシー・ホームズはヘルンの父とまたいとこである。ヘルンは後年夫人に向つて『あなたはさむらいの子だが、私にも商人の血はありません。さむらいと美術家の血はあります』と云つた。

チャールス・ヘルン所屬の聯隊は、一八四六年當時英國の保護の下にあつたアイオニヤ列島中のコルフ島に駐在してゐた。一八四八年頃には歐洲一體に多少の動亂があつた。その動搖の餘波を受けてか、アイオニヤ列島中のセファロニヤでは一八四九年頃に獨立を宣言して、自ら執政者を選んだ。當時英國の知事シートン子爵の要求により、更に軍隊は增遣されて、騷擾平定の後、從來のコルフ駐在の軍隊と共にアイオニヤ諸島、北はコルフから南はセリゴーに到るまで配置された。

ラフカディオ。ヘルンの母は Rosa Tessima(ローザ・テッシマ) と云ふコルフの人とも、セリゴーの人とも云はれて居る。國籍も正確には分らない。ギリシャ本島出の家柄の女であつたと云ふのが、一般の說であるが、モルタ島生れの人であつたと云ふ說もある。アイオニヤ列島は種々の時代にギリシャ人、イタリヤ人、ユダヤ人、モルタ人の移住するところであつた事、後彼女が夫と別れた時、アイオニヤに歸らないでモルタに赴いた事、及びラフカディオの幼時イタリヤ語と近世ギリシャ語の雜種のやうな言語を話した事を綜合して見れば、或はラフカディオの母はモルタ生れの人であつたかも知れない。果して然らば、ラフカディオは母の方からアラビヤ人の血を傳へてゐないとも限らない。アラビヤ人は亞細亞、亞弗利加の沙漠から出て、地中海の沿岸を荒らしてモルタに落着き、ヴェニスから移住したモルタ人と雜婚したからである。ラフカディオ自身も『母の方から東洋人の血が傳はつて居るかも知れない、何とも分らない』と云つて居るが、又或時は『自分は血統から云へば、半分東洋人だから、東洋の事物は何でも好きであるのも不思議ではない』(全集第十二卷二四八)と云つて居る。

『私共は無數の生命の化合物である。死んだ人々は死なないで私共のうちに生きて居る。心臟の一つ一つの鼓動のうちに、かすかに動いて居る』と云つたラフカディオ・ヘルン自

身は正しくその標本であつた。その數奇なる一生のうちに現れて居る特色は悉く基づくところがあつた。放浪を愛する事は、アラビヤ人やヂプシー族の如く、熱情はケルト人より受け、豐富なる空想は東洋より傳へ、義務に忠實にして勤勉力行なるはアングロ・サキソンの特色を有したのである。ヘルンの作を讀んで、この人必ず純粹の英人ではない。英人は中心尊大にして異邦異人種の文物を理解し同情する事はない。必ず異人種の血を分けたに相違ないと斷言した英人があつた。

軍醫チャールス・ブッシュ・ヘルンの壯時の寫眞は今も殘つて居る。當時流行の頰髯のある立派な人であつた。今日もライン地方の舊領地でドイツの娘を娶つて歸る多數の米國の兵士や將校があつたり、佛國の戰場でその少女と結婚して歸つたスコットランドの將卒がある事が不思議でないやうに、この若い英國の軍醫とローザ・テッシマは、どの島かで相思の仲となつた。娘の親戚一同は之に反對した。英國に對する敵愾心も加はつたのであつた。遂に娘の兄弟がこの軍醫を道に要撃して、殺したつもりで逃げた。半死の愛人を介抱して蘇生させたのはローザであつた。命の親のローザと携へてギリシヤ教の式で結婚したと傳へられて居る。要撃したのは兄弟ではなく、戀の敵であつたとも、又兄弟にしても戀敵にしても相手は七人であつたとも、否七人でなくて、チャールス。ヘルンの受けた

創が亡つてあつたとも傳へられて居る。この傳說はどこまでも傳說と見るべき物であらう。ヘルンがグールドに與へた手紙（全集第九卷四〇三）には『私の兩親の結婚については奇談（クイア・ローマンス）があるに』とだけ自白して居る。グールドはヘルンから聞いたと云つてこの要擊談の一つを傳へて居るが、ヘルンは家族に對して『自分の父の結婚は頗る小說的で、母の親戚は多く不同意であつた』とだけ云つたが、この要擊に關する話はなかつた。

この小說的結婚によつて三人の男兒が生れた。長子は生後間もなく死んだが、あとの二人は成人した。後の小泉八雲、ラフカディオ・ヘルンはその二男であつた。

ラフカディオの生れたのは一八五〇年六月、場所はリユカディヤであつた。父からはアイルランドに因んだ名のパトリシオと父の名のチヤールスとを貰ひ、母からは出生地に因んだラフカディオと母の名のテッシマを貰つてパトリシオ・ラフカディオ・テッシマ・チヤールス・ヘルンと命名された。もつと簡略に云へば、パトリシオ・ラフカディオ・ヘルンは彼の名であつた。パトリシオ卽ちパトリックの名はアイルランドでは餘りに普通で、アイルランド人の別名をパッディと呼ぶ程であるのも一原因であつたらう。或は父に對する反感も一つの原因であつたらう。ヘルンはその後アメリカへ渡ると共にパトリシオを捨てて、ラフカディオばかりをいつも用ふる事にした。アメリカから日本に渡つた頃より、

ラフカディオ・ヘルンの文名世界に高くなるに及んで、當年の喞白パトリシオが卽ちラフカディオ・ヘルンである事を發見して驚いた親戚の老人や學友は少くなかつた。

一八五一年の末、交替の時機が來て、チャールス・ヘルンは妻と當時二歳程のラフカディオを引きつれてリユカディヤを引上げた。（英國がアイオニヤ諸島をギリシャに讓つて駐在兵を引上げたのは一八六四年であつた）ラフカディオがリユカディヤに止まる事僅に一年半であつたが、ここで生れてここで育つたと云ふ事がラフカディオの一生を通じて深い印象を與へた。途中モルタ島に寄つた。ヘルンが晩年の手紙に「幼時モルタ島に立寄つて、そこの不思議な物語を父から聞いたやうに覺えて居る」とあるのは、恐らく後に父から聞いたのであらう。

モルタ島で、夫は再び西印度赴任の途につき、夫人と幼兒は侍女と共に巴里に赴いて、夫の弟、畫家リチャードの許に滯在した。チャールス・ヘルンは豫じめ弟に手紙を送つて、自分の妻がダブリンに着いて後の事を依賴した。さすが兄思ひのリチャードに取つてもこの一大任務を果す事は容易でない事情があつた。

當時ダブリンにはチャールスやリチャードの母とその未婚の妹スーザンとがゐた，この スーザン叔母は、筆まめて、根氣よくつけた詳しい日記を殘して居る。出版にならなかつ

た小說の原稿も存して居るとの事である。當時のダブリンでは、新舊二教徒は相反目して政治社會交際社會にも、その惡影響を與へてゐた。ヘルン家の一族はダブリンに於ける新教徒の錚々たる人々、あらゆる新教徒の運動や會合に熱心であつた。ギリシャ教か、ローマ教か、とにかく新教に屬しない異國人のチャールス・ヘルン新夫人が、この家庭に入りて無事に納まりさうにない事を熟知せるリチャードは、先づ兄嫁、ラフカディォ及び侍女の一行をリヴァプールに停めて、自ら先きにダブリンに赴いて、先方との意志疏通を計つたのであつた。スーザン・ヘルンの日記に「一八五二年七月二十八日、リチャードさんはリヴァプールから十時に着いて、金曜日の夕方七時に歸る事になつた。一兩日中に、チャールスさんの妻と子供を連れて來る筈、どうか萬事好都合に行くやうにと祈る」「七月二十九日、西印度グレナダから、六月二十五日附の手紙チャールスさんから參る。なつかしの兄上。至極壯健なれども、妻子の無事到着の報知を得るまでは心配にたへないとの事。何れ間もなく一同無事到着されよう」それから「八月一日、リチャードさんは今朝七時に、チャールスさんの妻子と、若い小綺麗な女中とをつれて歸着。ローザは私共一同に愛されさう、ラフカディォは人好きのする可愛い子供」とある。この若い女中は召使であると共に通譯でもあつた。若い夫人とヘルン家の人々との意志疏通は、この若い女中の不完全な

る通譯に心細くも、又危くも、たよつた次第であつた。
　南方の暖い曇りない日光、橄欖の林、葡萄の畠、青い空と青い海の間に育つた新夫人に取つては、烟と霧の多い、日光の輝く事の少い、薄汚い、ダブリンの市街生活はたへ難い物であつた。ヘルン家の人々の說によれば、この新夫人は綺麗な目をした美しい人であつたが、又怒り易い烈しい性質の人であつた。音樂の才はあつたが、その才を磨くために努力する事もなく、怜悧であつたが教育はなかつた。安樂椅子(ソファ)にもたれて、東洋婦人的に終日爲す事もなく、自分の境遇の淋しい事と、アイルランドの氣候と英語の覺え難き事とに對する不平ばかりこぼしてゐた。子供に對しても氣まぐれて、時々無理な折檻をしたと云ふ事である。勿論これは姑、小姑側の說であつた。
　唯一人宗教上の見地からこの新夫人に對して特別に同情する人があつた。それはラフカディオ・ヘルンの一生に大關係のある Sally Brenane(サレー・ブレネーン) と呼ばれたチャールス・ヘルンの母方の叔母であつた。ジャスティン・ブレネーンと云ふ舊信者の財産家に嫁して、自分も改宗して熱心なる舊教徒となつた未亡人であつた。ヘルン一家は英國教會に屬して、自分一人取除けてあるところから、この新夫人に同情するに到つた。その甥チャールスもこの叔母の愛するところであつた。子がないから、ラフカディオを養うて、ローマ舊教の教育を

施し、ウエッキスフォード州にある莫大なる財産の相續者としようと思ひついたのであつた。

それから、ラフカディオ母子は、ダブリン郊外 Rathmines（ラスマインス）にあるブレネーンの邸宅に移つた。ラフカディオの母に取つては、この時ばかりはやや幸福であつた。ブレネーンの馬車て、御寺參りをしたり、ダブリン市中へ買物に出たりして氣晴らしをした。この時のラフカディオは異樣の服裝をして耳輪をつけた黑い髮のオリーヴ色の顏色の子供であつた。

一八五三年八月のスーザン。ヘルンの日記には、「西印度にあるチャールス。ヘルンの記事が多い。黃熱病が軍隊に蔓延してチャールスもかかつた。それから、八月十九日にはなつかしいチャールスさんから七月二十八日の手紙が來た。病兵と共に送還されるらしいとの事、それなら九月の末か十月の初めには逢はれる』とあつて、間もなく、チャールスはサウサムトンへ向けて出帆したと記入してある。

チャールス。ヘルンが未だアイオニヤ島へ赴任しない時分に、同國人を戀したのであつたが、事情はチャールスを幸せず、その人は一段富有なる人に嫁した。失戀してアイオニヤ島に去つたチャールスはそこでローザに遇つたのであつた。今船中ではからずも、昔の戀人は今寡婦となつてダブリンにある事を聞いた。ダブリンに着いて見れば一年餘りのう

ちにローザは風土の激變のために健康を害して不機嫌となつて、昔ギリシャで自分を喜ばした人と別人のやうである。スーザン・ヘルンの日記によれば『一八五三年十月八日、チャールスさんは至つて壯健で歸つて來た。神樣の御蔭で再び相見る事を得た』『十月九日日曜、チャールスさん夫婦、子供は私共とガードナース。ヅレースの宅で一同幸に食事を共にした。その夜ローザが急病にかかつたので一同大騷ぎをした。今も引續き惡いが、そのうちによくなるであらう』スーザン・ヘルンの日記は、突然この邊でなくなつて居る。チャールスから見れば、ローザは昔のやうでない。一方に以前の愛人との交際は「燼（モエクヒ）に火のつき易い」やうに新たに初まる。ローザから見れば、遙々復つて來た夫は昔のやうに自分を愛しないで外出勝ちである。嫉妬も起る。ヒステリーにもなる。次第にこの二人の間は面白くなくなつて來る。

　そのうちに、クリミヤ戰爭が始まつてチャールスは又もや出陣する事になつた。ローザは再び男子をあぐる事になつたが、この夫婦は再び相和する事はなく、遂に離婚となつた。事實は離婚であつたが、ヘルン側が裁判所で主張したのは、チャールス・ヘルンがギリシャであげた結婚式はこの國では効力がないと云ふのであつた。換言すればこの結婚は正當な結婚ではなかつた事になるから、ラフカディオの母に取つては非常な侮辱であつた。そ

れてもこの主張が通つて法律上の手續の終つたのは一八五六年であつた。即ち事實上の離婚はチャールスがクリミヤ戰爭出發以前で、法律上の手續の濟んだのはセバストポールの包圍中 Alma（アルマ） や Inkermann（インカーマン） の戰の後、一八五五年三月歸國した翌年の事であつた。

ラフカディオの弟ヂェームスは一八五四年の生れである。一説によれば、ローザがギリシャへ歸つた時は、未だヂェームスは生れてゐなかつたが、後アイルランドに引取られたと云ふ事である。この人も成人して後アメリカへ渡つた。ラフカディオがアメリカを去る頃始めて通信した。オハイオ州で多年農業に從事してゐたが、今ニュ・ヨークにあると聞いて居る。獨逸婦人を娶りて幾人かの子女の父である。

かくてこの小說的な結婚も悲劇に終つた。母は歸國の後、從兄弟にあたる法律家（或はその人の子とも云ふ）と再婚したと云ふ噂もある。それから一年の後二人の愛兒を見たさに遙々アイルランドに來たが、ヘルン家では遇ふ事を許さなかつたと云ふ事實らしい悲しい噂もある。ヘルン自らが最後に母の事を聞いたのは一八五八年——九年の間の事で、母がスミルナで再婚したと云ふ噂であつた。

父がローザをして憤らしめた婦人と再婚したのは一八五七年であつた。その人は南アウストラリヤで裁判官を勤めたヂォーヂ・クラウフォードの未亡人で四人の連子のある Ali-（アリ）

Cha Posy（シャポーシー）であつた。その後三人の娘をあげた。エリザベス、ミンニー、バウジーの三人、何れも現存である。ミンニー、バウジーの二人は結婚して二人とも今未亡人である。ミンニーには三人の子女がある。明治四十二年の春、末の娘と共に、日本に來遊して遺族を訪うた。

二等軍醫正であつた父は、その後印度駐在となつて赴任したが任地セクンドラバッドで後妻はなくなつた。父は幼き子女を連れてアイルランドに歸り、學校を經營して居た妹のステュアート夫婦に預けた。（弟ヂェームスもそこにゐた）再び印度に赴いたが、健康を害して、汽船『ムラ』號で歸鄉の途中、印度熱のために、スエズで歿くなつた。一八六六年十一月二十一日であつた。父は退隱して、子女一同と共にラフカディオをも引取り、靜かに餘生を送らうと企てたのであつたが、それは不幸にして果されなかつた。

ヘルンの母がダブリンに來て、ギリシヤに歸るに到つた當時の事情は、若いラフカディオの柔い心に甚深の印象を與へてこの人の性格に甚だ大きな影響を及ぼして居るから、今少し詳しい說明をして見る。ヘルンが日本に於て、異母妹だちから手紙を受けた時、そのうちの一人ミンニーに向つて、當時の事情、生母の寫眞の有無などについて古い親戚に尋

ねて貰ひたき旨を賴んでやつた。その內の一人の異母妹エリザベスが、父の妹のリジーから得た手紙に、その當時の狀況がある。

一八九〇年一月七日、

なつかしきリラ様

父上の初めの結婚について、私の覺えて居る限り、殘らず喜んで御知らせ致します。父上がアイオニヤ島から歸省の節、私が遇ひに參り、そしてイディスやリッジー・スティヴンスと一緒に遊び居る節、時々「あゝ、自分の子供と、それから、その黑い眼を見せてやりたいものだが」などゝ半分戯れのやうに申されたが、結婚の話は出なかつた。しかし、再びあちらへ行かれてから、先づファンニー・エルウッドに、つぎに母上に、自分の新婦の事を手紙で知らせて參りました。よい家柄のギリシャ婦人で、名はローザと申したが、姓は覺えて居りません。父上はコルフ島とザンテ島に居られたが、その外どの島々に居られたか、私は知りません。

私共の母方の叔母サレー・ブレネーンが、父上の結婚された事、及び新婦のギリシャ人なる事、及びギリシャ教會（叔母は、ギリシャ教會と、自分所屬のローマ教會と

同一に考へられた）の人である事を聞かれて、直ちに新夫人を迎へ取る事を主張されたので、新婦は召使やら通辯やらとして、たしか兵隊の娘であつたファンニー・バットラーと云ふ女と、小パトリックを連れて參られた。私もダブリンにゐた頃は度々面會に參りました。この新婦は綺麗な黑い眼と髮の大柄の肥つた人でした。氣に入らないと隨分怒り易い、そして無精な人でした。英語が下手なので、話は容易にできなかつた。男の兒は誰にでも好かれ、又私共をも好いて、よくなつきました。そして怜悧な頓才のある子供でした。父上が餘り外出勝ちの時はこの人は隨分嫉妬もしたと覺えてゐます。この人と父上とはこの男兒をサレー叔母に任せて、ローマ教で育てる事に致しました。この男兒のために教育なり何なり、一切叔母の方で負擔する事にして、イディスは今、古い日記から父上が歸られてのちの事どもを寫してゐます。その當時私はアルマーにゐました。

　最上の醫者にも見せ、よい看護を受けてのち、轉地のため、ダンドラム村に逗留して保養する事になつて、父上も時々逢ひに行かれた。どうしても充分よくならない。それからどれ程か覺えないが、本人は國に歸りたいと、しきりに云ひ出したので、それが一番よからうと云ふ事になつたのです。

叔母はこの人と從者の旅費を拂つて、男兒は叔母のところに殘りました。歸る少し前に、又母となるわけが知れました。その子供は、その後無事に着いたが、これが卽ちデュムミーでした。

父上とこの人が離婚證書を作る事に一致して、子供は父の方へ送りかへす事になつて後、この人がギリシャの辯護士の子息と結婚した噂を聞いたのが最後でしたが、これは事實かどうか知りません。この二人の兄弟の遇はなかつた理由は簡單です。サレー叔母はこの結婚が、こんなに終つた事や、父上が又結婚しようとして居る事を非常に苦々しく思つて父上の寫眞を見る事も厭だと云つて取り下したので、私の母も仕方がなく、外へ持つて行きました。叔母は赤坊にまで怒りを移し、赤坊と男兒は決して遇はせない、兄弟でもない、と誓つて云はれた。赤坊はロンドンかリヴァプールで兵隊の妻である乳母の手から受取つて來て、洗禮が濟んで居るか、どうか分らないので改めて洗禮を施し、祖父の名を貰つてデュームスと名をつけたのです。

サレー叔母は追々年を取り、老耄のやうになり、横着な、卑しい人々の手にごまかされるやうになりました。この人々は自分等でも又僧侶達も、叔母の夫の親戚だと云つてゐました。そして叔母の財產を取り上げ、叔母をウォターフォードにつれ出し、

當時フランスの學校にゐたパトリシオの惡口をなし、叔母の金で投機をして、それをなくしてしまひました。叔母はウォターフォードの近傍のあばら屋で何贅澤品一つなかつたが、自分のひどく貧しい事も知らないで歿くなりました。

私はあの綺麗な男兒のパトリックがその後どうしたか知りたいとこれまで屢〻案じてゐました。パトリックこそ、實にひどい目に遭つたと思つてゐました。昨年の夏、チャーレー。ヘルンから、パトリシオの事をいくらか聞いて大層喜びました。

パトリックの母、ローザ。ヘルンの寫眞を見た事もなく、あると聞いた事もありません。なつかしいリラ様。もうこの上書く事がありません、覺えて居る事だけは皆申し上げました。

これだけ書いたので手が震へます。

いつも變らず愛する叔母リッジー。ハーディーより。

一八九〇年二月七日

この手紙の記者はヘルンの母から見て鬼千疋の小姑である。嫂の人となりを說いて居るところに、幾分の身贔負と幾分の嫂非難が潜んでゐないとも限らない。老いて幾分記憶の

確かならぬ事は、日附が前後二樣になつて居る事ででも分る。
同じくヘルンの父の妹イディスの婿ステュアート（學校を經營してゐた人）からヘルンの弟ヂェームスへあてて當時の事情を記した物がある。これも同じくヂェームスが、當時の事情を問合せた物をヘルンに送つた物である。

一八九〇年一月二十八日、

ヂェム樣

（前略）私共は母上を知らず、寫眞も持ち居らず。ただギリシャの婦人で、アイオニヤ島中のコルフ土着の人である事しか知りません。父上はその島々が英國の保護の下にあつた時、所屬聯隊と共に、そこに行かれ、母上と結婚せられたが又離婚された。如何なる事情によるか知らず。御話の寫眞はリラの母の寫眞です。それはもと南アウストラリヤの判事クラウフォードの妻でしたが、夫の死後マッディ、ヂョーヂ、レッギー、ミンニーの四人の子女を連れて歸英した。父上はこの未亡人と結婚して印度に赴いた。そこで女がなくなり、ついで父上は歸英の途中紅海でなくなつた。（中略）小妻は大層弱くなり、この數年間は七八兩月の外は戶外に出た事もありません。それ

も事て出るばかり。私は七十一の年にしては頗る壯健てす。叔父リチャードのなくなつた事は勿論御承知てせう。餘り急な事てした。御令兄のえらくなられたのを見て驚かれたてせう。しかし、これも當然の事と存じます。御身は文人としての兄の名を見て、手紙をやられたのてせう。その結果は如何てしたか。私共も「ハーパー雜誌」てその作を讀んだが、ラフカディオと云ふ綴名てした。ラフカディオが卽ち令兄てある事は思ひもよらぬ事てした。（後略）

足下に忠實なる　シー・ステュアート

ビスランド女史がヘルンの傳記を編纂した時、夫人に向つてヘルンが平生何か兩親に關して物語つた事があれば知りたいと云はれて、夫人が記されたのはつぎの物である。

「私四歳の時てしたと思ふ。一日大層いたづら致しました。ママさん立腹で、私の頰を打ちました。その時私ママさんの顏よく見ました。髮の毛の黑い、大きい黑い眼てした。日本人のやうな小さい女、この打たれた痛さてママさんを覺えたやうてす」

それから自分はママさん似だと云ふ事をよく云つてゐました。

「如何にかはいさうなママさんてした。不幸なママさんてした。氣の毒な女てした

ねー。あなた少し思うて下され。あなた、私の妻でせう、あなた一雄と嚴とで私の國に參りませう。あなた、國の言葉知りません。一人の友達もないです、ただ亭主御友達てす。亭主可愛がりません。誰可愛がりますか。しかしあの亭主少しむごい心あります。親切ないです。いけません。國の女可愛がるでした。あなたにさやうならしませう。いかに／＼かはいさうな、心痛いてす。あなたの心配の顔見るむつかしくないです。このやうなお話いけません、あゝ思ふさへいけません」と云つて大層ママさんを氣の毒がつてゐました。そして大層慕うてゐました。

「私のパパさんて喜んだ事が一度あります。あの時です、私小さいでした。何歳てしたらう。嚴か清のやうな時てした。私、乳母と遊んで居りました。背の方に澤山ガロップガロップ、この時乳母笑うて、私を高いに抱き上げました。同じ時、私のパパを見ました。私小さい手でパパを呼びました。パパ、直ぐに私を乳母から取りました。私馬の上にてす。如何に澤山の兵隊さんがガロップガロップでした。私大層喜びました。大將と思ひました。唯この時如何によいパパ様と思ひました」

小姑のリッジーが大きな女と認め、小さいヘルンが小さい母と解したところに（これだ

けは自分が似て居るから小さいとあとから推したものであらう）に相違はあるが、全體に於て、勞働として當時を想ひやる事ができる。ヘルンの同情は全く母の上にあるのは氣候の相違、言語の不通等の外に、愛兒を捨て一時は熱愛した夫を捨てねばならなくなつた事情を重く見て居るからである。

異母妹ミンニーに與へた手紙につぎのやうな記事がある。

私は父とダブリンを散歩してゐた。少しも笑はない人で恐ろしかつた。菓子を買つてくれた。雨を含んだ雲があつたが、雨の降らない晴れた日であつた。その頃未だズボンは着けてゐない。大分歩いた。そのうちに高い家の前の石段のところへ來た。そして何でも戸たたきをたたいた事を覺えて居る。内へ入ると階子段の下へ婦人が迎ひに來た。丈の高い婦人であつた。尤も丈の事は比べて見た上でなければ分らない。はつきり覺えて居る事は、こんなに綺麗な人を見た事はないと思ふ程の人であつた事だ。この人は屈んで自分にキスした。今でもその手の觸れた事を覺えて居るやうだ。それからおもちやの鐵砲と繪本を貰つた。歸り途で父は乾葡萄入りの菓子を買つてくれて、今日行つた家の事を少しでも云ふなと云つた。私からそれを云つたかどうか覺えない

が、大叔母はそれを見つけて大變怒り出したので、私は恐ろしくなつた。鐵砲も繪本も取り上げられた。そのうちにはデヴィッドがゴライアスを殺して居る繪もあつた。
大叔母は怒つたわけを十數年後迄は云はなかつた。

丈の高い婦人は云ふまでもなく、クラウフォード夫人であつた。シンシナーティ時代の友人チェニソンは、ヘルンが『或金髪(ブロンド)婦人のために、生母と別れる運命になつた』といつも云つた事を傳へて居る。ブレネーン叔母は終生ラフカディオの父を赦さなかつた。『印度に行つてから、父は楷書で私の讀めるやうに、虎や象の事などを手紙に書いて來た時、いつもブレネーン叔母は、「お前が父のところへ手紙を出す事を私は止めない」と云つたが、その實出す事を好むやうにも見えなかつたので、つい一度も返事をやつた事はない』とヘルンは云つて居る。

ヘルンが母に對して、終生思慕の念を絶たなかつた事は、未見の弟ヂェームスに與へた手紙にも明らかである。

御身は鹿のやうな大きい鳶色の目をした淺黑い美はしい顔が、つねに御身の搖籃を覗き込んだ事を覺えてはゐまい。毎晩ギリシャ風に、指で十字架をつくつて「父と子

と精靈の御名に於て」の祈りをする事を敎へた事を覺えてはゐまい。母はその子供らしい信仰に隨つて三つの力、殊に十九世紀がやはり尊敬を表して居る生命の源なる保護の下に、御身を置かんがために、御身に三つの小さい疵をつくつたであらう。……私共は變な風をした淺黑い癇癪持ちの子供であつた。そして金の耳輪を下げてゐたが、今もその跡はありませんか。……御身の寫眞を見て、私の血が躍るやうに覺えた。私は思うた，「ここに母の魂が生きて居る。又私と同じ欲、同じ心、同じ本能を持つた私の知らない人が居る」私にはいつも魂が二つあるやうに思はれる。一つは謀叛の心、制御にたへず、支配を憎み、何でも規則整頓を嫌ひ、前後の考なくして愛情の念強き事、これ一つ。今一つは忍耐自重の心である。この力は三十になるまで、その力を用ふる事はできなかつた。……苟くも私に善い分子があれば、それは私の知らないギリシャ人種の魂から來たのである。正を愛し，邪を憎み、美なる物，眞なる物を賞嘆し、人間を信ずる事のできる力――小さいながらに成功を私に與へた美術に對する感受性……はこれ皆母の賜物である。……私共は母の子である。少くとも高尙な人（融通、打算の才能でなく、愛する心と愛する力こそ高尙である）をつくるに足る資格を有したのは母であつた。私は一かどの富よりも、母の一枚の肖像を欲しく思ふ。

ヘルンは父の事について、別の手紙に書いて居る。

私の覺えて居るところでは、父を見た事は五度しかない。父は沈默家の方であつたと思ふ。印度から長い手紙を私に送つて、大蛇や虎や象の事を書いてあつたと覺えて居る。ペンで楷書で印刷したやうに書いてあつたから、容易くひとりで讀めた。……所屬聯隊と共に、町に來た時、私を抱き上げて、馬に乘せた事も覺えて居る。又私は赤い服を着た大勢の人々と正餐に列し、食卓の下を步いた事も覺えて居る。

ヘルンは又別の手紙に『私は肉體的精神的に父に似たところはない』と云つて居る。しかし母に同情の餘り、ヘルンがかう考へたのはたしかに誤解であつた。少くとも肉體的にはヘルンは父方に屬して居る。記者はヘルンの三人の異母妹を悉く知つて居る。ヱリザベスにはローマとロンドンとで、パウシーにはロンドンで、ミンニーには東京で何れも數囘會つた。この三人特にヱリザベスとミンニーの如きは一見してヘルンに酷似せる事が分る。ヘルンの横顏、殊にその鼻は爭はれないヘルン型である事を示して居る。その引き締つた

小作りの身體、著しき近視眼、何れも皆ヘルン家に通有の特徴である。

兩親の離婚事件は小ラフカディオの柔い心に如何に大なる疵を殘したてあらう。生長した後か、或は弟ヂエームスの年頃であつたら或はその疵は淺く小さかつたてあらうが、ラフカディオに取つての最大不幸は、凡て人の頭腦のできかかると云はれる五六歳の頃に起つたのてあつた。天性によりては案外無頓着に通過したかも知れない。しかし、チャールス・ヘルンとローザ・テッシマとの小說的結婚によつて生れた感情の子、パトリシオ・ラフカディオ・ヘルンに取つては凡ての小兒に取つて人生の根柢となる父母の結合、家庭の關係は直ちに破壞されて、この世の立脚地はあやしく不安の物となつたのであつた。恐らくヘルンの一生に附隨せる狐疑臆病、時として最も親しき友人にも欺かれぬかと疑ひ、時として疑心暗鬼を生ずるに到つた源は、ここに萠した物てあらう。

ヘルンが日本に來ない昔から東洋の事物を愛したのは、生れは東洋て、血統も半分東洋人てあると云ふ自覺から來て居ると自白して居るが、これも母に對する同情から起つて居る。東洋に對する同情、西洋に對する反感は、母に對する同情、父に對する反感に基づいて居る。ヘルンの一生に通ずる弱者に對する同情、同時に强者に對する反抗の態度は、同じく母に對する同情から、弱い者苛めをしてはならないと云ふ考が、深く若いヘルンの心

に染み込んだからであつた。學校にありては、地動說や進化論に迫害を加へたローマ舊敎に反抗し、シンシナーティや西印度にありては黑人に味方し、ニユ・オルリアンスにありては、本國政府に領地を賣られて、見捨てられたフランス人に同情し、日本に渡りては條約改正などを叫んで居る日淸戰爭前の弱き日本の味方となりて『知られぬ日本の面影』や『東の國から』を著すに到つた義俠心の動機はここに基づいて居るではないか。

ヘルンが晩年その友人に對してもつた好惡の念に關しても、その動機は父と母のもつれのやうな事から起つて居るのを見るのである。

ヘルンは熊本時代に上京して、かねて交通をしてゐた友人『甲』を訪れて滯在した。そこを去つて橫濱に出て『乙』なる友人を訪うた。(この『乙』なる人は大正十二年の大震災に橫濱で死んだ)この人の妻は日本人であつたが、ヘルンに向つて『「甲」さんはあなたに日本人の奧さんを紹介しましたか』と尋ねた。ヘルンは不思議に感じた。さてはあの日本婦人は『甲』の夫人であつたのか。紹介しなかつた「甲」の心事は少し解し難い。公然認めてゐない人であつたのかと考へた。それから『甲』に對する敬愛の念は少し減少して來たとヘルンは夫人に語つた。これがその一例である。

同じく日本の大學に某と云ふ人がゐた。大した敬意をもつてゐたわけではなかつたが、

同じ日本の研究者であつた關係から、出雲時代から文通もし往來もしてゐた。この人にも日本の夫人があつた。その人と手の切れぬうちに、本國から何も知らない新夫人を迎へた。そのうちに新夫人に解せられない事が折々起つた。たうとう新夫人はヒステリーになつた。この事情を聞き知つたヘルンは憤つた。ヘルンが大學を止めたのはこの人の中傷も與つて力があつたとさへ云はれて居る。これが第二例である。

同じく日本婦人を娶つて數人の子をあげた外國の學者があつた。ヘルンはその家庭を訪問した時、その夫人に丁寧な敬語を使つた。その人は笑ひながら『そんなに丁寧にするに及ばない。あれは女中で正當な妻ではない』と云つた。ヘルンはその人に貞節の念のない事を悲しんだと夫人に語つた。これは第三例である。

その後日本で抱車夫を選ぶ時の條件は只一つあつた。『あなた、おかみさん、可愛がりますか』『はい』『それなら、宜しい』かよわき婦人小兒を愛する程の者に惡人はない。これはヘルンの信仰であつた。晩年東京の或市長から會見を申し込まれた事があつた。その人の姓はロンドンで二重結婚のやうな行をしたとかねて聞いてゐた日本の或高官の姓と同じであつたのでヘルンは喜ばなかつた。後にそれは同姓の別人である事が分つて會見の約束をしたが、そのうちにヘルンは他界の人となつた。（早稻田の鹽澤博士の談話による）家庭の

不和のため妻を離別しようとして居る日本の友人に送つた手紙（全集第十一卷三二一―三二七）にも、この心がよく現れて居る。

三人の異母妹のうちミス・エリザベス・ヘルンは日本にある兄の文名の高きを聞いて熊本滯在中のヘルンに手紙を送つたが、返事はなかつた。つぎにバウジー（ブラウン夫人のちアラン夫人）も手紙を出したが、同じく返事はなかつた。最後に末の妹ミンニー（アトキンスン夫人）が手紙を送つた。この時だけは不思議に反響があつた。それから懇切なる文通は續いて神戸時代に及んだが、一八九六年（明治二十九年）東京帝國大學に赴任の少し以前から突然止んでしまつた。幾度手紙を出しても返事がないので、ミンニーの方では驚いて英國領事や『ジャパン・メール』社に依賴して、ヘルンの安否を尋ねたが、變りがないとの事であつたが、ヘルンが文通を絕つた理由は解し難いのであつた。ひそかに考ふるに、その理由は遡りて、ヘルンの父が母を離別して後妻を娶つた事に求むべきではなからうか。ミス・エリザベス及びブラウン夫人に答へなかつたのは、不道理ではあるが、これも母の敵の片割れであるとヘルンの感情が叫んだためでなかつたらうか。偶然怜悧なるアトキンスン夫人に釣込まれて答へたが、何かの折りに深く感じて再び沈默に歸つたのではあるまいか。ヘルンは或點に於て決して赦す事のなかつた例は外にもあつた。熊本で長

男誕生の時の手紙の一節に『世の中には自分の子を生んでくれる女を虐待する人もあると思ひ出したら、天地が暫らく暗くなつた』とある。自分の父と母とを思うて、ヘルンは深く嘆いたのではあるまいか。同時にヘルンはこの頃からこの點に關して、一層著しく嚴格になつてゐた事を思ひ合はすべきである。

二　大叔母のてもと

大叔母の居所――小ヘルンの悪戯――大叔母の熱愛――お化け――ゴート式寺院――『我が守護神』――『偶像禮拜』――ヘルンのギリシャ憧憬

母に別れて、ひどくしよげてゐた小ラフカディオを引受けた富有なる大叔母は、ラフカディオと共にダブリンのアッパー・リーソン町七三にある自分の家、アイルランドのウォターフォド州の海岸トレモア、及び大叔母のローマ舊教の友人で、そののちラフカディオの一身に大關係を有するに到つた英國サレー州レッドヒルの Henry Molyneux（ヘンリー　モリスークス）の家、この三箇所に代る代る滯在し、又夏になれば、ウエールスのバンゴアに赴いた。當時アイルランドの上流社會では、夏になれば、セント・ヂョーヂ海峽を渡つて對岸に行く事が流行した。この夏のバンゴア行はヘルンに取つて最も樂しい物であつた。バンゴアの近傍カルヴァノ

ン城で東洋の美術を始めて見た。又乳母と共に支那日本へ航海する船長の家に泊つて東洋の不思議な美術骨董偶像などを見た事もあつた。大叔母所有の土地のあるウエッキスフォードにも家があつた。

チャールス・ヘルンの姉にエルウッド夫人といふのがあつた。アイルランドの西端メーヨ州ラウ・コリップ地方に美はしき土地を所有せるフヲンク・エルウッドに嫁してゐた。ヘルンは幼時、大叔母と共に、時々この叔母の家に滞留した。ヘルンが「怪談」中の「日廻り」と題する追懐はウエールルスの小山とあるが、事實はアイルランドのこの場所であつた。共に松毬を拾つて遊んで居るロバートと云ふのは、後、海軍に入り、支那海で溺れようとする友人を救はうとして自分も溺死した従兄ロバートその人であつた。人名、地名は勿論、多少の事實をもヘルンの好みに變へるのは、凡ての作に施した常手段であつた。蓋し、アイルランドはヘルンに取つては不幸の思ひ出の多いところであつた。デ・クインシーやその他の文人によつて美化せられ、自分も又好んだウエールスの方を寧ろ選んだのであつた。

後年ヘルンが子供の嬉戯するのを見て、夫人に語つたところによれば、幼時のヘルンは、手に餘るいたづら者であつた。好き嫌ひの烈しい、途方もない事を仕出かす困り者であつ

た。鴨居の上に、インキ壜をのせて、戸を明けると目指す人の頭の上に落つるやうにした事もあつた。いつもヘルンの惡戯の犧牲となる婦人があつた。この人は小ヘルンから見て、嫌ひな僞善家であつた。いつも小ヘルンの頭を撫でて『まあ、可愛いぼつちやま』などと云つた時、ヘルンは『お世辭者』と罵つて逃げかくれた。子供の時に肉が嫌ひて、喰べようともしない。大叔母は喰べさせようとする。小ヘルンはそつと戸棚へ隱して置いて、後に腐敗しかかつた時、見つけられた事も度々あつた。

しかし、この大叔母は小ヘルンを熱愛し、小ヘルンもこの大叔母になついて到るところ、犬ころのやうに、いつもあとからついて歩いたと云ふ事である。同時に長く小ヘルンを愛育した乳母に、Kate Mython と云ふ者があつた。ヘルンのなくなつた一九〇四年の一年前まで生存して、大叔母を破産させたモリヌークスの未亡人の家に仕へてゐた。

「影」のうちの「夢魔觸」と題する一篇に『これまで、明りのついた部屋で、乳母と一緒に寢かされたが、六歲頃から淋しい部屋で、獨りで寢かされた。暗黑を恐れるから、そんな習癖を矯めすためと云ふので、殊更燈火を置かないで、暖かに寢かされると共に、ランプは退けられ、乳母も行つてしまふ、同時に』お化けが出て、毎夜小ヘルンを苦しめた時の事が詳細に書いてある。想像力の強い事にもよるが、同時に眼科醫グールドの說によ

れば、先天性の近視のために、實際暗黑のうちに、又は薄暗がりのうちに、物を見たのであるとの事である。

同じく、『影』のうちに「ゴスイックの恐怖」と題して、ゴスイック建築の寺院に連れられて、その屋根の尖端を物凄く恐ろしく感じた事を述べてあるのも、この時分の事である。

ヘルンの遺稿中に五六の自傳的の斷篇が發見された。ヘルンが企てた『自傳』の一小部分であつた。次に譯する物はその一つである。

私の守護神

「あゝ、あゝ
汝はこはし終りぬ、
わが美しき世界を」――ファウスト。

今述べようとする事は私の七歳ばかりの時分に起つたに相違ない――その時分には私は幽靈の事

は澤山知つてゐたが、神々の事は殆ど知らなかつた。

この上もなく確かな理由――即ち私は夜となく晝となく、それを見たと云ふ理由で、その當時私は幽靈とお化けとを信じた。眠りにつく前にお化けに見られないやうに頭からいつも蒲團を被つた、お化けが蒲團を引張るやうに感じた時にはいつも叫んだ。それから私はこんな經驗について語る事を禁ぜられた理由を解する事はできなかつた。

しかし宗教の事については殆ど知るところはなかつた。私を養つた老婦人は、ローマ舊教信者に私を養成しようと企てたが、未だ何かきまつた宗教上の教育を施さうとはしなかつた。私は祈禱を少し教へられたが、鸚鵡のやうにそれをくりかへすだけであつた。私は何故だか知らずに教會へ連れられた、それから紙のかざり（レース）で縁（ふち）を取つてある澤山の小さい繪を貰つた、――フランス製の宗教畫であつたが――その意味は分らなかつた。私の寢室の壁にギリシヤ風の肖像畫が一つかかつてゐた、――聖母とその子を描いた小さい油繪であつた、黄色ぽい色彩であつた、そして立派な金屬製の枠に入れて、その肖像の橄欖色の顏と手と足が見えるだけになつてゐた。しかし私はこの鳶色の聖母は自分の母――殆ど忘れて居る母――を描いたので、大きな目の神の子を自分だと想像した。私は父と子と精靈の名によつてと云ふ祈禱をする事を教へられたが、――その言葉の意味を知らなかつた。しかしそのうちの一つの名稱が私に非常に興味があつた、そして私が始めて宗教上の質問をしたのはこの精靈（ホリ・ゴースト）についてであつたと覺えて居る。私の好奇心を引いたのは勿論「靈（ゴースト）」と云ふ言

葉であつた、その質問をした時には恐れてふるへた、問うてはならない事だと思つたからであつた。その答を今はつきりと想ひ出せない、——ただ精靈とは白い靈で、暗くなつてから子供に澁面を作つて見せるやうな事はない事を會得した。しかしその名は、殊に祈禱書でその正しい綴りを覺えてからは一層、私に一種の鬼氣を感じさせた、そして私は花文字のＧに名狀し難い不可思議の念と氣味惡さを發見するに到つた。今日でもその恐ろしい文字の形は、時々子供の時分の朧げな、そして恐ろしい想像を想ひ起させる事がある。

私は神經質の子供であつたから、宗教の事は幸に永く知らせない事にしてあつたらしい。私の周圍に居る人々は私に怪談やお伽噺をしないやうに命ぜられ、私も亦幽靈の話をする事を嚴禁されたのは、確かにこの理由から來て居るのであつた。しかしこんなに嚴禁されてゐたにも拘らず、私は全く思ひがけなく、これまで私を惱ましてゐた物よりも、遙かに氣味の惡いお化けについて多少聽かねばならない事になつた。この有難くない知識は家の友人、——逗留客によつて私に與へられたのであつた。

客と云つても多くはなかつた、その逗留もいつも暫時であつたが、一人だけ特別の人があつた、その人は每年きまつて秋に來て、翌年の春まで滯在した——改宗した人で、——たけの高い女で、私のフランス製の繪本にあるたけの高い天使のうちによく似たのがある。その當時の私には、抽象的の觀念を作る事ができなかつたに相違ないが、それでもこの女は私に何だか朧げに悲哀の觀念を

人化したやうに見えた。この人は親戚ではなかつた、それでも私は「カズン・チヱーン」と呼ぶやうに云はれた。外のうちの人にはこの人はただの「ミス・デヱーン」であつた、そしてこの人がいつもゐた三階の部屋を、いつでも「ミス・デヱーンの部屋」と呼ぶ事になつてゐた。私はこの人がどこかの尼寺で幾年か續いて夏を送つてゐた事、それから尼になりたいのだと云ふ事を噂に聞いた。私は何故尼にならないのかと聞いたら、今に大きくなつたら分ると云はれた。

　この人は中々につこりともしなかつた、聲をあげて笑ふのを聞いた事などは決してなかつた、何か祕密の悲哀をもつてゐたが、それを知つて居る者は私の年を取つた保護者だけであつた。綺麗で、若くて、富んでゐたが、いつでもきちんと眞黒な着物を着てゐた。顏はいつでも悲しさうであつたが美しかつた、黒い栗色の髮は縮れてゐて、どんなにとき下げても組んで置いてもいつでも小波を打つてゐた、深い方であつた眼は大きく黒かつた。聲も覺えて居る、音樂のやうであつたが、その中に私の嫌ひな妙な甲走つた音があつた。

　それでも私と話して居る時はその聲が非常にやさしくなつた。いつも親切であつたが、――特別にやさしくなる事がよくあつた、それでも時々默り込んで沈んで居るので、近づくのが恐ろしい事があつた。それから非常に氣分がよくてやさしい時でも――私を撫でたりして居る時でも――彼女は妙に眞面目であつた。そんな時に彼女は私におとなしくする事、虚言を云はぬ事、素直になる事、「神樣の氣に入る」やうにする事について語つた。こんな說法は私は嫌ひであつた。私の老保護者

はそんな話はした事がなかつた。私にはよく分らなかつた、私はただ叱られて居ると思つた、それから憐まれて居るのかと思つたりした。

それから或朝の事（何でも冬の或淋しい朝であつたと覺えて居る）この退屈な說法を聞いて居るうちに、たうとうこらへ切れなくなつて、私は大膽にカズン・デェーンに、何故外の人の氣に入るやうにしないで、神樣ばかりの氣に入るやうにせねばならないのかと尋ねて見た。私はその時彼女の足もとの腰かけにかけてゐた。その質問をした時に彼女が顏色を變へた樣子は一生忘れられない。彼女は突然私を抱き上げて膝の上に置いて、私が恐ろしくなる程、穴のあく程黑い眼で私の顏を見つめて叫んだ、

「まあこの子は、——神樣が何だか知らないと云ふ事があるものですか」

「知らない」と私は息のつまるやうな小聲で答へた。

「あなたをお造りになつた神樣、——日だの月だの空だのをお造りになつた神樣、——樹だの綺麗な花だの、——何でも皆お造りになつた神樣。……あなた知らないのですか」

この人の劍幕にひどく驚いて、私は返事もできなかつた。

引き續いて云つた、「あなたは知らないのですか、神樣はあなたや私をお造りになつた事を——神樣はあなたのお父樣でもお母樣でも誰でも皆お造りになつた事を。……あなたは天國と地獄の事を知らないのですか」

私はこれからあとの彼女の言葉を覺えてゐない、ただつぎの言葉だけはつきり思ひ出す事ができる、――

「それからあなたを生きながら地獄へやつて、永く、永く、火の中へ入れて燒きます。……考へて御覧、――いつまでも、いつまでも、いつまでも燒きます、――泣く、燒ける、泣く、燒ける、――どうしてもその火から助けられません。……あなたはランプで指に火傷をした時の事を覺えてゐますね。――からだが皆燒ける事を考へて御覧なさい、――いつまでも、燒ける事を、永く、永く」

さう云つた時の彼女の顏つきは今でも私に見える、――その顏つきにあつた恐怖と苦痛。……それから突然泣き出して、私にキスしてその部屋を出て行つた。

それからさき私はカズン・ヂエーンが嫌ひになつた、――新しく取りかへしのつかないやうに私を不幸にしたからであつた。私は彼女の云つた事を疑はなかつた、しかしこんな話を聞かせた事を憎んだのであつた、――殊にその云ひ方が恐ろしかつたからであらう。今でも彼女の事を考へると、私の憎惡を隱さうとして子供らしい僞善をした時の相應に苦しかつた事が思ひ出されて何だか一種の苦痛を感ずる。春になつて私共を去つた時、そのうちに彼女は死ぬだらう――さうなると再び顏を見なくてもよいなどと思つた。

しかし私は變な境遇のもとに運惡くも又彼女に遇つた。今度彼女に遇つたのは、夏の末か秋の初

ゐか、確かに覺えてゐない、私はただそれが晩方であつて天氣が未だ氣もちよく暖かであつた事だけを覺えて居る。日は沈んだが未だ柔らかな色に滿ちた微光がはつきりしてゐた。そのたそがれの時刻に、私は偶然二階の廊下にゐた、――全く獨りで。……私は何故そこにひとりでゐたか覺えがない、――或は何かおもちやをさがしてゐたのかも知れない。とにかく階段の上に近い廊下に立つてゐた、その時カズン・ヂヱーンの部屋の戸が少し開いて居る事に氣がついた。それから見て居るとそろそろと開いた。それで私は驚いた、そのわけはその戸――廊下の方に開いて居る三つの内の一番奥の戸は、いつでも鍵がかかつてゐたからである。殆ど同時に、カズン・ヂヱーンその人は、いつもの黒い着物を着て、その部屋から出て、私の方へ進んで來た――しかし頭は天井に近い廊下の壁の方の何かを見上げて居るやうに、上の方に斜めに向いてゐた。私は驚いて「カズン・ヂヱーン」と呼んだ――しかし聞えない樣子であつた。彼女はそろそろ近づいたが、やはり頭の方が仰向いて居るので、顎から上の顔は何も見えなかつた。それから彼女は私のところを通りぬけて、眞直に階段に最も近い部屋に入つた、――この寝室の戸はいつでも開いてあつた。通つて行つた時でも私は彼女の顔は見なかつた、――ただ白い喉と顎と束になつた綺麗な髪ばかり見たのであつた。私は寝室へ「カズン・デヱーン、カズン・デヱーン」と呼びながら、あとを追ひかけて入つた。私は彼女が大きな四本柱の寝臺の足もとを廻つて向うの窓の方へ行くのを見た、そこで私はあとを追うて寝臺の向側に出た。彼女はそこで始めて私の居る事に氣がついたやうにふり向いた、私は彼女の

微笑を受けるつもりで見上げた。……彼女には顔がなかつた。顔がなくてただ青白い朦朧とした色ばかりあつた。私が見つめて居るうちに姿もなくなつた。次第に消えたのではない、突然　焔が吹き消されたやうに――ただなくなつたのであつた。私は段々暗くなつて行く部屋にひとりでゐた、――そしてこれまで恐ろしいと思つた事がないのに、始めて恐ろしくなつた。叫びはしなかつた、餘り恐ろしくて聲が出なかつたのである、――私は階段の上までどうやらかうやら歸つて、それから躓いて轉がり落ちた、――つぎの廊下まで轉々として落ちた。私は怪我をした記憶はない、階段の敷物は柔らかで餘程厚かつた。私の轉がり落ちた騒ぎで、早速介抱され、勞はられたが、私の見た事については一言も云はなかつた。もし云つたら罰せられる事を知つてゐたからである。……

それから何週間か何ケ月かの後、寒い季節の初めの或朝、本物の「カズン・デユーン」が歸つて來て例の三階の部屋に住む事になつた。彼女は又私に遇うて嬉しさうであつた、そして私を大事にして愛してくれたので、歸つて來ないやうにと内々考へてゐたのが恥づかしくなつて來た。丁度その日に散歩に連れて出て、菓子やおもちやや繪や――色々の物を澤山――買つてくれて、その包みを皆自分でもつて來てくれた。私は嬉しくないまでも、有難く思ふべきわけであつた。しかしそんなに大事にされて恥づかしくなつたその貴い心はもうなくなつた、そして誰にも云へない――就中彼女には云へない――あの事が思ひ出されて、私共が一緒に歩いて居るうちに私の心が怪しくなつて來た。こんなに私におもちやを買つてくれて、にこにこしながら面白さうに話をして居るこのカ

ズン・デユーンは、事によればあの顏のないカズン・デユーンの脫殼かも知れない。……明るい店や、愉快さうな人々の群の間では、私は恐れる事はなかつた。しかし後に――暗くなつてから――中身の方が殼から脫け出して、天井を見るやうにして顎を上に向けながら、その部屋から私の部屋へそつと來はしないだらうか。……私共がうちに着かないうちにうす暗くなつた、そしてカズン・デユーンは話もせず、笑ひもしなくなつた。きつと疲れたのである。しかし私は彼女が默つて眞面目になつたのは、段々うす暗くなつたのと同時であつたと思ひついて、――ぞつとして來た。

それでも私は新しいおもちやで愉快な一晩を過した、――おもちやはランプの火影で甚だ綺麗に見えた。カズン・デユーンは寢る時刻まで私を相手に遊んだ。翌朝彼女は朝飯の食卓に出て來なかつた――風を引いたので床を離れられないのだと聞いた。彼女は遂にその床を離れる事はできなかつた、そして私は再び彼女に遇はなかつた、――ただ夢に見たばかりである。彼女のかかつた肺患は危險だと云ふので、彼女の部屋に近づく事さへ許されなかつた。……彼女は財産をいつも行く事にしてゐた尼寺の誰かに遺し、書物は私にくれた。

もしその當時、思ひきつて別のカズン・デユーンの話をしたら、誰か――意外の結果になる事を恐れて――こんな妖怪の科學的說明を私にする事を至當と思つたかも知れない。しかし私はその說明を信じなかつたらう。私は見た事だけを了解した、そして見たから恐れたのであつた。

しかしそれを見た記憶はカズン・デユーンの棺が運び去られたのち、一層烈しく私を惱ました。

彼女の死を聞いて、悲むよりも恐れを抱いた。以前私は彼女の死んでくれる事を願つた。そしてその願が果された――しかしその罰はこれから來る事になつた。カズン・デェーンの信仰よりも遙かに古い朧げな思ひ、朧げな恐れ――ことに死人を人間の敵、惡魔のやうに恐れる心――がさながら生れぬさきの眠りからさめたやうに、私の心に目をさました。……こんな恐怖心は野蠻人に存して居る、その恐怖心に伴うて、人の性格は死と共に全然變るか或は奪はれると云ふ一種朧げな觀念、――又昔はいつくしみ、笑ひ、愛したそれ等の死人は、今は脅かし、冗語し、憎惡すると云ふ觀念がある。……當惑の餘り私は自問した、彼女の來ないやうに私を護つてくれる力はどこにあるか。私はカズン・デェーンの神樣を信ずる事を止めてゐなかつた。しかしその神樣は私に取つて何かしてくれるか、或はなし得るかを疑うた。その上私の信仰はカズン・デェーンがいつでも虚言を聞かせたのではないかと疑つたので、餘程怪しく動いて來た。幾度か彼女は幽靈やお化けの見えるわけはないと請合つたではないか。しかも私の見た物はたしかに彼女の中身、――彼女のお化けの幽靈、――そしてたしかに魔物であつた。たしかに彼女は私を憎んだ、彼女は私をひどく恐れさせたいばかりに淋しい部屋に連れこんだ。……こんなに死なぬうちから私を何故憎んだのであらう、――私が彼女を憎んだ事――死んでくれたらと思つた事を知つて居るからであらうか。しかしどうして知つたらう、――彼女の魂は血や肉や骨を透して私の憐れむべき小さい魂を見たのであらうか。

……とにかく彼女は虚言を云つた。……事によれば外の人々も皆虚言を云つたのかも知れない。

私の知つてゐた人々――明るいところを歩いたり、笑つたりしてゐた暖い血の通つて居る人々――は、若本當の事を思ひきつて云へない程、ひどく夜の物を恐れたのであらうか。……こんな質問に對して私は一つも答を得なかつた。そして私に暗黒信仰（ブラック・フエイス）の第二期が始まつた、――名狀し難い疑惑と名狀し難い恐怖の信仰であつた。

私はその當時眞面目な書物を讀む程年を取つてゐなかつた、カズン・デューンの遺産の價値を始めて知る事のできたのは後の事であつた、――その遺産には「ヴェヴアリ小說」の全部、ミス・ヱッヂワースの著書、枝や木の模樣の革製の綺麗な本のマーテン挿畫のミルトン・ラングホーン譯プリユタークの「列傳」ポープ譯の「イリヤッド」と「オディッセー」古い赤い紙のマーレイ版のバイロンの「海賊」と「ララ」それから不思議にもロツクの「人間悟性論」などがあつた。私は目錄の半分も思ひ出せない、しかし私は感謝しながら驚いた事を一つ覺えて居る、それはそのうちに宗教書の一冊もなかつた事である。……カズン・デューンは改宗者であつたが、文學の趣味だけはローマの物ではなかつた。

カズン・デューンの一代を知つて居る人々はもはや土に歸して居る。彼女を憎んだのが惡いと自分でどれ程自分を叱つて見たらう。しかし今でも私の心の奥に彼女の靈に對して「あゝ、汝はそれをこはし終りぬ、――わが美しき世界」をと叫ぶ不平の聲がある。

つぎに「偶像禮拜」と名づけた一篇がある。ギリシャ人を母とし、ギリシヤに生れたと云ふ自覺と、ギリシャ人の美に對する鋭き感受性の遺傳をもつてゐたヘルンが、自分をローマ舊教徒に養成しようとする企てに對して次第に反抗の氣を示して居る。

偶像禮拜

「あゝ、聖きところより來れるサイケの神」

初期のクリスト教會は、異教徒の神々はただ黄銅や石に過ぎないとは教へなかつた。かへつて、教會はその神々と云ふのは本當のそして畏るべき人物で——それを禮拜する人々を誘惑して破滅に導くために、假りに神體を裝うて居る惡魔であると考へた。私が異教徒の神々について、始めて朧げな知識を得たのは教會の傳說や高僧の列傳を讀んで居る時であつた。

それから私はその神々がお伽噺の天人や、お化けや、サー・ウオルタ・スコットの物語歌にある天人に幾分似て居ると想像した。お化けとその一族は繪入教會史にある醜い高僧よりは遙かに私に面白かつた——その面白さはフランス製の宗教繪本にある瘦せた天使でも中々及ばなかつた。この

痩せた天使は私にカズン・デエーンの事を思ひ出させたので嫌ひであつた。その上私はカズン・デエーンの神様の仲間は何だか變だと思つたので、何でもその神様の敵――惡魔、お化け、天人、魔女、異教徒の神々――には當然同情せざるを得なくなつた。實際惡魔には――惡魔は中でも强いと思つたので――世話になつたり、交際したりする事をよく祈つた、初めのうちは至極謙遜して、そして無愛想に答へられでもする事を非常に恐れたが、――後にはこんなに丁寧にしても相手にされない事を發見して怨みまじりの言葉で祈つた。

しかし向うが相手になつてくれなくても、カズン・デエーンの神様の敵に對する同情はたえず增加した、敎會史で惡いと云ふ神々、殊に異敎徒の神々に對する興味は益々增加するに到つた。そして最後に或日の事、私共の本箱のこれまで氣のつかなかつたところに、美術に關する色々の綺麗な書物を發見した、――大きな二つ折形の書物で中にはギリシヤの神話にある神、半神、角力、英雄、山水村野の女神、養牧の神、海の神、それから凡て面白い半人半獸の怪物、皆こもつてゐた。

その幸福な日にどんなに私の心が躍つて動搖したであらう。息もつかないで私は見つめた。そして見つむれば見つむる程、益々その顏や形が何とも云へない程可愛くなつて見えた。どの形も皆私を眩惑させ、驚かせ、迷はせた。そしてこの新しい愉快はそれだけで一種の不可思議であり、――又恐怖であつた。その繪のある紙の間から何物か――見えない物で私を恐れさせる物――が、かすかに動いて居るやうに思はれた。私は異敎徒に彫像の製作を敎へた地獄的魔法の話を思ひ出した。

しかしこの迷信的恐怖は消えてやがて一種の信仰、むしろ直覺――どうしてもそれを說明する事はできない物――と代つた、卽ちこれ等の神は美しいから、何かと讒謗されるのだと思ふやうになつた。

……(盲目的に、又搜索的に、私は一つの眞理、――醜き眞理、卽ち精神的道德的肉體的、何れなりとも最上の美はいつでも多數の者に憎まれ、少數の者によつてのみ愛せられると云ふ眞理に達した)……そして、これ等は惡魔と呼ばれるのだ。私はこれを尊敬した、――私はこれを愛した、――私はこれを尊敬しない者は永久に憎まうと決心した。……あゝ、その不朽の美と、私の宗教繪本にあつた聖徒、敎父、豫言者の醜との間の相違の大なる事よ、――さながら天國と地獄程の相違である。……その時中世紀の信仰は醜と憎惡の宗敎のやうに見えた。そして私の弱い小兒の時に敎へられたところでは實際又さうであつた。大分知識の增加して居る今日でも、「異敎徒」や「偶像敎徒」と云ふ言葉は――どれ程無學にも輕蔑の意味に使つてあつても――光明、美、自由、歡樂の昔の感覺を私の心に起させる。

餘程難儀して少年時代のこんな散漫な記憶を思ひ出す事ができる、それを語る時、昔の自分に代つてたえず語らうとして居るのは、後の遙かに人工的な自分である、――それで明らかに不調和を生じて居る事をよく私は承知して居る。昔の自分の經驗について何かもう少し語らうとする前に、

これを少し中止して脇路に入つてもよからう。

美の理想を始めて知覺するのは、決して始めて知るのではなくして再び認めるのである。美學の數學的幾何學的道理がどんなに精密でも、子供が始めてすぐれた美を覺ると同時に起る愉快な衝動を說明する事はできない。どの子供でも始めて見た物が、この世にある何物よりも美はしく見える理由は說明しようと試みる事もできない。子供はただそれを見て自分の生命の源泉に及ぼした不意の力を感ずるだけである、――そしてこの感じは朧げな深い記憶である、――血のうちに潛んで居る記憶である。

多數の人々は記憶してゐない、それだから、いつも分らない。洞窟に居る靑白い目のない魚は、――黑暗々のうちに數代泳いだ結果として――光明の喜びを感ずる事ができないと同じく、高尙な美を感じなくなつた無數の人々がある。恐らくこんな人々を出した種族は高尙な物を經驗した事がなく、不朽の美術や思想の昔の幸福な世界を見た事がないのであらう。或はこんな人々の心のうちの高尙な知識の方面は、野蠻性の遺傳で、長い間に次第に置き換へられて、消えたり鈍くなつたりしたのであらう。

しかしただ一瞥の下に、古への美の天啓を得る人、――その後に續いて來る神々しき感動――歡樂と哀情の不可思議な交錯――を知つて居る人、――この人は記憶して居るのである。いつか、どこかで黃金時代に於て、美と共に暮らしてゐたに相違ない。三千年前か――四千年前か、それはど

うでもよい、今日我を動かす物は昔の影である、忘れられた歡樂の幻である。美の力、人生と愛に對する價値、これ等の意味を遺傳的に知つてゐないでは、その人の靈はかすかになりとも神々の實在を認むる事は決してできない。

今私は思ふ、この渺たる一身のうちにある靈の一分は、今はなくなつた美の世界に生存したに相違ない、――その若々しさと强さの最善の物と自由に交つてゐたに相違ない、――譽れの競走の時の長い輕い足の有難さ、仕合に勝つた人の歡樂、デロスの神寶の傍に生えてゐて、それをオディッセウスも見た棕櫚の若木のやうに、すらりとした乙女の賞讃を知つてゐたに相違ない。……こんな事を皆信ずる事ができるのは、まだ子供の時に昔の神々の聖き人間性を感ずる事ができたからである。……

しかしこの發見の喜びも私に取つては新しい悲しみの種子となつた。私も、私の小さい所持品も、共に宗教上の監督のもとに置かれた、それから勿論、私の讀書も嚴しい檢査を受けたのであつた。或日この綺麗な書物が見えなくなつた、私は書物がどうなつたかと問ふ事が恐ろしかつた。幾週間も過ぎてそれがもとのところへ歸つてゐた、再び見て喜んだのも束の間であつた。書物は皆殘酷に訂正してあつた。私の檢閲係は神々の裸體を憎んで、その不行儀を直さうと企てた。多くの姿、山林の女神、水の女神、アポロやヴィナスの侍女、音樂の女神、これ等の姿が美しすぎると云ふので、小刀で削り取られた、――私はそんなにして兩乳の切り取られた綺麗な坐像を今でも思ひ出せる。

たしかに「林の中の女神の胸」が美しすぎると思はれた、山林の女神、水の女神、ヴィナスの侍女、音樂の女神、――皆胸がなくなつた。それから大概の神々は股引を穿かされた――小さい愛の神にも股引を穿かせた――曲線の美、殊に股の線を隱すやうに工夫した鵞ペンの縱橫線で織込んだ大きな袋のやうな水浴用の股引を穿かせた。……しかし私の例ではこの亂暴なやり方に幾分の教育的價値があつた事になつた。それは私にどうしてもとの通りにすべきかの難問を與へたのであつた、そして私は屢々鉛筆で消えたり隱れたりして居る線をもとの通りにしようと一所懸命に努めた。これは成功しなかつた、しかし、驚くべき程完全に切つたり消したりしてはあつたが、私がどうしてそれをやり直すべきかを熱心に研究したので――ウィンケルマンを知らないずつと以前から――どんなにギリシャの美術家が人體を理想化したかと云ふ事が分るやうになつた。……恐らく後年に於て、近代の裸體の作品中、暫らくも私に興味を與へる物の殆どないのは、その理由であらう。始めて見てどんなに美しいやうでも、これに對して昔の檢閱係が恨みの深い宣戰を布告した曲線のところに、何か平凡な物が直ぐに見えて來るのである。

彫刻であれ繪畫であれ、現代の裸體作品は現代の生きたモデルを幾分表はして居るので、――隨つて不完全な個人を幾分か表はして居る事は、殆どいつでも事實でなからうか。ただ偉大なる昔の作品は超個人的である、――種族の靈にある最高の理想を表はして居る。……この意見を拒む人の多い事は私も知つて居る、しかし私共は今も幾分は野蠻人ではあるまいか。善良にして偉大なるラ

スキンでも、ギリシヤ美術の問題について語る時は、ゴート人のやうなところが時々見える。メディチのヴィナスを「面白くない小さい物」と云つたではないか。

キリスト教以前の神々を知つて愛する事を覺えてからは、世界は再び私の周圍に光明を生じて來た。世界の上に寄集しゐた陰雲は次第に薄くなつて來た。恐怖は未だ去らなかつたが、私の恐れ憎んだ物を信じない理由だけを欲しかつた。日光に於て、靑き野原に於て、以前に知らなかつた喜悅を見出した。心の中には何物に對してだか分らない新渇望、新思想、新想像が動いて來た。私は美をさがした、そして到るところにそれを發見した、――草木の形にも、棚引く白雲にも、――かすかに靑い遙かの山の端にも。時としてこの世に生をうけて居ると云ふ單なる愉快が大きい深い喜悅となつて動いて來て、私を驚かした事もあつた。しかし又時として、新しい不可思議な悲哀、――漠として名狀し難き苦痛も時々私に迫つて來た事もあつた。

私は私の文藝復興に入つてゐたのであつた。

ギリシヤに對する憧憬はこの一篇によつても明らかに分るが、後キングスレーの『ギリシヤ英雄譚』を松江や熊本で生徒の賞品に寄附し、大學でも學生に勸めて讀ましめた事、又令息に勸めて『自分は幼時この書物を幾十度讀んだか覺えがない。今讀んでも飽く事を

知らない』と云つた事によつても分る。日本を愛好するに到つた一つの原因は、ヘルン自ら云つた通り、日本に於て、古ギリシヤ生活の類似點を認めたからであつた。

ラフカディオを行く行くはカソリックの僧侶にしたいと希望が假りに大叔母にあつたにしても、ヘルンの氣風から斷念せねばならなかつた。弟ヂェームスへの手紙に、ヘルンは『大叔母が私を僧侶にしようとして教育したと云ふのは本當でない。最も私は不幸にしてローマ舊教の學校に數年ゐた事がある。ここでは生徒をできるだけ無學にして置く事を、その教育の方針としてゐた。私は僧侶どころか、信者でもない』と云つて居る。

アショウ學校入學　其の以前の學校生活――アショウ學校――學友の記憶――一眼失明――二度半の近視――交際嫌ひの一原因――大叔母の破産――海の愛好――アショウ學校退學――ロンドン――フランス留學――ローマ舊教嫌ひ――米國行

ヘルンの學校生活は何時頃から始まつたか分らない。明かに知られて居るのは、一八六三年九月九日、ローマ舊教の學校、英國ダラムの「アショウ・コレッヂ」に入學した事である。アショウて親しかつた一學友の事を記す場合に『私共の滿十五歳頃の事であつた。……この學友とは滿十歳の頃から一緒にゐた』とあるのは、以前にも、何處かで一緒にゐたてあらうか。さきに引用した「夢魔觸」のうちに『その後、途に子供(チルドレン)の寄宿舍に送られてから、滅多に私を惱ますお化けが出て來なくなつたので、やや有難く感じた』とあるが

十四歳の時入學したアショウ學校の事ではないやうである。異母妹ミンニーに與へた手紙に、ほんの子供の時、或婦人の經營して居る學校に送られた事を書いて『この老婦人は私を虐待したので逃げ出した』とあるのは、アショウ以前の或學校を指すのであらうか。

この手紙及びヘルンがシエレーやキーツの傳記の講義に英國の小學校の非常に暴虐なるがために氣の弱い者(センシティーヴ)は只惡くなるばかりなる事を度々述べた事、令息は英國でなくアメリカの東部で教育するつもりであつた事、この令息は小學校に入れないで、三年程小學課程をヘルン夫婦で教へたのは、ヘルン自身の母がギリシヤ人なるがために幼時學校で苛められた覺えがあるからとの理由であつた事、『私は子供の時には肉體上精神上の自由と云ふ物を知らなかつたが、私の子供には與へてやりたいと思ふ』と手紙にある事等を思ひ合せて、アショウ以前にも一時ヘルンの學校生活はあつたとしても、それは幸福でなかつた事が思ひやられるやうである。それも一時であつて、多くは英國の上流社會のする如く家庭教師について初歩の教育を受けたのであつた。

アショウの學校生活は必ずしも不幸ではなかつた。アショウの學校、詳しく云へば、ダラムに近きヨークシヤイア・ヒルスの山腹にある St. Cuthbert's College, Ushaw(アショウ・聖・ガスバート・コレッヂ) は英國のローマ舊教の學校として設備、歷史等から見て、第一流の物である。出身者のうちに著名の文

人や宗教家が多い。

ヘルンの従弟でこの當時の事を書いて居る人がある。

なんでも繪が非常に好きな少年であつたと覺えて居る。非常に近眼であつた。自分は未だ幼なかつたので優しく丁寧にしてくれた。僧侶の學校にゐた時、大叔母と共に遇ひに行つた。教室を見せてくれるために二階に行く途中、聖母の像に禮拜せよと云はれたが、自分は拒んだ。ラフカディオは激昂して、何故禮拜しないか理由を云つてくれと願つた。いつでも非常に眞面目に、又非常に感じ易い性質をもつてゐた。

後ローマ教會で高い位置を占め、後又このアショウ・コレッヂの校長になつた當時の同級生 Monsignor Corbishly（コルビツシユレー師）の手紙に、つぎの記事がある。

彼を覺えて居ない者はない。隨分目立つた人で、學生中の大人氣者であつた。餘程奇抜な惡戯をする面白い人であつた。少年にしては立派な詩を作り、又非常な讀書家であつた。腕力崇拜家で、手帳には太い腕の繪ばかり描いてあつた。……

少年にしては想像力は非常に進んでゐた。學生としては、英作文だけは拔群であつた。始めて英文を作つた時は級中第一番であつた。學校にゐた間、始終大概一番であつた。しかもこの級には少年にして餘程の文章家と思はれた生徒は澤山ゐた。外の學課は中位か、それ以下であつた。尤も英作文の外は別に勉强もしなかつたやうであつた。想像力を養成整頓するのに全時間を費してゐた。

學校は愉快であつたらうと思ふ。いつも澤山の友人を有し、又大氣焰家であつた。實際、考は斬新奇拔であつたので、どの方面へ行つても發展するだらうと思はれた。教師の方から見れば、全く良い生徒とは云へなかつたらうが、はきはきした面白い少年であつたので種々の惡戲に對して怒る氣にはなれなかつた。

今日あれ程の大家になつて居るが、異教徒になつたと云ふ事實は餘り感心しない。さうでなかつたら大にこの人に同情をよせるのであつた。

文章ではいつも賞與を得た。シンシナーティのテュ ニスンに『昔學校で英作文で賞與を貰つた事があつた。全校生徒の前を通つてそれを受けに行く時、甚だきまり惡く思つた』と語つた事があつた。

Achilles Daunt（アキリーズ・ダウント）と云ふ當時の學生、今は文人として相應の名聲ある人の話がある。

この人の敍事的才能はこの時から傑出してゐた。怪力亂神的方面の文學は最も彼を喜ばした。……懷疑的性質をもつてゐて、一度私共の思ひもよからぬ質問、卽ち神の存在の證明を求めて、そんな事は夢にも思はない私共を恐れさせた事があつた。……想像は陰鬱であつた。それは少年時代の不幸の結果であると思はれた。何か家庭の紛擾のために、この人は多少打捨てられて、淋しい古い家に一人ぼつちで居るのだと學校での風評であつた。武者修行とか、深林に於ける巨人との格鬪とか、低い赤い月が荒野を照して勇士の鎧に輝くとか、嵐が物凄く沙漠を吹いて亡靈烈風のうちに叫ぶ、とか云ふのがこの人の好きな話題であつた。そしてこの想像を述べる言語は甚だ豐富であつた。

學校ではパッティーと呼ばれてゐた。頭字の「L（エル）」の意味を決して語らなかつた。ラフカディオの名は餘り變つて居るので、笑はれないためであつたらう。顏にはいつも悲哀の色があつた。時々友人と愉快に飛び廻つた事もあるが、それが終ると間もなく、もとの憂色にかへつた。

クリッケット、フットボール等の仕合に、殆ど、或は全く、頓着しなかつた。近眼の故もあつたが、要するに興味をもたなかつたからであつた。

一學友が自分の宛名は長くて困ると云つた時、ヘルンは自分のはもつと長い。「神、空間、宇宙、地球、東半球、歐羅巴、英國ダラム近傍、アショウ學校、ビー・エル・ヘルン」だと云つた。……

私の覺えて居るところでは、ヘルンは後には休暇になつても、歸省はしなかつたやうだ。家庭の事については、何も云はなかつた。私はヘルンの親友であつたが、家庭の事や、幼時について、話した事は少しもなかつたやうだ。……

ヘルンが後年、ヘンドリックに與へて十六歳の時別れた學校の友人の事を慕つて居るのはこの人であつたらうと思はれる。（全集第十一卷二九五）

又或學友の書いた物に、つぎの一節がある。

ロングフェローはヘルンの愛好詩人の一人であつた。……「ノース・サガ」にある一騎打ちや、試合や、勇士の大勇などを詠じた詩の一節を諳誦するのが好きであつた。いつも好んで口誦んだのが、

Like Thor's hammer, large and dinted was his horny hand.

「トウル神の槌の如く、彼の硬き手は大にして凹めり」

てあつた。ラフカディオは力瘤自慢であつた。この句を繰りかへす時、いつも右腕を曲げて、左の手でその瘤をつかんで見るのを常とした。私は時々彼を「大筋肉の人」と呼んだ事があつた。……非常に愛すべき人物で非常に眞面目な、同情に篤い人であつた。

當時のラフカディオについて、學友の手になつた書簡及び談話は外にも多いが、何れも大同小異で、ヘルンが學友間に人望のあつた事、英作文や文學の方の成績はよかつたが、その外は必ずしもよくなかつた事、想像豐富で斬新奇拔な考のあつた事、當時ロングフェローを好んだ事、時にオックスフォードにおけるシエレーを思はしむる擧動のあつた事、狂詩を作つて教師を苦笑せしめた事等を記して居る。

ヘルンが後年グールドに與へた手紙に、

私が少年の時に懺悔に行かねばならなかつた。そこで正直な思ひ切つた白状をした。或日嚴かな坊さんに「私は惡魔が沙漠にゐた隱者のところへ來たやうに美人になつて

來てくれたらよい、そしたら私は誘惑に落ちようと思ひました」と白狀した。この人は中々喜怒色に現れない人であつたが、この時には怒つて立ち上り、「氣をつけなさい、氣をつけなさい。どんな事があつてもそんな事を考へてはいけません。今にひどい罰が當ります」と云つた。餘り眞劒なので、恐ろしいやうな面白いやうな氣がした。私はこの人が餘り眞劒に見えたので、それではこんな誘惑は必ず眞に來るのか知らんと思つた。――併し惡魔は地獄にばかりゐて、遂に來なかつた。

とあるのはこの學校の出來事で懺悔僧とはウイリアム・レンナウルと云ふ非常に溫和な人であつた。この惡戲は校中で評判であつたと見えて學友中にもこの事を書いて居る人もある。

ヘルンは生れつき近視眼であつた。近視はヘルン一族の特有である。ヘルンの異母妹もさうである。ヘルンはその左眼をこの學校時代に The Giant's Stride（ジヤイアンツ・ストライド）と云ふ遊戲の最中に友人（後、家人に語つたところでは、最も親しき友人の一人）が急に放つた繩のさきが、目に中つたのが原因で失明した。長い間病院にゐた。この一大不幸のために、殘る一眼は元來の强度の近視に加へて愈々その負擔が重くなつた。たえざる勉學執筆のためにこの眼を刺

潰する事が多いので時々悪くなつた。眼に對する用心も深く、机上つねに小鏡を具へて眼を檢査した。執筆のためには特別に高く作らせ、眼に充血しないやうに注意した。ヘルンは自分だけでなく、家人や書生が新聞を下に置いて讀む事さへも嚴しく禁じた。ヘルンの近視は二度半であつた。その片眼鏡はつねに二つ携へて萬一に備へた。

この事はさほどヘルンを不具にしたわけではないが、ヘルンはつねにこれを氣にかけてゐながら、しかもそれを修飾する事を好まなかつた。紅彩の上に、白い膜のあるこの左眼のために、他人殊に婦人のために嫌惡されて居ると自覺してゐた。バウル、グールド、ヒルン等の未見の友人にもその事を告げて居る。（全集第九卷一五二、四〇五、第十一卷三七八）この事はその强度の近視眼、及び身長の低くかつた事と相伴うて、ヘルンを内氣で交際嫌ひにさせた事に預かつて力があつた。晩年、日本に來てヘルンが愉快に思うた事の一つは、日本では身長の低さを嘆ずるに及ばなかつた事である。

ヘルンがアショウを退學するに到つた原因、卽ち大叔母の破産の經路について少し語らう。ヘンリー。モリヌークスと云ふ大叔母の親戚で同じくローマ舊敎の信者があつた。（夫の親戚と一般に云はれて居るが、ケレナード夫人はやはり、ヘルン家の親戚と云ふ）

英國ロンドンに遠くないサレー州レッドヒルに住んでゐた。大叔母はこゝへ度々出かけて滯留した。そのうちにモリヌークスの經營にかかる東洋の貨物を賣捌く事業に度々莫大の資本、殆ど夫の遺産の過半を投じてやつた。

モリヌークスが一八六六年に破産して、レッドヒルの家を人手に渡し、アイルランドの南端トレモアに永住する事になつてから、大叔母もこのモリヌークス家の家族の一員となつた形になつた。ヘルンは後年異母妹ミンニーに與へて當時の事情を說明した物がある。

……大叔母は夫思ひであつた。大叔母は終生一つ思ひ惱んでゐた事があつた。臨終の時、夫は「サレー、御身には財産の始末は分つて居るね――」と云つたさうだ。大叔母は今少し聞き直さうとすると、もう駄目だつた。そこで大叔母は一生夫の臨終の言葉が氣にかかつた。坊さんに相談すると「カソリック敎徒の手にあるその財産は、夫の親戚の手で保管せよ」との意味だと說いた。大叔母は迷うて來た。モリヌークスの人々がこの大叔母を傍にしたのはこの時であつた。このヘンリーと云ふ人はローマ舊敎の敎育を受け、その上商業敎育を受けて、四つ五つの外國語を流暢に操つた。間もなく大叔母の家で幅を利かすやうになつた　大叔母は夫のために、ヘンリーを助け

るのだと私に物語つた。そのうちにこのヘンリーが娶る事にしてゐた若い婦人に五千圓の年金をやる事に定めた。……それから、ヘンリーは大叔母を說いて、自分を大叔母の遺言狀のうちに相續人に立てて貰ひ、私の方は五千圓の年金を與へて相續人を廢する事にしてしまつた。それ位で滿足せずに、大叔母の存命中にその財產を自由にしようとしたのが自分並びに大叔母の破滅の基となつた。ロンドンで失敗してから、財產は人手に渡つてしまひ、私を學校から退學させて、それからアメリカへ送つてヘンリーの友人のところへやつた。始め數ケ月のうちは、その友人から一週五弗づつの仕送りを受けたが、そのうちに勝手にせよと捨てられた。大叔母は間もなく死んだ。ヘンリー。モリスヱークスは手紙を送つて、私に送るべき物が澤山あると云つて來たが、遺言狀の事については一言もなかつた。……

モリスヱークス家がレッドヒルを退去してアイルランドのトレモアに移る以前から、ヘルンは大叔母と共に、トレモアに滯在した事は度々あつた。トレモアはウォターフォード市から二里半程離れて、一里餘りの灣に望んだ風景の好い著名な海水浴場である。ヘルンの一生を通じて變らなかつた『海を愛好するの念』は先きに云つたウエールスのバンゴアや

アイルランドのこのトレモアに於て養はれたのである。ヘルンは航海者となる事を斷念したのは近視のためであつた。（全集第十一卷二一三）凡ての運動は嫌ひであつたが、水泳に巧みであつたのも、ここに基づいて居る。小說「チタ」に寫してある海「燒津に於て」の海、その外、海に關する敍事抒情の文が最も勝れて居るのも、ここに基づいて居る。大學で敎へた學生で、江田島や横須賀の海軍の學校に敎職について居る人々を羨しいと云つた事がある。琴平參詣の時、若い海軍士官と道すがら話した事さへも、愉快な事の一つとして數へて居る、

ヘルンがアショウを退學したのは、大叔母の破產の前後卽ち一八六六年頃であつたらう。（ヘルンの父の歿くなつたのも一八六六年であつた）ヘルンが學生（大谷正信）の病氣を慰むるために與へた手紙に『……私が十七の年に、親戚に非常に富有な人もあつたが、誰も私を助けて學問を大成させてくれる者はなかつた。私は君がなる氣づかひのない者、卽ち下僕となつた。目を一つ失くした。病氣で二年床についた。助けてくれる者はなかつた。こんな困難にも屈せず、獨學自修した。しかも私は元、西洋のあらゆる贅澤に圍まれて富有な家庭に育つたのであつた。……』とあるが、これはかかる場合に多くの人のする通り、

慰むる方に重きを置いて、事實に重きを置いてゐない。二年の病氣は少しく大げさである。ヘルン自ら云ふ通り、らしい。下僕になつたのはアメリカへ渡つて後、數ケ月の事である。大叔母からの送金は僅かながら、渡米の後、數ケ月續いたのであつた。

大叔母の召使のうちにカザリンと云ふのがあつた。ロンドンの船渠のある東端のあたりで勞働者となつて居るデラネーなる者に嫁した。アシヨウを退學したヘルンはロンドンに出てこの人を便つて行つたらしい。夫人に語つて『大叔母の家に女中がゐて、幼時私の惡戲の甚だしい時に痛く私を折檻した。後、大叔母にも見離されて、行くところのなくなつた時、この舊婢を尋ねたところ、夫婦涙を流して、私を歡迎してくれた。日本でも女中は遠慮なしに主人の子女を折檻するが宜しい』と云つたのはこの人の事であらう。

ロンドンに如何程ゐたかは明らかでない。ただ何となしにぶらぶら歩いたり、博物館や美術館をのぞいたり、公園を步いて「門つけ」のうちにある『二十五年前ロンドン公園で聞いたさやうなら』を聞いたりした。當時はテニスンが『マウド』や『ロックスレー・ハウル』を出し、ブラウニングが『ソルデロ』を公にした頃、ウイリアム・モーリスや、ロセッティやラスキンや何れも盛んに活動せる頃であつた。

ヘルンのフランス留學は續いて起つた。モリヌークスの方ではアショウを退學させたが、未成年のヘルンをいつまでも捨てて置く事もできないので、今度はフランス留學を勸め、ヘルンもこれに應じて再びフランスのルーオンに近きYvetot（イーヴトー）に於けるローマ舊教の學校に入學した。近年フランスに於ける教育宗教分離のために、多くの記錄がなくなつたので、ここに於けるヘルンの擧動は分らないが、片目の外人は、ここでは甚だ不幸であつた事だけは想像される。その學校の規則峻嚴を極めたので、在學數ケ月或は二年未滿にして退學した。後長男一雄に佛語の初步を教へ始めた時、長く土塀の續いた學校町のやうな雜誌の繪を示して「私のゐたフランスの學校はこんなところであつた、御身も他日こんなところへ行くやうにならう」と云つた事があつた。

大叔母の手許で受けた家庭教育、アショウ、及びイーヴトーの學校教育何れもローマ舊教の教育であつたが、ヘルンの一生を通じて眞に蛇蝎の如く忌み嫌ふと共に、それから復讐でも受けるやうに、病的の恐れをなしたのはローマ舊教であつた。

令息を東京の或ローマ舊教の學校に入れる事を勸められた時、顏色を變へて「それよりは殺す方がよいと思ひます」と答へた事があつた。（最も晩年には、これ等の宗教教育も

一概に悪いと云へないのみならず、今日ではあれが一番賢い教育だと思ふと云ふ旨を述べて居る）神戸時代に、チエムバレン教授に寄せた手紙の一節に「マニラへ行つて見たいと以前から思つてゐます。私はローマ教は農夫の信仰などに對して、多大の同情を寄せてゐますが、――マニラには宗教裁判などは今も殘つて居るらしく、又私は不幸にしてゼズイットの注意人物になつてゐます。君は若いスペイン人で、財産を沒取されて行方不明になつたので、本國の友人等が大騷ぎをした後漸くの事で自由を得た者のある事を御存じでせう。私もまさか行方不明にもなるまいが何か故障に出あひさうです。……」（全集第十一卷一八二）と云つて思ひ止まつた事があつた。大學で故外山博士に紹介されてローマ舊教の僧、佛語佛文學の講師エミール・エックに遇つた時、同じくヘルンは顏色を變じた。砲兵工廠の前でエックの車と遇つた時、ヘルンは車夫を督勵して驅け拔けさせた事があつた。（しかし、エックとはその後、意外に話が合うて互に常談も云ひ合ふやうになつた）これ等の事實はフランスの學校がヘルンをしてローマ舊教を嫌はしむるに到つた原因を與へた事を思はせる。

イーヴトーの學校を出て、巴里に赴いたらうと思はれる。叔父リチヤードを訪ねたかどうかは分らない。普佛戰爭以前であつた。ガウティエやヴィクトル・ユーゴーやフローベ

ルやボードレーェルの盛時であつた。フローベルやガウティエを英米の文壇に紹介したのはヘルンが最初であつたが、この時これ等の著作に近づいたのであつた。渡米の行李中には、恐らくこれ等の著作が入つてゐた。

一八六九年、ヘルンはアイルランドの人々から若干の金を受取つて、モリヌークスの親戚カリネーンを便つて、アメリカのシンシナティに向つて歐洲を離れた。再びロンドンに立ち歸つて舊婢カザリンのところから出發したか、フランスから直ちに發したかも明らかでない。このアメリカ行はモリヌークスから見れば、ヘルンを厄介拂ひせんがための業であつたが、同時にヘルンの放浪性にも一致したのであつた。破産したと云へ、無一物になつたわけでもない大叔母の許に立ち寄つた方が自分の利益である事を知らぬでもなかつたが、モリヌークスに妨げられてか或は自ら遠慮してか、そのままに立ち去つた。

四　シンシナーティ

ニュ・ヨーク――『私の最初の小説』――シンシナーティ――窮乏――『星』――求職――ワトキン――記者――『烏の手紙』――『直覺』――『シンシナーティ・インクワイラー』――主筆コックリル――製革所の殺人事件――セント・ピーター寺院の尖端に上る――『繪入日曜新聞』發行と廢刊――『コムマーシャル』へ轉任――友人――讀書癖――外國文學の飜譯――異人種に對する同情――南方へ――メンフイス――弱い者苛めを憎む

一八六九年月日は分らないがニュ・ヨークに着いたのは何でも金曜日であつた。ここにどれ程留まつたか明らかでない。或傳記家は約二年と考へて居る。恐らく長くは滯在しないで、豫定の如くその年のうちに移民列車でオハイオ州の大都會Cincinnati（シンシナーティ）に出發したのであらう。つぎの自傳の斷片によつて多少その途中の消息が分る。移民を載せた列車、飢

餓、一少女の恩惠、三十年の後思ひ出しても、消え入りたくなるのは、その恩惠を施した少女に誤解を與へた事である、など以下の文に現れて居る。

私の最初の小説

世界の向うから黄色の表紙にスカンディネヴィヤの書肆の名、――大風、大濤、大波の響きある書肆の名――を刻印した小さい書物を送つて來た。霜の神々にふさはしいそれ等の名を見ると思ひ出す顔が一つある――それはただ北歐の傳説や物語、殊にビィヨルンステルン・ビヨルンスンの不思議な面白い話と、その顔とを私の想像で永く聯想してゐたからであると思はれる。

十九の夏を經た色の白い、赤みを帶びた強壯なノルウェイの田舎少女の顔である。お國風の着物を着て居る。眼は海のやうに灰色である、編んで下げた光澤のある髮は青いリボンで結んである。背は高い、どこかに凜とした品位が備はつて居る、それを一言で云ひ表はす適當な言葉がない。名は聞かなかつた、今後それを知る事もできない、――そして今はどうでもよい。今頃は少なからぬ孫をもつて居るだらう。しかし私に取つては彼女はいつも霜の神の土地から出て來たばかりの十九歳の美しい少女である、――神々と海王の娘である。彼女を見た瞬間から私はこの人のためなら死

私は答へない。彼が私の心を知つて居る事を私は怒つて居る。それから知つて居ると私に知らせるのは甚だ失敬だと思ふ。

意地悪くも彼は續ける、——

「君が彼女をそんなに好きなら何故彼女にさう云はないか。君が彼女に云ひたい事を僕に云ひ給へ、そしたら君のために通辯して上げる。……馬鹿な、そんなに女を恐れるには及ばない」

あゝ、彼女に云ひたい事を彼に云ふとの思ひつきは。……しかし彼の微笑を見てゐながら、彼に對して怒つて居る事もできない。

とにかく私は物を云ふ氣にはなれなかつた。三十八時間私は何も喰べなかつた、そしてたばこの煙ばかりで養はれてゐた私の小說的の夢は時々急な胃の痛みで妨げられて、食物なしでどれ程長く支へられるかを不思議に思はせた。未だあと三日の汽車旅行——そして金はない。……昨日私の隣人は何故私に喰べないかと尋ねた、——私がそのわけを云つたら、如何にすばやく彼はその話題を變へたらう。私は不平を云ふべき理由はない、彼が私に食物を與ふべき理由はないのだから。そして私は愚かにも不用意であつた事を反省する。

その時突然私の前に白い手が現れたので、私の反省は遮られた、その手は餘程大きな黑パンの切れに一寸程の厚さの黃色のチーズをのせたのを差出して居る。そこで私は躊躇しながらノルウェー少女の顏を見上げる。彼女は小兒のやうな美しい節の英語で私に「お取りなさい、そしてお上りな

さい」と云ふ。

私はそれを取つて貪り喰べる。黒パンとチーズのこの時程旨かつた事はこれまでにない。最後の一切れを嚥み下してから始めて、事の餘りに不意であつたのと、飢ゑてゐたので、彼女に禮を云ふ事を忘れてゐたのに突然氣がついた。衝動的に、そして變な時に、私は何か御禮の言葉を少し云はうと試みる。

不意に耳の根まで、彼女は赤くなつた、それから前にのり出してはつきりした鋭い調子で何か質問したので、私は恐れ、且つ恥ぢ入つた。私にはその質問が分らない、ただ彼女の怒つて居る事だけが分る、その恐れ且つ恥ぢ入つた瞬間に、私は本能的にノルウエー人の怒りの強さと深さとを推量する。私の顔は燃えるやう、それを見て居る彼女の灰色の眼は鋼のやうな灰色をして居る、それから彼女の微笑は怒つて居る時に笑ふ人々の子の微笑である。私は汽車で轢かれて死ぬか――穴の中に入るか――全く見えなくなりたいと思ふ。しかし私の淺黒の隣人は何か小さい聲で辯解する、――私はただ禮を云はうとしたのであると彼女に保證する。そこできつとなつた眉もゆるむ、それから一言も云はないで、走つて行く風景を見るために側を向く、そして莊嚴な憤りの色は速かに來たやうに、又速かに消えて行く、しかし誰も物を云はない、汽車は三十五年前の薄暮を通つて走る……そしてそれだけである。

……私の云つた事を何と取つたのであらう。私の淺黑い仲間は私に云つてくれない。私を憐れんだ親切な心の人を暫らくでも怒らせた事、――その人のためなら命でも喜んで捧げてもよいと思つた人の顏を赤くさせた事を考へると、今でも私の顏が燃えるやうになる。……しかし彼女の面影、彼女の貴い面影を私はいつまでも忘れない、そしてそのために彼女の生國の名までも、私には非常になつかしい。

ヘルン自ら語つて居る通りシンシナーティに着いた當時數月の間は、ヘンリー・モリヌークスの妹婿カリネーンの方へアイルランドの大叔母から送金して來た。カリネーンのグールドに語るところによれば、ヘルンは三度來訪したと云ふ事である。カリネーンはヘルンを好まないで少しも世話する事もなく、ただ大叔母から委託された送金を取次いだに過ぎなかつた。ついでにヘルンの晩年に至るまで變らない特質として、金錢に無頓着で經濟に拙であつた事を一言せねばならない。當時のヘルンに取つてはもとより經濟の巧拙は問題にならないが、大叔母よりの送金絶えて（カリネーンの說くところによれば、ヘルンは仕事を見出してから來なくなつた）仕事を求むる必要に迫られてから、ヘルンの窮乏は實

際涯なしかつた。
シンシナーティの時分の事と云つてヘルンが人に語つた事がある。シリア生れの行商人がヘルンを傭つて小さい鏡を賣らせた。凡そこんな事にヘルン程不適任な人はあるまい。終日歩いて一枚も賣れないで歸つた。自分の失敗の言分けをしようとしてその荷物を下し際に、過つて鏡を一枚踏み破つた。その砕くる音に吃驚して飛び出し、再びこの商人に顔を合せなかつた。又再びこの種の商業に從事しなかつたと云ふ事である。
『星』と題する自傳の斷片は、この時代に關する物である。

星

私は着物――少しかない、それも薄い――を脱ぎ去つて、枕にするためにまるくする、それから裸になつて乾草の中へ這うて入る。……あゝ、乾草の床の有難さ――長い幾夜かの後、床と名のつく物に寝た始めての床、――あゝ、休息の感じの心地よさ。乾草の心地よき香。……頭の上では屋根の間から星が見える――鋭く輝いて居る、空には霜がある。

階下には馬が時々重くるしく動いて蹄音をさせる。息をするのも聞える、その息が蒸氣となつて私のところへ上つて來る。彼等の大きなからだの暖みは建物一杯に漲つて乾草を通して私の血を暖める、――彼等の生命は私を暖める火である。

滿足さうに彼等は息をして居る。……私がここで乾草の中に蹲つて居る事を知つて居るに相違ない。しかし彼等は頓着しない、――それが私には有難い。息の暖いのも、清いからだの暖いのも、乾草の暖いのも、有難い、――休みながら時々動いてくれる事さへも有難い、これはからだの大きい、心の廣い、物を云はない仲間が居るぞと暗がりのうちで確めてくれるのだ。……私はどれ程有難く思つて居るか、――どれ程彼等を好いて居るかを云つてやりたい、――靜かなところへ大きな暖い靈魂のやうに彼等が擴げてくれる力と生命の心もち、それをどれ程嬉しく感じて居るかを云つてやりたい。……

彼等は物を解しない方がよい。彼等はよい食物と住居を得て居るからである、――綺麗で光澤のあるやうに世話をして貰つて居るからである、――彼等はこの世では役に立つて居るが、私は一體何の役に立つのであらう。……

それ等の鋭く輝いてゐる星は、皆それぞれ太陽――大きな太陽である。それは外の數知れぬ世界に光を與へて居るに相違ない。……その世界のうちには市街も、馬に似た動物も馬屋も乾草も、――鼠だの何だの――そんな小さな物も乾草のうちに隱れてゐるだらう。……私は數億の太陽のある

事を知つて居る。馬は知らない。しかし私の聞いて居るところでは一頭三千圓づつするさうだ、彼等は高等動物である。私は如何程するだらう。……

明日彼等の喰べたあとで、私も――濟ませて貰つて――何か喰べられるだらう、――そして私は數億の太陽のある事を知つて居ると云ふ事實があつても、私の食料を儲ける事ができないのである。

同じく家人に「一宿屋に泊つたが、熱病にかかつて居る事が分つたので放逐された。そこてありだけの着物を着て市街を驅け廻つて、遂に獨りで直してしまつた事がある」と語つたのも、又夫人のストーヴをたきつけるのを見て『私はあなたの赤坊の時分に宿屋で、客の寢て居る間に、ストーヴをたきつけて歩いた事があるから、あなたより上手です』と話したのも、何れもこの時代の事である。

つぎにアトキンスン夫人に與へた手紙がある。

私は或會社へ書記として入社する事ができたが、もともと算數に長じないのみか、普通の計算さへ碌にできなかつたので、駄目になつた。それから電信配達になつて電信局に出た。外の配達は皆若い子供てあるところへ、私が二十歳てあるのは、頗る滑

稽で、皆に笑はれた。私は癪に障つて給料をも受けないで止めた。友人は怒つて世話をしないと云ふし、下宿屋からは追ひ出された。最後に、宿屋の給仕となつてストーヴに火をたきつけたり、石炭を入れて廻つたり、何かしてその代りに食物と喫煙室に寢る事を得た。こんな事を一年半程續けた。その間に讀書作文の時間を見出した。その頃書いた物語は今はもうなくなつた。安い週刊新聞に出したが、原稿料は貰つた事はない。その外商店の引札を配つたり、廣告の原稿を書いたりして煙草や古着を買ふ程の金だけはできた。……

破れ着物。みそぼらしき風采で、ただ食を求むるに急なる苦しき生活を送つたが、その間にも公立圖書館などへ通つて修養は怠らなかつた事が分る。又如何に窮乏しても、最早（恐らくその當時大叔母の死去から）その關係の自然に消滅したモリスークスの補助を仰がぬ事にきめた事も分る。

その後ヘンリー・ワトキンと云ふ學問教養の深い親切な英國出身の活版屋へ紹介されて食客となつた。ワトキンはこの少年を憐れんで家に入れた。掃除や使あるきをして、ワトキンの『居候』となつて、藏書を借覽したりなどしてゐた。この人について活版事業を習

つたが成功しなかつた。
一八七四年の初め『シンシナーティ・インクワイラー』社に入つて記者となつたのは、ヘルンの本當の記者生活の始めと云つてよい。シンシナーティに着いてから今日まで五年間、種々雜多の事を試したうちに、やや新聞記者生活の端緒とも見るべきは、ロバート・クラーク會社に入りて校正係となつた事もある。又ワトキンの紹介でバーネー大佐と云ふ人の發行した『トレード・リスト』と云ふ商業新聞に關係して廣告を勸誘したり、記事を書いたりした事もある。そのうちには浮標（フローティンク・ブイ）をつけて、輕氣球で大西洋を橫斷すると云ふ、今日の飛行船の先驅とも見るべき建議など商業新聞には不相應な記事もあつた。
ワトキンの食客となつて居るうち、シンシナティの公立圖書館長トマス・ヴィカースの祕書の地位を得た事もあつた。後クレイビエルへの手紙に折々この人の事と、その圖書館にある文學や音樂の珍書の事を述べて居る。
職業のできた後も、一時はワトキンの家にゐた。ヘルンは人好きのする容貌風采ではなかつた。この事をヘルンは實際以上に自覺してゐた。ワトキンの家でも、ワトキンこそヘルンを愛し、ヘルンの異常の天才を認めたが、ワトキン夫人はヘルンを嫌うて、自分と娘はヘルンの前に現れた事はなかつた。この親密なる交際は、父であり夫であるワトキンと

ヘルンとにのみ行はれたのであつた。ワトキンの家を出た後も、同年配の友人よりもこの三十歳年長の老ワトキンとの交際を好んだ。シンシナーティ滯在中は毎日のやうに、この人の印刷所を訪問して、不在の時は紙切れに何か文句を書いて、署名の代りに『烏』の繪を殘した。ヘルンの沈鬱な樣子がポーの『レーヴン』に似て居ると云ふので二人の間で符牒となつてゐたからであつた。その後ヘルンが南方に移り、又日本に渡つて後も文通は絕えなかつた。ワトキンは九十四歳の高齡で明治四十四年、歿くなつた。ヘルンの手紙をまとめて、それを何よりの寶として誇つてゐたと云ふ事である。これ等の文通は一九〇八年『烏の手紙』と題して出版になつた。ワトキンはヘルンをポーよりも偉大とし『大文人たる天資は悉く具へて居たが唯一つ洒落と云ふ點が缺けてゐた』と云つて居る。

この時代に關する斷篇『直覺』を左に譯出する。四十年前にアメリカに來た友人とは卽ちワトキンの事である。

直覺

私は十九歲であつた、そして知人もない廣いアメリカの天地に孤客となつて、ままならぬ浮世を

かこつてゐた。私はこの浮世に處する術を知らなかつたので、できるだけそれを忘れようとした、そして毎日公立圖書館で養つた小說的の夢が、それを忘れる助けをしてくれた。この無錢讀書の贅澤について、私の重たる娯樂となつた物は、通り行く人の顏――少女の顏――を見て或理想の實現を見出さうと試みながら往來をさまよふ事であつた。それからその當時その土地で「展覽室(ガレリーズ)」と云つて寫眞屋の店後に飾りに置いてある寫眞を見て同じやうな娯樂を見出した。貧しい幾月かの間は、實際私に取つてはそれが繪畫展覽會同樣であつた。

或日或横町で新しい寫眞屋を發見した、そして入口のガラス箱にある一つの顏を見た、それを見ると驚きと喜びの餘り息もできない程であつた、――その顏は私の想像にも及ばない程はるかに優れた物であつた。それは刺繍のある肩掛のやうな物を頭巾に被つて居る若い婦人の顏であつた、この縫つた頭巾は顏形ちの並外れた美しさを特に際立つて美しく見せるための工夫であつたらしい。大きな黑い眼の視線は鋭くして落着いてゐた、鼻の曲線は劍の曲線のやうにはつきりしてゐた、口は美しく締つてゐた、――そしてこの顏には優しい聰したやうなところがあるにも拘らず、どこかに驚に類したところがあつた。……永い永い間、私はそれを見て立つてゐた、そして見るに隨つて、その優れた不思議な美しさが魅力のやうに增加するのであつた。私はこの實物の婦人を崇拜する特權を有する事ができたら、どんな日に――どんなひどい日にでも――遭つてもよいと思つた。しかし誰だらう。私は『展覽室』の主人に聞ふ事はできなかつた、そして外に見出す方法を考へる事が

できなかつた。
その當時私は一人の友人をもつてゐた、——そのアメリカの都で私の知つてゐた唯一人の同鄕人であつた、——私より殆ど四十年程以前に、アメリカへ流れて來た人であつた、——その人のところへ私は行つた。——私の子供らしい熱心に對していつも面白がつて同情を寄せてくれた、それで私の發見について物語つた時、彼は直ちに私と寫眞屋の店に行かうと云ひ出した。
暫らく默つて困つたやうに、半白の眉を寄せながらその寫眞を熟視した。それから彼はきつぱりと叫んだ、——
「これはアメリカ人ぢやない」
私は心配さうに尋ねた、「その顏をどう御考ですか」
「それは立派な顏だ」彼は答へた、——「中々立派な顏だ。しかしアメリカ人の顏ぢやない。英國人の顏でもない」
「スペイン人でせうか」私は云つて見た。「それともイタリヤ人でせうか」
「いや、いや」彼は極めてはつきりと答へた。「全く歐洲人の顏ぢやない」
「或はユダヤ人でせうか」——私は思ひ切つて云つた。
「いや、大層美人のユダヤ人も居るが、こんなのはない」
「それでは何でせう」

「どうも分らない、——どうも異つた點がある」
「そんな事がありませうか」私は反抗して見た。
「さあ、そんな氣がする、——きつとさうだ。……しかしちよつと待ち給へ、——この寫眞屋を知つて居るから聞いて見よう」

それから有難い事には彼は立ち寄つてくれた。……悲しいかな、その謎は思つた程早く解けなかつた。その寫眞の持主は誰の寫眞だか知らないと云つた。彼は寫眞類を撮つて居る卸し問屋から、外の「見本類」と一緒に買つたのであつた。その寫眞は巴里で撮つたのだが、それを貼つてある臺紙にはフランスの寫眞師の名はのせてなかつた。

ところで私の友人は漂泊者であるから、英國との關係は私の生れない前に切れてゐた、——この人は奇態な場所や變つた人々について、極めて驚くべき知識を有してゐたが、母國の生活に何等の興味を感じなくなつてから永い事になる。多分その理由でこの寫眞が私に分らないと同じく、この人にも謎であつたのである。寫眞師は若い男で生れた州を離れた事はない、そして見本類は勿論仲買人の手を經て求められたのであつた。私は又、美術や音樂や劇に娯樂を求むるやうな規則正しい社會と關係する事は殆ど絕望と云ふ程の苦しい境遇にゐた。さうでなかつたら、そんなに人を不思議がらせた不思議な人物の名はどんなに容易に知れたであらう。しかし私に知れるまでには中々年月がかかつた。

それから寫眞の事は全く忘れてゐた。私は幾百哩か離れた南部の都會にゐた、そして或藥屋の帳場によりかつつて、主人と話して居る時、不意に私の側のガラス箱に例の不思議な寫眞のある事に氣がついた。それはコスメティックの箱のふたに、貼紙として貼つてあつた。そこで又少年の時寫眞屋の入口で感じたと同じ驚きと喜びの感じが、私の血管を逆つた。……

「失禮ですがちよつと御尋ねします」私は叫んだ、――「これは誰の顏ですか、教へて下さい」

藥屋は寫眞をちらと見て、それから微笑した――つまらぬ質問に對して人が微笑するやうに。

「あなたが知らないと云ふ事がある物ですか」彼は答へた。

「知りません」私は云つた。「何年か以前にその寫眞を見たのですが、誰の寫眞だか分らなかつたのです」

「御常談でせう」

「本當に常談どころぢやない」私は云つた、――「それから私は是非知りたいと思つてゐます」

そこで彼は、私に告げた――しかし私はこの大悲劇女優の名をくりかへすまでもない。……直ちに「どうも異(ちが)つた血がある」と云つた昔の友人の言葉が私に閃いてかへつて來た。結局彼の云つた事は本當であつた。この不思議な婦人の血管に印度の王族の血が流れてゐた。

ヘルンが『シンシナーティ・インクワイアラー』社へ入つた當時の主筆ジョン・コック

リルナ社が一八九六年、六月號の『カーレント。リテラチユア』に、自らヘルンを採用した當時の事情を記して居る。

約二十年前、私は或西部の都で日刊新聞を引受けてゐた。或日事務所へ、變な容貌の小男が入つて來た。强度の近眼鏡をかけて、妙に臆病らしいそして「運」の神には見放されたと云ふ風をしてゐた

穩かな聲で、投書を買うて貰へまいかと聞いた。私はその方の金は餘り無いが、草稿を見た上て考へて見ようと答へた。彼は上衣の下から草稿を出しておどおどしながら、机の上に置いて、こそこそと逃げるやうに出て行つた。

それからその日おそく、その置いてあつた草稿を見て面白く書いてあつたのに驚いた。……

彼は主筆室の一隅に陣取つて、日曜版の爲めに特別の物を書いた。何れも當時の新聞には類のない程優れた物であつた。新聞一號の爲めに十二乃至十五欄を書いた事も覺えて居る。愉快に働いてくれるので私も喜んでゐた。卽ち文體の美しかつたのと、又一つはこの人が新聞に與へた調子が著しい物であつたからである。

何時でも机に坐つたきり、大きな飛び出た圓い目を紙にすれすれにして、熱心に、油斷しないで書き續けた。側に居る私には、居るかゐないか分らない偶像のやうであつた。

その當時、目が惡いので難儀してゐた。彼は又花のやうに感じ易かつた。何か不親切な言葉は彼に取つて鞭で打つ程の大打撃であつた。しかし、進んで人を憎んだりなどする方ではなかつた。……詩的で全性質美に調和して居るやうに見えた　實際不健全な物でも、感服のできない物でも、彼の筆に上れば綺麗になつた。そのうちに市部編輯の一員となつて報酬もよくなるにつれてこの人の記事が益々進歩した。

下層社會の事を好んで書き、市街の暗黒方面を搜つて、優しい小說的な話を掘り出した。汽船の發着所に於ける黑奴の荷積人足に興味を有し、絶えず行つて彼等の歌、奇習、物眞似等について書き、彼等の襤褸にも、彼等の野蠻な踊りにも詩趣を見出した。

その後、このヂョン・コッ クリルも又日本へ來遊した。その時（一八九五年）ヘルンはチェムバレンに手紙をよせてこの人の事を記して居る。

私は一八七四年、シンシナーティで日刊新聞の事業に從事し始めた。「インクワイラー」と云つて、編輯人はコックリルと云ふ火の玉のやうな青年であつた。やかましい主人で、非常な勉强家で、天成の新聞記者であつた。私共一同餘りこの人を好まなかつたが、とにかく、やり手であるので感心してゐた。いつでも罵り散らし、殆ど私共を半殺しにする程ギユギユ働かせたが本人もその通り働いた。毒舌にも一同恐れを抱いた。軍隊から出たばかりなので、軍隊の話を多くした。數年のうちに、新聞の賣高を非常に增したので社主は一かどの財產を作つたが、妬んで出してしまつた。……その後セントルイスの新聞をやつた。それからニユ・ヨークの日刊新聞「世界」をやつた。……賣高を二十五萬位にした。又つまり社主の嫉妬を受けた。……彼は又「アドヴアタイザー」をやり出したが自分で働いて來て、それを賣つて漫遊に出た。終りに「ヘラルド」のベンネットが、一ヶ年二萬圓で、日本へ派遣したと聞いて居る。

今日、ここでこの人に遇うて昔話をした。餘程穩かな面白い人になつて、又餘程優しくもなつたやうだ。少し胡麻鹽になつて居る。私の云つたところでもこの人の非凡な事が分る。他人のために順々に百萬の富を作つてやつて、自分が何もしない人など

は中々あるものでない。この人は文學者でも博覽な人でも學者でもない。しかし非常に優れた常識と博い經驗をもつて居る。それからマーク・トウェーン風に大分奇人(ヒユモリスト)である。

ヘルンがこの新聞に關係するやうになつてから間もなく、シンシナーティで有名な『製革所(タンヤード)の人殺し』(ハーマン・シリングなる者、その仲間に殺された事件)として長く知られて居る事件が起つた。ヘルンが有名になつた起りはそもそもこの事件から始まつて居る。入社後、間もない事であつた。外の記者が悉く出拂つたあとであつたので、急ぎの場合新參のヘルンをやつて見たが、その記事は讀者の大歡迎を受けて意外の成功をもたらしたと云はれて居る。(グールドの說によればこの事件のあつたのは一八七四年の一二月頃で、新聞に現れたのは同じ年の十一月であつたと云ふ。それにしてはその間の經過は餘りに長い。屍體が永く隱されてゐたと見える)

この事ありて後、ヘルンは探訪、三面記事に最も重きをなすに到つた。ヘルンは又その職務に對しては最も大膽機敏で、危險や困難を顧みなかつた。ヘルンがこの『人殺し』の記事は當時この種類の記事を歡迎したシンシナーティ人の趣味を思ふべき程ただ精細にその慘狀を寫した物に過ぎない、之を讃してポーの凄慘以上であると云ふのも、又之を貶し

てヘルンの藝術的良心を云々するのも、何れもその當を得ない。

又つぎに命ぜられて、シンシナーティのセント・ピーター寺院の塔上にある十字架に上つてその都市の鳥目視を記して滿都を驚かした事もあつた。しかしこの時ヘルンは宙乘りのやうな危險を冒して攀ぢ上つた事は上つたが、自分では强度の近視の肉眼を使用する考はなかつたので、眼鏡をさへ携へないで上つたのであつた。そして記した事はただ想像によつたのであつたが、その記事の精細なる事驚くべきであつた。

この年（一八七四年）六月二十一日、金主を得て Ye Giglampz（イー・ギグランプス）と名づくる繪入日曜新聞を畫家の Farney（ファルネー）と二人で發行して、八號まで續いた。第一號の大きさは十四半インチに十インチ四分の三、第二號からは十六インチに十一インチ四分の一であつた。八ページの內、第一、第三、第四、第八のページはファルネーの繪で、殘りは讀物であつた、讀出しには、表紙の標題と少し異なりて、つぎのやうに書いてあつた。

"The Giglampz"

Published Daily, except Week-Days

Terms, $ 2.50 Per annum

Address, "Giglampz Publishing Co." 150 West Fourth St.

この編輯人のヘルンである事は何人にも知れてゐた。表紙に（A Prospect of Herr Kladderadatsch, Introducynge Mr. Giglampz tu ye Publycke として）クラッデラダッチ君が大きな片目鏡をかけたヂグラムプスを大喝采のうちに公衆に紹介して居る繪がある。ヂグラムプスとは大きな眼鏡と云ふ意味である。

この雜誌の十二欄のうちヘルンは第一號に八欄、二號に七欄、三號に六欄、四號に三欄、五號に四欄、六號に二欄、七、八號は共に一欄だけ筆を執つて居る　この雜誌は當時の時事問題やその他を捉へて、繪と文章とで面白い諷刺を作るなど、專ら滑稽の方へ力を用ひて『ポンチ』その他を壓倒するつもりだ、と宣言してゐたが、元來ヘルンはその方面は不得意であつたから、やはり悲哀な物の方が勝つて居る。例のビーチャーの姦通事件の喧しい時であつたのでビーチャーの胸に（A）字をつけて、公衆の前に立つて居るのを、一同騷いで見て居る繪などもある。

ヘルンの出した記事の題が餘り大膽だと云ふので、ファルネーが勝手に變更したのを、ヘルンが不快に思つて、次第に書かなくなつたのが原因で廢刊するやうになつたとワトキンは述べて居る。ヘルンがシンシナーティを去る時、自らの書入あるこの雜誌の綴りを古本屋に賣拂つた。後、ファルネーが偶然それを發見して同人の所有となつたと云ふ事であ

る一八七六年『インクワイアラー』から『コムマーシャル』の社員に轉じた。初めの俸給は一週二十二弗、後に一週二十五弗となつた。

ヘルンはこの當時すでにその新聞記事に於て、古今東西に亘つて哲學宗教文學科學の諸方面に關する深い趣味と素養を示して居る。學校生活も短く、生活のために働く日の多かつた若いヘルンにどうしてこれだけの驚くべき學問修養ができたのであらう。これはヘルンの友人の說明によれば、第一にヘルンの讀書の驚くべき速力とその分量、第二に絕大なる記憶力によつて得られたのであつた。この時代のヘルンの手になつたこれ等の新聞記事も、その後のニユ・オルリアンス時代の物も、ずつと後の神戸時代の物も、ヘルンの歿後次第に編纂されて出版になつた。『東西文學評論』『アメリカ雜纂』二卷『西洋落穗』二卷『社說』『神戸時代の社說』などは卽ちそれである。

ヘルンが當時シンシナーティで得た友人は、不思議にもその後、何れも名高くなつて居る。ファルネーは有名なる畫家。ヂョーヂ・ケーブルは相當の文人。ジョセフ・テュニスンは古文學の大家。クレイビエルは音樂批評の大家として著述頗る多く、世界に名を馳せて居る。老友ワトキン、及びこれ等の人々と交際し談論する事、及び僅少なる收入から衣

食を節して書物を購ふ事はシンシナーティ時代に於けるヘルンの樂しみであつた。書物は珍らしい物、變つた物、東洋の物、大陸の物をあさつて讀んだ。ガウティエの怪談に興味を感じて、譯し始めたのはこの頃の事であつた。テュニスンはつぎのやうに書いて居る。

新聞記者の奴隷的生活も、彼の進歩向上の念を撲滅する事はできなかつた。毎日警察事故の探訪、あの模倣のできない文體で雜欄を書く事など終つて、毎朝二時三時から曉に到るまで孤燈の下に書物と原稿用紙に大切な目をすれすれにして、ガウティエを飜譯してゐた。

かくて譯された物は、『クレオパトラの一夜』『クラリモンド』『アリヤ・マーセラ』『みいらの足』『オムファル』『カンドール王』等の怪談となつてその後、出版された。ヘルンが大陸の新しい作者を英米の文壇に紹介した功勞は認めねばならない。ガウティエ、アナトール・フランス、ピエル・ロティ、何れも始めて紹介したのはヘルンであつた。ガウティエの出版の後れたのは原作者ガウティエも譯者ヘルンも二人とも未だアメリカでは認められなかつたので引受ける書肆がなかつたため、その後六年後れて、ニュ・オルリア

ンス時代にニユ・ヨークから出たのであつた。『支那怪談』であれ『黒人の諺』であれ、各種の飜譯であれ、西印度の諸物語であれ、晩年の日本に關する諸篇であれ、何れも變つた文學、變つた世界、變つた人生を示さうとするヘルンの努力であつた。

『シンシナーティ・コムマーシャル』社に勤めた事二年ばかりで、ニユ・オルリアンスに移る事になつた。この頃のヘルンは警察署へ出頭したり、事件によつては現場に驅けつけたりして毎日軟欄の記事を書いてゐた。しかしこれはヘルンは不得手であつた。殊に訪問記事を書く事はヘルンには苦手であつた。社長から或人を訪問する事を依賴されて出かけたが、四時間の後歸つて來てどうしても面會ができなかつたと報告した。あとでヘルンはその人の家の前を四時間もあちこち歩いたが、ベルを押して案内を請ふだけの勇氣が出なかつた事が分つた。社長は戲れて『ヘルンに訪問記を作つて貰ふためにはその人がヘルンを迎ひに來て招待しない以上、ヘルンは空手で歸るだらう』と云つた。こんな風にして一日十四時間も働いてただ煽動的方面の新聞事業に從事する事に飽きはてて、何となしに南方を慕つてゐたのであつた。

グールドは『ヘルンはこの時黑白雜種の婦人某と結婚しようとして正式の許可を得ようとした事から、「インクワイアラー」社を退けられたのであつた。（この當時、黑人の血

は四分の一あつても、公然の結婚は許されなかつた、しかし、この法律は間もなく廢せられた）「インクヮイアラー」では二十五弗の給料であつた。それから「コムマーシャル」は二十二弗でヘルンを雇つた。しかしこの結婚は行はれなかつた」と云つて居る。ケンナード夫人もその書中にヘルンが下宿せる家にアルスィア・フォレイと云ふ雜種の女がゐて冬の寒い夜半に凍えて歸る時、雨のふる夜半にびしよぬれになつて歸る時、ヘルンのために火を作り食事を暖めて迎へてくれた。重き病に臥した時ヘルンを看護した。女から親切を受けた經驗の乏しいヘルンはこの親切に絆されて、彼女と結婚する事は再生の恩人に對する義務であり、又迫害されたる種族に對する同情を示す所以であると考へた。そこでヘルンはクレイビエルやテュニスンの諫言にも耳をかさないで彼女に求婚した。同時に彼女は忽ち增長して厚かましくなり氣取屋になつた。驚いたヘルンはシンシナーティを逃げ出すに到つたと云つて居る。マックドーナルドに隨へば何れもヘルン傳說の一つで、捏造に過ぎないとの事である。尤もこの話はたとへ事實としてもヘルンに何の疚しいところもない。かへつて人種的國民的偏見の全くないヘルンの、弱者に對する義俠心を發揮して居る。蓋しこのオハイオ州は南部ではないが黑人に對する反感は想像以上に盛んである。後年日本舊文明を讃嘆した時と同じく異人種異文明に對して同情し、黑人の生涯に於て愛すべき

點を發見すると共に、白人の文明を罵倒咒咀するが如き態度に出てたとすれば、シンシナーティに於て意外の敵を作つて、かかる捏造說も、數多あつたと信ずる事ができる。

日本に渡來して後、出雲の中學生の一人落合貞三郎が基督教を信じたため、同級生から迫害らしい事を受けた時、これを慰めた手紙に左の一節がある。

……これで一段落着いたが、恐らく君は長い間、君に對して絕交してゐた友人に對して時々怒りたくなるだらう。彼等、或は彼等のうちの或人々に對して怒るのは至當だが、しかし、心の中ででも怒らないやうにせねばならない。實は君を絕交したのは、君の同級生ではない。たださう思はれたのである。君に反抗した本當の感情は國民的感情である。これは國家を嫉妬的に愛する感情で誰でも生れながらにもつて居る。君は知らないで、長らくその感情を君に背かせたのである。それ故長らく君を疎外したと云つても、今後昔のやうに友人を愛せられたい。私が未だ二十代の青年の時分に、君のやうな經驗をした事がある。私のゐたところで、ひどく憎まれてゐた人種の味方をしてやらうと私は決心した。私は憎む方が道德的に惡いと考へた。そこで私は大膽に彼等の辯護をし味方をした。そこで、凡ての人々は私に口を利かなくなつた。私は

そのためにその人々を憎んだ。しかし私は當時餘り若くて分らなかつた。卽ち私の論じた問題よりは、遙かに大きい外の道德的問題があつたのである。實際それが凡ての紛爭を惹起したのであつた。人々は充分にそれを述べる事を知らなかつたので、ただそれを何となしに感じたのです。幾年か經て、私は全く間違つてゐて迷うてゐた事を發見した。私は知らないで大きな國民的社會的原理に反對してゐたのであつた。そして私の最良友までが私に對して怒つてくれなかつたら、私は充分にこの道理をさとる事ができなかつたらうと思ふ。卽ち世の中には說明ができないが、經驗で始めて分るやうな事が、澤山ある。……

ワトキンは、シンシナーティの記者は、ヘルンの技倆を嫉視したのと、ヘルンの人好きがしないのとて、疎外するやうになつたと述べて居る。晩年に到るまでやかましかつた句讀のことを、この時分からやかましく云つて『オールド・セミコロン』と云ふ名を頂戴した事實もある。

かくて、何處かへ移りたいと思つてゐた時、急に決心した事情をテュニスンはつぎのやうに述べて居る。

ヘルンの文章益〻進むに随ひ、シンシナーティに於ける地位に對し不安の念を生じて來た　肉體精神、共に南方の空氣や景色を渇望して居た。シンシナーティで非常に不快な夜に、いつもの通り夜業をした或翌朝の事、雜談の折り記者仲間のうちに、メキシコ灣に臨んだ州の景色を述べた者があつた。南北戰爭前、綿で大財産を作つた人の邸宅に關する話であつた。白い圓柱、國道に通じて居る入口の並木、後庭の方に延長して居る白壁の奴隷部屋、立派な馬車道、蔦の絡まつて居る檜、樫、泰山木の花の香、朝早く囀づる「モノマネ鳥」の歌など、……ヘルンはその時何とも云はなかつたが、非常に興味を以てこの話の一言一句をも聽いてゐた事がその顏色で分つた。恰も、そこの景色や何かが目に見え、耳に聞え、鼻で嗅げるやうであつた。間もなく、シンシナーティを去つてニユ・オルリアンスに向ふ時、ヘルンは云つた、「私は新聞に對する眞面目を失つた。どうしても變化が必要だ。ここでは勉强ができないとか、友人がないとか云ふ事でなくて、氣候の惡いのが一番困る。ここの濕氣と、寒暑の差異の激しいのは縮み上るやうだ。早晩行くつもりであつたが、光や、樹木や、鳥の歌や花の香や、その外景色の話の面白さに、私は急に決心したのであつた。南方へ行けば身體にもよからうと思はれる。必ず働けると信ずる」

かくて、ヘルンは繁忙な新聞記者生活に飽いたのと、氣候その他の事情でその土地に飽いたのと、外に遊思勃然として湧いたのでシンシナーティを去つて二たび放浪生活に入るに到つたのであつた。

一八七七年十月、四十弗計りの旅費を準備し、老友ワトキン、『コムマーシャル』の記者ミユラ・ホルステッド、及びヱドワード・ヘンダスンに見送られて、シンシナーティのミアミ停車場を出て、鐵道でテンネシー州 Memphis（メムフエス）まで行き、汽船を待合せて一週間滯在の後、『トムソン・ディン』に投じてミスシッピ河を下り、ニユ・オルリアンスに到着した。

ヘルンがかつてつぎの話をした事がある。この途中メムフイスあたりの出來事であらう、ただテンネッシー州とばかりである。

根本的正邪に關する議論中の事であつた。ヘルンの一友人は道德の議論は、境遇により場所によつて違ふから、一概に惡い正しいと云へる行爲はないと云ひ出した。ヘルンは例

の思ひ沈んだ風で、よく考へてから云つた。

『どんな境遇でも、どうあつても、悪い事がただ一つある』

『それは』

『自分の快樂のために弱い者苛めをする事だ』

と答へて、それからその例として續いて云つた。

『昔、テンネシー州の或往來を歩いてゐた時の事であつた。何故だか知らないが、ひどく癇癪を起して氣ちがひのやうになつて居る人に遇つた。丁度一匹の小猫がその途を横ぎつて、その人の足もとへ來てまつはつた。この男は、この小猫を捕へて、目をたたき潰してしまつてから、これで怒りが安まつたと云ふやうに心地よげに笑つて、なげすてた。私はそれを止める事ができる程、近くにゐなかつたが、ポケットにピストルを持つてゐたので（その頃はいつも持つてゐた）この男を目がけて發火した。御存じの通りの近眼だから中らなかつた』

暫らくして附け加へて云つた。

『中らなかつたのは、これまで一生殘念に思つて居る事の一つだ』

五　ニユ・オルリアンス

ニユ・オルリアンス――『コムマーシヤル』へ通信――困窮――『デーリー・アイテム』――漫畫　南方の自然――日常生活――放浪熱――蓄財――飯店開業と失敗――職替癖――ニユ・オルリアンスの攻撃――『タイムス・デモクラット』――友人――『クレオパトラの一夜その他』――外國文學の飜譯――『異文學遺聞』――『支那の怪談』――『聖アントソニーの誘惑』――『ゴムボー・ゼベス』――ニユ・オルリアンス博覽會――フロリダ旅行――ハーバート・スペンサー――『チタ』――放浪愛

ニユ・オルリアンスに到着したのは、一八七七年十一月十三日であつた。ニユ・オルリアンス時代のヘルンの動靜、勉强、修養、一切の事はシンシナーティ時代の友人クレイビエルに送つた六十通に近い手紙、及び老友ワトキンに送つた數多の手紙によつて知る事が

できる。
メキシコ灣に注ぐミスシッピの河口に近い大都會、ルージアナ州の最大の市ニュ・オルリアンスはシンシナーティと殆ど同じ程の都會であつた。綿と砂糖の集散地　あらゆる人種の都會、フランスからアメリカへ賣り渡されたが未だフランス人フランス語それからスペイン人スペイン語の勢力の殘つて居る都會であつた。それから無花果の甘きところであつた。ヘルンの到着した頃のニュ・オルリアンスは南北戰爭の影響を受けて幾分疲弊してゐた。

ヘルンが着いたところはバロンヌ町八一三メイリ・バスティロスと云ふ下宿屋であつた。間もなく舊市街に移つた。その頃熱病が大流行して七千の住民を殺した。翌一八七八年の夏、ヘルンもそのやや輕い一種 dengue（デング） にかかつて一週間臥床した。僅かに一週間で瘦せ衰へて體重九十ポンド（十貫八百目位）以下になつた（全集第九卷一八）その翌年、又一回これにかかつた。小說「チタ」の結末にこの經驗を利用して居る。

ニュ・オルリアンスに來てから翌年四月までは『シンシナーティ・コムマーシアル』へ Ozias Midwinter（オージャス・ミッドウインター） と云ふ名で通信してゐた。ウィルキー・コリンスの小說『アルマデール』中の人物、背の低い、瘦せた、人好きのしない、臆病な『初對面で人にいつでも惡く思は

れる、後になつてもそれを直す事ができない』と自覺して居る人物、又コリンスが『何をやつても早晩（誰のせゐでもない、ただ全く自分が惡いために）失敗するにきまつてゐた。賴みになる友人は一人もなかつた。親類の事などは始めから口にも出さなかつた。こちらの方ではそんなものは皆死んで一人もゐないと思つて居るし、向うの方ではあれはもう死んだらうとたかをくくつてゐた』と書いた人物、その人物にヘルン自ら似て居ると思つて取つたのであつた。

これ等の通信の大要はヘンリー・ワトキンの『烏の手紙』の卷末に收めてある。第一の通信は、一八七七年十一月六日、メンフィスから送つて『十月二十九日ここで逝いた南軍のフォーレスト將軍の葬式を目擊』した事を報じた物から始まつて居る。つぎに同じく、『メンフィスの印象記』それから次第に『熱帶國の門に於て』『黑人問題について』『ニユ・オルリアンスの寺院訪問記』昔からヘルンの好物であつた『ニユ・オルリアンスの怪談』『クリオール（土着のフランス人の子孫の事）について』『雨期のニユ・オルリアンスについて』『黑人から出たと云ふ「クリオールの戀歌」』の飜譯、又ヘルンの昔から愛好した『墓地めぐり』などがあつた。このうちに『私は英國の北部でも、ウエールスでも、墓地を逍遙して古い三百年前の死人の名を苔むす墓石の上で讀んだ』とある。（本集第十二卷二九〇）日

本の婦人の名を分類したやうにニュ・オルリアンスの町名を研究して歴史的考古的資料を供した物もある。

こんなのんきな文學的な通信は、一般讀者には向かなかつたと見え、最後に一八七八年三月二十四日、時事問題に關する通信一つあつて、ヘルンの通信は『シンシナーティ・コムマーシャル』に絶えて居る。

ここで職業を得るまでに、再びシンシナーティの始めのやうな困窮を嘗めた事はワトキンに送つた手紙にも著しい。シンシナーティで集めた書籍は全部ワトキンに託して置いたが、フランスの書物だけを殘してあとは悉く賣り拂つて送金するやうに賴んだのもある。書物も賣り、衣服も賣つて、二日に一度五仙の食事をした事もあつた。日本へ來てからの手紙のうちに『私は昔の事共——不快な事共を夢のやうに思ひ出す。アメリカの市中に、獨りでゐて、ポケットに十仙しかない。手紙を出すのに三仙かかる。殘り七仙が一日の食費である。アメリカの市中で職業のないのは如何に恐ろしいかは、私によくよく分る、……私に覺えがあるからである』とあるのはこの頃の事である。

ヘルンは職業を求めようとして『デモクラット』社へ行つた時の話がある。編輯人のチヨージ・デュプレーが面會して見ると、見すぼらしい身なりの小男が机の上に一篇の草稿

を出して『これをいくらで買つてくれるか』と尋ねた。デュブレーはその草稿をざつと見て文學的價値のある事に驚いて十弗出した。その人は金を取つて歸つた。デュブレーはそれを丁寧に讀みかへして、組版のところへ送る前に僅か二三の字句を變へた。翌日早朝デュブレーの部屋へとび込んだのは前日の同じ男であつた。『こんなきたない金は要らないから返す。何故我輩の文章に餘計な添削をしたか』とどなりながら紙幣をなげつけた。デュブレーが言譯をしようとしたが、もうその人はゐなかつた。

　ヘルンはこの浪人時代にこの教育局長のヂョン・ディミトリを知るやうになつた。この人から『ニュ・オルリアンス・レパブリカン』の編輯人であるウィリヤム・ロビンスンに紹介された。さらにこの人の世話によつてニュ・オルリアンスに來てから七ケ月にして、一八七七年六月十一日創刊の『デイリ・アイテム』と云ふ小新聞の編輯所に入つて社説も書き、隨筆も書き、飜譯もした。入社したのは一八七八年六月十五日頃であつた。主筆はマーク・ビグネーと云ふ六尺以上の巨人であつたが、女のやうにやさしい親切な丁寧な人であつた　相當な詩人ですでに詩集も出してゐた。ヘルンが受けた俸給はシンシナーティ時代より遙かに少く、始めは一週十弗に過ぎなかつたが、この物價が非常に安く、容易に俸給の半を節する事ができたから、これまでの負債も次第に拂ふ事ができた。（全集第十

二卷一八四）それからヘルンに取つては有難い事は、勤務時間の少い事であつた。十時に出勤して一時に歸る事ができた。シンシナーティ時代の十四時間に比べると一日僅かに三時間で濟んだ。

クレイビエルに與へて當時の日常生活を述べた物がある。

私の記者生活の事を申し上げる。北方とは大分違つて居る。私は遂にこのフランス區の奇妙な中心に入る事を得たので、終日變な方言を聞いて居る。朝早く料理屋へ行つて、無花果、黑珈琲、クリーム、チーズ、玉蜀黍製の菓子、玉子などの隨分實のある朝飯をやる。これでやつと二十五仙。それから社に行く。二人の記者と文學の事、電報を土臺にして歐洲の事、その外の事を話す、これが一時間。それから地方の新聞（半分はフランス語、半分は英語で發行）がルージアナ州の方々の田舍から集つて來る。その野蠻な新聞から、ハサミと糊壺とを取つて、收穫に關する一欄の記事を切り拔いて作る、これで三十分。それからニユ・ヨークの日刊新聞が來る、それを讀んで又記事を作る、それで仕事が終る。長い天氣のよい午後は自由に遊び步ける。野心も希望もなければ、こんな愉快な生活はない。游泳も好都合にやれる。……（全集第九卷

ヘルンがこの『アイテム』のために働くやうになつてから、この新聞の調子は著しく變つて來た。これまでただ地方的記事しかなかつた紙面に殆ど全世界の記事、各方面に亙つた多趣多樣の記事が現れるやうになつた。ヘルンがシンシナーティで飜譯したガウティエの飜譯集「クレオパトラの一夜その他」のうちの『みいらの足』を始めて發表したのはこの新聞であつた。

しかしヘルンが入社してから二年ばかりの後一八七九年の頃、それ程努力して來たこの新聞がやはり經濟的に困難して居る事を聞いたヘルンは、その主筆マーク・ビグネーに向つて自分が新聞記事の外に漫畫を描いて見たいと申込んだ。この申込みは直ちに容れられた。そこでヘルンは日曜の午後など材料をさがしながら散歩した。ヘルンは父及び叔父から繪畫の才能を遺傳したのであつた。木版になつてそこに説明の文句の加へてあるこの漫畫は意外の好評を得て、新聞の賣高は激増した。この漫畫の數は一八七九年から一八八〇年の二年に亙つて百七十五ばかりあつた。ヘルンの日常の見聞であると同時に、今日と全く違つたその頃のニユ・オルリアンスの生きた歷史として比類のない物であつた。ヘルン

の俸給が二倍になつて一週二十弗となつたのはそのためであつた。
この漫畫は百七十五で終つた理由は、或はヘルンの方で飽きて來た事によるだらうが、さらに大きな原因は木版工ゼンネックの突然の死のためであつたらうと云はれて居る。この人『マスコット』と云ふ小新聞の主筆を訪問中、その主筆に怨みを抱いた男が突然闖入して發砲した。暴行者は逃げて流丸に中つたのはこのゼンネックであつた。
この當時のニユ・オルリアンスは未だ頗る野蠻であつた。決鬪は普通に、殊に新聞の方面では盛んに行はれた。しかし不正不正直を攻撃する事を少しも恐れなかつたヘルンは決鬪などを挑まれた事は一度もなかつたのは一つは、彼の如く盲目に近い者に決鬪を申込むのは卑怯であると思はれた事がヘルンに取つて幸をなしたのであつた。又一つははにかみのために、特別の人々を除いては同僚をも殆ど知らない程交際をしなかつた事が彼に幸したのであつたと云はれて居る。

とにかくシンシナーティ時代と比べると勉強の時間を多く得られるやうになつたので、その點で滿足してゐた樣子はクレイビエルへのつぎの手紙で分る。

結局シンシナーティのはげしい新聞記者生活を止めたのは僥倖でした。これで漸く、こんな事でもなければ、とても得られない獨學自修の暇が得られます。私は金も欲しいが、勉强のためには何か犧牲にしなければなりません。勉强しながら生活して行かれるうちは不平は云へません。

私がここに居るうちは、境遇か職業の變るまでは、何か著作をしようと云ふ考は當分中止です。しかしこの美はしい傳説の多い土地（香や夢の多いこの土地）で集めた材料はいつかは、どこか外で、何か物にして見たい。

こんな美麗な物に取り卷かれて居るうちは、そして溫室の空氣のやうな重い眠い空氣のうちでは、その美麗な物について書く事ができない。他日、寒い淋しい土地に行つて、この美はしい棕櫚や、苔の衣をきた並木、夏の風で波の立つ砂糖黍の畠、この神々しい大空（柔かい、綠の地平線のある、無窮のやうに深い廣い、雪のない）を思ひ慕ふ時始めて書けるやうになりませう。

南方に文學の出ないのは不思議ではない。現在は餘り美しいので想像が活動しなくなります。詩歌小說は物足りない要求や、不安の念が作り出すのです。想像の動いて、詩歌の生れる土地は、霧や霞や、空に奇々怪々の形の雲の往來する陰鬱な北方です。

……（全集第九卷五三）

シンシナーティの生活と比べて、別天地のこのニユ。オルリアンス生活でも、野心もあり空想も多いヘルンにはこの上もない物ではなかつた。新聞記者生活も長くは續けたくなかつた。眼はこの頃益〻悪くなつた。必要の時を除いて眼鏡を始終用ふる事を廢したのはこの時代の事であつた。眼鏡を用ふれば、眼に絶えず努力（ストレーン）を強ゆる事になるのと、今一つはこの頃角膜凸出し眼鏡と觸れるやうになつたからであつた。ボヘミヤ的放浪熱も間もなく起つた。キユバに行きたい、南米にも、東洋にも、行きたい。『寒くなれば日向に出て、熱ければ日陰に入ればよい』と云ふメキシコに行つて見たい。（全集第十二卷二〇五）それにつけても相當の資力を要する事に思ひついて、ヘルンはここで多少の貯蓄を投じて商賣を始める氣になつた。

クレイビエルへの手紙の一節に、

眼は疲れ切つて居る。早晩新聞記者も止めねばなるまい。何か商賣でもやつて見ようかと思ふ。「どこへ行かうか」「何をしようか」と云ふ疑問がまぼろしのやうに現れて來る。時々歐洲の事を考へ、フロリダの事、フランスの事、或は廣いロンドンの

事を考へる。（冥途の旅は厭だが）いつかどこかへ行かねばならない。――波止場へ行く毎に白い帆を張つた船をつくづくと見る。あゝ汝、交易の神、限りなき海の翼なる船よ、何處へ私を導き、如何なる運命を與へ、如何なる希望若しくは絶望を與へんとするか。……（全集第九卷三七）

この頃からヘルンは、私宅教師を聘してスペイン語を勉強した。英佛の外に、スペイン語を知つて居れば、自分の好む何處へも行かれると云ふのであつた。

ヘルンがここへ到着した當時住んでゐたアメリカ區域のバロンヌ町を間もなく離れて舊市街に移つた。舊式な不衞生な市街であつたが、ヘルンを喜ばせる古い物が多かつたのとその上部屋代が安かつたからであつた。セント・ルイス街に一週三弗で間借りをした。その地下室には女の占師がゐて晝も部屋を暗くしてあつた。その部屋の一隅に髑髏を二つ置いて二つの燈明をつけてあつた。それから暫らくしてブルボン町五一六に移つた。横の庭には芭蕉と橄欖の叢があつた。向ひは古いフランスのオペラ館であつた。『アイテム』社へ勤めるやうになつてから、さらにこの舊市街のスペイン區に近きフランス區の北端の

特別に安直な部屋に移つて、その時二十弗に增給した俸給の四分の三を節約する事ができた。それはヘルンに一つの計畫があつたからであつた。老友ワトキンへもヘルンは金を儲けて獨立したい事をくりかへし述べて居る。

クレイビエルへの手紙の一節にも彼は述べた。

私はただ人に使はれる事を止め、新聞記者生活の羈絆を脱したい、とばかり考へて居る。私はフランス區の北の端で間借りをして、臺所道具を一と通り買つて自炊して、一週二十弗の俸給のうち、費用を二弗につめて（勿論間代は別）それで暮らして居る。そして料理も可なり覺え、貯蓄もできた。來週小さい商賣を始めるつもりです。相手の人は北方のよい人です。來春までは南アメリカへ行ける程の金を殘すつもり。その頃までに、スペイン語を充分覺えて暫らく變つた地方でヂプシー生活を送りたいと思ふ。色々面白くない目にも遇ふだらうが、身體さへ健康なら、失敗する事もなからう。新生涯に入つて、目もよくし懷都合もよくし、變つた冒險や。種々の珍らしい古物學的研究などで、大に想像を豐富にしたいと思ひます。……（全集第九卷五九）

かくて俸給のうち、一週二弗で自炊生活をなし、殘りを貯蓄して百弗程の資本ができた

時、或人と共同で一八七九年二月の某日一品五仙の料理店を開業した。その開業の引札をワトキンへも一枚送つて來た。黄色な紙に、つぎの文句を印刷した物であつた。店の名は『不景氣(ハード・タイムス)』と云ふのであつた。

「五仙料理店（ドリエーヅ町百六十番地）
南部第一の大勉强の料理店、綺麗、小さつぱり、體裁のよい事では、ニユ・オルリアンスの何處の店にもまけない。白銅二つで充分の御馳走がある。何でも一品五仙、パンつき上等珈琲一杯僅かに五仙、何でも市價の半額」

クレイビエルとワトキンとへの手紙に、それぞれ支那人夫婦の開いて居る料理店へいつも行く話がある。そこで一喰四皿に珈琲と菓子つきで、二十五仙。その上特別に取れば一品何でも五仙、この上もなく綺麗で小さつぱりして居る。料理は上等である。この夫婦は廣告も何もしないで、繁昌して居る。開業以來七年になつて居るが、一かどの財產を作つたさうだと云ふ事を記して居る。（全集第九卷六六―六七）ヘルンの商賣もこれに習つたのであつた。

この『不景氣』の開店は一八七九年三月二日、營業はその月の二十二日まで續いた。毎日ヘルンの筆になつた廣告が『アイテム』に出た。しかし元來ヘルンは商才がなく、仲間には責任感も道德感もなかつた。彼の有金を奪つて料理人と一緒に負債を殘して逃げた。晩年、家族に對して私のやうな馬鹿正直な者は商賣などはとても駄目、一度で懲りたと云つたのはこの事である。

その後、又同じ動機から泡沫的建物會社のやうな物に出資して失敗した事もあつた。それて愈〻懲りてその種の投資を再びしなくなつた。日本に渡つて後マックドーナルドに利益ある投資を勸められても應じないで、『日本銀行』に長く無利子の預金をした事もあつた。

しかし又サンフランシスコか、フロリダのセント・アウガスティンのやうな都會で、古本屋を開けば成功するだらうと時々考へた事もあつた。古本屋の思ひつきはヘルンの愛書癖から起つたのであつた。ヘルンがニュ・オルリアンス滯在中如何に忙しい時でも、訪問する事を忘れなかつたところが四箇所あつた。何れも古本屋てあつた。第一はロイヤル町のフーリエてあつた。主人はその土地生れの佛人てあつた。第二は同じ町のデュリアンの店てあつた。主人はサント・ドミンゴ生れの佛人て、子供の時分にそこて黒人が亂を起し

た時兩親に連れられてニユ・オルリアンスに逃げて來たのであつた。この主人から西印度の思ひ出をよく聽いたので、後にそこへ行く考になつたのであつた。第三はエキスチエンデ町のミユルと云ふドイツ人の店であつた。ここでヘルンは始めてバウドレールのポーの譯を發見した。第四はキヤナル町一九六、アルマンド・ハウキンスと云ふロンドン生れの英人の古本と骨董の店であつたが、ヘルンはいつも最も長くこの店に遊んだと云はれて居る。ヘルンが暇と金さへあれば集めた書物はヘルンの趣味の通り珍らしい物、變つた物ばかりであつた。冊數も千に近く、ヘルン自らの說によれば二千弗の價値があつた。ヘルンの好みに丁寧に製本した物も多かつた。

　ヘルンの書籍に對する趣味と同じく、人物に對しても、非常にはにかみてあつたにも拘らず珍らしい變つた經歷をもつた人なら進んで交際を求めた事はのち日本時代と變らなかつた。インスピレーションは讀書からばかり來ないからであつた。そのうちにはマリー・ラヴオと云ふ黑人の女理髮師もゐた、その後集めた黑人の諺などもこんな人から材料を得たに相違ない。支那人の醫者もあつた。印度人もあつた、ドクトル・デヨンと云ふアメリカ生れの黑人もあつた。さらに驚くべきはローマ舊敎の僧アドリアン・ルケットと交際した事であつた。但しこれはルケット師がヘルンの佛文學に同情と理解を有せる事を知つて

進んで交通を求め、ヘルンはルケット師のアメリカ・インド人に關する一大權威てあるためにこれに應じたのてあつた。

一八七九年六月二十七日のワトキンへの手紙に、後に永住するに到つた日本の事を始めて書いて居る。

……日本に關して、色々考へて居る。……立派な田野……英國のやうな氣候……或はもつと溫暖かも知れない……歐洲人が澤山……英米佛の新聞。……

……ニユ・オルリアンスは泥棒の巢窟てある。泥棒、惡漢、相談づくの譽め合ひ、……政治上の詐欺、文學上の詐欺、……山師、スペイン人、ギリシヤ人、英人、コルシカ人、フランス人、ヴエネズイラ人、巴里の奸商、シシリーの人殺し、アイルランドの惡徒ばかり……日本はその半分も惡い事はあるまい。（全集第十二卷一九九）

その後、一八八二年七月七日、同じくワトキンへの手紙につぎの一節がある。

ニユ・オルリアンスは、私がこれまてゐたうちては一番、人間の利己主義硏究に最上の學校てある。佛敎に隨へば、洞窟て聲の反響するやうに、象の步く時に足痕の殘

るやうに、來世は現世の寫しになるものださうだが、この釋迦の教通りになる物なら、ニユ・オルリアンスの人は全部、來世は野獸になつて生れるだらうと思へば大分慰むるに足るのである。……(全集第十二卷二〇五)

これ等の非難にはヘルンの料理店失敗、泡沫的會社投資失敗等の一時の腹立ち紛れも多少加はつて居る物と見える。その實ニユ・オルリアンスはここでヘルンが終世の友人を幾人か得たところ、思ひ出の多いところであつた。

一八七九年十一月二十四日のワトキンへの手紙にこの時代の日常生活を記して居る。

朝は日出と共に起きて珈琲を一杯飮みパンを一きれ喰べる。それから社へ出て、アイテム[新聞]紙のために工夫をこらす。それから家に歸る。家の窓には草や蔓がはひまつはつて居るのと蚊が雲霞の如くに多いので薄暗い。そこへスペイン語の先生が來る。それから例の支那人の料理店に行く。それから古本屋廻りを二時間やる。それから寢る。眞夜中に起きて煙草をふかす。……(全集第十二卷二〇一)

この日常生活はその後少し變つた。ヘルンがニユ・オルリアンスに落ちついてから、い

つもそこのロマンスと異國情趣を好んで舊市街に住んでゐた。そこに流行してゐた病氣にも二度かかつたが、幾度か家を變へながらこの舊市街を離れる事はなかつた。しかしこの頃になつてこの不潔な不衛生な舊市街に飽きて來た。それからこの思ひ出の多い古い町を離れて、平凡なれども實際的なアメリカ市街に移る事になつたのは一八八一年であつた。始めに間借りをしたのはコンスタンス町三九であつた。そこから當時のガスケエ町その後改稱したクリーヴランド町六八にあるアイルランド生れのコートネー夫人の家に三度とも食事に通つた。それから七年、ニユ・オルリアンスを去るまで變らなかつた。この家の人人はコートネー夫婦とその當時十二歳の娘のエラと三人であつた。コートネー夫人は親切な人であつた。このニユ・オルリアンスで最も名高い記者の一人である點でヘルンを尊敬すると同時に、同じアイルランド人で七歳の時から孤兒同樣の境遇に置かれたヘルンに同情して心から世話をした。ヘルンはこの人々によつて始めて家庭にあるやうな溫かさを感じた。毎晩食後エラにお伽噺をした。エラのために繪入りのアラビヤの話を四十三ページ書いた。エラに立派な繪本を買つてくれた。一八八四年の夏グランド島に遊んだ時も、一八八五年にフロリダに旅行した時も、この人々に通信する事を忘れなかつた。ニユ・オルリアンスを去つてのち西印度からもニユ・ヨークからもフイラデルフイヤからも通信を忘

れなかつた。最後に日本から結婚の事、長男誕生の事も知らせて來たが、その頃はコートネー夫人の方で氣苦勞や元氣の衰へのために返事を出さなくなつて、この文通は絶えた。
この通信の例としてヘルンがその後遊んだグランド島からの物を二つ譯して見る。

一八八四年八月二十八日、グランド島にて

コートネー令夫人、

ペンとインキは餘り便利でないから、今度は鉛筆で申上げます。私は自分だけに都合のよいやうに靜かに面白く暮らしてゐます。毎日三回泳ぎます、水に入ると別人になるやうな氣がします。空氣はダイヤモンドのやうにすき透つてゐます。グランド島はどんなところかと説明するには、綺麗な砂の渚のある低い草地の島を想像して下さいと云はねばならない。ホテルと云ふ程のホテルはありません。ここは米國生れのフランス人の植民地で、小さい白い家は奴隷の住居であつたのです。今では改造されて居心のよい部屋になつてゐます。食堂は甚だ大きな二階の建物で、昔は何か砂糖の建物であつたかも知れません、それから小さい小屋が一つの町ほど列んでゐます。私の部屋は小さくて落ちついてゐます、それから誰でも戸も窓も終日明け放つて置きます。誰もこれまで物を盗まれた者はありません。無數の鳥と樹木と蟲がゐます、それから蜂はどこの隅にでも巣を造ります、――私の洗面臺の頂上の下にも二つ巣があります。料理は――（私はあなたは料理の事を聞きたい

だらうと思ひます）―― 甚だ結構です。ここでは葡萄酒は不要です、海の風は葡萄酒同樣です。私は食慾が盛んで、皮膚は全く日にやけてゐます。エラさんと御主人へ宜しく。

あなたに對して甚だ親切なる

ラフカデイオ・ヘルン

コートネー令夫人、

（前略）

あなたのよいビフテキ、よい羊肉、よい料理を想ひ出してなつかしくなります。ここには肉は殆どありません、――玉子は全くありません。ただ牡蠣とクローカー（魚）と、赤魚とシープヘッド（魚）と蟹とあるだけ。私は魚になつて鱗ができさうです。しかし牛乳とビスケツトとバタは澤山あります。バタは極上等ではありません、それから牛は餘り野生のカモミル（菊科植物）を喰べるので、乳は少し苦いやうですが、私はそれに慣れて好きになりました。

昨晩雨でした、それからあなたに蛙を聞かせたい。十萬の錫のラッパで大きなクリスマス前夜のお祝を吹いて居るやうでした。家の近くで、小さいのがポリ、ポリ、ポリと云ひ續けてゐましたが、沼の中で大きなのが錫のラッパを吹き續けてゐました。外の蛙共はテイテーブル、テイテーブル、テイテーブル（茶の卓）と云ひました、或は云つて居るやうでした。（後略）

ヘルンがこの夫人に贈つた『支那怪談』に小さな綺麗な字でつぎのやうに書いてあつた。

To my kindest and truest friend
Mrs. M. Courtney
—by whose generous care
and unselfish providing
I recovered that health
of mind and body
without which no
literary work can
be accomplished.

Lafcadio Hearn.

New Orleans. March 14, '87.
68 Gasquet Street.

私の最も親切なる最も眞實なる友人
エム・コートネー夫人へ、
——その人の篤い注意と
己を忘れての世話とで
私は心と體の健康を
回復しました
さうでなければ
文學上の作などは
何もできません。

ラフカディオ・ヘルン

一八八七年三月十四日
ニユ・オルリアンス、ガスクエ町六八。

このうちにある體の病氣と云ふのは一八八五年フロリダ旅行中に病を得て歸つてから二週間臥床した時の事であらう。

ヘルンはこの人々と近くなるやうにその後二回移つた。第一回はカナル町二七八であつた。ここは意外に騷々しい場所であつたので、つぎに移つたのはこの人々と同じクリーヴランド町一五六五であつた。距離も甚だ近かつた。ヘルンは朝出社の途中朝食のため、ここに立寄つた。それから晝飯に歸つた。午後は舊市街に出かけて古本屋廻りをしたりしてから家に歸つて勉强した。晩には又ここへ行つて晩飯を喰べた。この當時の間代は一ケ月二十弗。コートネー夫人へ拂ふ食料は一日一弗であつた。一週三十弗の給料を得たヘルンに取つては古本道樂の餘裕は充分にあつた。

一八八一年の末に、これまでこの地にあつた『タイムス』と『デモクラット』の二新聞が合併して新しく『タイムス・デモクラット』となつて南部第一の大新聞となつた時、當時南部の最も優秀なる記者の一人であつたヘルンは迎へられてその文學部長となつた。ヘルンは『アイテム』の副主筆の地位であつたが、以前料理店開業に失敗した頃から『デモクラット』にフランスやスペイン物の飜譯を出して居る關係もあつた。この『タイムス・

デモクラット』の第一號は十二月四日に出た。主筆はペーヂ・ベーカーであつた。ヘルンはこの人を「勢力の偉大な人（こんな人でなければ部下を統御する事はできない）この人よりも思慮深い且複雑濃厚な人はあるまいと思はれる程の人である。私はいつでもこの人が好きであつた。しかし私の好きな人は皆さうであるが、私一人だけの友人として置く事ができなかつた」（全集第十一卷一六六）と云つて居る。ベーカーはヘルンの長所短所をよく承知して、注意深くヘルンの心を亂さないやうに警戒した。ヘルンは自分の文章を直す事は勿論、句讀一つでも變ふのを嫌ふ事を承知したベーカーは植字部に命じて、故意には勿論、誤つてヘルンの句讀を變へた者は直ちに解雇する事を通知した。

この社中にゐた人々の中にはシンシナーティ時代の友人と同じく、その後著名になつた人は多い。チャールス・ウィットネー、デョン・アウガスティン、オノレ・バース、及びその後ヘルンの傳記を書くに到つたミス・エリザベス・ビズランド（ウエットモーア夫人）などはそれである。

この新聞は、文學新聞と呼ばれただけに、文學趣味に富んだ物であつた。ヘルンは『アイテム』の時のやうにあらゆる問題について書く必要はなく、ただ文學方面の記事を作ればよかつた。それでこの新聞に關係して始めてやや自分の世界を發見したやうな感を抱い

て、その趣味學問を發揮する隨筆飜譯の筆を執つた。一八八二年七月七日、ワトキンに與へて、この頃は一日五時間働いて一週三十弗を得るやうになつた事、藏書は三百册程になり蓄財も少しはできた事、生活に追はれないで文學的述作の閑暇が欲しいから金を儲けたい事、（全集第十二卷二〇三——二〇四）を述べて居る。ヘルンが、シンシナーティ時代に多忙な間を偸みて譯出したガウティエの『クレオパトラの一夜その他』を漸くニユ・ヨークのウォーシングトンから出版したのはこの一八八二年であつた。ヘルンは出版費用のうち百五十弗を自辨して漸く出版の運びになつた。（全集第十二卷二〇四）

『クレオパトラの一夜』は卷頭の一篇で外に五篇ある。全部ガウティエの作、ヘルンの好きな牡丹燈籠風の怪談である。この書物のために、バウル、ジョン・アルビー、ジエローム・ハートなど、それからその後ヘルンを誹謗したと云はれる傳記を書いたドクトル・デョーヂ・グールドから賞嘆の手紙を得た。ヘルンの友人にはヘルンの文を讀んでのち文通して友人となつたものが多い。オーコンネルもビスランドも皆この時代にかかる關係からできた友人であつた。この書物に對する當時の毀譽は相半してゐたが、毀る方はヘルンに對してではなく、寧ろガウティエに對してその奔放なところを責めたのであつた。

『タイムス・デモクラット』に關係して以來その紙上に連載した外國文學の飜譯は百八十七篇に達して居る、これ等はマウパッサン、フロオベル、フラムマリオン、バウディレイア、コッペ、ド・ネルヴァル、ミシュレー、ピエル・ロティ等の佛蘭西文學及びツルゲニエフ、ドストエフスキー等のロシヤ文學であつた、『江戸つ子』と名のる人が『フィガロ』に出した『日本の演劇』に關する物と、及び『リュストラション』に出た『日本人の仁義』と題する物との飜譯もある。當時マウパッサン、ロティ、アナトール・フランス等は未だ英米の讀書界に普く知られなかつた。これ等の文人殊にロティとフランスはヘルンによつて始めて英米の文壇に紹介されたのであつた。ロティの文體は晩年に到るまでヘルンの賞讃を絶たなかつたのである。日本で病氣にかかつた時、當時『讀みかけの「英人なき印度」を讀み了らないうちに死にはせぬかと云ふ懸念が最も恐ろしかつた』と白白して居る。ヘルンはこの時代にロティと文通してゐた。ロティは未だ發表しない物を先づヘルンに送つて、ヘルンがこれを飜譯して出した物もあつた。

多くの文學者は、その修業時代に飜譯をして居る。ヘルンは大學の講義にも、文學者の修業として、飜譯する事を勸めた。このニユ・オルリアンス時代はヘルンにとつて修業の時代、飜譯の時代であつた。グールドもヘルンが文學に貢獻した功勞から云へば、日本に

關する著述が第一、第二はこのニユ。オルリアンス時代の飜譯だと云つて居る。ヘルンは稽古臺のやうに慰み半分にこれ等の原文を取扱つたわけではない。「原文を愛好する餘りに飜譯する人は立派な物を作つて、つまらぬ人の手にかからぬやう傑作を保護すると云ふ滿足以外に何等の報酬をも要しない」（全集第九卷一三一）と自ら云つて居る。これが『クレオパトラの一夜その他』の出版のために、僅かな貯蓄から百五十弗も出版費の一部に提供した理由であつた。

『クレオパトラの一夜その他』（一八八二年）に續いて『異文學遺聞』（一八八四年）が出た。これはヘルンを保護し奬勵したペーヂ。ベーカーに捧げた。埃及、エスキモー、南太平洋、印度、フインランド、アラビヤ、ユダヤ等の傳說、物語を集めた物であつた。つぎに『支那怪談』（一八八七年）が出た。これはその名の示す通り支那の怪談である。シンシナーティ時代からの友人クレービエルに捧げた。この書は『異文學遺聞』よりも餘程以前に脫稿したが、書肆をめぐり步いた結果出版年月は後れたのであつた。この二書は華麗な彫琢した散文詩である。『異文學遺聞』の出版に際して、書肆から日本語、支那語、サンスクリット及び佛教に關する言葉が多過ぎるから取り消せと云はれて、ヘルンはそのままに置いて貰ひたいと云ふ意味の歎願書を送つて居る。後に日本でも『花嫁』『風月を

友として』『知らぬ顔』は勿論『月下氷人』までも面白いと云つて直譯し、アストンが、『ものの哀れ』を譯して The Ahness of Things としたのを賞讃して自分でも用ひた事のある程地方色や異國情趣を尊重したヘルンに取つては、このやうな書肆の要求は、たとへば日本固有の風俗畫を描く時、その人物に洋服を着せよと畫家に注文するやうな處があつた。

長篇の飜譯としてフローベルの『聖アンソニーの誘惑』もこの時代になされたが、出版者がなかつたので、草稿のままこの時代の蔵書とともに、グールドの手にあつたが、ヘルンの死後マックドーナルドによつて一九一〇年に出版された。

「規則的にやりさへすれば驚くべき程の事がやれる。毎日一時間づつの暇のない人でも三十分の都合はつくだらう。私はこんな風にして「聖アンソニー」を譯了した。一ページでも二ページでも譯して見ようと努めない日は一日もなかつた」（全集第九卷一三〇）と云つて居るが、その後アナトール・フランスの『シルヴエストル・ボンナードの罪』も同じやうに譯された。

一八八五年『ゴムボー・ゼベス』と題して、ルージアナ州、ニユ・オルリアンスの黒人の間に行はれる諺三百五十種を英佛の二國語に譯した一種の辭書やうの物を友人コールマンによつて出版した。それから同じ書肆から匿名で『ラ・クジーヌ・クリオール』と題す

るクリオール風の料理の書物を出版した。それから『ニユ・オルリアンスの歴史的スケッチ及び案內』と題する書物を編纂して出版したが、少くともそのうちの二章だけはすでにヘルンが新聞『アイテム』及び雜誌『ネーション』に發表した物であつた。この書物は今もなほ最もよいニユ・オルリアンスの案內書だと云はれて居る。この三冊の書物は、何れも一八八四年のニユ・オルリアンス百年祭記念博覽會の間に合ふやうに出版の豫定であつたが、後れてその翌年四月になつたのであつた。そのうち料理の本が比較的賣行がよかつた。この博覽會で日本の事務官服部一三に遇つた。當時彼は日本の事物に興味を有して種種の質問をする記者もあると考へたと云ふ事である。この博覽會の記事を幾篇か、『ハーパー雜誌』に出したのがハーパー書肆と關係するやうになつた原因であつた。

友人チャールス・ヂョンスンと共にフロリダを普く旅行したのは一八八五年であつた。この旅行中にスワンプ・フィヴアと云ふ病を得て歸つてから二週間床について三四貫ばかり體重を減じた。この紀行は『タイムス・デモクラット』に出て、後一九一一年に『印象派作者の日記』と題してハウトン・ミフリンから出版された物のうちにのせられた。

この時若きルージアナ人でウエスト・ポイント兵學校出身の中尉オスカー・クロスビーと交りを結んだ。この才能あるクロスビーと交際してヘルンは甚深の感化を受くるに到つ

た。この人の叔母ダンロウ夫人は『タイムス・デモクラット』紙上で書物の批評をしたり、詩を書いたりした。家に多くの人々を招じた。ヘルンもこの夫人の家で、このクロスビーと遇つたのであつた。

一九〇四年、ヘルンの死に先だつ事一ケ月、アーネスト・クロスビーに與へた手紙に、『君と同姓の青年、アメリカ陸軍中尉が二十年前に始めてハーバート・スペンサーの研究を教へた。そのクロスビーにいつも深い感謝と尊敬を感ずる。それからクロスビーと云ふ姓の人にはいつも好意を表したい』（全集第十一巻六三八）と云つた。

ハーバート・スペンサーの倫理學原理を讀んだ後、クレイビヱルに送つた手紙の一節に云つた。

自分ながら、君の變つた事に驚いて居る。これまでの私の變な哲學は君の知つて居る通りである。この頃或友人がハーバート・スペンサーを讀む事を教へた。突然これまでの東洋哲學の研究は、全く時間の浪費であつた事を發見した。私は又私の持つて居る僅かばかりの一般知識を如何に應用すべきかを始めて發見した。厭世觀をつまらなくし、凡ての種類の信仰に對して、新しい尊敬を敎ゆる大疑問（グレート・ダウト）が、不意に、又私に

取つては永久に、再發したので、云ふべからざる愉快を感じた。略言すれば「原理」を讀了したその日から、全然新しい智力的生涯が私のために開いた。これから數ヶ年の間にこの大哲學の殘りを研究しようと思ふ。

オーコンネルにも、つぎの手紙を送つて居る。

スペンサーの研究で私の思想が根本的に變つた。……凡ての主義(イズム)から離れ、凡ての主義(イズム)に對する同情を失つて、スペンサーに歸依するに到つた。スペンサーは同時に大疑問(グレートダウト)に對して朧げな、しかし、强大な慰藉を私に感ぜしむるに到つた。私はもはや唯物論などは捨ててしまつた。幼稚な頭に入り易い積極的懷疑論などは、永久に私の頭から消えてしまつた。（全集第九卷三〇八）

これ等の手紙は何れも一八八六年頃の物である。

一八八七年四月ビスランド女史に送つた手紙にもつぎの一節がある。

私は友人に悉く、ハーバート・スペンサー（先づ「原理」から始めて）を讀む事を

勸めて居る。急には讀めないが非常にためになる。人間の知識思想等をまとめる力がある。私はこれまで、スペンサー宗の改宗者を三人作つた。スペンサーを讀むのには、一節づつ讀むのに限る、一節づつ番號がついて居る。今生物學（バイオロジー）の二大冊を讀み居る最中、社會學一冊は卒業した。心理學は最も力を盡した書物だが、あと廻しにするつもり。全部卒業するには四年もかかる。しかし「原理」には全體の要領がある。外の物は敷衍に過ぎない。スペンサーを讀めば、人間知識の最も滋養ある部分を消化したやうな物である。それからその力のある引き締つた流暢な文體は研究の價値がある。

（全集第九卷三四八）

ヘルンがアメリカで購求した書籍で、日本で又、二重に購求した物がある。スペンサーはそのうちの一つである。自ら稱してスペンサーの弟子と云つた。ヘルンは進化論と、佛教の輪廻說とを結び合せて、獨得の世界觀をつくつてゐた。

ヘルンの創作として第一に現れたものは、小說『チタ、ラスト島の話』であつた。ヘルンは一八八四年の夏、メキシコ灣內、ミスシッピ河口バラタリヤ灣の一小島グランド島に遊んだ。ここで海水浴をしたのが英國以來十五年ぶりだと云つて居る。これまではミスシ

ッピ河で泳いだのであつた。ヘルンは游泳の達人であつた。そのためにここで島の人々の尊敬を得た。この熱帶の島の景色は中々によい。グランド島の西方にラスト島と云ふのがある。ヘルンの行つた頃は、潮の高い時には浪に隱れてしまひさうな砂地であつたが、三十年前まではグランド島と同じ性質の島で、ニユ・オルリアンスその他の地方から大勢の避暑客が行つた。一八五六年八月十日に非常な暴風が起つてこの島を席卷して樹木を倒し家屋を覆へし、數百の避暑客を掃き去つた。僅かに身をもつて逃れた者は極めて少數であつた。

この慘劇の物語がグランド島の海岸に殘つてゐた。その海岸一帶に於ても友人を失ひ、親戚を失つた者は多かつた。ヘルンがニユ・オルリアンスに歸つてから、その灣の風景を敍しあはせて『トーン・レッタース』（文反古）と題して生き殘つた人の書いた古い手紙に擬した嵐に關する短篇を書いた。

この物語の『タイムス・デモクラット』に出た時非常に好評を博したので、つひにそれを骨子として一部の小說を書く氣になつた。

グールドに送つてた手紙に云つた。

「チタ」はあの島の災害の時、一人の小兒がルージアナの漁夫に救はれて養育された事實を基にして書いた物です。何年か後に、土地の獵師がそれを發見して親戚にそのありかを知らせた。その親戚は富有な人であつたので、當時南部で貴婦人が養成される通りに養成しようとして、その子を尼寺にやつた。しかし、その子は海濱の健康な自由な生活に慣れてゐたので、尼寺には辛抱しきれなかつた。そこから逃げ出して一漁夫と結婚して、今もなほ無數の子供の母となつてあのあたりに居る。（全集第九卷四〇〇）

この小說は、ニユ・オルリアンス博覽會の記事を出した緣故があるので、ハーパー書肆に渡して、その雜誌『ハーパース。モンスリー』一八八八年四月號に出した。これまでヘルンの名を知らない、或はヘルンの名に無頓著であつたアメリカの一般讀者に文名を認められるに到つたのは實にこの『チタ』をもつて始めとする。

ヘルンが『チタ』を公けにして後二十年をへて、かつてラスト島を掃倒したと同じ暴風がグランド島を吹いた。その時遭難の一少女がマニラの漁夫に救はれ、何年かの後、全く死んだと思つてゐた父の許に歸るやうになつた事情は、ヘルンが『チタ』で想像したと同

じてあつた。

翌、一八八九年この小說は一冊となつて出版された。ニユ・オルリアンスのスペインの醫師、ドクトル・メータスに獻じてある。ドクトル・ロドルフオ・メータスはその當時ニユ・オルリアンスの醫科大學を出たばかりの、凡ての方面に趣味の博い青年であつた。そのために『醫學雜誌』の主筆に選ばれた。一八八二年ヘルンに交際を求めてそれからこの二人は友人となつた。二人は訪問し合つたり一緒に散步したりして、種々の問題について話した。『タイムス・デモクラット』に出た題は多くはこの人と一通り話した結果であつた。そのうちには黑人の熱帶、ギリシヤの體育、人種のにほひ、女のにほひなどの問題があつた。ヘルンは銳敏なる嗅覺をもつてゐた。このにほひの問題はヘルンに取つては大問題であつた。ヘルンの作にはこの問題は中々多いが、『回顧』のうちに「若さのにほひ」と題する一篇がある。それから一八八五年フロリダから歸つてからの病氣の時にもこの人の世話になつた。『クリオールの料理』のうちの献立と『ゴムボー・ゼベス』中の黑人の諺のうちに、このメータス夫人から得た物は多かつた。メータスはその後ニユ・オルリアンス醫科大學の解剖學の教授となつて、今はその醫科大學長である。

ニユ・オルリアンスへ來てから十年になつた。文名も高くなり地位もたしかであつた。しかしどうしてもヘルンにつき物の放浪愛は又頭を上げて來た。『波止場に出て船ばかり見て居る』と云ふ不安の念は、失意の時にも得意の時にも、ヘルンにはつき物であつた。『タイムス・デモクラット』に關係して、得意の飜譯隨筆の筆を執つて居る時も、漫遊して一生を旅で送らうと云ふ放浪の念は捨てなかつた。スペイン語の勉强もこれから起つて居た。波止場へ出てスペインの船が、西印度又はコスタリカから入港して來るのを見ては落ちついて居られなかつた。

グールドに送つた手紙の一節がある。

……醫學でも修業する機會があればよかつたと思ふ。そんな職業をもつてゐたら、金持てあるのと同じ事になる。萬國に通用する貨幣を持つて居るのと同じである。……そしたら私は一定の場所に落ちつかないで、何處でも、好きな程歩き廻るだらう。變つたところで初めに人と交際するのが妙に面白い物だ。――そのうちに敵ができたり、人の感情を害したり、惡意を挑發したりする。だから長く止まらないのに限る、長く止まつたら空想（イルージヨン）は消えてしまふ。……醫者でも、建築家でも、機械學者でも、何

ても廣く世間の需要をみたす職業をもつて居るのは、大資本を有して居るのと同じだ。……それに次いて商賣人も美しい。ニユ・ヨークと同じくヴァルパライソにでも、巴里と同じくバンコックにでも、到る處に落ちついて居られるから。……（全集第九卷三五八）

かくの如く、これまで夢想してゐた熱帶地方の旅行を、やがて實現する事を得たのは、黑人や『クリオール』の研究によつてその文名を知られてゐたからであつた。ハーパー書肆の委託をうけその雜誌へ通信する約束て『チタ』の出版の前年、卽ち一八八七年六月の一日か二日にニユ・オルリアンスを出發した。出發の前にペーヂ。ベーカー、オスカー・クロスビー、ダンロウ夫人、ドクトル・メータスに暇を告げた。コートネー夫人とエラは泣いた。ヘルンはこれを慰めて度々手紙を送る約束をした。書物の箱を倉庫會社に預け、さらに貴重なる書物と書類はトランクに入れてコートネー夫人に預けた。

六　西印度、フィラデルフィヤ、ニユ・ヨーク

老友ワトキンと再會——ニユ・ヨーク——西印度——一旦ニユ・ヨークに歸る——ウエルドン——サン・ピエール——アルヌー——『ユーマ』——『佛領西印度の二年間』——「消えた光」——ニユ・ヨーク——フィラデルフィヤ——『因果』——ニユ・ヨーク——パツトン——日本行の案——『シルヴエストル・ボナードの罪』——日本行

ニユ・オルリアンスを出發し途中シンシナーティに立寄つて、半日をロングワース町二六の老友ワトキンの印刷所で樂しく送つた。これが二人の永訣であつた。その日の夕方、シンシナーティを出發してニユ・ヨークの西五十七丁目四三八のクレイビエルのアパートメントに着いた。クレイビエルは當時『ニユ・ヨーク・トリビユーン』の記者であつた。ヘルンはコートネー夫人につぎのやうな通信をした。

ニユ・ヨーク西五十七丁目四三八　　　一八八七年六月五日

コートネー様

長い旅行のあとで少しも疲れてゐません、そして最も驚くべき建物の一つに愉快に落ちついてゐます。ここでは立派な住宅は町その物と云へます。一つの建物に三千の人が住んで居る事を考へて下さい。十一階もあつて、その土臺になつて居る岩石と同じやうにしつかりした建築で一つの町になつて居るのもあります。それには入口が百もあつて窓が數千あります、そして一階づつ分れて貸家になります、――湯と水と電燈がついて、浴室、臺所と外に八室が一まとめに同じ階にあります、――エレヴエターと鐵の階段と外に火災の時の非常口があつて電鈴と電話があります。或建物では最高階の屋賃は一ケ月八十弗ばかりです。富んだ人でなければこんなところには住めません。私の云ふ家は中央公園に近くて、月に達しようと試みて居るやうです。今夜その上の方へ出て見て、下を見ると眼がくらみました。夜になると一切の物がひつそりとなります。

ここはニユ・オルリアンスよりもずつと寒くて、空氣は全く違ひます、空はそれ程青くなくて遠いやうです。色もはつきりしません、地平線は霞んで居るやうです。冬はきつと非常に寒いでせう。今のところ空氣は私に非常に愉快です。

ルイスヴイルとナツシユヴイルの鐵道で衝突があつたので、私はシンシナーテイで半日停らねばならなくなりました。そこで私の親しい老友人だけに會ひました。老人は私を見て胸が裂けるやう

に泣きました。そして私が入つた時に叫ぶやら跳ぶやらいたしました。
クレイビエルはヂヤシー・シテイの停車場まで私を迎ひに來てくれました。この人は立派な家をもつてゐます、それから實にやさしい可愛い夫人と小さい娘があります。この夫人は人を愉快にさせる親切な色々の方法を心得た人で、私にあなたを思ひ出させます。

ここでは日曜の規則を守りますが、床屋は許されて開いてゐます。

相應に評判のよい新聞記者ならここでは中々の金を取るやうです、――よい新聞の普通の記者は一週六十弗から七十五弗、それから百弗も取ります。しかしニュ・ヨークではその普通の記者になるのが容易ではありません。

あなたはよく氣をつけて達者でゐて下さる事を祈ります。……荷物は無事につきました。私は少くとももう一週間はここに居るつもりですから、又すぐに手紙を上げます。これは急いで、夜書いた物です。

神樣の御惠みのあるやうに祈ります、それから皆樣に宜しく。

ラフカデイオ・ヘルン

ヘルンがホテルへ行かうとしたのを聞かないでクレイビエル夫妻が中央公園に近きそのアパートメントにとめたのであつた。そこで二人は十年間の積る話をした。

それから數日の間ヘルンはニユ・ヨークの雜沓に氣おくれしながらシンシナーティ時代の友人テユニスンを訪問した。つぎにやうやくの事でビスランド女史のアパートメントを訪問すると、引越しのあとであつた。新しい寓居を尋ねて今度は逢ふ事ができた。游泳のためにコーネー。アイランドに行つて見たが、メキシコ灣の温い水に慣れた彼には大西洋の水は北氷洋のやうに思はれた。クレイビエルとハドスン河の上流の方へ遠足もした。

七月の上旬、ヘルンはトリニダッドに向つて汽船『バラクータ』でニユ。ヨークを出發した。この旅行中マルティニークのサン・ピエルからクレイビエルにクリオールの歌を入れた手紙を送つたが、クレイビエルの小さい娘には島の服裝をした立派な人形を贈つた。

コートネー夫人への手紙はつぎのやうであつた。

デメララ、ヂョーヂタウン

コートネー様

これまでは私の旅行は愉快な驚きの連續でした、たしかに旅費の十倍以上の價値があります。この町は恐ろしい暑熱で、不健康地です、今は雨期です、——しかし私共は明日トリニダッドへ出發します、それはもつと北です。そこに長くは停りません。私はマルティニークに一二ケ月停るつもりです。重なる町はサン・ピエールです。私共はデメララへの途中そこに寄りました、私は運よく

都合をつけて、町を見る事ができました。私はこの町は世界第一の綺麗な町だと思ひます。椰子の木、オレンヂの木、マホガニーの木、その外妙な大きな色々の木で蔽はれた山の斜面にあります。ニユ・オルリアンスの古いフランス町をもつと古風にして、往來の狹い黄色に塗つた家なみが一面に坂にたつて居ると想像すると分りませう。同じやうな中庭と二階建の木造家屋と屋根窓があります。非常に綺麗です。もしそこに住みたければ一ケ月二十五弗でその山の中に住まれます、ただ一年のうちで今頃はよく瘧(おこり)があります。

御承知の通り私は船に強いから、旅行は面白いのです。太陽は直射しますから日向には出られませんが、暑熱は私を弱らせる事はありません。

これは拙い手紙ですが、忙しい旅行中ですからこれが精一杯のところです。あなたは達者で幸福にお暮らしの事と信じます。マルティニークに落ちついたらもつとよく書く事ができませう。

皆さんに宜しく。

ラフカデイオ・ヘルン

ドクトル・メータスに送つて熱帯地方を讃美した手紙のうちにも『熱帯地方こそ、この死にかけて居る地球のうちの生きて居る部分で、—— 文明などはつまらない冷たい物だと思ふ。熱帯地方を始めて見た時、前に見た事があつたと思つた、再び見るだらうと思ふ、

私の命が續けばそこで私の一生の大部分を送るのだと思ふ。全く天國のやうだ』と書いて居る。又別に『マルティニークで亂ゑて居る方が、ニュ・ヨークの贅澤よりもよい』とも云つた。

この旅行は七、八、九の三ケ月に渡つた。その紀行『西印度への眞夏の旅』は『ハーパース・モンスリー』に出た。その後『佛領西印度の二年間』に收められた。

一八八七年九月二十一日、汽船『バラクータ』でヘルンは一旦ニュ・ヨークに歸つた。今度はクレイビエルの家へは行かないで、フルトン街とウォータ街とパール街の角にある『ユナイテッド・ステーツ。ホテル』に泊つた。クレイビエルを訪れるとクレイビエルは一家をあげて轉地してゐた。ニュ・ヨークはやはり雜沓の地であつた。忘れられないのは南方の光と色であつた。それから再び西印度に歸る決心をした。そこで『ハーパース・モンスリー』の主筆アルデンを訪れた。ヘルンはアルデンに勸められてニュ・デアシーのアルデンの宅に數日滯在する事にした。アルデンは西印度への再遊にも贊成してくれた。ヘルンは今度は當分西印度を離れないつもりであつたので、九月二十六日コートネー夫人に打電して預けてあつた書籍書類入りのトランクを取りよせた。同時にドクトル・メータス

に手紙を書いて倉庫會社に預けてある書物の箱をアルデンの家に送らせる事を頼んだ。ビスランド女史には今度は遇はなかつた。この忙しい間にコートネー夫人へはつぎの手紙を書いた。

コートネー様

私は十月一日土曜の朝早く西印度へ出かけます、少くともこの冬はここにゐません、――澤山仕事がありますから。今この手紙を書いて居る時まで未だあなたから手紙がありません。しかし私が出たあとでも大人が世話してくれますから御手紙は私のところへ屆きます。トランクの運賃は先拂にしてくれたのでせうね、さうでないとおくれます、それからあなたにそんな費用を少しでも拂はせたらお氣の毒です。しかしあなたはこんな事はよく承知だから大丈夫と思ひます。

ニユ・ヨークの下町は恐ろしいところです、馬車を雇はないと私はどこへも行かれません。頭の上で鐵道汽車は轟々と鳴ります、往來は荷馬車や馬や種々様々の車が通つて、――ブロウドウェーの混雜は恐ろしいやうです。どこかへ行くのに午前全部かかつて、歸りに午後全部かかります。私は郵便局の建物の中に入つて一所懸命に二十分も歩かなければ、――手紙一本投函するところも見出せません。ここの大きな建物の大きさは、一つの建物の家賃が一年百萬弗以上だと云へば想像ができませう。五十萬弗から七十萬弗がもつとも普通です。ここに居ると眼がくらみ、耳が聞えなく

なり、息ができなくなり、恐ろしくなります、ここから出て賑い古風な場所に行くのが樂みです。行つたところから寫眞を送りませう。私のあて名はマルテイニーク、サン・ピエール、アメリカ領事氣づけです。

ニユ・ヨークへ歸つて見ると友人は皆轉地してゐました、それで困つてゐたところへ、偶然田舍への招待を貮晩受けました。そこで私は休んでゐた間にニユ・ヨークの方の用事が片つきました。しかしそれからあちこち人をさがしたり何かして遊びあるきましたが、何かさがすのに私は二日程かかります。

さて、歸りにニユ・オルリアンスの方を廻つて見るつもりですから皆さんにお目にかかれるでせう。今度は片道の切符にしました、――ハヴァナとフロリダを通つて歸れるやうにと思ふからです。今から十八日か二十日程したら又手紙を上げます。

皆さんに宜しく、ことにあなたは大事になさるやう、

眞實なるあなたの友人

ラフカディオ・ヘルン

一八八七年十月二日、ヘルンをのせた汽船『バラクータ』は東河の波止場四十九號を離れてマルティニーク島サン・ピエルに向つた。

サン・ピエルは二百尺以上の棕櫚椰子の繁茂せるところであつた。アラビヤ物語にありさうな多くの人種の居るところであつた。凡て自然がその眞盛りな偉大な力と色と光を示して居るところであつた。ここに上陸したヘルンは疲れた人の重荷を下したやうな氣分で、再び熱帶生活の安樂な習慣に歸つた。ヘルンの部屋づきの老婢シリリヤは一杯の珈琲と一皿の果實を運びながら、毎朝五時に彼を起した。それからヘルンは大きな椰子の木の繁つた海岸から出て游泳した。一時間の後歸つて晝飯まで書き續けた。どうしても筆の進まない時はニユ・ヨークで買つて來た寫眞機を携へながら散歩して「荷運び女」や「洗濯女」と話したりした。甚だしい近眼であるので寫眞は餘り成功しなかつたやうである。晝飯は野菜と果物と魚であつた。午後は暑熱のために何もしないのがこの地方の習慣であつた。七時に晩飯、九時に床についた。時々島巡りの旅行もした。友人とペレー山へ登つた事もあつた。

ヘルンがここで得た友人のうちに、公證人のレオポルド。アルヌーがあつた。この人は『天の河緣起』のうちの「小說よりも奇」に出て居る人物、それからヘルンが『佛領西印度の二年間』を捧げた人であつた。ヘルンはニユ。ヨーク出發の際、宿料を拂ひ、船賃を拂ひ、百六弗の寫眞機を買つて、サン。ピエールに上陸した時は三百弗の現金を殘してゐ

ただけであつた。ヘルンの『佛領西印度の二年間』のうち「マルティニーク雜筆」十五篇のうち「ハーパース・モンスリー」に出た物は四篇だけであつた。ヘルンが最初に送つた長篇の原稿「リ」はそのままではテルデンに容れられなかつたために、ヘルンの經濟にくるひを來した。「リ」は大訂正の後『佛領西印度の二年間』の最後にのせられた）そのうちにヘルンもここで健康を害して六週間ぶらぶらした。この窮乏の際に六百フランを立替へてくれたのはこのアルヌーてあつた。

ヘルンはここで一八四八年の叛亂中の插話を聞いた。それは『ユーマ』の話であつた。若い黑人の女ユーマは白人の子守であつた。叛亂中に、その主人の子供のために自分の家も戀人も自分自身をも捨てて、燒打の火焰に包まれた時足もとまで捧げられた梯子をも顧みないて主人の子供の難に殉じたのであつた。ヘルンは餘りに感動して書いたので、この話は殆ど自然に三ケ月でできた。

『佛領西印度の二年間』には前後の紀行とマルティニークの記事がある。童謠も、お伽噺も、大きなむかての話も、ヘルンに忠實に仕へた老婢シリリヤの美はしい話もある。歸路船中で手にした墨繪で竹を描いた日本製の團扇を賞嘆した記事もある。ビスランド女史はこの『佛領西印度の二年間』と『神國日本』とをヘルンの二大傑作と稱して居る。

ポムペイの市街が、ヴエスヴィアス山の爆發噴火のために埋沒したやうに、一九〇二年(明治三十五年)五月八日ペレー山の爆發は四萬の住民と共にサン・ピエールを全沒させた。日本でこの島の災害を聞いたヘルンは深く嘆息して、その當時の新聞切拔きを大切に保存してゐた。アメリカから日本へ携へて來た物は極めて少數であつたが、そのうちにマルティニークで着てゐた更紗の服がある。

日本に於てヘルンが往時を回想した事のうちにはアイルランドの山中も、ロンドンの街頭も、ニユ・オルリアンスの波止場もあつた。しかしヘルンが最も憶つた物はマルティニークであつた。「ゴスイック の恐怖」「小說よりも奇」「西印度の夢」何れもこのマルティニーク追懐の強い叫びであつた。佛教研究によつて養はれたヘルンの草木や蟲に對する愛情はさらにその熱帶趣味によつて培はれたのであつた。晩年東京市ケ谷富久町、瘤寺の森林を愛したのも、西大久保の庭園の芭蕉や羊齒蘭を愛したのも、西日のさし込む書齋を特に造らせたのも、皆この熱帶趣味の憧憬であつた。

自傳斷片のうちにこのマルティニークに關する物がある。この斷片の後半はアルヌーに關する物である。

……一條の明るい長い狹い通りが、燃えるやうな一叢れの綠――滴るやうなリアナ蔓の綠の方へ次第に上つて居る。現代の町は一つもない、皆十七世紀の物である、外面の黄色な、又家々の外面の間に黄色な庭の壁のある町である。ところどころ隙間から、海は青い光を放つて見える、――海の青い光が灣へ下る苔蒸した古い階段を照して居る。そしてこの隙間から遙か下に青海原に浮んだ船が見える。

壁はレモン色で、古めかしい露臺と格子は綠色である。椰子の樹は中庭や庭園から温かい青い空へ――筆では書けぬ程の青い空へ――その羽のやうな頂きが殆ど觸れるかと思はれる程上つて居る。そしてこの黄色の家並の内外にある一切の物は、――玄武岩の敷石にも銀色の輝きを貸す程の強い光に照されて――電光のやうな白い日光に浸つて居る。

白い帆木綿(カンヷス)のズボンを穿いただけで竹細工の大きな帽を冠つた男、――腰まで裸で彫刻のやうな筋肉をした男が、――跣足(はだし)で、大股で、音も立てずに通る。眞黑のもある、金色の皮膚、蔦色がかつた皮膚、赤みがかつた皮膚と云ふやうに變つた美しい色もある。そして女は派手な色の物を着て

通る、——橙色、バナナ色などの果物の色の女、——黄蜂の腹の模樣のやうに燃えるやうな黄色の筋のある頭巾を被つた女が通る。温い濃い空氣は砂糖と肉桂の香、マンゴーや蕃茘子（カスタード・アップル）やグアヴア・デエリーや新しいココア樹の乳の香で芳ばしい。

——大きなアーチ形の門の琥珀色の陰と、涼しい濕つた風のあるところへ私は入る。玉と散る噴水のささやきに滿ちた中庭に達する。そこで小さい男の子と女の子が土語（クリオール）の「ミイ」を叫んで私を迎へに走つて來る。銘々私の手を片々づつ捉へる、——銘々美しい鳶色の頰をキスせよとさし出す。同時にその父の聲——大鐘の調子のやうに深く響く聲が奥から「どうぞ、おはひり」と呼ぶ。その大きな、なつかしい聲を聞くと、長らく火攻めに遇うた亡者が眞珠の門を通る時のやうな同情の喜び、大きな平和の感じが私に來る。……

しかしこれは皆過去の事——現在の事でない。……月も太陽もその都のその町を再び照す事はない、——再びその道は踏まれる事はない、——再びその庭園の花の咲く事はない。……夢のうちでなければ。

一八八九年五月一日、ヘルンはいくつかのでき上つた原稿と、多くの文學的材料を記入した幾冊かの雜記帳を携へて、サン・ピエールを出發してニユ・ヨークに向つた。

ヘルンのさしあたりの仕事は『ハーパース・モンスリー』に出した小說『チタ』を單行本にして出版するための校正と、サン・ピエールで書いた小說『ユーマ』の出版準備と、『佛領西印度の二年間』を完成する事とであつた。

これよりさきニユ・ヨークは餘りに騷々しくて仕事ができないと思つたヘルンは、フィラデルフィヤにある未見の友眼科醫グールドに依賴してフィラデルフィヤに閑靜な一室を得たいと賴んだ。ヘルンの多くの友人のやうにこの人もヘルンが『タイムス・デモクラット』に連載した飜譯に對する賞讃の手紙を送つて友人となつたのであつた。グールドはその住宅の一室を提供してヘルンを招待した。五月八日にニユ・ヨークに上陸したヘルンが恐らくアルデンを訪問しただけで、直ちにフィラデルフィヤに赴いて不幸にもグールドの客となつたのはこの理由であつた。ここでヘルンは『チタ』の校正、その他の仕事に從事したのであつた。その間に短篇小說『因果』を書いた。これはヘルンが日本へ渡つてのち『リッピンコット雜誌』に出た。この忙しい間にコートネー夫人へつぎのやうな手紙を送つて居る。

フイラデルフイヤ、南十九丁目一一九、ドクトル・デヨーヂ・グールド方

コートネー樣

御手紙がやうやく今日――六月五日――マルティニークからフイラデルフイヤまで私のあとを追つて來た事を聞いて驚かれるでせう、私は今ここで少し著述をするために暫らく止まつて居るところです。

私は西印度から歸つて三週間になります。氣候のために別にからだを惡くはしませんでした、黄熱病がありましたが、しかし私は達者でくらしました。ただ健康の點だけでは私は別に不平も云へませんでした。しかし暑熱の中では私は結局書く事も、考へる事もできない事が分りました、それで暫らく氣候をかへたいと思ひました。その上そんな遠くでは思ふやうに何も出版ができませんから、よい本を出すために歸らねばならぬ事になりました。

乾物商賣の方をおやめになつた事を聞いてこの上もなく喜びました。全く助けもなしに、あれだけの事をやるのは餘りに骨が折れませう。

私はマルティニークで受難祭(グッド・フライデイ)を二度過しました。あなたがその日に肉を喰べる事を好まないからと云ふわけであなたのうちへ來る人々は肉を止めたのは感心でしたが、マルティニークであつたら一萬弗出してもその日に肉の一グレーンだつて得られません。そこの人々は受難祭に肉を喰べると一生運が惡いと考へてゐます、受難祭に肉と云ふ言葉を口に出しても、叫び出す程この人々の眼には罪惡に見えるのです。……これを聞いてあなたはきつと喜ぶでせう、そしてマルティ

ニークの人々は悪い人間でないと思ふでせう。

私がもつと度々手紙を書かなかつたと云ふわけで、あなたは私を甚だいけないと思つて居るでせう。實は色々困る事があつて誰にも餘り手紙を出しませんでした、――餘りの炎暑で一日のうちに書く事のできる時間は少ししかありません、それからこんな國では手紙を書く事が毎日段々物うくなります。……

只今は書物を出すために忙しいところです。私は甚だよい友人の家にゐます、――（私はあなたのやうに、お醫者には運がよいやうです）――お醫者で眼科醫です。何か眼にどうかあれば、私によい人がついてゐます。いつまで居るか分りません、しかし私の出版すべき書物があるから、冬になるまではアメリカを去る事は先づできません。私は未だ熱帶地方の事を考へてゐます、しかしマルティニークの私の友人達でも一年たたないうちは西印度のどの場所へも歸つて來ない方がよいと忠告しますから、――私は多分どこか外へ、――恐らく世界の向う側へ行くでせう。私は同じところに長く留ると考へて下さるな、しかしもし留るとすればアメリカのどこよりもフイラデルフイヤが好きです。……しかし仕事が皆かたづくまでは、つぎに何を計畫してよいか分りません。

私の旅行が無事であつたのは、あなたが祈つて下さつたおかげだと思ひます。私は熱帶地方で色色困る事にも遇ひましたが、無事に通過しましたから、以前よりも自信ができました。

皆さんに宜しく、ことにあなた御自身に宜しく申上げます、いつもあなたの友人、感謝の念を忘

れない昔の小さい寄宿人の

ラフカディオ・ヘルン

その年の十月ヘルンはニユ・ヨークに出た。今度は西十丁目、一九四に部屋を借りた。これはシンシナーティ時代の友人テユニスンと同じ宿てあつた。

ヘルンが弟ヂエームスと通信したのはこの頃の事てあつた。弟はヘルンが大叔母の許に引取られた時、叔母婿ステユアートの經營してゐた學校へ送られて、そこに十六歳までゐた。それから渡米して始めにニユ・ヨーク、後にウイスコンシンへ行つた。ヘルンがシンシナーティにゐた頃弟は同じオハイオ州のギブスンバーグで農業をやつてゐた。同じ州で、數時間の汽車旅行で過へるところにゐながら双方で知らずにゐた。ギブスンバーグからブラッドナーに來て、弟は土地の新聞で兄の名を知つた。それから送つた手紙が廻り廻つて兄ヘルンに達したのはフイラデルフイヤのグールドの宅にゐた時てあつた。ヘルンは最初疑つたらしいが、明らかに分つてから、フイラデルフイヤからもニユ・ヨークからも弟に文通した。第一章にその一端を示したやうな生母をなつかしんだ手紙はこの時の物てあつた。

この頃ニユ・ヨークに出てゐたニユ・オルリアンスの『タイムス・デモクラット』の主筆ペーヂ・ベーカーはヘルンと度々遇つたが、今更もとの新聞記者に引きもどす事は云ひ出せなかつた。ベーカーはヘルンをもう一度招きたがつたが、手紙に、あの時再びニユ・オルリアンスに歸りたかつたが『何だか敗北のやうな氣がして口には出せなかつた』と云つて居る。それ程この時代のヘルンは急いで職業を求むる必要に迫られてゐた。

ヘルンがニユ・オルリアンス時代から通信してゐたが、ニユ・ヨークへ來てからクレイビエルの紹介で遇つたパットンと云ふ『ハーパース・モンスリー』の美術主任の記者があつた。二人は友人になつた。ヘルンは西四十七丁目一三三のパットンを度々訪れた。パットンは日本の美術文學に關する知識を有して書物も澤山もつてゐた。ヘルンは以前から相應に日本に關する知識をもつてゐたが、その書物は多くは珍らしかつた。この當時パットンに送つた手紙がある。

パットン様

色々珍らしい貴重な書物を貸して下さつた事に對する御親切は言葉では述べつくされません。皆私に新しい物で、それを見るだけでも非常な樂みです。チエムバレン氏の「古事記」の譯は特別に面白い物でした、――それから日本の神話や國語に關するアイヌの影響と云ふ人種學上の研究も。

君はまだ御覽にならないやうなら、――ローマ字で日本語を書いてフランス語で直譯してある繪入の本で、チユルタンの出版した物を面白いと思はれるでせう。(「日本のにぎはひ」と云ふのです)巴里のルルーはこんな物を出してゐます、クリスタンかバウトン(ブロードウエー七〇六)から綺麗な目錄を取れば出てゐます――バウトンの方が取引きをするにはずつとよい店です。それから巴里ヴオルテイヤ河岸二五のメソン＝ユヴ會社の目錄を見ると、日本の珍らしい書物の目錄が得られます。もし東洋の文學に興味があればこの目錄をもつて居る方がよいでせう。……

支那と日本の書物から飜譯してできたロスニーの「日本歴代史」もやはりお氣に入りませう。これがアカデミーから賞與を得ましたが、中々高價――五〇フラン――です。……

私は君ともつと早く逢つて私共双方の好きなこの事についてもつと話せばよかつたと思ひます。

御親切に對して感謝しながら

甚だ眞實なる

ラフカデイオ・ヘルン

ヘルンがパットンに對して、もし自分が日本へ行く機會があつたら、西印度の記事より、もつと立派な物を作れる思ふと云つたのは、こんな書物に關する談話から起つたのであつた。パットンは熱心になつた。もしヘルンが行つて記事をつくるとしたらどんな題目を選ぶだらう、その計畫を書く事を頼んだ。そこでヘルンはつぎのやうに書いた。

パットン樣

日本のやうにそんなによく人の行く國に關して書物を書かうとする場合に、——そんな事をしようとするのは賢明でないでせうが、——全然新しい事を發見しようなどとは望めません、ただできるだけ全然新しい方法で考へる事だけです。私はできるだけこんな書物に生氣と色を入れて見たい、そして旅行者或は學者の外の記者が書くやうな報告や說明よりは、むしろ讀者に生きた感覺を與へて見たい。……こんな書物はそれ故大概は——一篇づつが特殊の人生を表はす短い隨筆集になりませう。いよいよそこの實地を踏んで見なければはつきりした計畫もできないが、この書物の一部分になると思ふやうな題目を試みに書いて見ます、——多くは、私の信ずるところではこれまでの日本に關する通俗的の書物にはない物です。

「第一印象、氣候と風景、日本の自然の詩的分子」

「外國人に取つての都市生活」

「日常生活に於ける美術、美術品に對する外國影響の結果」

「新文明」

「娯樂」

「藝者及びその職業」

「新教育制度、――こどもの生活――こどもの遊戯等」

「家庭生活と一般の家庭の宗教」

「公けの祭祀法――寺院の儀式と禮拜者のつとめ」

「珍らしき傳說と迷信」

「日本の婦人生活」

「古い民謡と歌」

「藝術界に於ける――日本の古い大家、生き殘つて或は記憶となつて與へて居る感化、日本の自然と人生の反映者としての勢力」

「珍らしき一般の言語、――日常生活に於ける奇異な言葉の習慣」

「社會的組織、――政治上及び軍事上の狀態」

「移住地としての日本、外國分子の地位等」

しかし本當の章の名はなるべく日本的に、全然風變りな物にしたい、そして全く論文體にはしたくない。問題をそれに關係ある個人經驗から論ずる事にしたい、それに關係のある平凡な話に類する物は注意して除く事にしたい。つまり、讀者の心に日本に居るやうなはつきりした印象——觀察者とたるばかりではなく、さらに一般の人々の日常生活の仲間入りをして彼等の思想で考へて居るやうな印象を殘す事を努めるのです。できるだけ、話は少くとも短篇として面白いやうにできるでせう。

それから私の滯在の終りの頃に、日本人の感情を描いた小說を作つて見たい。

これはさし當り、書物の計畫に關して申上げる事のできる先づ精々の覺え書きです。

最も眞實なる

ラフカデイオ・ヘルン

西十丁目一四九　　一八八九年十一月二十九日

私は五〇〇ページばかりで——西印度の書物程の內容のある書物が書けさうです。體裁を異にして大きい文字で、組み方を變へたらずつと立派な書物になりませう。

これを基にしてバットンはつぎに插畫のある方がよいと思ひついた。それから畫家ウェルドンに說いて、この事ができる場合に同行する事を勸めた。それからウェルドンにヘル

ンの手紙を示してこの計畫を打明けた　ウェルドンは同意した。それからパットンはモントリールへ行つてカナダ大平洋鐵道汽船會社長を訪問した。その會見の結果、ヘルンとウェルドンがモントリールに到着すると共に、會社からこの二人へ日本への往復の汽車汽船の優待券とそれから二百五十弗づつの手當を贈る事になつた。つまりヘルンやウェルドンの筆によつて日本への遊思を公衆にそそる事は會社の利益となるからであつた。

パットンの成功を聞いてヘルンは喜んだ。しかしヘルンに心配はあつた。全く異人種の國、言語不通の國へ行く懸念であつた。

月曜日

パツトン樣

土曜日の親切なる御手紙今朝拜見。この手紙はたしかに長く保存します、そのうちの要件のためではなく、私が失ひたくない有難い友情がこもつて居るからです。

君は日曜の晩をウェルドンと一緒に過しましたが、どの點から見ても立派な男のやうです、そして藝術的に全く同情して行かれるでせう。それが御承知の通りこんな種類の事をするのには非常に大切な、肝要な、なつかしい點です。この事に關する私のこれまでの疑惑はなくなりました。

君の盡力によつて經濟上の事は非常に圓滑になりました、さうでないと私は非常に困つたでせう。

それでも出發前に少し金を作らねばなりません、それで延びるのは有難い事です。

私としては、君の云はれるやうにやれない理由は二つあります、永く田舍に行つてゐてそこであちこち廻つて居る事ができない事とそれから病氣です。あとの事よりも前の方が起りさうです。私はどうしてもその國の人々の言語が分からないでは、これまでの物——立派な物——よりも以上の物は到底できないと思ひます。語學者や人類學者の著述を除いては、日本に關する作者はただまぼろしのやうな印象をしか與へません、そして日本に關する書物はガウティヱのスペインの書物——それにはスペイン人はゐない——のやうになつてゐます。最もよい書物は二年目にできる書物だと思ひます、しかし私共は何か全く新しい物をやるつもりです、——實はそれができないと思つたら、この大事は引き受けなかつたのです。

甚だ忠實なる友人

ラフカデイオ・ヘルン

西十丁目一四九　　　一八九〇年二月三日

未だ外に心配があつた。それはアルデンに送つた手紙にある通り經濟の方面の心配であつた。

アルデン様

私が勸められて居る日本行について、私の現狀を申上げて見たい。それには澤山の艱難がありま す、今のやうではどうしてよいか分りません。

モントリールで拂つて貰へる二百五十弗の外には何等持ち合せはありません。出發までに多少收入の見込みがあるとしても、現在の狀態から考へると、旅行のために絕對必要な物を少し買つたり、少しの負債を拂つたりする事ができる位が精々でせう。

それで殘るのが二百五十弗です。旅行には勿論費用がかかります、食物、宿、祝儀や禮金、皆で(私の經驗では)五十弗以内では中々やれません。

二百弗で日本の實地研究を始めるのです。始めての國では始めの數ケ月は外の場合よりもいつでも金が多くかかります。その二百弗で六ケ月を支へねばなりますまい——八月まではそれ以上の送金を受けるあてがありません。私がつかつてもよい金は一日に一弗ばかりになります。畫家の方は幸にこんな事に超越してゐます、その上私共よりこんな仕事に對して餘計の報酬を取ります、さうなると私は一緒にやつて行けないから、その人から借金したりして、頭が上らなくなります。外の條件が同一であるとして千弗かけてできた著作は僅か百弗かけてできる著作と非常に違ふ事になります。私は安物を作らねばならぬ事になる。

西印度の書物は安物ではなかつた。私は最初自分の蓄財を五百弗と「チタ」の上り高を幾分加へ

た物をそのために消費した。二度目にも同じ程の金をもつて行つた。それでも、氣候が温暖で生活が安かつたにも拘らず、私は金が不足したので殆ど失敗した。私はすでにクリオールの生活と言語に通じてゐた、ところがこの日本はニユ・ヨークと同じ緯度にあつて、もつと條件がむつかしいのに、私はたつた二百弗をたよりにして行かねばなりません。

金の心配があつては創作力が非常に鈍ります。しかし病氣の可能性、その內地旅行の當然はかどらぬ事（第二回の送金のあるまでは動けないでせうから）を二百弗で解決しようとするのは心配以上です。

世界第一のよい作者が澤山の金を携へて日本へ行つた事があります。英國程の大きさの國で、自分の下宿から出られるだけの金もなくては、ただ時を浪費して歸るだけの事に過ぎないと思ひます。ただ生活するだけなら、外に何もできないと同樣です。「トリビユーン」は南米に人を送る場合は一ケ月數百弗の俸給（一週七十五弗と思ひます）を拂ふ外に、信用狀までくれます。そして得る物は僅かの大ざつぱの通信文だけです。條件は非常に惡いと思ひますから、誰か外にこの仕事を引き受ける人があれば私は助かります。

ラフカディオ・ヘルン

ウエルドンあてのこの手紙に對してハーバー書肆から二月十三日の日附てヘルンに返事

を出した。その要旨は『ハーパー書肆は今度の日本行には責任はない。しかしヘルンがこの旅行を利用して提出した旅行記で、ウエルドンが是認した物を「ハーパース・モンスリー」に掲載する事は承知する』と云ふのであつた。それからさらに詳しくその條件を示した。

一、日本に關する記事で「ハーパース・モンスリー」に適當な物があれば六萬語までは掲載する事。

二、できるだけ早く「日本の新文明」に關する物を得たい事。

三、一文は一萬語を超えない事。

四、原則としてウエルドンの挿畫のあるべき事、しかし挿畫を是非入れなくてもよい事。たとへば日本語の特別の語法を示したい時には二三千語でそれを書いてもよい事。しかし何れにしてもウエルドンに見せて貰ひたい事、ウエルドンはそれによつて或は口繪か數々の繪か或は兩方を作る事ができるから。

五、日本の宗教に關する——或は言語に關する哲學的或は科學的論文は「ハーパース・モンスリー」に發表しない事。國民生活に關係ある場合に限り、宗教的實行方面を

取扱ふ事。

六、『ハーパース。モンスリー』に掲載の分の原稿は千語について二十弗、その以外のハーパーの雜誌の分は千語につき十五弗の割合で稿料を拂ふ事。

七、日本に關する記事はハーパー以外の新聞雜誌に出さない事、それからこれ等の記事を書物にして一割の印稅を拂ふべき事。

これだけ見たところでは餘りよい條件とも思はれなかつたが、ヘルンはその翌々日十五日に承諾を與へた。思ふに東洋ことに日本を見る事はヘルンの宿望であつた。最近ヘルンを動かしたヘルンの所謂一大著述が出た。『一册子ではあるが、東洋に關する最良の書籍で、私の有する凡ての東洋の書籍を集めたよりも遙かに豐富な內容をもつて居る』(全集第九卷四四八)とヘルンが賞讃したパーシヷアル。ロウエルの『極東の魂』であつた。當時日本の憲法は發布せられ、その年一八九〇年(明治二十三年)には第一帝國議會が開かれる事になつてゐた。その陸海軍商工業の進歩は極東の一小帝國をして次第に世界の耳目を聳動させる物があつた。ヘルンは多少不利な條件を忍んでなりとも、この好機會を逸したくなかつた。

さらに百方ヘルンを勸めたのは發案者のパツトンであつた。金の不足が原因で斷念しさうになつた事を聞いて、自ら奔走して『コスモポリタン雜誌』の主筆にヘルンの西印度に關する隨筆二篇を買はせた。この雜誌の記者をしてゐたビスランド女史もこれを助けた。丁度この時出版にならうとしてゐた『ユーマ』の裝幀にも力を入れて日本の縮緬を使つたりなどした。それからハーパー書肆に勸めて英譯の佛文學叢書に加へるために、アナトール・フランスの『シルヴエストル・ボンナードの罪』の飜譯をヘルンに依賴する事にさせた。

ヘルンはニユ・ヨークを嫌つた、寒さを嫌つた。この二つを忍びながら西十丁目一四九の部屋で全速力で飜譯をした。この飜譯はハーパー書肆から費用を受持つてよこした若い女速記者に口授してでき上つた物であつた。僅かに二週間でき上つた。この稿料は百十五弗であつた。

いよいよヘルンは決心して暫らくアメリカを去る準備をした。ドクトル・グールドに未だ八十弗の負債があつた。五ケ月ばかり客になつた恩儀もあつた。萬一の事を考へたヘルンはこの際、アルデンに預けてあつた藏書をグールドに預け直した。

それから三月五日ニユ・ヨークを立つた。ここで得た親友エルウツド・ヘンドリツクに

オルバニーまで見送られた。畫家ウエルドンと途中て一緒になつた。ヘルンはスートケースと手さげかばんとを一つづつもつてゐた。懷中インキ壜とペンを少しとペン軸三本もそのうちにあつた。モントリールからヴアンクーヴアに行き、それから横濱に向つたのは三月十七日であつた。船は「アビシニア」と云ふ小さい汽船であつた。三等室には支那人が百人もゐたが、支那人の習慣として埋葬のために本國に持つて歸る遺骨は六十もあつた。(全集第十二卷五六七)日本がヘルンの埋骨の地にならうなどとは夢にも思はないで出かけたのであつた。

この三本のペン軸のうち、一本は棺の中へ入れられ、一本は異母妹アトキンスン夫人來訪の時贈られ、今一本だけ殘つて居る。

七　横濱から松江

横濱着――ハーパー書肆と絶縁――松江へ赴任――當時の外人教師――ヘルンの評判と優待――籠手田知事――西田千太郎――片山尚絅――學生――荒川龜齋――特殊部落訪問――結婚――人の家――紋所――旅行――交際――松江の寒氣――熊本へ轉任――送別――『知られぬ日本の面影』

ヴァンクーヴァから横濱まで十三海里の速力で十七日を要した。陰氣な天氣の續いたあとで横濱へ着いた時は快晴であつた。富士山と白い四角な帆をあげた多くの船を見ながら入港した。多くの外客と共に船の名の語尾の『丸』を見て訝つた。海鷗が手をのばして捕へる事ができる程多いのを見て、ぱんの屑を投げ與へた。これは歐洲の河や湖水の白鳥のやうに法律で保護してあるのだらうと考へて、動物愛護心の盛んなヘルンは喜んだ。これ等の光景に感激したヘルンは『自分はここで死にたい』と云つたのに對して、ウエルドンは『自分はさうは思はない、自分はここで生きてゐたい』と云つたと傳へられて居る。それから父と子とで櫓を押して居るはしけに乘つて上陸した。明治二十三年四月四日（受難祭（グッド・フライデイ）の日）であつた。櫻はそろそろ咲きかけてゐた。やがて鯉幟も飜る頃に近かつた。

その日のうちにビスランド女史から貰つた紹介状をもつてマックドーナルドを「グランド・ホテル」に訪問して食事を共にした。ここでチエムバレンへの紹介状を得て直ちに手紙を送つた。（全集第九卷四七八）もうすでに西印度とは比べ物でないこの複雜な國の研究は永く落着いてからでなければできない事を考へたヘルンは、この手紙のうちにも求職を依賴して居る。

ウエルドンとは別々の行動を取つて時々會ふ事に二人で相談した。『日本への冬の旅』と題してハーパーへ送つたモントリールから橫濱までの紀行はその年の十一月の『ハーパース・モンスリー』に出た。ハーパーはこれに對して百五十弗送つた。

それからヘルンは橫濱の寺院や神社を訪ひ、江の島、鎌倉にも遊び、東京にも行つた。東京では新橋の車夫に引き込まれて、本鄕の赤門前の三好屋と云ふ安宿に泊つた。その後明治二十九年大學に赴任した時偶然泊つたのが又この三好屋であつた。

非常なる興味をもつて毎日異境の珍奇なる見聞をしながら、ヘルンはつくづく來し方を顧みた。新聞記者生活を止めてニユ・オルリアンスを去つて原稿生活を始めてから約三年間の收入一年平均五百弗にしかならなかつた。ニユ・オルリアンス時代の多少の貯蓄も消

費して少しの負債もあつた。西印度へ行つた時もハーバーはただそこでできた原稿を買つてくれただけで、旅費滯在費一切自辨であつた。その原稿も一度拒絶された事があつた。今度の旅行の條件もよく考へると不利な事ばかりであつた。旅費と手當はカナダ太平洋鐵道汽船會社のそろばん勘定の好意から贈られたので、ハーバーとは直接の關係はなかつた。ハーバーの要求した記事の題目と條件は皆ヘルンの氣に入らなかつた。特派員と云ふ物はこんな物ではなからうと思つた。ウエルドンの條件は自分のより遙かによかつた。自分のやうな侮辱的待遇を受ける特派員はないと思つた。

ヘルンはそれからそれと疑惑の眼をもつて見た。要するにヘルンはハーバーがかけひきを知らぬ自分を利用し酷使し侮辱して居ると考へて憤つた。こんな事なら自分は勝手にやつてよいと思つた。

それからハーバーに絶緣狀を送つたのは五月上旬であつた。ヘルンはもはや關係したくないと云つて『ユーマ』『チタ』その外の契約書までも送りかへした。ハーバー書肆とウエルドンから辯明の手紙を送つたが、ヘルンはそれに耳を藉さなかつた。その後ハーバー書肆から書物の印税、稿料を送つて來た時、ヘルンは頑として受取らうとしなかつた。ハーバー書肆は横濱の米國領事に依賴して友人マックドーナルドを通じて送らうとした。マ

ックドーナルドはそれて『グランド・ホテル』の株をヘルンの名義で買つて置いて徐ろに說いた。怒つた相手から當然受取るべき金を受取らないのは鳩に豆鐵砲を打つやうな物で無効だと云つた。むしろなるべく多く取るやうに工夫すべきだと云つた。そしてヘルンにそれを受取るやうにさせた。しかしヘルンのハーパー書肆に對する不快の感は長く殘つたらしい。記者が明治三十六年にヘルンを訪問して談たまたまアメリカの出版書肆に及んだ時も、ヘルンはハーパー書肆に對する不快をもらした。

ハーパー書肆と絶緣してから、日本での求職を續くべきか、歸國すべきかについて暫らく思ひ惑うた事はビスランド女史への手紙にも明らかである。（全集第九卷四七五）偶々ビスランド女史に紹介されたマックドーナルド、日本で交際をもとめたチェムバレン、以前ニユ・オルリアンス博覽會の事務官當時文部の普通學務局長服部一三の斡旋で出雲松江の中學校の英語教師（月俸百圓）となつて赴任する事になつたのは日本國に取つて、又、ヘルンに取つて不思議の因緣と云はねばならない。

出雲は神代以來有名な國であり、又交通不便で舊日本を知るに好都合なる事を思つて、喜んでここに赴く事になつた。好んで熱帶地方に赴いたと同じく前人未到の新天地を開拓

して文學界のコロムバスとならうと云ふ志はいつもヘルンに盛んであつた。

横濱の或寺院で偶然知合となつた眞鍋晃（マナベアキラ）と云ふ書生を通辯兼道案内として横濱を發し岡山に着き、津山を經て鳥取街道に出で下市に達し、ここで始めて盆踊を見た。伯耆米子から小蒸氣船で中海を横斷し、大橋川の水道に入り、大橋河岸に上陸したのは八月末頃であつた。九月二日に登校した。師範學校にも少し受持時間があつた。

明治二十三年前後には多くの中學には英米の雇教師はゐた。松江の中學ではヘルンは第二回の外人教師であつた。この頃日本全國は未だ歐米崇拜熱の去らない時代であつた、極端なる歐化熱の時代所謂「鹿鳴館」時代を去る事遠くなかつた。コルクが落ち込んだ洋酒の容器一本を恭しく奉書紙に包んだのが貴重な贈答品であつたと云ふ明治の初年が、精神的に復興したやうな時代であつた。西洋人に笑はれまいと云ふのが當時の警戒であつた。英語を國語にすべしだの、歐米人と雜婚して人種を改良すべし（高島嘉右衞門）だの云ふ說すら唱へられた時代であつた。（日本國民の、少くも日本青年の自覺心は第一高等學校あたりの生徒が外人に野球試合で勝つた頃から次第に起つたのである）記者は鄉里の中學で三度引續き米人教師の來任した時の事を覺えて居る。生徒の全部が學校を一日休んで國道を二里程行いて出迎へをした。それ程に歡迎され崇拜された優勝人なるがためであらう

か、その外人の多くは自國の風俗習慣を貴ぶと同時に日本人を半開劣敗の人種と見るのが普通てあつた。日本の事物を貶して二言目には『英國では』『アメリカでは』と反覆するをつねとした。

然るに事實、この優勝人種として仰がれ、又自任した英米人の多くは、勿論例外はあつたが案外に無學無識てあつた。上級生に文法て無造作にやりこめられる人もあつた。手に錨の入墨をした人もあつた。教室で煙草を嚙んだり、床の上に唾を吐いたりした人もあつた。教場で賣るために小冊子を持ち込んで二冊以上買へば割引すると云つて、日本學生の輕侮を招く者もあつた。

これ等の儕輩と同日の論てないヘルン、人種的國際的宗教的偏見の微塵もないヘルンが出雲の學生に如何に見られたらう。『知られぬ日本の面影』のうち「英語教師日記」中に當時の學生石原喜久太郎（醫學博士）との問答がある。

「先生は天長節の式に御眞影に敬禮なさいましたのを見ました。先生は先の先生とちがひます」

「どうして」

「先の先生は、私共を野蠻人だと申しました』

「何故」

「その先生は神様（その人の神様）の外に尊い物はない。外の物を尊ぶ者は、卑しい無學の人民に過ぎないと申しました」

「どこの國の人です」

「耶蘇教の宣教師で、英國の臣民だと申しました」

「しかし、英國臣民なら女王陛下を尊敬しなければならない。英國領事の事務室に入るにも脱帽しなければならない」

「本國でどんな事をなさるのか知りませんが、仰つた事は私の今申した通りでした。ところで私共は、陛下を尊敬しなければならないと思ひます。それを本分と思ひます。陛下の爲めに喜んで一身を捧げる事を光榮と思ひます。しかし、先の先生は私共を野蠻人、無智蒙昧な野蠻人だと申しました。先生は如何御考ですか」

「石原君、私はその人自身こそ野蠻人、野鄙な無學な分らず屋の野蠻人だと思ふ。陛下を尊敬し、陛下の法律に隨ひ、一朝事あるときは國家の爲めに身命を抛つのが最高の義務です。たとひ自分で外の人々と同じやうに信じなくとも、祖先の神々や國家の宗教を尊ぶのが君達の義務です。それから、どんな人が云つたにしても　　陛下のため又國家のために、そんな野鄙な惡口に對して憤慨するのは、君達のつとめです。……」

珍らしくも今度の西洋人は日本が好きだ。日本人自らがつまらぬと思つて居る物までも好むやうだと云ふ聲が、學生から父兄へ、學校から市中へ傳はつた。松江の人は不思議に思つた、感嘆した。さなきだに歐米人でさへあれば日本人に尊敬される時代に、日本を愛好するが故に一層日本人からは敬愛されると云ふ好位置に立つた。その上松江人は元來外國人を歡迎する市民である。やがて全市擧つてヘルン先生（松江訛りではフェ、ロン、先生）を敬愛するに到つたのも不思議ではない。

ヘルン自身に取っても松江の愉快であつた事は想像ができる。男女老若皆自分に對して笑顏を見せて居る。アメリカでは身長の低きをかこつたが、日本人は五尺二寸五分のヘルンと同じ位か或は低い。富なくしては享有のできない物、隨つて人を不平ならしむるやうな物質的文明は日本には未だ多くない。首府を離れる事數百里のこの松江には現代物質文明の香すらも無い。電燈瓦斯電話は勿論西洋料理もストーヴも無い。質樸なる簡易生活があるだけであつた。基督教の宣教師はゐたが歸依するものは稀れで、もしあれば「お大」のやうな運命に遇つた、（全集第六卷六〇一）はるかに出雲富士を望み、湖水によつた松江の風光は極めてよい。この當時のヘルンは多年の重荷を卸したやうに感じて、ここそ自分

の落ちつくべきところと思つた。アメリカに於ける惡戰苦鬪は過ぎ去つた惡夢のやうに忘れられた。當時の新聞の記事は赴任匆々のヘルンが如何に松江の人々に敬愛されたかを示して居る。二十三年九月十四日の『松江日報』（百七十三號）につぎの記事がある。

お雇教師ヘルン氏。本邦に在留せる西洋人はとかく自國の風を固守し我邦の事物を目して野蠻なり未開なりと惡しざまに誹評する輩あれども、今度本縣に雇入れられたるお雇教師ヘルン氏は感心にも全く之に反して、日本の風俗人情を賞讃すること切りにして其身も常に日本の衣服を着して日本の食物を食し、只管日本に歸するが如き風あり、氏が當地に着松せりとの報に接するや、或人は直ちに氏を尋ねんと思ひたれども、何分唯一枚の浴衣をつけたるのみなれば、斯樣なる風にて始めて當地に罷り越したる外人を尋ぬるは、大に其禮を失するものならんとて態々其家に歸りて洋服に着換へ、それより氏の旅宿に赴きたるに氏は早速出で丶之を迎へ某氏の洋服を着したるを見て跪坐するの困難を察し、椅子を出して之を坐せしめ、自身は浴衣のま丶布團の上に坐しいと愉快げに當地方の談話を爲したりと、某氏も之を見て大に其案外なるにあきれ、然らば態々洋服に着換ざりしものと後悔したりと、それより某氏はヘルン氏に向つて當地は山陰の奥に遍在して西洋人等の出入すること極めて稀れなれば、今度當地へ來松せられたるに就ても萬事不便勝ならんと物語りしに、氏は微笑して否々貴見大に違へり、予は日本の風俗日本の習慣を愛すること最も甚しければ、西洋人の常に往來して人々已に西洋風を見習ふたる地方は之を見るを好まず．古來

の風俗習慣を其儘保存する地方に滯留するは予の最も好む所なり、故に予は日本人の住む所ならば如何なる所にても之に住居せんと決心せり、今日とても予の食物は少許の鮨、數箇の玉子、二三合の日本酒さへあらば之にて充分なり、無理に西洋料理を食するに及ばぬことなりと喋々辯じ去りたりと云ふ、因に記す、氏は過般日本玩弄物についての著述を爲さんとして種々其材料を蒐集中なりしが近來半以上脱稿をつげたりと云ふ。

翌二十四年五月二十六日の同じく『松江日報』（三百七十三號）に記事が二つある、

メール新聞記者大にヘルンを賞す。我が尋常中學校御雇敎師ヘルン氏は西洋人として稀れなる日本好にして其衣服飮食より居宅裝飾に到る迄一切萬事日本風にて人をして一見日本人なるかを疑はしむる如くなること、及び氏は多年米國にありて操觚家となり此社會に雄飛し極めて詩文に妙を得たることは每度本紙に於て報導し置きたる所なるが當時橫濱メール新聞記者たる頭本農學士は之に就て過般上京中なりし當地の某氏に語りて曰く「ヘルンは我がメール新聞の通信員にして、時々日本の事情に就て通信すれども、氏の如く日本の眞情を穿ちて一讀掬すべき名文を草するものは數多の通信員中一人として之れあるなく、今春氏の通信にかゝる和田見情死事件の如きは能く日本娼妓の實狀を直寫せるを以て外人中に之を購讀するもの甚だ多く、同日の新聞紙は忽ち賣切れたり、氏の如き文章家は中々得易からざるものなれば、務めて之を優待し永く日本に滯留せられたきものなり云々」而して同農學士はヘルンに其刺を通じて今後

の交際を求めたりとか、かくの如き良教員を得たるは我が中學校の最大幸福たるものなれば予輩は縣下の爲め、世人の厚く同氏を待せんことを希望せんと欲するものなり。

ヘルン氏大に滿足せり。　氏の始めて本縣に雇聘せらるゝ事となるや文部大臣は特に本縣に注意を下して氏の如き良教師は中々かくの如き小給にて雇ひ入るゝことを得るものにあらざれども、幸に氏は獨身にして多くの出費を要せず、爲めに多くの給料を望まざるを以て貴縣に於ても心を此邊に注ぎ充分優待せらるべしとありしかば、同氏の來縣以來、本縣の氏に待するや中々懇篤なるを以て氏も大に之に滿足し、松江の寒氣には閉口すれども、向ふ五六年は如何なる事情あるも當地を去るを欲せずと物語れりとか。

當時の松江の新聞のヘルンに關する記事は中々多いがいつもこの調子で揭げられた。日本好きの西洋人であるばかりでなく、えらい文學者だと云ふ事が知れ渡つたのであつた。松江で人形や『ひとがた』を集めて英國博物館に送つた事は事實であつた。和田見情死事件とは『日本の面影』に「心中」と題した一篇がそれであつた。

當時島根縣知事は山岡鐵舟の高足と呼ばれた古武士の面影のある籠手田安定であつた。ヘルンは一見してこの知事を敬愛した。熱心な國粹保存家であつたので、松江の老士族連がこの知事によつて武術の復興したのを喜んだ。二の丸で競馬が昔風にあつた、擊劍や鎗

の試合があつた。ヘルンは必ずその度毎に特別に招待された。二十四年五月新潟縣へ轉任した時、いたく別れを惜んだ。中學の校長は木村牧、教頭は西田千太郎であつた。西田は當時出雲の三才子の一人と呼ばれた溫厚なる才人であつた（現福岡工科大學教授西田精の兄）ヘルンはこの人と終世かはらない厚誼を結んだ。その後『東の國から』を捧呈して居る。晩年この人肺患にかかつた時、ヘルンは痛く心配して『このやうな人このやうな病氣にかかるのは神樣が惡い』と慨いた。早稻田大學に出た當時、この學校が好きてあつた原因の一つは、高田學長の風采何となく西田に似て居る事であつた。漢文の敎諭に片山尙絅と云ふ片山兼山の孫で滋賀縣師範學校長から轉じた人があつた。ヘルンは舊日本の人として敬愛した。英語の通じない片山を訪うて、手眞似で好意同情を表した事もあつた。片山が茶菓をすすめて赤い色の羊羹を箸で取つた時、近視のヘルンは之を煙草の火と思ひ誤り煙管を出して受けようとして氣がついて二人で大笑した事もあつた。散歩に出て、向ふへ片山の行くのを見て、後ろから『カテヤマ、カテヤマ』と連呼して追ひつき、共にどことなく歩いた事もあつた。

　當時の學生中にさきに述べた石原喜久太郎、大谷正信、學生中第一に旅宿に訪問し、又絕筆の手紙を得た藤崎八三郎（もと小豆澤）落合貞三郎などあつた。

或は西田と共に、或は學生と共に、或は單獨て、暇さへあれば、松江市中をあさつて、骨董や浮世畫を買ひ、又、市中や近郊の神社佛閣名所舊跡を訪ひ、學生には牡丹、狐・蚊、幽靈、龜、螢、時鳥の如き題を與へて英文を作らしめ孜々として日本研究を怠らなかつた。

ヘルンが赴任後、まもなく松江人を驚嘆せしめた事があつた。或日單獨で市中寺町龍昌寺に赴き、その墓地を徘徊して偶然一石地藏を見て之は凡作でないと感じ、西田氏を通じて寺僧に尋ねて見ると、それはその後關西彫刻界にも高くなつた荒川龜齋（重之助）の作であつた、ヘルン直ちに灘の四斗樽をみやげにこの人を訪問して彫刻を依賴し、又屢々招いてヘルンの所謂『貧しき天才』を饗應した。今小泉家にある天智天皇の彫像は明治二十三年の東京博覽會に出品したのを讓り受けたのであつた。この逸事が傳はつて當時の新聞にも出て松江の人々のヘルンに對する尊敬心は益々高まつたのであつた。そののち古美術の鑑定を依賴しに來る者すらあつた。

それから少し後の事であつたが、又別の方面から松江市民を驚嘆せしめた事があつた。松江の郊外に屑物や、空壜などを買ふ事を營業とする「山の者」と呼ばれる特殊部落がある。松江市の人でここを訪れる者は殆どない。さながら厄病のやうに嫌はれ賤まれるのがそれまでの習慣であつた。ヘルンは二十四年の春、西田千太郎を誘うてここを訪れた。こ

の部落は驚きの目を以てこの珍客を迎へた。珍客は一つの家に入つて屑物の廣重の繪などを買うた。主婦の汲んで出す茶を飮んだ。これはこの部落へ止むを得ないで來る松江人と雖も決してしない事てあつた。珍客はそれを知つて態と飮んだのであつた。この部落の人人のする大黑舞を所望した。主婦の世話て、若い女の一隊の『八百屋お七』の歌に合せて、一人の老婦人が舞うた。『八百屋お七』のために淚を流すと共に、幾百年の日本の古い迷信のために社會から葬られて居るこれ等の若い歌ひ手の身の上に同情の淚を注いて、許す限りの祝儀を與へて歸つたのであつた。シンシナーティやニュ・オルリアンスて、いつも黑人の味方となつたヘルンとしては如何にも自然な行爲てあつた。この始末は、ヘルン自ら明治二十四年六月十三日の「デャパン・メイル」にも出したのてあつたが、松江の諸新聞もこれを報じて松江人を驚嘆せしめたと共に、多少警醒せしむるところもあつた。この異常な訪問を受けた部落の喜びと誇りは云ふまでもなかつた。

松江に到着した當時は材木町の宿屋にゐた。眞鍋晃はまもなく歸つた。その年の十月頃、末次本町（スヱツグホンマチ）と云ふ町の二階建の一家を借りた。材木町も末次本町も大橋川に架せる大橋に近く相隣した町てある。湖上の展望もある。朝早く松江の人々が宍道湖の水て顔を洗ひなが

ら朝日を拜するのを見て興じたのも、橋の上の霜をふむ下駄の音のからころと鳴るのを喜んだのも皆ここであつた。

同年十二月、西田の媒によつて松江の藩士小泉湊の女節子と結婚した。小泉家は維新前御番頭を勤めて五百石を食んだ家柄であつた。夫人の母方の祖父は放蕩な主君を三たび諫めて赤坂見附上の主邸内で切腹した出雲で有名な忠臣、鹽見增右衞門と云ふ家老（知行千四百石）であつた。その頃（嘉永以後）江戶では『三本杉家老鑑』と題して永く芝居に演じ、『線香山』と題して講談にのせた。その後の『河內山宗俊』も同じ事實によつた物、「家老高木小左衞門」は鹽見增右衞門をモデルにしたのであつた。維新後、出雲には奮發家と云ふ新熟語が永く流行した。發奮して事業を起す人の事であつた。夫人の父も奮發家の一人となつて織物の工場を起したが、士族の商法が多く陷るべき運命に陷つて失敗した。名家の零落は悲慘である。夫人も學問藝能一通り修めたあとで思はぬ不幸に際してゐた時、西田に勸められてヘルンに嫁する事になつた。ヘルンの人となりはその頃松江市中に知れ渡つてゐたので、夫人も不安のうちに安心して嫁したのであつた。この結婚は幸福であつた。ヘルンその後の生涯の幸福は云ふまでもなく、著作も夫人に負ふところ多かつた。日本婦人の美德を讚した文章や手紙は中々多い。最後の『神國日本』に於て最も多くの紙數

を日本婦人の頌徳にささげて居る。（全集第八巻三九一―三九七）

二十四年の元旦に羽織袴て、日本の習慣通り年始の廻禮をした。定紋は中學の畫學教師後藤金彌（魚洲）にはかりてヘロンとヘルンと似通へるところから鷺（さげ羽の）を用ひた。

同年五月北堀町字鹽見繩手に轉宅した。これは城跡に近く天守閣も見え、城の壕に望んて庭の廣い、池のある物寂びた屋敷てあつた。

その年の夏杵築の大社に詣てて破格の特權を得て參拜する事を得た。日御崎にも詣てた。宮司小野尊光男爵夫人は夫人の從姉なるがために殊に便宜を得た。加賀浦の潜戸も見た。松江に歸つてから前年赴任の時伯耆の下市て見た盆踊を見ようとしてそこまて行つたが盆踊は警察のために禁止された事を聞いて失望して、池の中に溫泉の湧出する東郷の池に行く途中、八橋に滯在して海水浴をした。八橋より一里程の大塚と云ふところに盆踊のある事を聞いて見に行つたが西洋人が來たと云ふので踊りはそこ除けにしてヘルンを取り卷き、砂をかけると云ふ騷ぎに驚いて歸つた。八橋の人々はあとてヘルンに陳謝した。（全集第九巻五五七、六〇五）東郷の池に行くと絃歌しきりに起つて居るので、ヘルンは一刻も立ち留る事を肯んじない。その儘引きかへし美保關をへて松江に歸つた。

ヘルンが專心文筆に從事し隱者のやうな生涯をおくるやうになつたのは少し後の事であつた、日本での始めての著述『知られぬ日本の面影』は論文も小說もあるが大部分は出雲を中心として書いた地誌、風俗誌、名勝紀行である。その頃は學生をも歡迎し、敎師とも交際した。學生大谷正信の家に行つて節分の豆まきを見た事もあつた。諸種の會合にも出た。島根縣敎育會の大會で通譯づきの講演をした事も二回あつた『想像力の價値』（西田千太郞通譯）『熱帶地方の話』（中山彌一郞通譯）であつた。ヘルンの傳記家が云ふ程臆病でも陰氣でもなかつた。蓋し一年餘りの松江時代程ヘルンに取つて幸福な時代は前後になかつた。松江人がヘルンに對する尊敬と友情とを吸收して自分も松江の一市民の如く愉快に生活した。松江を去つて後、東京に永住するやうになつてからも、松江の追懷談の出ない日は一日もなかつた。

ヘルンは事情の許す限り松江に永住するつもりであつた。ただ松江の氣候冬頗る寒く、日本海を吹いて來る風は十三年間南部及び熱帶地方に慣れてゐたヘルンには斬るやうであつた。身體はとにかく、ヘルンに取つて貴い眼の惡くなる事は堪へかねた。ヘルンの眼は寒さにはいつも惡くなつた。冬期だけを暖地で費してその殘りを松江で送らうなどとさまざまに思慮をめぐらしたが、最後に割愛して熊本第五高等中學校に轉任する事となつた。

學校生徒は勿論松江全市ヘルンと別れを惜んだ。中學師範の教師一同より古出雲燒の大花瓶一對を贈り、中學生一同二百五十一人より金銀づくりの短刀を餞別に贈つた。師範生は送別會を開いた。出發の當時コレラが流行したので學校閉鎖中にも拘らず中學生全部は教師、父兄、市の有志、縣の高官と共に波止場まで見送りをした。その日は明治二十四年十一月十五日であつた。大橋から小蒸氣で宍道(しんぢ)まで行き、車で廣島に出で、吳から汽船で門司に渡り汽車で春日まで、そのさきは車で熊本に赴任した。

『知られぬ日本の面影』の大冊二卷はその後熊本時代に出版になつたが過半は出雲時代の草稿にもとづいて居る。日本に對して未だまぼろしのさめないうちの新しい印象を細大殘さず書きとめてきたのであつた。出雲に遊ぶ外國人は悉くヘルンのこの書物に誘引されて來る。さて來て見てヘルンの明らかなる心眼と强き想像力とに驚嘆して歸るさうである。島根縣警察部の調査にかかる外國人旅行人員調がある。三十二年から外客の激增したのは偶然であらうか。ヘルンの筆によるのではなからうか。四十四年九月二十八日の『松陽新報』の社說にこの事を說いて『小泉八雲の銅像を建てよ』と論じたのは偶然でない。

	人員
明治二十三年	?
同　二十四年	?
同　二十五年	一〇
同　二十六年	四〇
同　二十七年	四一
同　二十八年	八九
同　二十九年	五九
同　三十年	五四
同　三十一年	七一
同　三十二年	二一二

	人員
同　三十三年	一五二
同　三十四年	一九〇
同　三十五年	一八八
同　三十六年	二六一
同　三十七年	一五一
同　三十八年	一九六
同　三十九年	三二六
同　四十年	三八二
同　四十一年	三二四
同　四十二年	三三四

八　熊本

官舍に入らず――秋月胤永――有馬純臣――學生――熊本の印象――旅行――日常生活――長男出生――言行――社交――松江を憶ふ――學生の無宗教――日本の道徳的瓦解――解約

熊本第五高等中學校の校長は初め嘉納治五郎、後中川元、教頭は櫻井房記であつた。佐久間信恭は同僚の一人であつた。月俸二百圓、明治二十四年十一月より二十七年十月まで滿三年勤續した。初めの住所は手取本町三四に定めたが基督教會の鐘が近く聞えるので、外坪井西堀端町三五に移つた。この家には樹木こそ少いが石の多い（その石に七百圓程かけたと云ふ）廣い立派な庭園があつた。熊本の人は水前寺公園程の庭だと褒めた。高等中學校附屬の外人官舍があつたが日本間がないのでヘルンはこの官舍に入らないで、純日本風の家に入つたのであつた。漢學の教師故秋月胤永はこの官舍に入つた。秋月はもと會津の家老、白髯を垂れた愉快さうな老人であつた。ヘルンは松江で籠手田知事を敬愛したと

同じ理由でこの秋月先生を尊んで『東の國から』のうちに「神」と呼んで居る。二十六年五月、この人の古稀の祝賀會を學校で擧行し職員生徒一同の祝文詩歌を呈した。これを印刷して『鎭西餘響』と題した小册子がある。ヘルン自らの懇篤なる祝文もある。（全集第十二卷五七六）この一小册子をヘルンは大切に保存してゐた。學習院出身の柔道四段故有馬純臣も教師のうちにゐた。完全なる英語を話す人、最も貴族的な人、自分が見た日本人中の最も風采のあがつた人と云つて居る。

學生のうちには隈本繁吉も村川堅固博士も黒板勝美博士もゐた。ヘルンがその手紙に於て最もその人物識見を賞讃して居るのは當時法科の首席故安河内麻吉（内務次官在職中昭和二年歿）であつた『男のうちの男』と家人に噂してゐた。東京の家を訪問した時、取つぎの者それと知らずに斷つて後、安河内なる事が分つてあと追ひかけさせて引きもどした事もあつた。（全集第十卷五四八——五四九、五五七——五六一）

熊本は松江とちがつて風流の土地ではない、松江のやうに骨董店や古本屋はない。十年の亂でなくなつたとも、初めからないのだとも云はれて居る。松江のやうに茶の湯や生花などの盛んな土地ではない。風景は雄大で男性的で大陸的であるとも、殺風景とも云へる。松江の別天地からただ大なる軍事上の都と云ふ感じを與へるばかりの熊本へ來たヘルンに

取つては初めから少し勝手が違つたやうであつた。市中や近郊を散歩して『大へんよいところを見つけたから案内する』と云つて夫人を連れて行つたのは、高等學校の後ろ細川侯の菩提所東嶺寺であつた。

二十五年の春休みに太宰府に詣てた。夏休みには博多に二泊して門司から海路神戸に出て、京都奈良をへて神戸に歸り、再び門司に引きかへし、新たに門司から海路伯耆の境港に上陸し、それから隱岐に赴いて各島を歴遊する事三週間、美保の關へ歸つたのは八月十六日てあつた。境港へ出て陸路備後の福山から尾の道へ出て歸つた。

二十六年の春、又博多に赴いた。その年の夏始めて、單身長崎へ出かけて見たが、餘りに淋しいのでただ一泊の後歸宅した。（全集第十卷三〇三――三一一）

二十六年十月十一日のチエムバレンへの手紙に、熊本に於けるヘルンの日常生活を知らせた物がある。

……私の一日の行事を見本として書いて見ませう。これは誰にも書く考はないが、君になら書い

てならないわけはないから。

午前六時――小さいめざましが鳴る。妻が起きて私を起す――昔のさむらひ時代の眞面目な挨拶で。私は起きて坐る、蒲團のわきへ火種の消えた事のない火鉢を引き寄せて煙草を吸ひ始める。女中達が入つて來て平伏して旦那樣にお早うございますと云つてそれから戸を開け始める。そのうちに外の部屋では、小さい燈明が先祖の位牌と佛樣（神道の神樣ではない）の前にともされて御勤めが始まつて先祖へ御供へをする。（精靈は供へてある物を喰べないで――その精氣を少し吸ふのださうです。それでその供物は極めて少々づつです）もうすでに老人達は庭へ出て、朝日を拜んで手を拍つて出雲の祈禱をつぶやいて居る。私は煙草を止めて緣側へ出て顏を洗ふ。

午前七時――朝飯。極めて輕い物――玉子と燒きぱん。ウイスキー小匙入れたレモナードと黑コーヒー。妻が給仕する、私は妻にも少し喰べさせようとする。しかし妻は少ししか喰べない――あとで一同の朝飯の時にも顏を出さねばならぬから。それから車夫が來る。私が洋服を着始める。始めのうちは、妻が順序よく一つづつ渡して、ポケットに氣をつけてくれたりなどする日本の習慣は嫌ひでした、――これは人を怠惰にすると思ひました。しかしそれに反對しようとすると、人の感情を害して面白くないから、それで古い習慣におとなしく從つてゐます。

午前七時半――一同玄關でさやうならを云ふために集まる、しかし女中達は外に立つ――主人は洋服の時は女中達は立つて居ると云ふ新しい習慣によるのです。私はシガーに火をつける――私の

ところへ運ばされた手にキスする（これだけが舶來の習慣）それから學校へ行く。

（四五時間ぬける）

車夫の呼び聲で歸ると、――一同前同様おかへりと云つて挨拶しに玄關に來る、それから手傳されるままになつて洋服をぬいで着物、帶などに着換へる。座蒲團と火鉢は用意してある。チェムバレンさんメイスンさんから手紙が來て居る。晝食。

外の人々は私がすんだあとで食事をする、隱居は二人あるが、私は稼ぐ人だから、一家を支へて行く人の事は第一に考へねばならないと云ふ主義によるのです――しかし外の場合には第一の位ではない。たとへば一同集まる時には名譽の地位は年齡と親子の關係でいつもきまる。その時に私は第四番の席につき、妻は第五番の席につく。そして老人はその時にいつでも第一番にもてなされる。

食事中は妄りに外の人々や女中を妨げない事に一種の了解がある。規則ではないがこの習慣を私は尊重する。それで私は一同のすまないうちは妄りにその方へは行かない。それから銘々好きな場所についても一種の禮法がある――それも嚴重に守られる。

午後三時四時――非常にあつい時には皆晝寢をする――女中達も交る交る眠る。涼しくて氣もちがよければ、一同働く。女は裁縫。男は庭やそこらで色々こまごました事をする。子供達が遊びに來る。「朝日新聞」が來る。

午後六時。　入浴時間。

六時半——七時半——晩餐。
午後八時——一同箱火鉢を圍んで「朝日新聞」を讀むのを聞く、或は話をする。時々新聞の來ない事がある——そんな時には珍らしい遊戲をする、それには女中も加はる。母は合間に針仕事をする。或遊戲は甚だ奇拔です。……
しかしもし夜が非常によい時には、私共は時々出かける——いつでも女中は交代に連れて外出の機會を與へてやる。時々芝居に行く事もある。時々來客がある。しかし最も愉快な事は夜ランプのついた店で何か變つた或は綺麗な掘出し物をして來る事です。そんな時には大得意で持ち歸つて、一同團欒して感心して見る。しかし私だけは晩は大概書く事にしてゐます。私の來客で大切の客なら——妻だけが出て——外の者はその人の歸るまで出ないやうにする。そして妻が接待する。普通の客なら女中に任せる。
夜がふけると、神樣の世になる。晝のうちは神樣はただ普通の供物を受けるのだが、夜になると特別の祈禱を受ける。小さい燈明をつけて、私を除いてうちの者は代る代る祈禱禮拜する。この祈禱は立つたままでするが、佛へのお勤めは跪いてする。私はただ一度祈禱をするやうに云はれた、——それはうちに心配な事があつた時でした、その時教へられた通り、一言一句日本語をくりかへして神々に祈つた。神棚の燈明は燃えてなくなるままにしてある。
寢る合圖をするのが私で、一同それを待つて居る——書く事に心を奪はれて時間を忘れる事があ

る。さうすると餘り勉強が過ぎないかと注意される。女中は部屋部屋へ蒲團を擴げる、火鉢に火をつくり直して私共――即ち私とその外の男――が夜勝手に煙草の吸へるやうにする。それから女中達は平伏してお休みと云ふ、それから全く靜かになる。

時々眠りにつくまで讀書する。時々鉛筆をもつて――床の中で書き續ける事がある――しかしいつでも昔の習慣に隨つて小妻はおさきに御免蒙りますと云ふ。そんな禮儀は――餘り謙遜すぎるから――止めさせようと試みたが、結局美はしい習慣で――魂の中にしみ込んで居るから、止めさせる事はできません。これが日常生活の概略です。それから眠ります。

熊本時代にヘルンに取つて一大事が起つた、即ち二十六年十一月、長男一雄の誕生てあつた。(一雄の名はラフカディオに因んだのであつた)アメリカの親友ヘンドリック及び異母妹アトキンスン夫人に與へてこの事を報じた物がある。スペンサーを讀んで世界觀が一變し、この誕生によつてヘルンの人生に對する考が變つたのであつた。ヘンドリックへの一部分はつぎの通りてある。

君に一つ御知らせしようと數週間待つてゐた事が思ひの外後れてやうやく昨晩になつて出來した。それは長男誕生の事です。非常に強壯で大きい黒い眼をしてゐます。しかし西洋の兒よりはむしろ

日本の兒のやうです。鼻は私に似て居るが母の容貌が種々の點で私の容貌と混じて居るから不思議です。幸に何にも異狀がありません。醫師の說によれば骨の樣子で丈の高くなる事が分るさうです。歐洲人と日本人との雜種は兩親共壯健でさへあればいつも改良です。幸ひ自分の妻の一族は皆强壯な士族です。妻も無事ですが私は心配致しました。それからこの新しい經驗で、「出產」と云ふ事は、神聖な物又恐ろしい物で、宗敎の力を藉りて保護してもまだ充分と云へない事を非常に深くさとりました。

それから自分の子供を生んでくれる女を虐待する男も世の中にはあると思ひ出したら、天地も暫らく暗くなるやうな氣が致しました。それから私はこんな幸福を授けてくれた「不可思議の力」に對して恭しく感謝した事を白狀します。――それから御禮の祈りを捧げました。さうするのが愚な事だとは思ひませんでした。

君がいつか父となられる事があれば、一生のうちで最も不思議な强い感じは、始めて自分の子供の細い叫び聲を聞く時であらうと思ひます。ちよつと自分の體が二つあるやうな變な感じが致します。そればかりでない、說明のできない一種の感じが參ります。――恐らく昔、昔、天地開けて以來、私共の種族の父と母とが感じ來つた感じが、この際自分に反響して來るのであらうと思へる程の甚だ微妙な又甚だ不思議な感じです。……

自分の受けたやうな教育は受けさすまいと云ふ述懐は同じくこの手紙（全集第十一巻八五―八七）に出て居る。この時からヘルンは一層の責任を感じ同時に一層の勉强家となつた。その後の友人に與へた手紙に、一雄の噂のないのは殆ど無い。

二十七年四月讃岐金比羅に參詣した。二十七年夏、單身東京横濱に赴き珍らしい玩具や乳母車など買ひ込んで歸つた。東京ではチエムバレンの留守宅に泊つた。メースンと共に大津の海水浴場にも出かけた。歸途チエンバレンを宮の下に訪うた。

熊本時代のヘルンも相應に社交的であつた。二十五年の一月陸軍初めの祝宴に羽織袴で偕行社へ出かけて來會者一同を驚かした。（師團長は野崎中將）その外公私の宴會へこの服裝で出かけた事もあつた。卒業生全體の寫眞には二回加はつて居る。二十七年三月九日明治天皇銀婚式の祝賀會を學校で開いて、夜四百の學生の提灯行列を行ひ、九時に歸つてから餘興と祝宴を開いて殆ど曉に達した事があつた。この時もヘルンは九州學生の破鐘の如き萬歳の三唱や、怒濤の如き軍歌の合唱や、フランスの學生ならばとにかく英國學生等の眞似もできぬ程機智頓才の溢れた（とヘルンは云つた）餘興の芝居等に非常に興味を感じて、學生の强ふるままに十五杯程の酒を飲んで二時過ぎまでゐた事もあつた。（全集第十

卷四九八・五〇三）同じく二十七年の初め學校の同窓會なる龍南會の講演で『極東の將來』と云ふ大問題を提へて『白禍』の次第を論じこれに對抗するのは日本人と支那人のみなる事を論じて最後に『肉體は野蠻人であれ、頭腦は文明人であれ、九州魂を養へ、贅澤華美を捨てて質素簡朴善良なる物を愛せよ、これが卽ち日本を偉大にする所以、東洋の覇となる所以』だと論じた。（全集第十二卷五七九）

しかし、ヘルンに取つて憶はれるのは松江であつた。二十五年十一月一日メーソンに與へた手紙に『……九州人――普通人――は好きといふわけに行かない。出雲では萬事柔和で古風であつた。ここでは農夫や下等社會は酒を飲む、喧嘩をする、妻をなぐる。私は日本人は皆天使ででもあるやうに書いた事を思ふと氣ちがひにでもなりさうだ。……』（全集第十二卷一六〇）と云つたがこれは折惡しくも手取本町のつい近所で、事實人目もかまはず妻をなぐる相當の身分の人（その人の子が後に縣知事になつた）があつて折々ヘルンの目にとまつたのであつた。松江の學生は多く神道を奉じた。熊本の學生は多く無宗教を宣言した。チエムバレンへの手紙に歎じて居る。『私は「神の有無は知らない」とある學生の文章を如何程見たか知らない程です、と云へば不思議に思はれるかも知れないが、これは私には少しも有難くない。宗教家から見れば、私は不可知論者、無神論者、その外何とても

呼ばれるだらうが、しかし十八歳乃至二十歳の少年にして宇宙の「不可思議」に對して畏敬と哀愁を催さないのは大なる損失てす。私にとつては宗教はいつも一大事でした。そして今日も私は或意味で深く宗教的です。青年に宗教の缺けたのは情けない事てす。宗教心は後天的思想を彩るべき青年の詩てす。少くとも後に世界大の感情を可能ならしむるのです。……』（全集第十卷四五五）政治的方面もヘルンを悲觀させた。選擧干渉と云ふ珍事もあつた。チエムバレンに與へて『日本は道德的大瓦解を蒙らうとして居る。ここでは漁夫が喧嘩をする、農夫が爭ふ。政治家は要撃し合ふ、學生は戰ふ、罪人は增加する一方と云ふ有樣です。日本も今少し經つたら世界最良の國では無くなるてせう……』と云つた。（全集第十卷三〇一）

ヘルンの日本に對する　松江に對するとは云はない）幻影はやや消えかけた。しかし、ヘルンの新日本に對して慊らない心は、たとへば次第に生長して自分から離れて行く子供を見る親心のやうてあつた。日淸、日露の戰爭の初めはひどく心配した。ヘルンのこの戰爭中の心配は、贔負の角力は大丈夫と知りながら同時に又負けさうでならないのと同じ心持ちであつた。

三年の期滿ちたが、契約を續けない事にした。この時代にはヘルンは英語ラティン語、

（佛語も一時）併せて一週二十七時間の受持があつた。その上作文の添削など頗る忙しかつた。『知られぬ日本の面影』の一部分と『東の國から』とその他の草稿がこの時代三年間の著述であつた。思ふやうに述作のできないのが一原因で仙臺や鹿兒島の同じ學校からの招聘を辭し、『神戸クロニクル』社の招きに應じてその記者となつて赴く事となつた。

毎日一欄づつの記事を書く約束で月俸百圓であつた。

九　神戸

神戸の印象――旅行　マニラ行を思ひ止まる――歸化――旅行――刻苦精勵――『心』　『グリーニングス、イン、ブツダ、フイルヅ』――東京大學から交渉――旅行

熊本に慊らないヘルンに神戸の氣に入るわけはなかつた。ヘルンに取つては神戸は舊日本の面影の毫も見えない醜い歐洲文明の模倣ばかりの新開地であつた。盆踊のやうな舊式な物は一切外人の抗議によつてか、日本官憲の遠慮によつてか勿論見る事はできなかつた。外人はここでは最も尊大に、日本人はここでは最も卑屈に見えた。外人商館を何番樣と稱し外人の家を御屋敷と稱へて福の神樣のやうに尊ぶところであつた。市中を散歩すれば卑劣な車夫がうるさくあとをつけて來てややもすれば惡所へ導かうとするなど、少しも油斷ができなかつた。仕方なくヘルンは人の通らぬ場末や田舍道ばかり歩いた。

初めの住所は下山手通四丁目七、まもなく同じく下山手通六丁目二六、後に中山手通七

丁目番外一六に轉居した。

ヘンドリック氏に與へて云つた。『神戸はよいところだが、私には不愉快です。餘り日本内地に慣れて來たからです。音をさせないで歩き、和かい聲で話をする日本婦人の間で暮らしたあとで、外國婦人を見たり聲を聞いたりすると、ひどく神經に障ります。（その上ここでは外國婦人は殆ど皆ひどい町人風で――氣取つた英米風が流行します）敷物、汚れた靴――つまらない流行――ひどく高價な生活――氣取り――虛榮――無駄話。それよりは柔い疊の上の、いつも優しい禮儀正しい、美はしい、清い、質朴な日本生活の方がどんなにか住みよいでせう。……』（全集第十一卷二九五）チエムバレンにも同じ意味の手紙を送つて居る。『内地にゐたあとで、ここで外國生活を見るのは甚だ不愉快です、居留地などは恐ろしくなります……湯津（石見）や、日御崎や、隱岐に住んで、日本風に暮せるだけにして居る方が開港場の最上の生活よりもはるかによい。……カーペット、ピヤノ、西洋窓、カーテン、眞鍮のしめ金、教會堂、みんな嫌ひです。それから白シャツ、それから洋服……所謂文明なる物がどれ程嫌ひてあつたか今まで氣がつきませんでした。どんなにその文明の醜惡なるかは舊日本（昔からあつた唯一の文明國）に長く住んでゐたので始めて分ります。これが私の感情です。……』（全集第十一卷一五九）

二十八年の春、京都大博覧會を見てしばし滯在した。十月再び京都に赴いた。奠都一千百年祭を見んがためであつた。末慶寺を訪うて畠山勇子の墓に詣でたのはこの時であつた。この頃琉球から熱帶地方マニラ邊へ旅行して見ようと計畫したが、ローマ舊教の注意人物と自任して居るので、思ひ直して止めた事は第三章にも說いた通りであつた。アメリカへ一度歸つて見たいと思つたが、家族のあるヘルンには、昔のやうに簡單な旅行はできなくなつたので思ひ止つた。出雲へ歸つて永住する方法も講じて見た。

二十八年五月十五日令息と共に黃海海戰當時の旗艦松嶋を見物した。

二十八年の夏は旅行はなかつた。

これより先き、熊本時代から妻子と自分の國籍問題について思ひ迷うて人にも相談したが、遂に歸化する事に決して手續をしたのは神戶時代の始めで、事の落着したのは、二十八年の秋であつた。八雲の名は出雲を愛する餘り「八雲立つ」の歌から取つたのであつた。「八雲」は「ハーン」に通ずると云ふ意味は少しもなかつた。

ヘルンの歸化の直接の原因は日本國土の美に魅されたからではない。もとより日本國土日本人民を愛する事日本人以上であつたに相違ないが、歸化するに到つたのは妻子一族の將來を思うてかくするのが最善の方法と思ふところを決行したのであつた。ヘルンは以前

自分よりも遠縁のモリヌークスのために、大叔母ブレネーン夫人の相續權を奪はれた事に鑑みて、妻子のために正當なる權利を與へ置く事を心がけた。ページ・ベーカーに與へて『領事の前で結婚すれば妻は英國人となつて日本で財產所有の權利がなくなる。外務大臣の許可なくして只日本風に結婚して居るのでは正當の結婚でない。――しかしその許可を得れば妻も子供もやはり英國人になつてしまふ。それて私の結婚は道德的に又古い法律ては正當であるが、新法律では正當でなくなる。そして私の妻子（それから私は日本風に兩親や祖父を養つて居る）は遺言狀でも遺して置かないと權利をもたなくなる。その遺言狀にも、親戚の者から苦情が云へる。そこで私は國籍をうつして日本人となつてこの面倒を解決した。さうなると外國人並の俸給で日本政府に雇はれる望みは全くなくなる。日本人となつた英人はただ日本の標準で給料を支拂はれるからである。その上英人が英國民から與へられる極めて有力なる保護を失ふ事になる。最後に領事館税よりはるかに高い税を拂はねばならなくなる。子供は兵役に服する事になる。（尤もそれは差支はない）……』（全集第十一卷二七九、――二八〇）とある。同時にヘルンにはどこまでもはつきりした個人主義の英國風よりもぼんやりした家族主義の日本風が好もしかつた。『人が死ぬ、裁判官が出張する、領事が出張する、財產調べが始まる、競賣が始まる、遺產分配が行はれると云ふ仕

方より主人の遺した物は何となしにそのまま家族一同の物になると云ふ方が有難い」と夫人に語つたのはこの意味であつた。妻子の方を英國籍に移すのは氣の毒、むしろ自分一人だけ歸化した方が簡單であると云ふ考であつた。それ程にしながら、なほ遺言狀を認めて、増島六一郎博士に託した事を見てもヘルンが妻子のために思ひやつた事が分る。この歸化は、のち東京帝國大學に招かれる時に及んで大に累をなしたのであつた。

序でだが、ヘルンの歸化に關してアメリカの諸新聞雜誌のうちに誤りを傳へて居る物がある。曰く「ヘルンの歸化したのは大學講師時代であつた、その時祝賀會があつて伊藤公が演說をした」（その演　筆記もある）又曰く「大學總長演說して「今やヘルン歸化して日本人となつた、俸給も又日本人並でなければならない、願くは我等と同じく米食せられよ」と云つて百五十圓の俸給を三分の一、五十圓に減じた、狡猾な日本人ではないか」

二十九年の二月に伊勢參宮をした。四月に京都、大津附近、法隆寺、奈良、堺、大阪に遊んだ。堺で妙國寺の土佐志士の墓に詣でて今もかかる人々が出て日本のために惡聲を放つ外國人に制裁を加へたらよいと述懷した。伊勢には出雲にはない何々ホテルの西洋建築餘りに煩しくて甚だ大神宮の神聖を害すると託つた。

すでに四十五歳に達し、且つ父たる事を自覺したヘルンの刻苦精勵はこの時代より更にその度を加へた。二十八年一月ヘンドリック氏に與へて云つた。

……今では時間程貴重な物は何もありません。私は無駄話を聞きに行つたり、結婚する見込もない（既に妻帶して居るから）美人を見に行つたり、時間潰しにカルタをやつたり、或は美はしい事も眞實な事をも語つてゐない手紙に返事を書いたりして、時間を浪費する事はできません。勿論私も稀れにこんな事をする事もあるが、しかしあとで一生のうちそれだけ痛ましく浪費されたと深く感じます。そんな事には平氣な人もあるが、人生の最好時期をつまらなく浪費した私はそれはできません。その償ひに死ぬまで雷のやうに勉强します。立派な事もできませんが、しかし少しづつ分つて來たやうです。

私はどんな個人的娯樂にも無頓着になつたやうです、――同情と同情のある話の外には。これは少し病的かも知れません、もつと著しいのは、私がその人々のために働くのが當然となつて居る……人々の爲めに働くのは最大幸福だと感じて來た事です。わざと考へて居るのではなく、その考は私の一部となつて居る程に感ずるのです。

それから私も勿論少し成功して少し譽められたい。餘り成功して餘り譽められると驚いてしまひます。しかしこれまで得た賞讃でも時々面食つた事があります。用心しなければなりません。

つぎに、これまで好きであつた事で何だか嫌ひになつたと思ふ事があります。「プテイ、ジュルナル・ド・リール」や「シャリヴァリ」（ポンチやパック類）などは一冊見ても厭になつて怒りたくなります。本能以上の高尙な感情と衝突する本能に訴へようとの見えすくやうな考で書いたフランス小說は面白くなくなりました。パリス・オペラが隣りにあつて、無代で入場ができても行きたくはありません。若し行けば外の人の喜ぶのを見るためです。絕世の美人を訪問して夜會服で迎へられる事も厭です。隨分變人になつたと御考でせう。何と云ふ主義から來たのでもありません。只小さいながら自分の最善なるものに忠なるわけに行かない物は、何でも避けたいと思ふだけです。この規則から少しでも背くと仕事の方に關係します。

全體に於て少しづつ進步するやうに思ひます。勿論、私の著述について落膽したり、つまらないと思つたり致します。今日は可なりよいと思ひ、明日は、自分は馬鹿で駄目だと思ひます。つまり神經の故（せゐ）によるのです。しかし永く滿足して居るのは非常に有害だと信じます。失敗や困難や嘲弄は缺くべからざる藥です。……（全集第十一卷二八九――二九一）

かくの如くにして、ヘルンの日本に關する著述のうち、最も有名なる『心』及び『佛の畠の落穗』ができた。過勞の爲めに、二十七年の終りから二十八年の初めにかけて三ケ月間眼を病んで讀書執筆を廢した事もあつた　この　の醫師ドクトル・パブリエルはもと獨

逸の海軍軍醫であつた。まだ軍艦生活を營める頃からヘルンの著書を愛讀して、ニュレンベルグの新聞に『チタ』を飜譯した事があつた。

明治二十八年十二月の初め、チエムバレンを通じて外山學長から東京帝國大學文學部の英語英文學の講座を受け持つ事の交渉を受けた。ヘルンは熊本の學校の忙しさを思ひ出したのでためらつた。しかしチエムバレンから懇さに事情を開いて又親切なる禮儀をつくした申込みに接したので、遂に承諾して上京する事になつた。この事情はあとで詳しく述べる

二十九年の夏は、東京に轉ずる事になつて暫らく遠ざかるからと云ふので又出雲に行つた。神戸から船で伯耆の境まで行つて美保の關と松江に滯在して神戸に歸つた。その間に松江中學校長淺井郁太郎の送別會にも出た。松江中學の同窓會に出て講演もした。その趣意は『自分はこの學校の教師である頃、よく諸君から忠君愛國の話を聞いてゐた。自分はその當時さほどにも思はなかつたが日清戰爭の時に始めてその實例を多く見て甚だ感動した。この精神は日本の寶だから今後之を失はないやうに心がけられよ』と云ふのであつた。

一〇　東京　その一

富久町二十一番地――瘤寺――授業時間――燒津――燒津に於ける逸事――東京の印象――瘤寺の伐木――西大久保にて邸宅を買ふ――散歩の地――『人生は餘りに短し』

明治二十九年八月二十日、先づ夫人と共に上京して本郷赤門前の三好屋に投宿した。ここで外山博士の來訪を受けた。ここは二十三年の春横濱から上京の際、偶然車夫に引込まれた宿であつた。何分手狹であつたので翌二十八日龍岡町の龍岡樓に轉じた。清水書記官の世話で小石川に西洋館のある邸宅を見たが氣に入らない。遂に大學から遠いのを一つの取得に、市ケ谷富久町二一今の成女高等女學校（當時まだなかつた）の門前の高臺で日當りのよい新築の家に移つたのは九月二十六日であつた。この家はその後故梅澤中將が借りてゐたが、今はもうない。後ろは自證院圓融寺（俗稱瘤寺）であつた。寛永十七年（一六四〇年）尾張藩主徳川光友侯の夫人千代姫自證院菩提の爲めに創建せられた物であつた。

檜の皮を剝いたままの材木でできて居るので、瘤寺の名の如く節目の瘤著しく目立つ。京西の別天地をなして數百年の老杉晝も暗い程に森々として聳えてゐた。その間に散在してゐた墓地はヘルンの家と地續きであつたので、暇さへあればこの墓地を逍遙した。住職とも心安くなつた。(『異國情趣』のうちの「死者文學」參照)

授業時間は十二時間、時間割はつぎの通りで、六年間變らなかつた。

月　十一時——十二時（一時間）　木　十時——十二時、二時——三時（三時間）

火　八　時——十二時（四時間）　金　十時——十二時　（二時間）

水　午後一時——三時（二時間）

時間の組合せは文科一年生全部、英文科一二三年國史科二年獨文科一二年佛文科一年生合併、英文科一二三年生合併、英文科二三年生合併、英文科三年生、英文科を除いた文科一年生全部などであつた。敎科書は學生の希望で文科一年生全體でミルトンを用ひた事一回あつたが、多くはテニソン、ローセッティ等の十九世紀詩人の作を用ひた。英米文學史の講義は年々續いて六年半のうちに內容は變つて居るが二回と少しくりかへした。五時間程の講義は種々の題目に關する物、同じ題目をくりかへした事は殆どなく、每年新しい物であつた。

木曜日には十二時から二時までの休憩時間があつたので、午餐は、初めのうち眞砂町の彌生亭に出かけたが、學生もよく出入したので、その後は上野の森を好んだからそこの精養軒に行つた。夫人と約してこゝで會食し、それから竹の臺の當時の商品陳列館廻りなどもした。日本語で價を聞いたのに英語で答へた女店員に驚いて、そのまゝ買ふのを止めたのもこゝであつた。夫人の外出日は木曜ときめてあつた。

三十年の始め、熊本出身の學生同窓會に招かれて、駒込吉祥寺に赴いて一場の談話をした。

三十年の二月十五日に二男巖誕生。强さうな名前の大山大將の名を取つたのであつた。

三十年の夏、以前西田の紹介で知人となつた濱松中學の教諭田村豐久が舞坂來遊を勸めたので家族同伴で行つて見たが、海の遠淺であるのが氣に入らない。その晩にもそこを去らうとしたのを漸くなだめて一泊し、翌日は停車場毎に下車してなりともよい海水浴場をさがす事にした。翌日濱松に行いて燒津の事を聞いてそこに行つた。海の深くて荒いのが氣に入つた。初め一週間程秋月と云ふ宿屋にゐたが、後同じく田村の下宿の主婦の紹介で、魚屋の山口乙吉の二階を借る事になつた　そこに一週間滯在の間に藤崎八三郎（當時士官候補生）が訪れて來たので歸途一同御殿場に下車し、ヘルンと藤崎とは富士登山した。

三十一年の夏、家族一同及び田村と共に鵠沼に赴いた。一月程の滯在中にマックドーナルドは雨森と共に來遊した。蟹を捉へ貝を拾うて小兒の如く遊んだ。しかし鵠沼は同じく遠淺で氣に入らない。宿屋は東京の客多くて騷々しく、再遊の念は起らなかつた。

三十二年再び燒津に赴き、山口乙吉の二階に入つた。山口乙吉の名は燒津を材料にした諸篇に多く見えて居る　魚屋の兼業に、店には干物ラムネ草鞋までも賣つてゐた。二階と云ふのは、東西の明いた南北の閉ぢた、天井の低い蚤の多い、四疊十疊の二間つづきと廊下をへだてた十二疊との三間であつた。三十三年、三十四年、三十五年、及び三十七年續いて赴いた。三十六年には夫人の產期近づいたので行かなかつただけであつた。ヘルンは暑熱を愛したので燒津は避暑でなくただ游泳のために赴いたのであつた。

燒津はヘルンに取つては松江や、日御崎や隱岐程に好きなところであつた。松江で見た樣な舊日本を再びここで見出したのであつた。『神樣の村です』と口癖のやうに云つた。『燈籠流し』と云ふ物を見たのはここであつた。運のよい事があれば達磨に眼を入れる習慣もここで見た。町では漁師から、田舍では農夫から會釋を受けた。ヘルンは每日長男に敎ふる外一切を忘れて、嬉々として游泳を恣にした。ヘルンの游泳は極めて巧妙であつた。一日に三度は必ず海に入つた。乙吉、草鞋をヘルンにはかせて海岸まで案內した。夜は提

灯を携へて海岸に立ちヘルンの行方を見守り、遥かにシガーの火によつてヘルンの所在を知る事を得た。雨の時でも雷鳴の時でも缺く事はなかつた。雨の時には傘を海岸の砂の中にさしこみ着物をその下に入れて海に飛び込んだ。暴風雨の時には海岸に出て怒濤を飽かず眺めてゐた。夕方、子供と共に『夕燒小燒』を高らかに歌つた。時に近隣の子供を集めて話を聞き、自分もランプを薄暗くして怪談を物語つた。天野甚助の「漂流談」もここで聞いた。夫人は留守中、大掃除、蟲干、疊の表替、障子の張替等、ヘルンの靜思を破るやうな騷がしい、音のする事は皆濟ましてから迎へに行くのをつねとした。ヘルンは游泳、散歩の外の日常の仕事は長男に敎ふる事と、留守中の夫人へ一日一回又は二回手紙を書く事であつた。蹠の足は眞黑になつた。今日は鰹が澤山取れたなどの片かなの繪入りの手紙であつた。

燒津に於けるヘルンの逸事を二三ここに書く。

ヘルンは燒津で餘り立派でない理髪店で髭を剃らせた。剃刀の切れ味がよかつた。そこの砥石を見てこれは絶品だ。これ程のものを有するからは餘程の腕利であらうと云つて書生に自分のナイフを研がせにやつた。紙を切り鉛筆を削つて見て氣に入つた。乙吉に聞いたら、研料は三錢との事であつた。ヘルンは三錢は安過ぎる、五十錢やらうと云つた。書

生は乙吉と相談して二十錢やつた。床屋は勿體ないと云つて受取つたと復命した。ヘルンは書生を叱責して『腕前を尊敬せねばならない、外觀名聲によつて拂ふのでない』と云つて更に三十錢を追加して『君の巧妙なる技倆に報ゆる』と云つて床屋に贈つた。ヘルンが歸京の後、この床屋は禮狀を送つて來た。ヘルンはこの手紙を讀んで、日本の總理大臣の感謝狀を得たよりも有難いと云つて保存してゐた。

兒童を集めて話をさせた或晩の事であつた。一人の子供の話の最中、長男がその話に身が入らなかつたか、側の繪本を取り上げて見てゐた。話が濟んでから、ヘルンは『あの態度は惡い、あなたは無禮致しましたから謝罪をなさい』と云つて、直ちに長男をその子供の宅にやつて謝罪させた。

漂流談の主人公天野甚助は酒屋を營んで、乙吉の家と後ろ合せになつてゐた。ヘルンの滯在中、長男が甚助の混成酒をつくつて居るのを見てヘルンに告げた ヘルンは『あの人もあの時分に死んで居れば、そんな事はせずに濟んだであらう』と不興氣に云つて、それから燒津では餘り日本酒を飮まなかつた。

燒津の海岸に頭と手のとれた地藏があつた。ヘルンはこれを修復しようと思ひ立つて、モデルをさがして近傍の子供の『善作』と云ふのを得て、石工を呼んで着手しようとして、

手紙で一應東京の夫人に相談した。夫人は或老僧にはかつた。子供の追善供養ならば、とにかく、さもなければ緣起が惡からうと云はれて、その通り不賛成の返事をした。ヘルンはその計畫を中止して言分けの手紙を送つた。それには地藏が豆大の涙を落して、立つて居る繪がある。つぎに地藏の獨白（モノローグ）がある。曰く「自分は子供の冥福を祈るために建てられる地藏ではない。浪を鎭め洪水の氾濫を防ぐための地藏である。あの子供の母思ひ遂ひをして、自分の改造の邪魔をしたので悲しい」しかし、あなたの云ふことも至當故、この計畫は止める。御免御免』と云ふのであつた。

毎年八月十二日の祭禮に、山車が乙吉の家の前を通る時、ヘルンは必ず若者を犒うた。この祭禮にはいつも十五圓乃至二十三圓を寄附した。歸る時には年々宿料の二倍乃至三倍を與へて、乙吉の親切に報ゆると、同時に棚の達摩の眼のできるのを見て喜んだ。（『日本雜事』「乙吉の達摩」參照）

それから三十年程の今日の燒津町は當時亂杙の防波堤が今六百餘間のコンクリートの物と變つたやうに變つて居る。しかしこの町の人々は今『贈從四位小泉八雲先生風詠之地』と題する碑をたててこの土地を愛したヘルンを記念して居る。

ヘルンは東京を如何に見てゐたか。三十年八月ヘンドリックに送つた手紙の一部分を譯

出する。

……このいやな東京では、眞の日本らしい印象は中々得られません。君に東京の說明をする事はとても駄目です。一國一縣を說明するよりむつかしいのです。ここに綺麗な、アメリカの郊外とも見える外國の公使館などの立ち列んだところがあるかと思ふと、すぐ近くに數百年もたつた古めかしい支那風の門のある屋敷がある。少し行くと又數哩平方の非常に汚いところがある。それから砂埃になつた數哩の練兵場があつて殺風景な兵營が周圍に聳えて居る。それから大公園があつて墨のやうに黑い影や、不思議に美はしい物がある。それから數平方哩の家並の店がある。これは一年に一度位燒ける。それから又汚いところになる。それから田畠や竹籔がある。それから又町になる。それが皆平坦なのでなく坂だらけ。大うねりにうねつた大都會である。鬱蒼たる傳奇的の靜けさと工場や停車場や混雜の場所と互に入り混つて居る。遠くから見れば大きなハミガキ楊枝を立てた樣な數哩の電柱の行列などは見てもぞつとする。いくら行つても盡きない數哩の水道鐵管は大通りの通行の邪魔をする。すでに七年かかつて、地中に敷設しようとして居るが不正事件やら何やらで中中捗取らない。廣大なる溜池もできて居るが未だ水がない。……雨ふれば市街が溶ける、鐵管が沈む、鐵管敷設の穴が足元の弱い老人を溺らせ、遊んで居る子供を呑込む。蛙が往來で盛んに鳴き合ふと云ふ騷ぎ。こんな無茶苦茶騷ぎの眞中で詩だの未來だの永劫だのと考へる事はむつかしい。詩神は東京で御留守だから海岸へでも行つてさがすつもりです。……（全集第十一卷五六四――五六五）

この時代のヘルンに取つては詩神は燒津の海岸と、瘤寺の森林に於てのみ求められるのであつた。瘤寺の森林はヘルンが朝夕散歩の場所、默想の場所、珍客接待の場所でさへあつた。突然三本の巨大なる老杉が切り倒された。ヘルンは驚き且つ落膽した。事實は瘤寺も財政困難なるが故ならば自分の力の及ぶ限り老樹を保護したいとも云つた。もし寺の押し寄する物質的文明には抗し難く、墓地は移され樹木は切られ、あとは貸地貸家となる第一歩であつた。その後ヘルンの散步は止んだ。引き續く伐木の音を聞いて自分の手足を斬られるやうだと歎じた。

これまで夫人が家を買ふ相談をかける毎に、それでは松江で、隱岐でとばかりで相手にならなかつたが、瘤寺の伐木事件で漸くふさいで引越しを考へてゐた時、偶然西大久保の小學校の隣地に、某子爵の本邸で樹木、草花、竹藪の茂げれる七百坪に近き地所に、五十坪許りの數寄をこらした家の賣物のある事を聞いて遂に買ふ氣になつた。更らに書齋等五十餘坪を新築して、三十五年三月十九日に引き移つたのが今の邸宅であつた。

市中を離れて西大久保に移つてからヘルンが單獨に、或は家族と共によく散步したところは、戸山の原、雜司ヶ谷、高田馬場、目白臺、落合、新井、堀の內であつた。「自分が二十年若かつたら江戸川に望む目白臺に家を作りたい」と述懷した。勿論これは桂川水電

の赤い柱の立たない以前の事であつた。落合火葬場の烟突を望んで『自分もやがてあの中から煙になつて消える』と云つて夫人を氣味惡がらせた。落合橋の手前、江戸川の上流を見下した森林のうちに上戸塚の觀音寺（八十八ヶ所の第八十五番）と云ふ物寂びた寺院がある。大師堂もある。經文を彫刻した小石橋もある。ヘルンは寂寞たるこの寺域を特に愛して寫眞師をつれて長男をこの石橋に立たせてとらせた寫眞もある。境内の一地藏の顏が長男に似て居るといふのでとらせたのもある。新宿二丁目大宗寺の大佛の傘を珍らしがつてとらせたのもある。

三十二年十二月二十日には三男淸、三十六年九月十日には長女壽々子を得た。三十六年三月には大學を止めた。

この時までに大學の講義のために、著述の暇ないとこぼしながら、リッツル。ブラウンから『異國情趣と回顧』『靈の日本』『影』『日本雜事』の四冊、マックミランから『骨董』外に長谷川から四冊の『日本お伽噺』を公けにして居る。さればこの頃のヘルンの刻苦精勵はめざましいものであつた。晩餐の招待に『人生は餘りに短し』と書いて斷つて居るのがある。ヘルンの傳説の一つに『紅葉館（メーブル）クラブで、數多の外人集つて談笑の際、ヘルン突然立つて「自分は急に今後この會に出られない事に思ひ及んだ。自分には時間が何よ

りも貴重だ。なすべき仕事が多い。ここで時間を空費する事はこれからはできない」と云つて果然たる一同を見かへりもしないでさつさと歸つた』と云ふのがある、勿論事實でない。僞筆も眞筆以上の出來榮のがあると云ふが、この作り話もこの時代のヘルンの心理を充分に説明して居る。

二　東京　その二

外山博士と往復の手紙の契約――外山博士――交際嫌ひ――多忙なる大學教授――不安――他の外國敎師との關係――迫害を想ふ――ミサンスロピック――『異國情趣と回顧』――『靈の日本』――『影』――『日本雜事』――『骨董』――『怪談』――『日本お伽噺』――學生への賞品――義務に忠實――長男――賜暇請求――意志疎通せず――解約の通知――留任運動――ヘルン自らの解約に關する說明――ミス・ヒューズ――世界の同情――アメリカ大學の招聘――『神國日本』――『天の河緣起』――早稻田大學――ロンドン大學から招聘――死

これより先き『大西洋評論』に出たヘルンの文章や『知られぬ日本の面影』を讀んで、その流麗な文體、豐富な學殖に深く感じた人は少數ながら日本人のうちにもあつた。神田乃武男もその一人であつた。男の親交ある外山學長に當時東京文科大學の英文學敎授ウッドの滿期の後の候補者としてすすめた。外山學長もこれに同感してチェムバレン名譽敎授

に依賴して遂にヘルンを招聘するに到つた。その第一回の通信はつぎの物であつた。

一八九五年（明治二十八年）十二月六日

チエムバレン教授

少々御願があるのを御聽き下さい。來年九月から大學英文學教授の地位に新しい人が要ります。しかし君も充分御承知の通り、本國から知らない人を迎へる事は甚だ冒險です。推薦狀などはいつもあてになるときまらないから。誰か技倆の充分分つて居る人に來て貰へたら甚だ幸福と感ずる次第です。未だ今の場合に結局幸福と感ずるやうになるかどうか分りませんが、容易に見切らないで、飽くまで御頼みするつもりです。

君は詩人ヘルン氏を勿論御承知の事と存じます。私はこの人の文學上の技倆について隨分よく聞いてゐます。こんな事柄に輕々しく判斷を下して君に笑はれるかも知れませんが、私はこの人こそこの頃の著述の外には何の推薦狀をも要しない人と思ひます。こんな天才が何故かかる世界の邊鄙に止つて居るか分りませんが、それは私のかれこれ云ふべきところではありません。そして私は心ひそかに、この人が長くこの國に止つてくれる事を願つてゐます。さて私の御願と云ふのは、若し君にしてヘルン氏を御承知ならば、この文科大學で英文學を教授して下さるまいか聞いて下さいと云ふ事です。私の聞いて居るところでは、ヘルン氏は非官立學校主義だと云ふ事ですが、もしこの

反感は、何か高い道德上又は政治上の主義に基づいて居るものならば、勿論仕方がありませんが、もしその原因するところは官立中學校からか、又は以前の校長か同僚の個人的缺點から偶發した些細な故障にあるわけならば、大學では萬事もつと好都合であらうと思ひます。勿論ヘルン氏は何人にも拘束されずに獨立であつて宜しく、又學生の如何なるものなるかは、君自ら御承知の通りです。私の最も恐るるところは、ヘルン氏の近頃の著述は西洋の公衆によつて大歡迎を受けたので地位や金錢の考はこの人を誘引する所以になるまいと云ふ事です。しかし私はヘルン氏は不親切な人でないと思ひます、英文學の研究は一日も廢すべからざるのみならず、又よく人を得てそれを教へられる事は、日本文學の將來に於て大影響を有する事を固く信じてこの手紙を差上げる次第です。

君の代理の成功せん事を祈りながら、

君に對して忠實なる、　外山正一

チエムバレンは更らに俸給その他に關し、詳細に尋ねたあとで、ヘルンにこの旨を傳へた。ヘルンはよい校長の下で、氣樂な學校へ行く事なら、月百圓でもよいが、外國語を三つ教科書なしの一週二十七時間、五分間も腰かける暇のない、殊に晝食もできない、不作法な熊本の事を思ひ出すと、一週千圓でも行く氣になれないと書き送つた。チエムバレンから外山學長へ交渉する。外山學長からそんな學校ではないとつぶさに說明する。ヘルン

の方では二人の懇切に感じて、チェムバレンに三つの條件を出して、これでよければ承諾してもよいと云つた。第一は國籍の如何によつて俸給は變らぬ事。第二は一期限の間雇はれる事。第三は助手助教として外の人を入れぬ事。これは勿論有能の人ならば差支はない、とにかく自分の妨害をしたり教師學生間を中傷するつまらなくうるさき人を入れぬ事。この三條件であつた。さらにこの手紙に書き加へて「私は注文通りの事はできるかどうかは覺束ない。學究的方法で英文學を教ふる事はできまい。私は進化論的工夫によつて歷史的感情的に教へる事ならできよう……」終りに、『この事を妻にきかせると、妻は教師にならない迄も東京へは是非行きたいと云つたが、私は東京は嫌ひだから、數年の辛抱の後田舍へ退隱して一生を送りたい。蛙の鳴く水田、晴れ上つた朝の空、霞、野火の香、田圃の歌、笠を被つた農夫、素性が分らぬながらにそれぞれ緣起のある神社の祭禮、小さい店とそこに住んで居る人々の一生、八百屋、飴屋、占師、僧侶、神主、漁師、不思議な話を語る巡禮。これ等は私の愛する美の世界、私の入るべき世界である。……』と云つた。

ここまで話が運んだので、外山博士は初めてヘルンに手紙を送つた。

一八九五年（明治二十八年）十二月十二日、東京文科大學に於て

ラフカディオ・ヘルン殿

昨朝程喜ばしく感じた事は近來ありません。チェムバレン教授は態々君との文通の結果を知らせに御出で下さいました。私はチェムバレン教授の助けをかりた事の無駄でなく、私の同教授に書き送つた事が、目ざす人の注意を惹くに到つた事を甚だ有難く思ひます。私共の友人チェムバレン氏はこの上媒となつては或は誤解の生ずる事を恐れると云ふ事故、失禮ながら私は直接に君に文通致します。私は君に始めて手紙を上げるのですが、さながら舊友にでも文通するやうな感があります。私はこれ迄いつも「大西洋評論」にある君の寄稿を讀んでゐます。「戰爭後」を面白く讀んだのもつい數日前でした。しかし筆を執つて君の如き英文の大家に對して文通する事を思ふと多少臆しないわけに參りません。

御注意の條件について申し上げます。

一、歸化して日本臣民となつたために、俸給に關係すると云ふわけは分りませんが、外人の教授が日本臣民となつた例は全く新しいので、この點に關しては今少し調査を經た後でなければ、何とも申上げかねるが、私共に未だ分らない事はこの點ばかりではありません。とにかくそのやうな點に關して必要なる調査をしてその結果を御知らせ致します。

二、「大學の一期限」と云ふ意味は、私にもチェムバレン氏にも充分分りませんが、氏の考によれば、一學生が君の教授を受ける一定の年數を指すのであらうとの事です。どの意味であらうとも

學校のきまりはかうなつてゐます。卽ち議會の協贊を經た通り、大學は外國人の敎授を來る九月より二年間（より二ケ月を減じて）を一期として英語英文學の講座に聘する事ができます。しかし、これは本國から來る人に取りては餘り短期限なので、學校ではこの期限を今一年增して三年にしようと議會に要求するつもり、議會も異議なからうと考へます。それ故議會が許せば君と約定の期限も御差支なければ、三年に致したいのです。但し議會が萬一承諾しなければ約定の最大期限が一年と十ケ月になります。しかし双方異存なければ（異存はあるまいと思ひますが）初めの契約の終りに又三年契約を延せない理由はありますまい。ただ憲法上の手續きがうるさく加はつて居るだけです。

三、大學では君が……困つたやうな助敎授、助手などで煩はされる事はありません。第一の點に關して調査した結果が、君のために好都合であると分り次第、私は早速私の計畫を實行するに必要なる手續きを致します。三月の終りに豫算の定まり次第、確たる契約を結ぶ事ができる筈です。

幸に我校で、英語英文學の講座を受持つて頂く事になれば、學生は君の薰陶の下に啓發するところ甚だ多からうと信じます。君は謙遜して自分の資格を輕んじて居られるが、君の云はれる通り、英文學は進化論の主義を基として、歷史的に又感情的に敎へられるなら、これに增した敎へ方はあるまいと考へます。

ここに封入した物で英語英文學の外國敎師を雇入れる場合の重なる條件の如何なる物であるか分

ります。

これで凡ての點が明瞭になつたらうと思ひます。敬具

外山正一

それからヘルンの方で承諾の旨を答へたので、外山博士から又つぎの手紙を送つた。

東京、一八九五年（明治二十八年）十二月二十日、

ヘルン様

御存じの通りつまらない事でどうかすると人間は喜んだり悲しんだり致しますが、御手紙の初めの三字を見て私の不安の念がなくなりました。その點について深く謝します。手紙の初めに「殿(サー)」などと始つて居ると兩方の間が妙に遠慮があつて心からの温たさのあるべきところに冷淡な隔てができるやうに思はれます。先達てさし上げた手紙にその冷い形式で始めたとき、私の心が不滿足でした。しかし有難くも君の方からこの忌むべき「殿づけ」を止めてもよい事にして下さいました。

先の手紙に、時間の點について明瞭に書かなかつた事を殘念に思ひます。一日四時間は最大限でせうが、どこの大學教授でも、そんなに働いて貰へるわけは無い。君の場合に於て實際の受持時間は一日に二時間卽ち一週十二時間以上になる事はありますまい。勿論多少の「直し物」もありませう。それは教師に覺悟して貰つてゐます。君の文學上の述作をなさるのに充分の時間があると信じ

ます。又、日本人の性格の研究に關して、一新天地を開くやうな物故大學の人々と親密になつても君の著述も、性質に於て損害を受けるやうな事はあるまいと思はれます。

友人が「東の國から」を一冊進んで貸してくれたので、私は大愉快を以て、數日前に讀み了りました。そのうちには全く人を感動させるところが多くあります。今度の「心」を一部下さるとの御約束は有難く深く御禮申します。私の方ではその代り「新體詩集」を一部謹んで呈上致します。日本語ですから君に面白いかどうか分りません。吹聽のやうで恐れ入りますが、少しこの書物について云はせて下さい。恐らく君は御承知でせうが、日本には歐米にあるやうな本當の或は感情の現れた讀方は講釋師のやうなのを除いては外にありません。私は人の日本文を朗讀するのを聽いて居るといつでも皆必ず變な節で、それを讀み上げるだけです。新體詩でも、感動を與へるやうに讀むために書かれるのではありません。作者自身でも、自分の作つた物を、如何にしてよく讀むべきかなどの考は少しもありません。そこで私はこの事を數年來研究してゐます。この進呈した書中にある私の作は「人生の讃美歌」又は「サー・ムーアの葬式」の作の如く朗讀し、高唱しようと云ふ特別の目的で書いたのです。文體は我流で一風あります。そこで世間や、批評家は全く狼狽して居るやうです。卽ち强い句、その他そんな事に全く無學な人々にとつては、普通の七五調や五七調の作の方が、もつと自然で又もつと上品に見えるからです。ついでに申し上げるが、サー・ヱドウイン・アーノルドの「喇叭手白神源次郎」の詩を御讀みの事と想像します。もし御讀みなら如何御考です

か。私にはあの詩は少し冷かで、充分の情熱がないやうに見えます。サー・エドウィン・アーノルドは冷たいインキで書かないで、燃ゆる血で書いて居るとは思はれません。しかし私は大分生意氣になつたやうです。桂冠詩宗の候補者に對して日本人の癖に、こんな事をならべるのは全く出過ぎた沙汰です。

クリスマスの御祝ひを申し上げてもよいでせうか。

忠實なる

外山正一

記者は不幸にして、外山先生の名高い朗讀は一度も聞く事を得なかつたが、先生の新體詩及び朗讀に對する熱心を知つて居る者は、先生が新來のヘルンに對して、かくまでに胸襟を開いた書簡を讀んで微笑を禁じ得ないであらう。この時の外山學長の手紙は今一通あつたやうだが、ヘルンはこれを西田千太郎に與へたやうである。とにかくこのやうな書簡の往復に基づいて、ヘルンの大學に入る事は決定した。

決定して、愈々手續きをする場合に意外の障害を發見した。當時の規定に『新たに日本人を雇入れる場合には月俸百圓をこゆる事を得ない、但し特別の技能を有する者はこの限

りでない」と云ふ意味の箇條があつた。ヘルンは英人ではあるが日本に歸化して居るので外人に對するやうな契約もできない。日本人同等の取扱もできない。そこで俸給は西洋人竝にして特別待遇を受くる講師となる事になつた。契約年限は外山博士と默約にして、表面は二十九年九月から三十年三月までであつた。翌年からは一年づつの契約で最後まで續いた。かくて一週十二時間の授業を受持つて月俸四百圓と決定した。最後の二年は四百五十圓となつた。

その外ヘルンは、外山博士に高帽や白シャツやフロックコートや燕尾服を着用しない事を要求して外山博士之を許したと云ふ事である。それにも拘らず明治二十九年十二月明治天皇の行幸にはフロックコート高帽（シルクハット）で出て居る。更に驚くべきは三十年の卒業式に列し、同じくフロックコート高帽でヱック教授とリース教授との間に入つて、文科の職員卒業生の寫眞に加はつて居る。

西田千太郎に與へた手紙に左の一節がある。

外山博士は益〻好きになります、珍らしい人です。本當に眞面目な、しかも世慣れた人――非常に親切な、そして非常に率直な人です。皮肉の云へ（ヽヽ）る人で、皮肉などは

中々上手です。外人の教師のうちにはこの皮肉を大分氣味惡がつて居る人もある。私も中々鋭いのを側で聞いた事もある。しかも外山博士は未だ直接に私にはやらない。よく私の性質を理解して居ると見える。英文學者やその價値について中々よく知つて居る――自分の専門の事は殆んど語らない。どうしてあれ程英米文學者を研究する暇があつたものか分らない。私には學生の事について色々注意してくれた。學生の好みや、學生を喜ばす事について。……

外山博士の雅量よく、ヘルンの長所短所を知つて之に接した事が分る。外山博士の諧謔は遠慮會釋なく、縦横に當つたがヘルンだけには向けなかつた事も分る。三十年六月外山氏の學長時代に初めの一年間の報告を送りて、同時に文科大學の英語英文學教授に關する改良意見を提出した物も殘つて居る。

翌三十年十一月に外山學長は大學總長となり、三十一年四月伊藤内閣に入つて文部大臣となつたが、僅かに二ケ月にして伊藤内閣の總辭職と共に辭した。三十三年三月八日歿した。ヘルンが日本に於て葬列に加はつたのは、前後只一回外山博士の葬式の時であつた。「知られぬ日本の面影」のうちに出雲の學生の葬式を詳しく記してあるのはその實、熊本

へ轉任の後の聞き書きであつた。ヘルンの手許に外山博士に關する物が多い。鳥谷部春汀の評論のある雜誌『太陽』も保存してある。如何に故人の紀念を尊重してゐたか分る。

ヘルンが、松江時代熊本時代から神戸時代東京時代にうつるに隨ひ、次第に交際嫌ひになつたのは、寸陰を惜んで刻苦精勵するに到つたのと、今一つはヘルンの氣分が次第にかくの如くならしめたのであつた。

大學でも、松江の籠手田知事、熊本の秋月胤永の如き人を見た。それは云ふまでもなく根本通明翁であつた。しかし今度は進んで話をする程ではなく、ただ相見て目禮微笑するだけであつた。今一人半白の老人があつてヘルンに目禮し、ヘルンもこれに答ふるをつねとしたが、しかし進んで知らうともしなかつたと見えて、この人の名は知らなかつた。

大學もヘルンの思ふやうに暇ではなかつた。一週十二時間土曜日だけを除いて一日二時間乃至三時間の授業があつた。そのうち木曜日の授業は午後に亙つた。教科書を用ふる時間は五時間程であつた、テニスン、ローセッティなどを使用したが、これにも多く詩に關する講義の筆記をさせた。少くとも七時間は講義であつた。年々歲々同じ講義を繰りかへす例もないではないが、ヘルンはそれはできなかつた。絕えず新しい講義をするのには、

その準備に絶えず苦心せねばならなかつた。三十一年三月マックドーナルドに與へた手紙の末に『日本の大學教授なるものの境遇は先づ大概この通り』とある。

一、一週十二時乃至十四時間の講義。

二、一年平均百回の公けの會（懇親會、送迎會等の晩餐會）

三、六十回の私交上の晩餐會。

四、平均三十回乃至五十回の慈善會、音樂會、慈善會でない會、音樂會でない會等からの招待。

五、平均百五十回の午後の社交的訪問。

六、平均三十回の日本出版物に寄稿の要求。

七、平均百回の各方面から金錢寄附の要求。

八、平均一ヶ月四回の演說、講演の要求。

九、平均百回の「何か用のある」學生の訪問――大抵教師の時間を浪費するため。

これて半分程書いたに過ぎない。私はどれにも皆「否」と云ふ。――勿論柔かに、さもなければ、どうして生きて居られよう。まして默想の時間、著述の時間などは到底あるも

のでない。……

ヘルンの大學に對する不安は歷史のリース教授及び經濟のフォックスウエル教授の解雇と外山博士の逝去の頃から始まつて居る。

リース教授の解雇にはヘルンは深く同情をよせたが、仕方がないと思つた。日本人は次第に硏究を積んで一時外人に委ねてあつた學問を又讓り受けるのが至當だと思つた。フォックスウエル教授はヘルンが『英人には珍らしい立派な人——あくまで學問的でしかも同情のある人、面白い友人、博い强い思想家』（全集第十一卷三五〇）と稱讃した人であつた。明治三十二年十月にこの人の歸國の時に與へた手紙に『今後、再び君に、休憩時間の退屈を紛らして貰へない事を殘念に思ふ。しかし、私自身の解職の日も甚だ遠からう筈はないと思ふ』（全集第十一卷三六八）と云つたのは、必ずしも人を慰めんがための云ひ草ばかりでなかつた。每月三月の末に契約の新たにせられる時夫人に辭令を渡しながら『又もう一年だけ居る事にしました』と云ふを常とした。

記者は明治二十九年、ヘルンの招聘せられると共に入學して三十二年に出たが、ヘルンの大學の構內を散步するのを見た。蒲公英(タンポポ)を摘んで來てテニスンの或比喩を說明した事も

あつた。同時にいつも教官室に出入するのをも見た。當時の外國教師エック、ケーベル、フローレンツ、リースの諸氏と親しく話して居るのをも見た。然るに三十三年に入學して三十六年の春、ヘルンの解職當時なほ在學中であつた落合貞三郎その他の人々は、ヘルンの教官室に出入したのを目撃した事を覺えないとの事である。教官室に入らない人は外にもあつたが、ヘルンの如く入らない事を通則とした人はなかつた。ヘルンは車から下りて風呂敷包みを携へて直ちに教室に入つた。休憩時間には構内の池の周りを散歩し、池畔に休んで煙管で煙草を吸つた。雨天の時にはその儘教室に休息するか或は廊下を往來するだけであつた。

フォックスウエルも去りリースも解雇されたが、外山博士のある間はまだ心丈夫であつた。その通り契約は一年毎に繼續された。そのうち三十三年の春外山博士は逝いた。急に頼りなく感じた。これまでも交際嫌ひなヘルンは學校では孤立であつた。他の外國教師は何れも大學出身の長々しき學位を有せる人々であつた。ヘンドリックに與へて『今、文科大學に居る人々は哲學の教授(ハイデルベルヒ)サンスクリット及び言語學の教授(ライプチッヒ)佛文學教授(リオン)それから——どこの馬の骨だか分らない英文學の教授』(全集第十一卷五三九)であるとヘルンは云つた。偶然にも又當時の文科大學に於ける外國教

師は、悉くヘルンの讐敵ローマ舊教で養成された人々であつた。エック教授はその派の僧侶、ヘルンが中頃親しくなつた事はあるが、初めから恐れた人であつた。哲學のケーベル教授は仙骨を帯びた先生ではあるが、時に怪氣焔を吐いて人を驚かす事がある。ヘルンに向つて「異教信者は皆靈魂を救ふが爲めに、燒き殺すべきである。又全世界はローマ舊教の支配を受けるやうになるがよい」」（全集第十一卷五四五――五四六）と放言してヘルンを驚かした。ヘルンの次第に疑心暗鬼を生じて教官室に入らなくなつたのは「飴屋、八百屋、占師、巡禮の世界こそ自分の世界である」と云つた理由の外にヘルンに取つて相當の理由があつたからではあるまいか。ヘンドリックに與へた手紙のうちに「それから、段々淋しくなる。それから私が通るといつも大きな音をさせて地に唾を吐くのをきまりとして居る人々があるこの惡戲は日本人も上手だから西洋人に限つて居るわけではない。しかし、今云つたのはハイデルベルヒ出身の博士だちの行儀です。しかしそんな事はどうでもよい。……』（全集第十一卷五五四）この手紙は明治三十年五月の物である。その當時すでにこの疑心があつた。

家族にはいつも快活な方面を見せ、少しも憂愁の色を示さなかつたヘルンも、いつの頃よりか、夫人に向つて「耶蘇教徒は同盟して、私を大學から逐ひ出さうとして居る」と語

るやうになつた。
ヘルンの基督教徒から迫害を受けて居ると自ら信じて居るのは古い事である。熊本時代に（明治二十六年二月）ヘンドリックに與へた手紙にも「……つまらない小さい自分だがあらゆる基督教徒の注意人物である。生意氣だなどと考へてはいけない。注意されるのはえらい者に限る事はない。正業に歸らうとする醜業婦や、職業を求めようとする前科者と同じである。これ等は少しもえらい事はない。私に何かよい職業でもあつたら、必ず無信者、不名譽な元通信員は文學を教へると云ふ口實の下に青年を腐敗させると云ふ反對の聲が上るであらう。……フィスクが云つた通り、今日は異教徒を燒き殺しはしないが、その代りその名譽を害し流言を放つて餓死させようと同盟する。……私は何か貴い目的のために殉難者を氣取るつもりはない。私はそんな者ではない。要するに私は不評判な人間だ。それから薄弱だから、婦人の力で幾分辯解して貰へると云ふ御蔭などは全くあらう筈がない。――それから、私は横着で出しやばりでないから、私の力で得られる物も長くもつて居られない。白髪まじりになつたこの年になつてから漸く分つて來た。それから獨立のできる見込もなく、報酬のよい地位を得る見込もないから、文學の方面で最善をつくす事も先づできさうにない。やりたい旅行をやる暇もなく金もなく機會もないから。……」（全集

大學に入つた翌々年、一八九八年（三十一年）十月、マックドーナルドに與へた手紙に「私を壓迫する物この迫害感は更に大きくなつて居る。その大意はつぎの通りであつた　「私を壓迫する物は社會と教會と英米の批評界の三つである。第一の社會は或種類の人に壓迫を加へて餓死させる。私もその種類の一人である。第二に私は教會の壓迫を受けて居る。教會と云つてもローマ、ギリシャ、英國教會等と云ふのではない。凡ての宣教師を支へて凡ての自由思想を排する耶蘇教全體を云ふのである。宗教家の方から私の著書について時々親切な手紙を送るからと云つて、欺かれてはならない。その手紙は心からの物であらうが、しかし教會の大勢力に對しては何の力もない。ハックスレー博士も云つた通り「それと戰つて見た上でなければ迷信の力の如何に強き物なるかは分らない」（このハックスレーの言葉は手紙のうち講義のうち幾度か引用された）實際社會と教會と聯合すれば中々、力のある事は君も認めるであらう。第三に批評界が私を壓迫して居る。著書の評判のよい事はあてにならない。新聞雜誌の上で、書物を賞讃するのは廣告を寄せ集める手段に過ぎない。人間が少しでも變つた事を書いて注意を引けば、必ず壓迫を受ける物である。ただ精神肉體共に强ければこれに打ち勝つ事ができるが、私のやうな弱い者には駄目だ。自惚と思ひ給ふな。かくなるのは

つまらない人もえらい人も皆同じてす。社會、教會、批評界の三つては、壓迫も頗る大きいと云はねばならない。日本に來て私に會ふ事を求むるのは同情からのためてはない。六本足の牛を見に來る好奇心の類て、あてにはならない。この壓迫に對して、私の持つて居る味方は、君と日本政府ばかりである。日本政府は私の著書が日本に多少の利益をなして居る事をうすうすは知つて居る。……」（全集第十一卷四六三―四六五）

ヘルンが一八九四年（明治二十七年）十二月、神戸からヘンドリック氏に與へた手紙に次第に人間嫌ひになつた事を自白して居る。『先日の御手紙て外界に對する君の精神上の變化の事を承つた。私の場合ては、この變化は悪い方てす。私は人間に對して、昔のやうに感ずる事ができなくなつた。少し人間嫌ひ(ミサンスロピック)になつたやうてす。人と人との關係の眞相は要するに皆利己主義から來て居るやうに見える。その强さはただ勢力、地位、年齢等によるに過ぎない。この關係のうちに興味のあると思ふのは皆迷ひだと思はれる。一般に男は外の男に已れの本心を示さない。示すとすれば女にだけ示す。それもその女が外へ洩らさないと信じて居る場合だけ。勿論女の方ても洩さない、そこは神樣が番をして居る。女も他の女に本心を見せない、男にだけ見せる。女の見せる魂は男は外に洩らす事はてきない。男は如何に野蠻ても女の美醜を云ふ事しかてきない。女の心中は少し分つても言葉ては云

へない。要するに皆敵同志の假面舞踏會だ。……』（全集第十一卷二八四―二八五）

教官室にも入らない事として居る程だから教師とは交際しない。自らは基督教徒の壓迫を蒙り、他人からは疎外されて居ると信じてゐた。會合には多く出ない。さきに云つた通り三十年の卒業式には列席して文科の卒業生の寫眞に加はつたのが初めの終りであつた。三十一年には文科の卒業生て寫眞をとる計畫もなかつた。三十二年頃からは小泉先生は學生の會へは呼んでも來てくれぬといつかきまつてしまつた。同時に著書は驚く可き精力をもつて出された。一年一册の平均で出た。生々活氣に滿ちた松江時代の『日本の面影』から熊本時代の『東の國から』神戸時代の『心』及び『佛の畠の落穗』と次第に客觀的叙事より、主觀的抒情になつたが、東京時代の『異國情趣と回顧』『靈の日本』『影』『日本雜事』『骨董』『怪談』と次第に默想、憂愁、沈鬱、凄慘の氣に滿ちて來た。殊に最後の『骨董』『怪談』の二書に到つてその頂上に達した。

同時に又、學生に對する講義は益々興味を加へて來た。三十一年の春には英文科一二三年生その他に對して懸賞論文を課してハウソーン全集、ポーの全集等合せて五六部を分つた。この年は學生を一堂に集めて悉くその文を批評して後に丁寧に奉書に包んで水引とのしをかけ次賞品を手づから授けた。次回三十二年からは英文科三年生に卒業論文として懸

賞した。銘々の賞品に手紙を添へて宿所へ届けさせた。或ところでは本人の留守に代りに出て受取つた未亡人の母は涙を浮べて禮を云つた。大學の寄宿舍で受取た一學生は躍り上つて『萬歲』を叫んだ。こんな復命を車夫から受けてヘルンは喜んだ。三年生僅かに三人の時に賞品を一つだけ（ウエブスター大辭典）出した事もあるが、多くは三つ以上出した。一等五十圓、二等三十圓として禮袋にそれだけの額を十圓金貨で入れて與へた年も一度あつた。勿論ヘルンの自費であつた。これ等の事はヘルンの大學を去るまで五年間引つづいたが、當時大學の當局者は毫も知らなかつた。即ちヘルンは會議室や教官室の『英雄』で無く、ただ學生に對して職責をつくせば足ると信じて居る『先生』であつた。人に面會しないのを通則としてゐたが學生にだけはとにかく面會した。一度面會を斷つて後、學生と氣がついてあとを追ひかけさせて會つた事もあつた。學校は殆ど休まなかつた。記者は二十九年より三十二年までの三年間にただ一回、三四日引つづいて小泉講師の休講のあつた事を記憶して居る。

かくの如くしして五年を經過して三十五年の秋となつた。その間に二十六年生れの長男はすでに學齡に達してゐた。次男以下は日本人として教育するつもりであるが、長男だけ

には英語の教育を施さうとは年來の願望であつた。日本の小學校へ入れないで、夫人と共に、一日に二時間乃至三時間は必ず教へた。時計の數へ方を教へた時の畫も殘つて居る。キングスレーの『三人の漁夫』の詩を教へた時の畫も殘つて居る。元日と雖も廢さなかつた。しかし到底これで滿足はできなかつた。自分で連れて行つて、どこかの學校へ落ちつくまで見屆ける事を考へた。英國の小學校は餘りに亂暴だからアメリカ東部へ行かうと決心した。アメリカの友人に手紙を出して、職を求むる事を依賴した。

　同時に大學に向つて賜暇を請求した。外國教師は六年も勤續すれば一年程の休暇を得て歸省する事ができるとヘルンは考へた。ヘルンをしてかく考へさせるに到つた先例はあつた。文科の教師にはその例はなかつたとも云はれる。この邊は御雇教師と當局者との間によくある樣に、事情が十分疏通してゐなかつた事を示して居る。双方の意志疏通を缺いたため、つまらぬ原因のために憤然として止めた幾人かの例があつたと云はれて居る。ヘルンにして若し歸化人でないとしても、この請求は容れられたかどうかは疑はしい。歸化人なるがために日本人竝以上の給料で就職する事さへ外山學長の時代でも中々面倒であつた程であるから、この請求は容れられなかつた。ヘルンは怒つた。ウエットモーア夫人への手紙（全集第十一卷六二一）に『日本政府に五千六百圓の信義的貸金がある』と云つたのは卽

ちこの事である。
ヘルンが大學を去る當時、卽ち三十五年の暮から三十六年の初めの有樣はかくの如き危機一髮の時であつた。大學から斷られなかつたら何かの機會を見つけてヘルンは必ず自ら去つたであらう。當時大學に入る內定で外國に留學してゐた新進の人は幾人かあつた。それ等の人々が入る事に關して財政の問題があつた。何人か解職される餘儀なき事情があつた。當時敎師間に最も折合の惡い、學生の評判のよいか惡いか分らない、沒常識なヘルンを識るのが最も自然らしく當時の當局者に考へられた。（外に文學者としてはえらいか知らぬが敎師としてはどうだかと考へた人もあつたらしい。否文學者としても蟬や蟻の話が多くてつまらないと思つた人もあつたかも知れない）卽ち一九〇三年（明治三十六年）一月十五日附で文科大學長井上博士の名、松永書記の手で「明治三十六年三月三十一日限りて終る約定をつづける事は、目下の事情不可能なる事を遺憾ながら豫め通知し置く事の必要」なる旨を三行半ばかりで書いた一片の通知が、郵便で行つた。ヘルンと文科大學との關係はかくの如く簡單に終つたのであつた。

　それから二月の末になつてこの事を知つた學生は騷ぎ出した。總代を選んで留任運動をした。新聞も同情した。當時の總代は三年生、安藤勝一郎、石川林四郎、落合貞三郎の三

人であつた。落合の當時の日記にはつぎのやうに出て居る。

二月二日、月曜、午前十時より二時間連續英文學史の講義は小泉先生によつて授けられる、時間終りて一同留まり小泉先生留任問題について相談せり。その結果總代として我等三人が次の日曜日に先生を訪問するに決定。……

三月八日、日曜、英文科總代、石川、安藤二氏と共に大久保村に小泉先生を訪ふ、先生の留任を請はん爲めなり。新宿停車場の茶店に會合す、先生は近來、面會を斷り居らるるを强ひて謁を賜りぬ、好都合なりき。……和服にて恭謙の態度にて我等を迎へらる。來意を告げしに先生は奥に入りてかの大學よりの解約通知狀を持ち出でて生等に見せられる。生等が何卒御留任ありたしと申し上げしに對して先生はこれまで大學當局の與へし屈辱を憤慨的に語られ、生等の來訪に對しては大いに喜ばれて好意を謝せらる。最後に十一時半頃辭し出でし時には、自ら玄關に送り出でられ、我等が門を出づるまで、坐したるまま後より見送り居られし樣子は、石川君をして大いに感激の念を起こさしめて、宛然昔の儒者の先生又は俳句の宗匠の樣だな――と云はしむ。……

この總代の報告と更に改めて相談の會合は、その週の土曜の夜、本郷臺町三〇大學基督教靑年會を借りて開かれた。その時の樣子は「帝國文學、小泉八雲號」に小山內薰の筆で

「留任」と題した物に出て居る。

ヘルンがそれ程學生の欽慕を受けて居る事を知らなかつた當局者には意外であつた。文人ヘルンは教師としても深い感化力を有せる事を發見した。それからヘルンを學長室へ呼んだが來ない。學長自ら西大久保の邸を訪うてこれまでの時間と俸給を半減して留任を請ひ、學生の熱心をも無にせず學校の都合をつけようとした。梅博士も來た。これまで收入の見込のない時でも、書肆との契約を破棄する事を顧みなかつた直情徑行（イムパルシーヴ）、利害損得の打算をしないヘルンはこの井上學長等の懇願に應じなかつたのは當然であつた。かくの如くにして文科大學との關係は絶えたのであつた。

學校の事がこのやうになつたが、ヘルンに取つては事頗る不思議であつた。學長井上博士は基督教の攻撃者、東洋哲學及び佛教の教授なるがために、ヘルンの好きな一人であつた。（全集第十一卷五四一）「私が間接に日本に盡したところは少くない。英米の日本に對する同情は私の筆に負ふところ頗る多い。それを知つて居る日本政府が私を虐待する道理はない」しかし、外人の說に隨つて日本の美風良習を破壞して顧みない日本政府である。今度の事も必ず基督教徒の迫害が原因である」とヘルンは考へた。これより先き、英國の女子教育家ミス・ヒユーズ女史（ウヱールスの人）が來て日本の教育を視察したが、ヘルン

の名聲を慕うて安井哲子女史を案內とし文科大學に赴きその講義をきいた。ツーズツース の講義最中であつた。但し、ヘルンには無斷であつて、ヘルンが講義を終つて教場を出る時に突然黑衣の婦人に握手を求められて驚いた。それから女史は交際を求めてヘルンを訪れた、ヘルンは面會した。その返禮としてヘルン夫人を目白の日本女子大學で催した茶話會に招いた。ただそれだけであつたが、その事が偶然解職の前であつたので、ヘルンは思ひ合せてこのヒユーズ女史こそ探偵(スパイ)となつて自分の講義をきき、日本政府に自分を讒したのであると信ずるやうになつた。當時留任運動の委員、安藤、石川、落合の三人にも、ヘルンは、或婦人の爲めに讒せられてかくなつたと云ふ意味の述懷をした。マックドーナルドにもかくの如く語つたのでそれを傳へてビスランド女史はその傳記にかくの如く記して居る。フォックスウヰルはヘルンよりかくの如く聞いたので、かくの如くロンドンで演說した。ヒユーズ女史こそとんだ濡衣を着たわけであつたが、日本人を怨むよりはむしろ飽くまで西洋人、基督教徒に罪を着せたヘルンの心事に、比喩は全く違ふが一讀みする子を怨まないて縄取る人を怨む」と云ふ文句を想ひ起させるところがある。

ミス。ヒユーズはロンドンに於てヘルンが東京大學から解約された事及びその原因は女史がヘルンの講義について日本文部省當局者に批評したためであるとの噂を聞いて驚いた

と云つて、その妄を辨じた手紙をヘルンに送つて居る。そのうちに『女史は批評どころか深く感じた次第である事、大學以外に外人集つてヘルンの講義を聽かうと計つた事、女史が萬一批評したところで日本にある數多の愛讀者を動かす事のできぬ事、女史もヘルンと同じケルト人である、同情こそあれ、反感のある筈のなき事』等を縷々として述べて居る。この手紙を受取つたのは三十六年の秋であつた。ヘルンの意果して解けたかどうかは遂に分らない。

　アメリカで一二年どこかの大學で講義する地位の急にできなかつた時もこれ又基督教徒の同盟がその手をアメリカまで延ばして自分を排斥するのだと考へた。（全集第十一卷六一六）

　ヘルンが大學を止めた時、世界の同情がヘルンに集つて日本政府のヘルンに厚からざるを非難した。「國家的忘恩」と題して二欄を埋めて日本政府を攻撃したフランスの新聞 Aurore（アウロア） もあつた。翌三十七年ヘルンが逝いた時も政府から何の沙汰もなかつたので、チエムバレンも日本政府は時局の爲めに大恩人を忘れて居ると公言した。只教師としても、ヘルンは官立學校に滿十一年勤めたのであつた。

　それからカーネル大學から一期五千圓の報酬で講演を依頼して來た。その上スタンフォ

ード大學からも往復の何れかで講演を依頼して來た時、カーネル大學の方でチフス流行のため暫らく見合せたいと云つて來た。アメリカの友人が盡力して外に地位を見出さうとして居る時、ヘルンは珍らしく病氣にかかつた。氣管を痛めて少しく吐血した。病癒えて後渡米の事は一時見合せて講演の材料を著書にする事にした。ヘルンの日本に關する卒業論文とも云ふべき『神國日本』がそれであつた。家族制度、祖先教等の日本固有の國道を論じた物に始まつて佛教儒教の傳來から基督教の渡來に及び、日本の精神界の歴史を叙說して日本の將來に論及した物であつた。ヘルンは少からざる精力をつくした。既に草稿を送り校正を終り最後の校正を是認して打電したのは終焉の前數日であつた。『怪談』『天の河緣起』の大部分、何れも大學を出た後、一年餘の短日月間の苦心の作であつた。

『神國日本』の終つた頃早稻田大學から招聘された。梅博士が高田學長へ推薦したのであつた。その使命を帶びてヘルンを訪うたのは內ケ崎作三郎であつた。三十七年四月から出て一週四時間を受持つた。年二千圓の報酬であつた、時間の割合では東京帝國大學の待遇よりも優れてゐた。

早稻田ではヘルンは再び松江時代に歸つたやうであつた。日本服の教師が多いと云つては喜び、高田學長の風采が故西田千太郎に似て居ると云つては喜んだ。高田博士に招かれ

てその邸宅に赴いた時夫人が迎へて『ようこそいらしやいました』と日本語で挨拶されたのを喜んで、歸つて玄關に立つたまま珍らしい事があつたと云つて夫人にその話をした。久しぶりでフロックコートを着て、講師の懇親會に出て寫眞にも加はつた。教官室の隅に小さくなりながらではあるが誰かれと話しをした。『十三年間、そのために一切の物を犧牲にした養ひ國から、半白になつて追放されては如何ともする事はできない』(全集第十一卷六一五)と云つたヘルンの苦い感情も幾分慰められた。蓋し早稻田には逆境を經て來た苦勞人が割合に多かつた。學生となつては忽ち特待生、卒業して忽ちに留學、忽ちにして學位を得たやうな順境に立つた人の事を、ヘルンは色美はしくて香の少い熱帶の果物に、それと反對の人を色よりも香の高い北方の果物にたとへて居る。ゲーテの所謂『涙と共にパンを食した』人は割合にここに多い事をヘルンは見たであらうか。果して然らばヘルンは自分の世界はここにあると思つたであらう。

二男は三十六年四月から大久保小學校へ出した。長男は外國行を斷念してのち、三十七年四月から上級へ編入學させた。長男及び二男が世話になると云ふので請はれるままに大久保小學校の父兄會に出席して田村豐久の通譯で一場の談話をしたのは三十七年三月であつた。

三十七年九月十九日に心臟が痛んで一時は驚いたが間もなく恢復した。その月の下旬にロンドン大學から講演を依頼して來た。オックスフォードからも依頼して來る筈だと附記してあつた。十四年前ヘルンの日本行を助けたカナダ太平洋鐵道汽船會社から優待券を送つて來た。未だそれについて考ふる暇もなくて二十六日になつた。松江時代の學生、當時の滿洲軍總司令部附藤崎（小豆澤事）大尉に慰問として送る書籍をあれやこれやとさがしなどして最後に手紙を書いたのが絕筆であつた。いつも變らず晚餐の後、子供と戲れなどして書齋に退いたが、それから少し氣分が惡くなつて、そのまま狹心症をもつて逝いた。五十五歲であつた。九月三十日、佛式をもつて瘤寺に葬り、墓は雜司ヶ谷共同墓地に建てられた。法名は『正覺院淨華八雲居士』であつた。

この年（一九〇四年）英國はエドウィン・アーノルドと畫家フレデリック・ワッツを失ひ、ロシヤはアントン・チエホフと畫家ヴエレスチヤギンを失ひ、アウストリアはエミール・フランツォスを失ひ、ハンガリーはモール・ヨーカイを失ひ、日本はラフカデイオ・ヘルンを失つた。このうちチエコフを除いて、ヘルンは最も年少であつた。この點から見ても、日本の損失は最大であつた。

ヘルンの逝いた時は日露戰爭の最中であつた。ヘルンはこの年の八月一日の日附て、國運を賭してのこの大戰爭中の日本人の冷靜にして健氣な態度を述べた手紙に擬して「日本からの手紙」と題する長篇を明治三十七年十一月の『大西洋評論』に發表した。その最後に『……日本は頻繁なる天變地異の國、地震海嘯洪水火災の土地である。これ等の災害はこの國民を鍛へて不幸と困厄に對する驚くべき忍耐心を養成して來た。これまで日本を最もよく知つて居る外國人でも日本の底力はよく分つてゐない。攻撃に反抗する力よりも攻撃を耐へ忍ぶ力が遙かに勝つて居るのかも知れない』（全集第七卷五〇七）と結んだ一節の如きは當時の世界の新聞に轉載された物であつた。しかもヘルンはこの戰爭の終末を見ないて逝いた。

それから十一年の後大正四年、大正天皇が卽位の大禮をあげさせられた時ヘルンは從四位を贈られた。文人としてのヘルンの功勞は日本政府によつてこの時始めて正式に認められたのであつた。

一二　思ひ出の記

小泉節子

ヘルンが日本に參りましたのは、明治二十三年の春でございました。ついて間もなく會社との關係を絶つたのですから、遠い外國で便り少い獨りぼつちとなつて一時は隨分困つたらうと思はれます。出雲の學校へ赴任する事になりましたのは、出雲が日本で極古い國で、色々神代の面影が殘つて居るだらうと考へて、邊鄙で不便なのをも心にかけず、俸給も獨り身の事であるから澤山は要らないから、赴任したやうでした。

伯耆の下市に泊つて、その夜盆踊を見て大層面白かつたと云ひますから、米子から船で中海を通り松江の大橋の河岸につきましたのは八月の下旬でございます。その頃東京から岡山邊までは汽車がありましたが、それからさきは米子まで山また山で、泊る宿屋も實に

あはれなものです。村から村て、松江に參りますと、いきなり綺麗な市街となりますので、旅人には皆眼のさめるやうに驚かれるのです。大橋の上に上ると東には土地の人の出雲富士と申します伯耆の大山が、遙かに富士山のやうな姿をして聳えて居ります。大橋川がゆるゆるその方向へ流れて參ります。西の方は湖水と天とぴつたり溶けあつて、靜かな波の上に白帆が往來してゐます。小さい島があつてそこには辨天樣の祠があつて松が五六本はえてゐます。ヘルンには先づこの景色が氣に入つたらうと思はれます。

　松江の人口は四萬程ございました、秀康公の血を引いた直政といふ方が參られまして、その何代か後に不昧公と申す殿樣がありましたが、そのために家中の好みが邊鄙に似合はず、風流になつたと申します

　學校は中學と師範の兩方を兼ねてゐました。中學の教頭の西田と申す方に大層御世話になりました。二人は互に好き合つて非常に親密になりました。ヘルンは西田さんを全く信用してほめてゐました。「利口と、親切と、よく事を知る、少しも卑怯者の心ありません、私の悪い事、皆云うてくれます、本當の男の心、お世辭ありません、と可愛らしいの男です」お氣の毒な事にはこの方は御病身で始終苦しんでいらつしやいました。「唯あの病氣、如何に神樣悪いですね——私立腹」などと云つてゐました。又「あのやうな善い人です、

あのやうな病氣參ります、ですから世界むごいです、なぜ惡き人に惡き病氣參りません」東京に參りましても、この方の病氣を大層氣にしてゐました。西田さんは、明治三十年三月十五日に亡くなられました。亡くなつた後までも「今日途中で、西田さんの後姿見ました、私の車急がせました、あの人、西田さんそつくりでした」などと話した事があります。似てゐたのでなつかしかつたと云つてゐました。早稻田大學に參りました時、高田さんが、どこか西田さんに似て居ると云つて、大層喜んでゐました。

この時の知事は籠手田さんでした。熱心な國粹保存家と云ふ事でした　ゆつたりした御大名のやうな方で、擊劍が御上手でした。この時には色々と武士道の嗜みとも申すべき物が復興されまして、擊劍とか鎗とかの仕合だの、昔風の競馬だの行はれまして、士族の老人などは昔を思ひ出すと云つて、喜んでゐました。この籠手田さんからも、大層優待されまして、凡てこんな會へは第一に招待されました。

ヘルンは見る物聞く物凡て新らしい事ばかりですから、一々深く興に入りまして、何でも書き留めて置くのが、樂しみでした。中學でも師範でも、生徒さんや職員方から、好かれますし、土地の新聞もヘルンの話などを掲げて賞讚しますし、土地の人々は良い教師を得たと云ふので喜びました。「ヘルンさんはこんな邊鄙に來るやうな人でないさうな」な

どと中々評判がよかつたのです。
しかし、ヘルンは邊部なところ程好きであつたのです。東京よりも松江がよかつたのです。日光よりも隱岐がよかつたのです。日光は見なかつたやうです、松江に參りましてからは行つた事がございませんから。日光は見たくないと云つてゐました。しかし、行つて見ればとにかくあの大きい杉の並木や森だけは氣に入つたらうと思はれます。
私の參りました頃には、一脚のテーブルと一個の椅子と、少しの書物と、一着の洋服と、一かさねの日本服位の物しかございませんでした。
學校から歸ると直に日本服に着換へ、座蒲團に坐つて煙草を吸ひました。食事は日本料理で、日本人のやうに箸で喰べてゐました。何事も日本風を好みまして、萬事日本風に日本風にと近づいて參りました。西洋風は嫌ひでした。西洋風となるとさも賤しんだやうに「日本に、こんなに美しい心あります、なぜ、西洋の眞似をしますか」と云ふ調子でした。これは面白い、美しいとなると、もう夢中になるのでございます。
松江では宴會の席にも度々出ましたし、自宅にも折々學校の先生方を三四名も招きまして、御馳走をして、色々昔話や、流行歌を聞いて興じてゐました。日本服を好きまして、羽織袴で年始の禮に廻り、知事の宅で昔風の式で禮を受けて喜んだ事もございました。

松江に參りまして、當分材木町の宿屋に泊りました。しかし、暫らくで急いで他に轉居する事になりました。事情は外にもあつたでせうが、重なる原因は、宿の小さい娘が眼病を煩つてゐましたのを氣の毒に思うて、早く病院に入れて治療するやうにと親に頼みましたが、宿の主人は唯はいはいとばかり云つて延引してゐましたので『珍らしい不人情者、親の心ありません』と云つて、大層怒つてそこを出たのでした。それから末次本町と申すところの或物もちの離れ座敷に移りました。しかし『娘少しの罪ありません、唯氣の毒です』と云つて、自分で醫者にかけて、全快させてやりました。自分があの通り眼が惡かつたものですから、眼は大層大切に致しまして、長男の生れる時でも『よい眼をもつてこの世に來て下さい』と云つて大心配でした。眼の惡い人にひどく同情致しました。宅の書生さんが書物や新聞を下に置いて俯して讀んでゐましても直ぐ『手に持つてお讀みなさい』と申しました

この材木町の宿屋を出ましてから末次に移りまして、私が參りまして間のない事でございました。ヘルンの一國な氣性で困つた事がございました。隣家へ越して來た人が訪ねて參りました。その人はヘルンが材木町の宿屋に居た頃やはりその宿にゐた人で、隣り同志になつた挨拶かたがた「キユルク拔き」を借りに見えたのでした。挨拶がすんでから、へ

ルンは『あなたは材木町の宿屋にゐたと申しましたね』と云ひますとその人は『はい』と答へました。ヘルンは又『それではあの宿屋の主人の御友達ですか』と申しましたら、その人は又何心なく『はい、友達です』と答へますと、ヘルンは『あの珍らしい不人情者の友達、私は好みません。さやうなら、さやうなら』と申しまして奥に入つてしまひます。その人は何の事やら少しも分らず、困つてゐましたので、私が間へ入つてなんとか言譯致しましたが、その時は隨分困りました。

この末次の離れ座敷は、湖に臨んでゐましたので、湖上の眺望が殊に美しくて氣に入りました。

しかし私と一緒になりましたので、ここでは不便が多いと云ふので、二十四年の夏の初めに、北堀と申す處の士族屋敷に移りまして一家を持ちました。

私共と女中と小猫とで引越しました。この小猫はその年の春未だ寒さの身にしむ頃の事でした、或夕方、私が軒端に立つて、湖の夕方の景色を眺めてゐますと、直ぐ下の渚で四五人のいたづら子供が、小さい猫の兒を水に沈めては上げ、上げては沈めして苛めて居るのです。私は子供達に、御詫をして宅につれて歸りまして、その話を致しますと『おゝ可哀相の小猫むごい子供ですね――』と云ひながら、そのびつしより濡れてぶるぶるふるへ

て居るのを、そのまゝ自分の懐に入れて暖めてやるのてす。その時私は大層感心致しました。

北堀の屋敷に移りましてからは、湖の好い眺望はありませんてしたが、市街の騒々しいのを離れ、門の前には川が流れて、その向う岸の森の間から、御城の天主閣の頂上が少し見えます。屋敷は前と違ひ、士族屋敷てすから上品て、玄關から部屋部屋の具合がよくてきてゐました。山を背にして、庭があります、この庭が大層氣に入りまして、浴衣て庭下駄て散歩して、喜んてゐました。山で鳴く山鳩や、日暮れ方にのそりのそりと出てくる蟇がよい御友達てした。テテポッポ、カカポッポと山鳩が鳴くと松江ては申します、その山鳩が鳴くと大喜びて私を呼んて「あの聲聞きますか、面白いてすね」自分でも、テテポッポ、カカポッポと眞似して、これてよいかなどと申しました。蓮池がありまして、そこへ蛇がよく出ました。『蛇はこちらに悪意がなければ決して悪い事はしない』と申しまして、自分の御膳の物を分けて「あの蛙取らぬため、これを御馳走します』などと云ってやりました。「西印度にゐます時、勉强して居るとよく蛇が出て、右の手から左の手の方に肩を通って行くのてす。それても知らぬ風をして勉强して居るのてす。少しも害を致しませんてした。悪い物てはない』と云ってゐました。

私が申しますのは、少し變でございますが、ヘルンは極正直者でした。微塵も惡い心のない人でした。女よりも優しい親切なところがありました。ただ幼少の時から世の惡者共に苛められて泣いて參りましたから、一國者で感情の鋭敏な事は驚く程でした。

伯耆の國に旅しました時、東鄕の池と云ふ溫泉場で、先づ一週間滯留の豫定でそこの宿屋へ參りますと、大勢の人が酒を飮んで騷いで遊んでゐました。それを見ると、直ぐ私の袂を引いて『駄目です、地獄です、一秒でさへもいけません』と申しまして、宿の者共が『よくいらつしやいました、さあこちらへ』と案內するのに『好みません』と云ふので直にそこを去りました。宿屋も、車夫も驚いて居るのです。それはガヤガヤと騷がしい俗な宿屋で、私も厭だと思ひましたが、ヘルンは地獄だと申すのです。嫌ひとなると少しも我慢致しません。私は未だ年も若い頃ではあり、世馴れませんでしたから、この一國には每度弱りましたが、これはヘルンの極まじりけのないよいところであつたと思ひます。

その頃の事です、出雲の加賀浦の潛戶に參りました時です。潛戶は浦から一里餘も離れた海上の巖窟でございます。ヘルンは大層泳ぎ好きでしたから、船の後になり先きになりして樣々の方法で泳いで私に見せて大喜びでございました。洞穴に船が入りますと波の音が妙に巖に響きまして恐ろしいやうです。岩の間からポタリポタリと滴が落ちます。船頭

は石て舷をコンコンと叩くのです。これは船が來たと魔に知らせるためだと申します。その音がカンカンと響きまして、チャポンチャポンと何だか水に飛びこむ物があります。船頭は色々恐ろしいやうな、哀れなやうな、物凄いやうな話を致しました。ヘルンは先程着た服を又脱ぎ始めるのです。私も『こんな恐ろしいやうな傳說のあるところには、何か恐ろしい事が潛んで居るから』と申して諫めるのです。ヘルンは『しかし、この綺麗な水と、蒼黑く何萬尺あるか知れないやうに深さうなところ、大層面白い』と云ふので、泳ぎたくてならなかつたのですが、遂に止めました。ヘルンは止めながら大不平でした。殘念と云ふので、翌日まで物も云はないで、殘念がつてゐました。數日後の話に『昔人が惡いと云ふところて、私泳ぎましたが過ありません。ただあの時、或時海に入りますと體が燒けるやうでした。間もなく熱がひどく出ました。それと、あゝあの時です、二人で泳ぎました、一人は急に見えなくなりました。同時に大きな鮫の尾が私の直ぐ前に出ました』と申しました。

松江の頃は未だ年も若く中々元氣でした。西印度の事を思ひ出してよく私に『西印度を見せて上げたいものだ』と申しました。

二十四年の夏休みに、西田さんと杵築の大社へ參詣致しました。ついた翌日、私にも直

ぐ來てくれと手紙をくれましたので、その宿に參りますと、兩人共海に行つた留守でした。お金は靴足袋に入れてほうり出してありまして、銀貨や紙幣がこぼれ出て居るのです。ヘルンは性來、金には無頓着の方で、それはそれはをかしいやうでした。勘定なども下手でした。そのやうな俗才は持ちませんてした。ただ子供ができたり、自分の體が弱くなつた事に氣がついたりしてから、遺族の事を心配し始めました。大社の宮司は西田さんの知人てありまして、ヘルンの日本好きの事を聞いてゐますから、大層優待して下さいました。盆踊が見たいと話しますと、季節よりも少し早かつたのでしたが、態々何百人と云ふ人を集めて踊りを始めて下さいました。その人々も皆大滿足で盆踊をしてくれました。尤もこの踊りはあまり陽氣で、盆踊ではない、豐年踊だとヘルンが申しました。この旅行の時、ヘルンが『君が代』を敎はりまして、私共三人でよく歌ひました。子供のやうに無邪氣なところがありました。

二週間許りの後、松江に歸り盆踊の季節に近づいたので、ヘルンと私と二人て案内者も連れないで、伯耆の下市に盆踊を見に參りました。西田さんは京都へ旅を致されました。私共ただ二人で長旅を致したのはこれが始めてでした。下市へ參りまして昨年の丁度今頃赴任の時泊りました宿屋を尋ねて、踊りの事を聞きますと『あの、今年は警察から、そん

な事は止めよ、と云つて差止められました』との事で、ヘルンは失望して、不興でした。『駄目の警察です、日本の古い、面白い習慣をこはします。皆耶蘇のためです。日本の物こはして西洋の物眞似するばかりです』と云つて大不平でした。

この時には、到る處盆踊をさがして歩きました。先きに申しました東郷の池のさわぎもこの時の事でした。漸く盆踊を見つけて參ります、と反對に西洋人が來たと云ふので踊りそこのけにして、いたづらに砂をかける者がある。あとから謝罪に來ると云ふやうな珍事もございました。出雲に歸りましたのは、八月の末で、京都から歸られた西田さんと三人で旅行の話を致しまして愉快でした。これは一月程の旅行でしたが、この外一日がけの旅はよく致しました。

出雲は面白くてヘルンの氣に入つたのですが、西印度のやうな熱いところに慣れたあとですから、出雲の冬の寒さには隨分困りました。その頃の松江には、未だストーヴと申す物がありませんでした。學校では冬になりましても、大きい火鉢が一つ教場に出るだけでした。寒がりのヘルンは西田さんに授業中、寒さに困る事を話しますと、それならば外套を着たままで、授業をなさいとの事でした。この時一着のオヴアーコートを持つてゐましたが、それは船頭の着る物だと云つてゐましたが、それを着てゐたのです。好みはあつた

のですが、服装などはその通り無雑作で構ひませんでした。

熊本で始めて夜、二人で散歩致しました時の事を今に思ひ出します。或晩ヘルンは散歩から歸りまして『大層面白いところを見つけました、明晩散歩致しませう』との事です。月のない夜でした。宅を二人で出まして、淋しい路を歩きまして、山の麓に參りますと、この上だと云ふのです。草の茫々生えた小笹などの足にさはる小徑を上りますと、墓場でした。薄暗い星光りに澤山の墓がまばらに立つて居るのが見えます、淋しいところだと思ひました。するとヘルンは『あなた、あの蛙の聲聞いて下さい』と云ふのです。

又熊本に居る頃でした。夜散歩から歸つた時の事です。『今夜、私淋しい田舍道を歩いてゐました。暗いやみの中から、小さい優しい聲で、あなたが呼びました。私あつと云つて進みますとただやみです。誰もゐませんでした』など申した事もございます。

熊本にゐました頃、夏休みに伯耆から隱岐へ參りました。隱岐では二人で大概の浦々を廻りました。西鄕、別府、浦の鄕、菱浦、みな參りました。菱浦だけにも一週間以上ゐました。西洋人は始めてと云ふわけで、浦鄕などでは見物が全く山のやうで、宿屋の向ひの家のひさしに上つて見物しようと致しますと、そのひさしが落ちて、幸に怪我人がなかつ

たが、巡査が來るなどと云ふ大騒ぎがありました。西郷では珍客だと申すので病院長が招待して下さいました。ヘルンはこの見物騒ぎに隨分迷惑致しましたが、私を慰め勵ますために、平氣を裝うて『こんな面白い事はない』などと申してゐましたが、書物にはやはり困つたやうに書いて居るさうでございます。御陵にも詣でました。御醍醐天皇の行在所の黒木山へも參りました。その側の別府と申すところでは菓子がないので、代りに茶店で、『煎り豆』を出したのを覺えてゐます。

歸りに伯耆の境港で偶然盆踊を見ましたが、元氣な漁師達の多い事ですから、足を踏んでも、手を拍つてもえらい勢ですから、ヘルンはここで見た盆踊は、一番勇ましかつたといつも申しました。杵築のは陽氣な豐年踊、下市のは御精靈を慰める盆踊、境のは元氣の溢れた勇ましい踊りだと申しました。

それから山越しに、伯耆から備後の山中で泊つた事をいつも思ひ出します。ひどい宿でございましたが、ヘルンには氣に入りました。車夫の約束は、山を越えまして三里程さきで泊ると云ふのでしたが、路が方々こはれてゐたので途中で日が暮れてしまつたのです。山の中を心細く夜道を致しました。そろそろ秋ですから、色々の蟲が鳴いて居るのです。山が蟲の聲になつてしまつて居るやうで、それでしんとして淋しうございました。『この

近くに宿がないか』と車夫に尋ねますと「もう少し行くと人家が七軒あつて一軒は宿屋をするから、そこで勘忍して下さい』と申すのです。車が宿に着きましたのが十時頃であつたと覺えてゐます。宿と云ふのが小さい田舍家で氣味の惡い宿でした。行燈は薄暗くて、あるじは老人夫婦で、上り口に雲助のやうな男が三人何か話してゐます。二階に案内されたのですが、婆さんが小さいランプを置いて行つたきり、上つて來ません。あの二十五年の大洪水のあとですから、流れの音がえらい勢でゴウゴウと恐ろしい響をしてゐます。大層な螢で、家の内をスイスイと通りぬけるのです。折々ポーッポーッと明るくなるのです。肱掛窓にもたれてゐますと顏や手にピョイピョイ蟲が何か投げつけるやうに飛んで來て當るのです。隨分ひどい蟲でした。膝の近くに來て、松蟲が鳴いたりするのです。下の雲助のやうな男の聲が、たまに聞えます。はしご段がギイギイと音がすると、あの惡者が登つて來るのではないかなどと、昔話の草艸紙の事など思ひ出して心配してゐました。婆さんが御膳を持つて上つて來ました。あの蟲は何と云ふ蟲ですかと尋ねますと「へい夏蟲でございます」と云つて平氣で居るのです。實に淋しい宿で、夢を見て居るやうでございました。ヘルンは「面白いもう一晩泊りたい」と云つてゐました。箱根あたりの、何から何まで行き届いた西洋人に向く宿屋よりも、こんなのがかへつて氣に入りました。それですか

ら、私が同意致したら、隱岐の島で海の風に吹かれてまだまだ長くゐたでございませう。飛驒の山中を旅して見たい、とよく申して居りましたが、果しませんでした。

神戸から東京に參ります時に、東京には三年より我慢むつかしいと私に申しました。ヘルンはもともと東京は好みませんで、地獄のやうなところだと申してゐました。東京を見度いと云ふのが、私の兼ての望みでした。ヘルンは『あなたは今の東京を、廣重の描いた江戸繪のやうなところだと誤解して居る』と申してゐました。私に東京見物をさせるのが、東京に參る事になりました原因の一つだと云つてゐました。『もう三年になりました。あなたの見物がすみましたら田舍に參ります』と申した事も度々ありました。

神戸から東京に參りましたのは、二十九年の八月二十七日でした。大學に官舍があるとか云ふ事でしたが、なるべく學校から遠く離れた町はづれがよいと申しまして、捜して頂きましたけれども良いところがございませんでした。

この時です、牛込邊でしたらう。一軒貸家がありまして、大層廣いとの話で、二人で見に參りました事がございました。二階のない、日本の昔風な家でした。今考へますと、いづれ旗本の住んで居られたと云ふ家でしたらうと存じます。お寺のやうな家でした。庭も

かなり廣くて大きな蓮池がありました。しかし門を入りますから、もう薄氣味の惡いやうな變な家でした。ヘルンは『面白いの家です』と云つて氣に入りましたが、私にはどうもよくない家だと思はれまして、止める事に致しましたが、後で聞きますと化物屋敷で、家賃は段々と安くなつて、たうとうこはされたとか云ふ事でした。この話を致しますと、ヘルンは『あゝ、ですから何故、あの家に住みませんでしたか。あの家面白いの家と私思ひました』と申しました。

富久町に引移りましたが、ここは庭はせまかつたのですが、高臺で見晴しのよい家でございました。それに瘤寺と云ふ山寺の御隣であつたのが氣に入りました。昔は萩寺とか申しまして萩が中々ようございました。お寺は荒れてゐましたが、大きい杉が澤山ありまして淋しい靜かなお寺でした。毎日朝と夕方は必ずこの寺へ散歩致しました。度々參りますので、その時のよい老僧とも懇意になり、色々佛敎の御話など致しまして喜んでゐました。それて私も折々參りました。

日本服で愉快さうに出かけて行くのです。氣に入つたお客などが見えますと、『面白いのお寺』と云ふので瘤寺に案内致しました。子供等も、パパさんが見えないと『瘤寺』と云ふ程でございました。

よく散歩しながら申しました。『ママさん私この寺にすわる、むつかしいてせうか』この寺に住みたいが何かよい方法はないだらうかと申すのです。『あなた、坊さんてないてすから、むつかしいてすね』『私坊さん、なんぼ、仕合せてすね。坊さんになるさへもよきてす』『あなた、坊さんになる、面白い坊さんてせう。眼の大きい、鼻の高い、よい坊さんてす』『同じ時、あなた比丘尼となりませう。一雄小さい坊主てす。如何に可愛いてせう。毎日經讀むと墓を弔ひするて、よろこぶの生きるてす』『あなた、ほかの世、坊さんと生れて下さい』『あゝ、私願ふてす』

或時、いつものやうに瘤寺に散歩致しました。私も一緒に參りました。ヘルンが『あゝ、あゝ』と申しまして、びつくり驚きましたから、何かと思つて、私も驚きました。大きい杉の樹が三本、切り倒されて居るのを見つめて居るのです。『何故、この樹切りました』『今このお寺、少し貧乏てす。金欲しいのてあらうと思ひます』『あゝ、何故私に申しません。少し金やる、むつかしくないてす。私樹切るより如何に如何に喜ぶてした。この樹幾年、この山に生きるてしたらう、小さいあの芽から』と云つて大層な失望てした。『今あの坊さん、少し嫌ひとなりました。坊さん、金ない、氣の毒てす、しかしママさん、この樹もうもう可哀相なてす』と、さも一大事のやうに、すごすごと寺の門を下りて宅に歸

りました。書齋の椅子に腰をかけて、がつかりして居るのてす。『私あの有樣見ました、心痛いてす。今日もう面白くないてす。もう切るないとあなた賴み下され』と申してゐましたが、これからはお寺に餘り參りませんてした。間もなく、老僧は他の寺に行かれ、代りの若い和尙さんになつてからどしどし樹を切りました。それから、私共が移りましてから、樹がなくなり、墓がのけられ、貸家などが建ちまして、全く面目が變りました。ヘルンの云ふ靜かな世界はたうとうこはれてしまひました。あの三本の杉の樹の倒されたのが、その始まりてした。

淋しい田舍の、家の小さい、庭の廣い、樹木の澤山ある屋敷に住みたいと兼々申してゐました。瘤寺がこんなになりましたから、私は方々搜させました。西大久保に賣り屋敷がありました。全く日本風の家て、あたりに西洋風の家さへありませんてした。

私はいつまでも、借家住ひで暮すよりも、小さくとも、自分の好きなやうに、一軒建てたいと申しますと、『あなた、金ありますか』と申しますから『あります』と申します。『面白い、隱岐の島で建てませう』といつも申します。私は反對しますとそれては『出雲に建てて置きませう』と申しますから、全く土地まで搜した事もありました。しかし私はそれほど出雲がよいとも思ひませんてしたから、ついこの西大久保の賣屋敷を買つて建增

しをする事に、たうとうなつたのでございます。

嘗てヘルンは、まじりけのない日本の眞中で生きる好きと云ふのでしたから、自分でその家と近所の模樣を見に參りました。町はづれて、後に竹藪のあるのが、大層氣に入りました。建増しをするについては、冬の寒さには困らないやうに、ストーヴをたく室が欲しい。又書齋は、西向きに机を置きたい。外に望みはない。ただ萬事、日本風にと云ふのでした。この外には何も申しませんでした。何か相談を致しましても「ただこれだけです。あなたの好きしませう。宜しい。私ただ書く事少し知るです。外の事知るないです。ママさん、なんぼ上手します」などと云つて相手になりません。强ひて致しますと「私、時もたないです」と申しまして、萬事私に任せきりでございました。「もう、あの家、宜しいの時。あなた云ひませう。今日パパさん、大久保に御出で下され。私この家に、朝さやうならします。と、大學に參る。宜しいの時、大久保に參ります、あの新しい家に。ただこれだけです」と申しまして、本當にこの通りに致しました。時間を取ると云ふ事が大嫌ひでした。

西大久保に引移りましたのは、明治三十五年三月十九日でした。萬事日本風に造りました。ヘルンは紙の障子が好きでしたが、ストーヴをたく室の障子はガラスに致しただけが、

西洋風です。引移りました日、ヘルンは大喜びでした。書棚に書物を納めてゐますし、私は傍に手傳つてゐますと、富久町よりは家屋敷は廣いのと、その頃の大久保は今よりずつと田舍でしたのとて、至つて靜かで、裏の竹籔で、鶯が頻りに囀つてゐます。『如何に面白いと樂しいですね』と喜びました。又「しかし心痛いです」と申しますから『何故ですか』と問ひますと『餘り喜ぶの餘り又心配です。この家に住む事永いを喜びます。しかし、あなたどう思ひますか』などと申しました。

ヘルンは面倒なおつき合ひを一切避けてゐまして、立派な方が訪ねて參られましても、『時間を持ちませんから、お斷り致します』と申し上げるやうにと、いつも申すのでございます。ただ時間がありませんてよいと云ふのですが、玄關にお客がありますと、第一番に書生さんや女中が大弱りに弱りました。

人に會つたり、人を訪ねたりするやうな時間をもたぬ、と云つてゐましたが、そのやうな交際の事ばかりでなく、自分の勉强を妨げたりしたりするやうな事から、一切離れて潔癖者のやうでございました。

私は部屋から庭から、綺麗に、毎日二度位も掃除せねば氣のすまぬ性ですが、ヘルンは

あのバタバタとはたく音が大嫌ひて、『その掃除はあなたの病氣です』といつも申しました。學校へ參ります日には、その留守中に綺麗に片付けて、掃除して置くのてすが、在宅の日には朝起きまして、顏を洗ひ食事を致します間にちやんとして置きました。この外掃除をさせて下さいと賴みます時には、ただ五分とか六分とか云ふ約束て、承知してくれるのてす。その間、庭など散歩したり廊下をあちこち歩いたりしてゐました。

交際を致しませぬのも、偏人のやうてあつたのも、皆美しいとか面白いとか云ふ事を餘り大切に致し過ぎる程に好みますからてした。このために、獨りで泣いたり怒つたり喜んだりして全く氣ちがひのやうにも時々見えたのてす。ただこんな想像の世界に住んて書くのが何よりの樂しみてした。そのために交際もしないて、一分の時間も惜んだのてした。

「あなた、自分の部屋の中て、ただ讀むと書くばかりてす。少し外に自分の好きな遊びして下さい」「私の好きの遊び、あなたよく知る。ただ思ふ、と書くとてす。書く仕事あれば、私疲れない、と喜ぶてす。書く時、皆心配忘れるてすから、私に話し下され」

『私、皆話しました。もう話持ちません』『てすから外に參り、よき物見る、と聞く、と歸るの時、少し私に話し下され。ただ家に本讀むばかり、いけません』

その書く物は、非常な熱心て進みまして、少しても、その苦心を亂すやうな事がありま

すと、當人は大層な苦痛を感じますので、常々戸の明けたてから、廊下の跫音や、子供の騒ぎなど、一切ヘルンの耳に入れぬやうにと心配致しました。その部屋に參りますにも、煙草をのんで、キセルをコンコンと音をさせて居る時とか、歌を歌つて室内を散歩して居る時を選ぶやうにしてゐました。さうでない時は、呼んでも分らぬ事もあるかと思へば、極小さい音でもひどく感ずる事もありました。何事につけこの調子でございました。

西大久保に移りましてから、家も廣くなりまして、書齋が玄關や子供の部屋から離れましたから、いつでもコツトリと音もしない靜かな世界にして置きました。それでも簞笥を開ける音で、私の考こはしました、などと申しますから、引出し一つ開けるにも、そうつと靜かに音のしないやうにしてゐました。こんな時には私はいつもあの美しいシャボン玉をこはさぬやうにと思ひました。さう思ふから叱られても腹も立ちませんでした。

著述に熱心に耽つて居る時、よくありもしない物を見たり、聞いたり致しますので、私は心配の餘り、餘り熱心になり過ぎぬやう、もう少し考へぬやうにしてくれるとよいが、とよく思ひました。松江の頃には私は未だ年は若いし、ヘルンは氣が違ふのではないかと心配致しまして、或時西田さんに尋ねた事がございました。餘り深く熱心になり過ぎるからであると云ふ事が次第に分つて參りました。

怪談は大層好きでありまして、『怪談の書物は私の寶です』と云つてゐました。私は古本屋をそれからそれへと大分探しました。

淋しさうな夜、ランプの心を下げて怪談を致しました。ヘルンは私に物を聞くにも、その時には殊に聲を低くして息を殺して恐ろしさうにして、私の話を聞いて居るのです。その聞いて居る風が又如何にも恐ろしくてならぬ樣子ですから、自然と私の話にも力がこもるのです。その頃は私の家は化物屋敷のやうでした。私は折々、恐ろしい夢を見てうなされ始めました。この事を話しますと『それでは當分休みませう』と云つて、休みました。氣に入つた話があると、その喜びは一方ではございませんでした

私が昔話をヘルンに致します時には、いつも始めにその話の筋を大體申します。面白いとなると、その筋を書いて置きます。それから委しく話せと申します。それから幾度となく話させます。私が本を見ながら話しますと『本を見る、いけません。ただあなたの話、あなたの言葉、あなたの考でなければ、いけません』と申します故、自分の物にしてしまつてゐなければなりませんから、夢にまで見るやうになつて參りました。

話が面白いとなると、いつも非常に眞面目にあらたまるのでございます。顏の色が變り

まして眼が鋭く恐ろしくなります。その様子の變り方が中々ひどいのです。たとへばあの「骨董」の初めにある幽靈瀧のお勝さんの話の時なども、私はいつものやうに話して參りますうちに顏の色が青くなつて眼をすゑて居るのでございます。いつもこんなですけれども、私はこの時にふと恐ろしくなりました。私の話がすみますと、始めてほつと息をつきまして、大變面白いと申します。『アラッ、血が』あれを何度も何度もくりかへさせました。どんな風をして云つてたでせう。その聲はどんなでせう。履物の音は何とあなたに聽きますか。その夜はどんなでしたらう。私はかう思ひます、あなたはどうです、などと本に全くない事まで、色々と相談致します。二人の樣子を外から見ましたら、全く發狂者のやうでしたらうと思はれます。

「怪談」の初めにある芳一の話は大層ヘルンの氣に入つた話でございます。中々苦心致しまして、もとは短い物であつたのをあんなに致しました。「門を開け」と武士が呼ぶところでも「門を開け」では強味がないと云ふので、色々考へて「開門」と致しました。この「耳なし芳一」を書いてゐます時の事でした。日が暮れてもランプをつけてゐません。私はふすまを開けないで次の間から、小さい聲で、芳一芳一と呼んで見ました。『はい、私は盲目です、あなたはどなたでございますか』と內から云つて、それで默つて居るので

ございます。いつも、こんな調子で、何か書いて居る時には、その事ばかりに夢中になつてゐました。又この時分私は外出したおみやげに、盲法師の琵琶を彈じて居る博多人形を買つて歸りまして、そつと知らぬ顏で、机の上に置きますと、ヘルンはそれを見ると直ぐ『やあ、芳一』と云つて、待つて居る人にでも遇つたと云ふ風で大喜びでございました。それから書齋の竹籔で、夜、笹の葉ずれがサラサラと致しますと『あれ、平家が亡びて行きます』とか、風の音を聞いて『壇の浦の波の音です』と眞面目に耳をすましてゐました。

書齋で獨りで大層喜んでゐますから、何かと思ふて參ります。『あなた喜び下され、私今大變よきです』と子供のやうに飛び上つて、喜んで居るのでございます。何かよい思ひつきとか考が浮んだ時でございます。こんな時には私もつい引き込まれて一緒になつて、何と云ふ事なしに嬉しくてならなかつたのでございました。

『あの話、あなた書きましたか』と以前話しました話の事を尋ねました時に『あの話、兄弟ありません。もう少し時待つてです。よき兄弟參りませう。私の引出しに七年でさへも、よき物參りました』などと申してゐましたが、一つの事を書きますにも、長い間かかつた物も、あるやうでございました。

「骨董」のうちの「或女の日記」の主人は、ただヘルンと私が知つて居るだけでござい

ます。二人で祕密を守ると約束しました。それから、この人の墓に花や香を持つて、二人て參詣致しました。

『天の河』の話でも、ヘルンは泣きました。私も泣いて話し、泣いて聽いて、書いたのでした。

『神國日本』では大層骨を折りました。『此書物は私を殺します』と申しました。『こんなに早く、こんな大きな書物を書く事は容易ではありません。手傳ふ人もなしに、これだけの事をするのは、自分ながら恐ろしい事です』などと申しました。これは大學を止めてからの仕事でした。ヘルンは大學を止められたのを非常に不快に思つてゐました。非常に冷遇されたと思つてゐました。普通の人に何でもない事でも、ヘルンは深く思ひ込む人ですから、感じたのでございます。大學には永くゐたいと云ふ考は勿論ございませんでした。あれだけの時間出てゐては書く時間がないので困ると、いつも申してゐましたから、大學を止められたと云ふ事でなく、止められる時の仕打ちがひどいと云ふのでございました。只一片の通知だけで解約をしたのがひどいと申すのでございました。

原稿がすつかりでき上りますと大喜びで固く包みまして（固く包む事が自慢でございました）板など入れて、ちやんと石のやうにして置くのです）表書を綺麗に書きまして、そ

れを配達證明の書留で送らせました。校正を見て、電報で『宜しい』と返事をしてから二三日の後亡くなりました。この書物の出版は、餘程待ちかねて、死ぬ少し前に、『今あの「神國日本」の活字を組む音がカチカチと聞えます』と云つて、でき上るのを樂しみにしてゐましたが、それを見ずに、亡くなりましたのはかへすがへす殘念でございます。

ペンを取つて書いてゐます時は、眼を紙につけて、えらい勢でございます。こんな時には呼んでも分りませんし、何があつても少しも他には動きませんでした。あのやうな神經の鋭い人でありながら、全く無頓着で感じない時があるのです。

或夜十一時頃に、階段の戸を開けると、ひどい油煙の臭が致します。驚いてふすまを開けますと、ランプの心が多く出て居て、ぽつぽつと黒煙が立ち上つて、室内が煙で暗くなつてゐます。息ができぬやうですのに、分らないで一所懸命に書いて居るのです。私は急いで障子を明け放つて、空氣を入れなどして、『パパさん、あなたランプに火が入つて居るのを知らないで、あぶないでしたね―』と注意しますと『あゝ、私なんぼ馬鹿でしたね―』と申しました。それで常には鼻の神經は鋭い人でした。

『パパ、カムダウン、サッパー、イズ、レディ』と三人の子供が上り段のところから、聲を揃へて案內するのが例でした。いつも『オールライト、スウィートボーイス』と云つ

て、嬉しさうに、少し踊るやうな風で參りますのでございます。しかし一所懸命の時は、子供だちが案內致しましても、返事がありません。また『オールライト』と早く返事を致しません。こんな時には、待てども待てどもなかなか食堂に參りませんから、私がまた案內に行きます。『パパさん澤山時、待つと皆の者加減惡くなります。願ふ、早く參りて下され。子供、皆待ち待ちてす』『はー何ですか』などと云つてゐます。『あなた何てすか、いけません。食事てす。あなた食事しませんか』『私食事しませんでしたか。私は濟みましたと思ふ。をかしいてすね』こんな風ですから『あなた、少し夢から醒める、願ふてす。小さい子供泣きます』ヘルンは『御免御免』など云つて、私に案內されて、食堂に參りますが、こんな時はいつも、トンチンカンてをかしいのです。子供にパンを分けてやる事など忘れて、自分て『ノウ』などと獨り合點をしながら、急いで喰べてゐます。子供等がパンをと賴みますので、氣がついて『やりませんてしたか。御免御免』と云つて切り始めます。切りながら、又忘れて自分て喰べたりなど致します。

食事の前に、ほんの少々ウィスキーを用ひます。晩年には、體のためにと云ふので、葡萄酒を用ひてゐました。こんな時にはウィスキーを、葡萄酒と間違つてトクトクとコップについて呑みかけたり、コーヒーの中に鹽を入れかけたり、などするのてす。子供達から

注意されて「本當です。なんぼパパ馬鹿ですね」など云ひながらまた考に入るのです。幾度も「パパさんもう、夢から醒めて下され」などと申します。

食物には好惡はございませんでした。日本食では漬物でも、刺身でも何でも頂きました。お菜から喰べました、最後に御飯を一杯だけ頂きました。洋食ではプラムプディンと大きなビフテキが好きでございました。外には好きなものと云へば先づ煙草でした。

食事の時には色々話を致しました。パパは西洋の新聞などの話を致しますし、私は日本の新聞の話を致します。新聞は永い間『讀賣』と『朝日』を見てました。小さい「清」が障子からのぞきます。猫が參ります。犬が窓下に參ります。自分の食物をそれぞれに分けてやります。なかなか愉快に喰べました。それが濟むといつも皆で唱歌などを歌ひました。

よく獨りで、何か頻りに喜んだり悲しんだりしてゐました。喜んで少し踊るやうにして廊下を散歩して居る事もありますし、又獨りで笑つて居る事もあります。私が聞きつけて「パパさん何面白い事ありますか」と尋ねますと、こらへてゐたのが、破れたやうに大きい聲になつて大笑など致します。涙をこぼしてママさんママさんと云つて笑ふのです。これは新聞にあつたをかしかつた事や、私の話した事などを思ひ出してであります。

あのやうに考へ込んだり、怪談好きである事から、常談など申さぬだらうと思はれるや

うですけれども、折々上品な滑稽を申しました。「いつも先生に遇ふと、何か一つ常談の出ない事はない』と申された方がございました。

面白い時には、世界中が面白く、悲しい時には世界中が悲しい、と云ふ風でございました。怪談の時でも、何の時でも、さうでしたが、もうその世界に入り、その人物になつてしまふのでございました。話を聞いて感ずると、顔色から眼の色まで變るのでした。自分でもよく、何々の世界と、よく世界と云ふ言葉を申しました。

ヘルンの平常の話は、女のやうな優しい聲でした。笑ひ方なども優しいのでしたが、しかし、ひどい意氣込みになる人でしたから、優しい話のうちに、えらい勢で驚くやうに力をこめて云ふ事がありました。

笑ふ時にも二つあります。一つは優しい笑方で、一つは何もかも打忘れて笑ふのです。この笑は一家中皆笑はせる面白さうな笑で、女中までが貰ひ笑を致しました。大學を止めた當時、日本に駐在でしたマクドーナルドさんが横濱から毎日曜毎に御出でになりました時などは、書齋からヘルンのこの笑聲が致しますので、家内中どんなに貰ひ笑を致したか知れません。

書齋のテーブルの上に、法螺貝が置いてありました。私が江の島に子供を連れて參りま

した時、大層大きいのを、おみやげに買つて歸つたのでございます。ヘルンがこれを吹きますと、太い好い音が出ました。『私の肺が强いから、このやうな音』といつて喜びました。「面白い音です」と云つて、頰をふくらまして、面白がつて吹きました。それから煙草の火のなくなつた時に、この法螺貝を吹くと云ふ約束を致しました。火がないと、これをポオー、ウオーと云ふやうに、大きく波をうたせるやうにして、長く吹くのです。さう致しますと、臺所までも聞えるのです。內を極靜かにして、コットリとも音をさせぬやうにして居るところです。そこへこの法螺貝の音です。夜などは殊に面白いのでございます。私は煙草の火は絕やさないやうに、注意をしてゐましたが、自分で吹きたいものですから、少しでも消えると直ぐ喜んで吹きました。如何に面白いと云ふので、書齋の近くに持つて參つて居りましても、吹いて居るのでございます。この音が致しますと、女中までが『それ、貝がなります』と云つて笑ひました。

よく出來た物などを見ますとひどくそれに感じまして、賞めるのでございます。上野の繪の展覽會にはよく二人で參りました。畫家の名など少しも頓着しないです。繪が氣に入りますと、金がいくら高くても、安い安いと申すのです。『あなた、あの繪どう思ひます

か』と申しますから『おねだん餘り高いですね』と私は申します。金に頓着なく買はう買はうとするのを、少し恐れてから返事を致すのでございます。すると『ノッ、私金の話でないです。あの繪の話です。あなた、よいと思ひますか』『美しい、よい繪と思ひます』と申しますと『あなた、よいと思ひますならば買ひませう　この價まだ安いです。もう少し出しませう』と云ふのです。よいとなると價よりも澤山、金をやりたがつたのです。そして早く早くと云つて、大急ぎで約定濟の札をはつて貰ひました。

京都を二人で見物して歩きました時に、智恩院とか、銀閣寺とか、金閣寺とかに廻りました。五錢十錢といふ拜觀料が大概きまつてゐます。ヘルンは自分で氣に入りますと、五十錢とか一圓とか出さうと云ふのです。そんな事には及びません、かへつてをかしいと申しましても『ノッ、ノウ、私恥ぢます』と申しまして、聞き入れません。お寺でも變な顏して、御名前はなどと聞くのですが、勿論申した事はございません。

松江にゐました頃、或お寺へ散歩致しまして、ここで小さい石地藏を見て、大層氣に入りまして、これは誰の作かと寺で尋ねますと、荒川と申す人の作と云ふ事が分りました。この人は評判の偏人でございましたが、腕は大層確かであつたさうです。學問のない、慾のない、いつも貧乏をしてゐながら、物を頼まれても二年も三年もかかつても、こしらへ

てくれない老人でございました。ヘルンは面白いと云ふので、大きい酒樽を三度まで進物に致しました。それから宅に呼びまして御馳走をしたり、自分でその汚い家を訪ねて話など致しました。彫刻を頼んで、そんなに要らないと云ふのを澤山にやりました。しかし、宅にございますあの天智天皇の置物は、荒川の作にしては出來のよい方ではないが、ヘルンの申しましたこの『貧しい天才』を尊敬して買つたのでございます。

ある夏、二人で呉服屋へ二三反の浴衣を買ひに行きました。番頭が色々ならべて見せます。それが大層氣に入りまして、あれを買ひませうこれも買ひませうと云つて、引寄せるのです。そんなに澤山要りませんと申しましても『しかし、あなた、ただ一圓五十錢は二圓です。色々の浴衣あなた着て下され。ただ見るさへもよきです』と云つて、たうとう三十反ばかり買つて、店の小僧を驚かした事もあります。氣に入るとこんな風ですから、隨分變でございました。

浴衣はただ反物で見て居るだけでも氣持ちがよいと申しました。始めの好みは少し派手でしたが、後にはぢみな物になりました。模樣は、波や蜘蛛の巣などが殊に氣に入りました。これを着ますと『あゝあの浴衣ですね』などと云つて喜びました。日本人の洋服姿は好きませんでした。殊に女の方の洋服姿と、英語は心痛いと申しました。

或時、上野公園の商品陳列所に二人で參りました。ヘルンは或品物を指して、日本語で『これは何程ですか』と優しく尋ねますと、店番の女が英語でおねだんを申しました。ヘルンは不快な顏をして私の袖を引くのです、買はないであちらへ行きました。

早稻田大學に參るやうになりました時、高田さんから招かれまして參りました。奧樣が、玄關に御出迎ひ下さいまして『よく御出で下さいました』と仰つて案内されたのが英語でなくて上品な日本語であつて嬉しかつたと云ふので、歸りますと第一に靴も脫がずにその話を致した。

『讀賣新聞』であつたかと存じます、或華族樣の御隱居で、昔風が御好きで西洋風の大嫌ひの方の話がありました。女中も帶は立て矢の字、髮は椎茸たぼの御殿風でございました。着物も裾長にぞろぞろ引きずつて步くのです。ランプも一切つけませんで源氏行燈です。シャボンも嫌ひ、新聞も西洋くさいといふので、西洋くさい物は奉公人の末に到るまで使はせないのださうです。こんな風ですから奉公人も厭がつて參りません。『あの御屋敷なら眞平御免です』と申します事が記してございました。この話を致しますと、ヘルンは『如何に面白い』と云つて大喜びでした。『しかし私大層好きです、そのやうな人、私の一番の友達、私見る好きです。その家、私是非見る好きです。私西洋くさくないです』

と云つて大滿足です。「あなた西洋くさくないでせう。しかし、あなたの鼻」などと常談申しますと『あ、どうしよう、私のこの鼻、しかしよく思うて下さい。私この小泉八雲、日本人よりも本當の日本を愛するです』などと申しました。

子供に白足袋をはかせるやうに申しました。紺足袋よりも白足袋が大層好きでございました。日本人のあの白足袋が着物の下から、チラチラとするのが面白いと申しました。

子供には靴よりも下駄をと申しました。自分の指を私に見せて、こんな足に子供のを致したくないと申しました。

ハイカラな風は大嫌ひでした。日本服でも洋服でも、折目の正しいのは嫌ひでした。物を構はない風でした。燕尾服は申すまでもなく、フロックコートなど大嫌ひでした。ワイシャツや、シルクハット、燕尾服、フロックコートは「なんぼ野蠻の物」と申しました。

神戸から東京へ參ります時に、始めてフロックコートを作りました。それも私が大層頼みましてやつとこしらへて貰つたのでございます。「大學の先生になつたのですからフロックコートを一着持つて居らねばなりません」と申しますと『ノウ、外山さんに私申しました。禮服を私大層嫌ひます。禮服で出るやうなところへ私出ませんが、宜しいですかと云ひました。それで宜しいですと外山さんが約束しましたのですから、フロックコートい

けません』と云ふのです。しかし漸く一着フロックコートを作りましたが、それを着けましたのは、僅かに四五度位でした。これを着る時は又大騒ぎです。いやだいやだと云ふのです。『この物、私好きない物です、ただあなたのためです。いつでも外にの時、あなた云ふ、新しい洋服、フロックコート、皆私嫌ひの物です。常談でないです。本當です』などと云つていやがりますけれど、私は參らねば惡いであらうと心配しまして、氣の毒だと存じながら四五度ばかり勸めて着せました。自分がフロックコートを着るのはあなたの過ちだと申してゐました。

或時、常談に『あなた日本の事を大變よく書きましたから、天子樣、あなた賞めるため御呼びです、天子樣に參る時、あのシルクハット、フロックコートですよ』と申しますと『それでは眞平御免』と申しました。この眞平御免と云ふ言葉は前の西洋嫌ひの華族の隱居樣の話で覺えたのです。マッピラと云ふ音が面白いと云ふので、しきりに眞平と云ふ事を申しました。

外出の時はいつも背廣でございましたが、洋服よりも日本服、別して浴衣が大好きでした。傘もステッキももつた事はございません。散歩の途中雨にあつても平氣で歸るのですが、餘り烈しいとどこででも車を見つけて乘つてかへりました。靴は兵隊靴です。流行に

は全く無頓着でした。『日本の勞働者の足は西洋人のよりも美しい』と申しました。西洋よりも日本、この世よりも夢の世が好きであつたらうと思ひます。休む時には必ず『プレザント、ドリーム』とお互に申します。私の夢の話が大層面白いと云ふので喜ばれました。

ワイシヤツやカラなどは昔から着けなかつたやうです。フロックコートを、仕方なく着ける時でもカラは極低い折襟でした。一種の好みは萬事につけてあつたのですが、自分の服裝は少しも構はない無雜作なのが好きでした　シヤツと帽子とは、飛び放れて上等でした。シヤツは橫濱へ態々參りまして、フラネルのを一ダースづつ誂へて作らせました。帽子はラシヤの鍔廣のばかりを買ひましたが、上等物品を選びました。

うはべの一寸美しいものは大嫌ひ。流行にも無頓着。當世風は大嫌ひ。表面の親切らしいのが大嫌ひでした。惡い方の眼に『入墨』をするのも、齒を脫いてから入齒をする事も、皆虛言つき大嫌ひと云つて聞き入れませんでした。耶蘇っ坊さんには不正直なにせ者が多いと云ふので嫌ひました。しかし聖書は三部も持つてゐまして、長男にこれはよく讀まねばならぬ本だとよく申しました。

日本のお伽噺のうちでは『浦島太郎』が一番好きでございました。ただ浦島と云ふ名を

聞いただけでも『あゝ浦島』と申して喜んでゐました。よく廊下の端近くへ出まして『春の日の霞める空に、すみの江の……』と節をつけて面白さうに毎度歌ひました。よく諳誦してゐました。それを聞いて私も諳ずるやうになりました程でございます。上野の繪の展覽會で、浦島の繪を見まして値も聞かないで約束してしまひました。

『蓬萊』が好きで、繪が欲しいと申しまして、色々見たり、描いて貰つたりしたのですが皆滿足しませんでした。

熱い事が好きですから、夏が一番好きでした。方角では西が一番好きで書齋を西向きにせよと申した位です。夕燒けがすると大喜びでした。これを見つけますと、直に私や子供を大急ぎで呼ぶのでございます。いつも急いで參るのですが、それでもよく『一分後れました、夕燒け少し駄目となりました。』なんぼ氣の毒』などと申しました。子供等と一緒に『夕燒け小燒け、明日、天氣になーれ』と歌つたり、または歌はせたり致しました。燒津などに參りますと海濱で、子供や乙吉などまで一緒になつて『開いた開いた何の花開いた、蓮華の花開いた……』の遊戲を致しまして、子供のやうに無邪氣に遊ぶ事もございました。

『廣瀨中佐は死したるか』と申す歌も、子供等と一緒に聲を揃へて大元氣で、歌ひまし

た。室内で歌うたり、子供の歌つて居るのを書齋で聞いて喜んだり、子供の知らぬ間にそつと出かけて一緒に歌つたり致しました。先年三越で福井丸の船材で造つた物を賣り出した時に卷煙草入を買つて歸りました。その口に偶然ヘルンの書いて置きました『廣瀨中佐の歌』が出ましたから私は不思議に思ひまして、それを丁度その箱に納めて置きました。

發句を好みまして、これも澤山覺えてゐました。これにも少し節をつけて廊下などを歩きながら、歌ふやうに申しました。自分でも作つて芭蕉などと常談云ひながら私に聞かせました。どなたが送つて下さいましたか『ホトトギス』を毎號頂いて居りました。

奈良漬の事をよく『由良』と申しました。これは二十四年の旅の時、由良で喰べた奈良漬が大層旨しかつたので、それから奈良漬の事を由良と申してゐました。

熊本を出まして、これから關西から隱岐などを旅行しようとする時です。九州鐵道のどの停車場でございましたか、汽車が行き違ひに着きまして、四五分、互ひに止まりました時に、向うの汽車の窓から私共を見た男の眼が非常に恐ろしい凄い眼でした。『あゝえらい眼だ』と思つて居ると、私共の汽車は走つてしまつたのですが『今の眼を見ましたか』とヘルンは申しました。『汽車の男の眼』と云ふ事を後まで話しました。

角力は松江で見ました。谷の音が大關で參りました。西洋のより面白いと申してゐたやうでした。谷の音といふ言葉はよく後まで出まして、肥つたといふ代りに「谷の音」と申すのでございます。

芝居はアメリカで新聞記者をして居る時分に毎日のやうに見物したと申してゐました。有名な役者は皆お友達で交際し、樂屋にも自由に出入したので、芝居の事を學問したと申してゐました。日本では芝居を見たのは僅か二度しかないのです。それは松江と京都で、ほんのちよつとでした。長い間人込みの中でぢつとして見物して居る事は苦痛だと申しました。しかし、よい役者のよい芝居は子供等にも見せて宜しいと申しまして、よく芝居を見に行くやうに私に勸めました。團十郎の芝居には必ず參るやうに勸めました。その日の見物や舞臺の模樣から何から何まで、細い事まで詳しく話しますのが私のおみやげて、ヘルンは熱心にこれを喜んで聞いてくれました。團十郎には是非遇つて芝居の事について話を聞いて見たいと申してゐましたが、果さないうちに團十郎は亡くなりました。

晩年には日本の芝居の事を調べて見たいと申してゐました。三十三間堂の事を調べてくれと私に申した事もございました。これから少しづつ自傳を書くのだと申しました。その方は斷片で少しだけでもできてゐますが芝居の方は少しもできぬうちに亡くなりました。

私はよく朝顔の事を思ひ出します。段々秋も末になりまして、青い葉が少しづつ黄ばんで、最早ただ末の方に一輪心細げに咲いてゐたのです。或朝それを見ました時に「おゝ、あなた」と云ふのです。「美しい勇氣と、如何に正直の心」だと云ふので、ひどく賞めてゐました。枯れようとする最後まで、かう美しく咲いて居るのが感心だ。賞めてやれ、と申すのでございます。その日朝顏はもう花も咲かなくなつたから邪魔だと云ふので、宅の老人が無造作に拔き取つてしまひました。翌朝ヘルンが垣根のところに參つて見るとないものですから、大層失望して氣の毒がりました。「祖母さんよき人です。しかしあの朝顏に氣の毒しましたね」と申しました。

子供が小さい汚れた手で、新しい綺麗なふすまを汚した事があります。その時「私の子供あの綺麗をこはしました、心配」などと云つた事もありました。美しい物を破る事を非常に氣に致しました。一枚五厘の繪草紙を子供が破りましても、大切にして長く持てば貴い物になると敎へました。

祭禮などの時には、いつももつと寄附をせよと申しました。少し尾籠なお話ですが、松江で借家を致しました時、掃除屋から、その代りに薪（米てなく）を持つて來てくれた話

を聞いてヘルンは大層驚いて『私恥ぢます、これから一回一圓づつおやりなさい』と申して聞き入れなかつた事がございました。

ヘルンはよく人を疑へと申しましたが、自分は正直過ぎる程だまされやすい善人でございました。自分でもその事を存じてゐたものですからそんなに申したのです。一國者であつた事は前にも申しましたが、外國の書肆などと交渉致します時、何分遠方の事ですから色々行きちがひになる事もございますし、その上こんな事につけては萬事が疑り性ですから、挿畫の事やら表題の事やらで向うでは一々ヘルンに案内なしにきめてしまふやうな事もありますので、こんな時にヘルンはよく怒りました。向うからの手紙を讀んでから怒つて烈しい返事を書きます。直ぐに郵便に出せと申します。そんな時の樣子が直に分りますから『はい』と申して置いてその手紙を出さないで置きます。二三日致しますと怒りが靜まつてその手紙は餘り烈しかつたと悔むやうです。『ママさん、あの手紙出しましたか』と聞きますから、態と『はい』と申し居ります。本當に悔んで居るやうですから、ヒョイと出してやりますと、大層喜んで『だから、ママさんに限る』などと申して、やや穩かな文句に書き改めて出したりしたやうでございます。

活潑な婦人よりも優しい淑（しとや）かな女が好きでした。眼なども西洋人のやうに上向きでなく、下向きに見て居るのを好みました。觀音様とか、地藏様とかあのやうな眼が好きでございました。私共が寫眞をとらうとする時も、少し下を向いて寫せと申しましたが、自分のも、そのやうになつて居るのが多いのでございます。

長男が生れる前に子供が愛らしいと云ふので、子供を借りて宅に置いてゐた事もありました。

長男が生れようとする時には大層な心配と喜びでございました。私に難儀させて氣の毒だと云ふ事と、無事で生れて下されと云ふ事を幾度も申しました。こんな時には勉強して居るのが一番よいと申しまして、離れ座敷で書いてゐました。始めてうぶ聲を聞いた時には、何とも云へない一種妙な心持がしたさうです。その心もちは一生になかつたと云つてゐました。赤坊と初對面の時には全く無言で、ウンともスンとも云はないのです。後に、この時には息がなかつたと申しました。よくこの時の事を思ひ出して申しました。

それから非常に可愛がりました。その翌年獨りで横濱に參りまして（獨り旅は長崎に一

週間程のつもりで出かけて、一晩でこりこりしたと云つて歸つた時と、これだけでした）色々のおもちやを澤山買つて大喜びで歸りました。五圓十圓と云ふ高價の物を思ひ切つて澤山買つて參りましたので一同驚きました。

ヘルンは朝起きも早い方でした。年中、元日もかかさず、朝一時間だけは長男に敎へました。大學に出て居ります頃は火曜日は八時に始まりますからこの日に限り午後に致しました。大學まで車で往復一時間づつかかります。晝のうちは午後二時か三時頃から二時間程散步をするか、或は讀書や手紙を書く事や講義の準備などで費しまして、筆をとるのは大概夜でした。夜は大概十二時まで執筆してゐました。時として夜眠られない時起きて書いて居る事もございました。

壽々子の生れました時には、自分は年を取つたからこの子の行先を見てやる事がむづかしい。『なんぼ私の胸痛い』と申しまして、喜ぶよりも氣の毒だと云つて悲しむ方が多ございました。

私の外出の日はヘルンの學校の授業時間の一番多い日（木曜日）にきめてゐました。前日にはよく外に出かけてよいおみやげを下さいと親切に注意致しました。『歌舞伎座に團十郎、大層面白いと新聞申します。あなた是非に參る、と、話のおみやげ』など申します。

そしていつも『しかし、あなたの歸り十時十一時となります。あなたの留守、この家私の家ではありません。如何につまらんです。しかし仕方がない。面白い話で我慢しませう』と申しました。

晩年には健康が衰へたと申してゐましたが、淋しさうに大層私を力に致しまして、私が外出する事がありますと、丸で赤坊の母を慕ふやうに歸るのを大層待つて居るのです。私の跫音を聞きますと、ママさんですかと常談など云つて大喜びでございました。少しおくれますと車が覆つたのであるまいか、途中で何か災難でもなかつたかと心配したと申して居りました。

抱車夫を入れます時に『あの男おかみさん可愛がりますか』と尋ねます。『さうです』と申しますと『それなら、よい』と申すのです。

或方をヘルンは大層賞めてゐましたが、この方がいつも奥様にこはい顔を見せて居られる。これが一つ氣にかかると申してゐました。

亡くなる少し前に、或名高い方から會見を申しこまれてゐましたが、この方と同姓の方で、英國で大層或婦人に對して薄情なやうな行があつたとか申す噂の方がありましたので

ヘルンはその方かと存じまして断らうと致して居りました。しかし、それは人違ひてあつた事が分りまして、愈々遇ふ事になつてゐましたが、それは果さずに亡くなりました。凡て女とか子供とか云ふ弱い者に對してひどい事をする事を何よりも怒りました。一々申されませんが、ヘルンが大層親しくしてゐました方で後にそれ程でなくなつたのは、こんな事が原因になつて居るのが幾人もございます。日本人の奥様を捨てたとか、何とかそれに類した事をヘルンは怒つたのでございます。

ヘルンは私共妻子のためにどんなに我慢もし心配もしてくれたか分りません。氣の毒な程心配をしてくれました。歸化の事でも好まない奉職の事でも皆さうてございました。

電車などは嫌ひてした。電話を取つける折は度々ございましたが、何としても聞き入れませんでした。女中や下男は幾人でも増すから、電話だけは止めにしてくれと申しました。その頃大久保へは未だ電燈や瓦斯は參つて居りませんでしたが、參つてゐても、とても取り入れる事は承知してくれなかつたらうと存じます。電車には一度も乗つた事はございません。私共にも乗るなと申してゐました。

汽車も嫌ひて燒津に參りますにも汽車に乗らないで、歩いて足の疲れた時に車に乗るや

うにしたいと云ふ希望でしたが、七時間の辛抱と云ふので汽車に致しました。汽車と云ふ物がなくて歩くやうであつたら、なんぼ愉快であらうと申してゐました。船はよほど好きでした。船で焼津へ行かれる物なら喜ぶと申してゐました。

ヘルンが日本に參ります途中どこかで大荒れて、甲板の物は皆洗ひさらはれてしまふ程のさわぎで、水夫なども酔うてしまつたが酔はない者は自分一人で、平氣で平常のやうに食事の催促をすると船の者が驚いてゐたと話した事がありました。

燈臺の番人をしながら著述をしたいものだとよく申しました。

或時散歩から歸りまして、私に喜んで話した事がございます。『千駄谷の奥を散歩してゐますと、一人の書生さんが近よりまして、少し下手の英語で、「あなた、何處ですか」と聞きますから「大久保」と申しました。「あなた國何處です」「日本」たゞこれきりです。「あなた、どこの人ですか」「日本人」書生もう申しません、不思議さうな顔してゐました。私の後について參ります。私、言葉ないです。唯歩く歩くです。書生、私の門まで參りました。門札を見て「はあ小泉八雲、小泉八雲」と云ひました』と云つて面白がつてゐました。

『アメリカに居る時、或日、知らぬ男參りまして、私の或書物を暫らく貸してくれと申しますので貸しました。私その人の名前をききません。またその男、私の名前をききません。一年餘り過ぎて、或日その人その書物を返しに參りました。大きい料理屋に案內しました。そして大層御馳走しました。しかし誰でしたか、私今に知らないです』と話した事がありました。

煙草に火をつける時マッチをすりましたら、どんな拍子でしたかマッチ箱にぽつと燃えついたさうです。床は綺麗なカーペットになつてゐたので、それを痛めるのは氣の毒だと思ひまして、下に落さぬやうにして手でもみ消したさうでございました。そのために火傷いたしまして、長く繃帶して不自由がつてゐた事がございました。

ヘルンの好きな物をくりかへして、列べて申しますと、西、夕燒、夏、海、游泳、芭蕉、杉、淋しい墓地、蟲、怪談、浦島、蓬萊などでございました。場所では、マルティニークと松江、美保の關、日御崎、それから燒津、食物や嗜好品ではビステキとプラムプーデン、と煙草。嫌ひな物は、うそつき、弱いもの苛め、フロックコートやワイシャツ、ニュ・ヨーク、その外色々ありました。先づ書齋で浴衣を着て、靜かに蟬の聲を聞いて居る事など

は、樂みの一つでございました。

三十七年九月十九日の午後三時頃、私が書齋に參りますと、胸に手をあてて靜かにあちこち歩いてゐますから「あなたお悪いのですか」と尋ねますと「私、新しい病氣を得ました」と申しました。「新しい病、どんなですか」と尋ねますと「心の病です」と申しました。私は「餘りに心痛めましたからでせう。安らかにしてゐて下さい」と慰めまして、直に、兼てかかつてゐました木澤さんのところまで、二人曳の車で迎ひにやりました。ヘルンは常々自分の苦しむところを、私や子供に見せたくないと思うてゐましたから、私に心配に及ばぬからあちらに行つて居るやうにと申しました。しかし私は心配ですから側にゐますと、机のところに參りまして何か書き始めます。私は靜かに氣を落ちつけて居るやうに勸めました。ヘルンはただ「私の思ふやうにさせて下さい」と申しまして、直に書き終りました。「これは梅さんにあてた手紙です。何か困難な事件の起つた時に、よき智慧をあなたに貸しませう。この痛みも、もう大きいの、參りますならば、多分私、死にませう。そのあとで、私死にますとも、泣く、決していけません。小さい瓶買ひませう。三錢或は四錢位のです。私の骨入れるのために。そして田舍の淋しい小寺に埋めて下さい。悲しむ、

私喜ぶないです。あなた、子供とカルタして遊んで下さい。如何に私それを喜ぶ。私死にました知らせ、要りません。若し人が尋ねましたならば、はあれは先頃なくなりました。それでよいです」

私は『そのやうな哀れな話して下さるな、そのやうな事決してないです」と申しますと、ヘルンは「これは常談でないです。心からの話。眞面目の事です」と力をこめて、申しまして、それから『仕方がない』と安心したやうに申しまして、靜かにしてゐました。ところが數分たちまして痛みが消えました。『私行水をして見たい』と申しました。冷水てとの事で湯殿に參りまして水行水を致しました。

痛みはすつかりよくなりまして『奇妙です、私今十分よきです』と申しまして『ママさん、病、私から行きました。ウイスキー少し如何ですか』と申しますから、私は心臟病にウイスキー、よくなからうと心配致しましたが、大丈夫と申しますから『少し心配です。しかし大層欲しいならば水を割つて上げませう』と申しまして、與へました。この時、コップに口をつけまして『私もう死にません』と云つて、大層私を安心させました。このやうな痛みが數日前に始めてあつた事を話しました。それから『少し休みませう』と申しまして、書物を携へて寢床の上に横になりました。

そのうちに醫師が參られました。ヘルンは『私、どうしよう』などと申しまして、書物を置いて客間に參りまして、醫師に遇ひますと『御免なさい、病、行つてしまひました』と云うて笑つてゐました。醫師は診察して別に惡いところは見えません、と申されまして、いつものやうに常談など云うて、色々話をしてゐました。

ヘルンはもともと丈夫の質でありまして、醫師に診察して頂く事や藥を服用する事は、子供のやうに厭がりました。私が注意しないと自分では醫師にかかりません。ちよつと氣分が惡い時に私が御醫者樣にと云ふ事を少し云ひおくれますと、『あなたが御醫者樣忘れましたと、大層喜んでゐたのに』などと申すのでございました。

ヘルンは書いて居る時でなければ、室内を歩きながら、或は廊下をあちこち歩きながら、考へ事をして居るのです。病氣の時でも、寢床の中に永く横になつて居る事はできない人でした。

亡くなります二三日前の事でありました。書齋の庭にある櫻の一枝がかへり咲きを致しました。女中のおさき（燒津の乙吉の娘）が見つけて私に申し出ました。私のうちでは、ちよつと何でもないやうな事でも、よく皆が興に入りました。『今日僅に小さい筍が一つ頭をもたげました。あれ御覽なさい、黄な蝶が飛んでゐます。一雄が蟻の山を見つけまし

た。蛙が戸に上つて來ました。夕燒けがしてゐます、段々色が美しく變つて行きます』こんな些細な事柄を私のうちでは大事件のやうに取騷ぎまして一々ヘルンに申します。それを大層喜びまして聞いてくれるのです。可笑しいやうですが、大切な樂みでありました。蛙だの、蝶だの、蟻、蜘蛛、蟬、筍、夕燒けなどはパパの一番のお友達でした。

日本では、返り咲きは不吉の知らせ、と申しますから、ちよつと氣にかかりました。けれどもヘルンに申しますと、いつものやうに『有難う』と喜びまして、緣の端近くに出かけまして『ハロー』と申しまして、花を眺めました。『春のやうに暖いから、櫻思ひました、あゝ、今私の世界となりました、で咲きました、しかし……』と云つて少し考へてゐましたが『可哀相です、今に寒くなります、驚いて凋みませう』と申しました。花は二十七日一日だけ咲いて、夕方にはらはらと淋しく散つてしまひました。この櫻は年々ヘルンに可愛がられて、賞められてゐましたから、それを思うて御暇乞を申しに咲いたのだと思はれます。

ヘルンは早起きの方でした。しかし、私や子供の『夢を破る、いけません』と云ふので私が書齋に參りますまで火鉢の前にキチンと坐りまして、靜かに煙草をふかしながら待つて居るのが例でした

あの長い煙管が好きでありまして、百本程もあります。一番古いのが日本に參りました年ので、それから積り積つたのです。一々彫刻があります。浦島、秋の夜のきぬた、莊子、蟲の念佛、枯枝に鳥、拂子、茶道具、去年今夜の詩、などのは中でも好きであつたやうです。これでふかすのが面白かつたやうです。外出の時は、かますの煙草入に銃豆のキセルを用ひましたが、うちでは箱のやうなものに、この長い煙管をつかねて入れ、多くの中から、手にふれた一本を拔き出しまして、必ず始めにちよつと吸口と雁首とを見て、火をつけます。座布團の上に行儀よく坐つて、樂しさうに體を前後にゆるくゆりながら、ふかして居るのでございます。

亡くなつた二十六日の朝、六時半頃に書齋に參りますと、もうさめてゐまして、煙草をふかしてゐます。『お早うございます』と挨拶を致したが、何か考へて居るやうです。それから『昨夜大層珍らしい夢を見ました』と話しました。私共は、いつも御互に夢話を致しました。『どんな夢でしたか』と尋ねますと『大層遠い、遠い旅をしました。今ここにかうして煙草をふかしてゐます。旅をしたのが本當ですか、夢の世の中』などと申して居るのです。『西洋でもない、日本でもない、珍らしいところでした』と云つて、獨りで面白がつてゐました。

三人の子供達は、床につきます前に、必ず『パパ、グッドナイト、プレザント、ドリーム』と申します。パパは『ザ、セーム、トウ、ユー』又は日本語で『よき夢見ませう』と申すのが例でした。

この朝です、一雄が學校へ參ります前に、側に參りまして『グッド、モーニング』と申しますと、パパは『プレザント、ドリーム』と答へましたので、一雄もつい『ザ、セーム、トウ、ユー』と申したさうです。

この日の午前十一時でした。廊下をあちこち散歩して居まして、書院の床に掛けてある繪をのぞいて見ました。これは「朝日」と申します題で、海岸の景色で、深山の鳥が起きて飛んで行くところが描いてありまして夢のやうな繪でした。ヘルンは『美しい景色、私このやうなところに生きる、好みます』と心を留めてゐました。

掛物をよく買ひましたが、自分からこれを掛けてくれあれを掛けよ、とは申しませんでした。ただ私が、折々掛けかへて置きますのを見て、樂しんでゐました。御客樣のやうになつて、見たりなどして喜びました。地味な趣味の人であつたと思ひます。御茶も好きで喜んで頂きました。私が致してゐますと、よく御客樣になりました。一々細かな儀式は致しませんでしたが、大體の心はよく存じて無理は致しませんでした。

ヘルンは蟲の音を聞く事が好きでした。この秋、松蟲を飼つてゐました。九月の末の事ですから、松蟲が夕方近く切れ切れに、少し聲を枯らして鳴いてゐますのが、いつになく物哀れに感じさせました。私は『あの音を何と聞きますか』と、ヘルンに尋ねますと『あの小さい蟲、よき音して、鳴いてくれました。私なんぼ喜びました。しかし、段々寒くなつて來ました。知つてゐますか、知つてゐませんか、直に死なねばならぬと云ふ事を。氣の毒ですね、可哀相な蟲』と淋しさうに申しまして『この頃の溫い日に、草むらの中にそつと放してやりませう』と私共は約束致しました。

櫻の花の返り咲き、長い旅の夢、松蟲は皆何かヘルンの死ぬ知らせてあつたやうな氣が致しまして、これを思ふと、今も悲しさにたへません。

午後には滿洲軍の藤崎さんに書物を送つて上げたいが何がよからう、と書齋の本棚をさがしたりして、最後に藤崎さんへ手紙を一通書きました。夕食をたべました時には常よりも機嫌がよく、常談など云ひながら大笑など致してゐました。『パパ、グッドパパ』『スウイト・チキン』と申し合つて、子供等と別れていつものやうに書齋の廊下を散歩してゐましたが、小一時間程して私の側に淋しさうな顏して參りまして、小さい聲で『ママさん、先日の病氣また歸りました』と申しました。私は一緒に參りました。暫らくの間、胸に手

をあてて、室内を歩いてゐましたが、そつと寢床に休むやうに勸めまして、靜かに横にならせました。間もなく、もうこの世の人ではありませんでした。少しも苦痛のないやうに、口のほとりに少し笑を含んで居りました。天命ならば致し方もありませんが、少しく長く看病をしたりして、愈々駄目とあきらめのつくまで、ゐてほしかつたと思ひます。餘りあつけのない死に方だと今に思はれます。

落合橋を渡つて新井の藥師の邊までよく一緒に散歩をした事があります。その度毎に落合の火葬場の煙突を見て今に自分もあの煙突から煙になつて出るのだと申しました。

平常から淋しい寺を好みました。垣の破れた草の生ひしげつた本堂の小さい寺があつたら、それこそヘルンの理想でございましたらうが、そんなところも急には見つかりません。墓も小さくして外から見えぬやうにしてくれと、平常申して居りましたが、遂に瘤寺で葬式をして雜司谷の墓地に葬る事になりました。

瘤寺は前に申したやうなわけで、ヘルンの氣に入らなくなつたのですが、以前からの關係もあり、又その後淺草の傳法院の住職になつた人と交際があつた縁故から、その人を導師として瘤寺で式を營む事になりました。ヘルンは禪宗が氣に入つたやうでした。小泉家

はもともと淨土宗ですから傳通院がよかつたかも知れませんが、何分その當時は大分荒れてゐましたので、そこへ參る氣にはなりませんでした。お寺へ葬りましても墓地は直に移轉になりますので、どうしても不安心でなりませんから割合に安心な共同墓地へ葬る事に致しました。靑山の墓地は餘りにぎやかなので、ヘルンは好みませんでした。

雜司ヶ谷の共同墓地は場所も淋しく、形勝の地でもあると云ふので、それにする事に致しました。一體雜司ヶ谷はヘルンが好んで參りましたところでした。私によいところへ連れて行くと申しまして、子供と一緖に雜司ヶ谷へつれて參つた事もございました。面影橋と云ふ橋の名はどうして出たかと聞かれた事もございました。鬼子母神の邊を散步して、鳥の聲がよいがどう思ふかなどと度々申しました。關口から雜司ヶ谷にかけて、大層よいところだが、もう二十年も若ければこの山の上に、家をたてて住んで見たいが殘念だ、などと申した事もございました。

表門を作り直すために、亡くなる二週間程前に二人で方々の門を參考に見ながら雜司ヶ谷邊を散步を致したのが二人で外出した最後でございました。その門は亡くなる二日前程から取りかかりまして亡くなつてから葬式の間に合ふやうに急いで造らせました。

一三　交際と交友

交際嫌ひ――座談上手――最後までの友人――エルウッド・ヘンドリック――ウエットモーア夫人――ミッチエル・マックドーナルド――友人を棄てた理由――チエムバレンの解釋――ヘルンの晩年に於ける精神的傾向――交際をさけて專心著作に努む

一眼盲である自分の容貌のために、他人ことに婦人に嫌はれるとヘルンはきめてゐた。これはヘルンを交際嫌ひにした一原因であつた。談話の際右の眼の上にたえず手をやる癖のあつたのは、無意識にこれを隱さうとしたのであつた。帽子も一生を通じて大きな鍔廣の物を選んだ動機も同じであつた。或婦人はヘルンを萎びた背中の曲つた老人の學者のやうに豫想してゐたが、遇つて見ると立派な元氣な人であつたと云つたのを、反語と解して愚弄されたと思つた。ニユ・ヨークでアルデンの家に滯在中、アルデンの娘のアンニーと

馬車で遠乘に出かけた時、ヘルンの右側にあつたアンニーの話のうちに一眼の男の話があつた。話が終つてから、ふと氣のついたアンニーは言分けをした。ヘルンは答へて『かへつてその事を忘れて下さつた人はこのアメリカであなたばかりと思つて私は感謝します』と云つたと傳へられて居る。

ヘルンがこんな事を氣にしたために氣おくれして快活に振舞ふ事ができなかつたのと、普通の婦人の喜ぶお世辭とへつらひを云はなかつたのと、邊幅を修飾する事は全然嫌ひであつた事などのために、すぐれた婦人を除いて多くの婦人、たとへば老友ワトキンの夫人、クレイビエル夫人、グールド夫人などに喜ばれなかつたのは事實であつた。それからヘルンは朝は勿論夜中でも眼が覺めると同時に、床の中で喫烟する習慣をもつてゐた。近眼のヘルンはよくシートを焦した。これがクレイビエルやグールドの客となつて滯在して居る間に子供達に評判のよかつたのに反して、そこの夫人達に不評判であつた原因であつたと云はれて居る。一方邊幅を修飾しない身なりのためにヘルンが友人を訪問しても、女中や玄關番に取りついで貰へない事があつたために怒つた事もあつた。最後にクレイビエルを訪うた時もさうであつた。

しかしこの一見目立たないはにかみのヘルンが小さい部屋で少數の氣心の知れた友人と會談の場合には、この人程座談の上手な人、同時にこの人程よい聽手はあるまいと思はれた。ニユ・オルリアンス時代の友人はヘルンのギリシヤの祖先に名高い噺家がゐたのであらうと云つた程であつた。東京の大學時代の講義もさうであつたが、その話しぶりはやや低聲で口早で、よどみなく流れる音樂のやうであつた。聽く人は彼の文章に魅せられると同じやうに彼の談話にも魅せられた。ヘルンの著作や人物から考へて案外に思はれる事は常談やしやれの巧みな事であつた、それからをかしい時の大笑であつた。餘り大聲で高笑をしてから氣がついてきまりの惡い顏をした事もあつた。

ヘルンが最後まで交際なり文通なりを續けた人々は、フエノロサ、サー・エドウィン・アーノルド、エルウッド・ヘンドリック、ミッチエル・マックドーナルド、ツエットモーア夫人及び少數の日本人であつた。『骨董』を捧げたサー・エドウィン・アーノルドはヘルンよりもさきに歿したので、この人に與へた手紙は殘つてゐない。ヘルンが始めて佛教を知つたのはこの人の『アジアの光』によつたのであつた。『佛領印度の二年間』を捧げたアルヌー、『ユーマ』を捧げたテニニスン、『チタ』を捧げたドクトル・メータスには

ーカーベ・ーヂーペたげ捧を『鬪遺學文異』とンキトツ・ーリンへ。たつかなは會機の通文

に與へた東京時代の手紙はないが、文通の機會はなかつただけであつた。コートネー夫人

からも返事がなかつたので、熊本時代から文通は絶えた。『異國情趣と回顧』を捧げたハ

ウルは米國海軍の軍醫であつたから、マックドーナルドに紹介された友人であつたらうと

思はれる。『靈の日本』を捧げたアリス・フォン・ベイレン夫人はシカゴの人であつた事

と、この人から贈つた書物が數部ヘルンの藏書中に發見された事以外に今のところ分つて

ゐない。『東の國から』を捧げた西田千太郎はヘルンよりもさきに歿した。『心』を捧げ

た雨森信成は米國で學問して、英佛獨の各國語に精通し、和漢の學問にも佛教にも精しか

つたので、何でも知らぬ事のない不思議な人とヘルンに見られてゐた。『日本に來た殆ど

あらゆる外國の著述家――特にサー・エドウィン・アーノルドを助けた人です。……彼は

私がこれまで遇つたうちの最も驚くべき人物の一人です』（全集第十一巻一四一）とヘルンは云

つた。陸奥宗光伯にも知られてゐたと云ふ人でありながら、晩年西洋洗濯屋の主人として

グランド・ホテルに出入してゐたところから見ると隠れた學者で一種の畸人であつたらう。

晩年ヘルンは彼と疎遠になつた。ヘルンの書簡がまとまつて雨森未亡人の手からアメリカ

に渡つて居ると以前に聞いたが、その後の事は分らない。『知られぬ日本の面影』を捧げ

たチエムバレン、それからメースンは晩年になつて少し疎遠になつたが、ヘルンの歿後これ等の二人、殊にチエムバレンがヘルンの遺族のために盡した事は一通りではなかつた。エルウッド・ヘンドリックは一八八八年ヘルンがニユ・ヨークで得た友人であつた。ヘルンが最も思ひ切つて打明けた手紙を最も多く送つて居る友人の一人である。ヘンドリックから、遺族に送つた手紙に、左の文句がある。

私がラフカディオの友人であつたと云ふよりは、ラフカディオが私の友人であつたと云ふ方が至當です。何故と云ふに、私がラフカディオに與へた助けなり世話なりは、ラフカディオが私にしてくれた親切な助けと、深い同情に比べると、到底比較にならないからです。

ニユ・ヨークにゐた時分には人ごみの急がしい、騒がしい往來を通る事は、ラフカディオに取つて、中々むづかしかつたので、私は助けて一緒に通りました。ラフカディオはむづかしい事を人に頼むやうな人ではありませんでした。私のした事位は誰にてもできる事です。ところがラフカディオは私にあらゆる親切をつくしてくれました。私は何年間も日記でも書くやうに、人にできないやうな親切をつくしてくれました。

何でもラフカディオに書き送つて打ち明けました。不幸の時や腹の立つ時は、何だかラフカディオに云はないでは居られないやうな氣がしました。何故だか分りません。ただラフカディオの深い智慧と博い心でそれに同情してくれると思つたからでせう。そして、いつでも驚くべき智慧を與へてくれました。時々賞めてくれました。時々それはいけないと云つてくれました。しかしその時には優しく、親切に申しましたので、私は怒つた事はありません。時々やけを起しさうな場合に、ラフカディオは巧みに救つてくれました。……

記者は先年ヘンドリックに手紙を送りて、ヘルンと交際を結ぶに到つた當時の事情、及びヘンドリックの短い自傳を書く事を依賴した時の返書を抄譯する。

……ラフカディオがニユ・ヨークにゐたのは一八八八年の冬から八九年の春までであつたと思ふ。當時私はローリンス夫妻の家にゐたが、ローリンス夫人はアリス・ウヱリントン・ローリンスと云つて文人でした。ミス・ビスランドを通じて、ラフカディオを知るやうになつてゐたので、或夕方晩餐に招いた。何でも九月か十月頃であつたと思ふ。ラフカディオは途に迷つて、急に家が分らないので、遲刻して來た。そし

て困つてゐた。その晩ローリンス夫人は少し拙い事をやつた。それはその晩ラフカディオに紹介するつもりで色々の文人を招いて置いたのであつたが、こんな事はラフカディオの氣に入らないから、固くなつて、何も云はないでゐた。私はラフカディオの困つて居るのを察してそつと「今夜これから外へ行く約束があるが、それは是非と云ふ程の會でもないから（獨逸人の通信者の例月會でした）なんなら又途を迷はないやうに見送りがてら同行致しませう」と云つて見た。當夜の紳士淑女間の文學談や何かから逃れる機會を如何に喜んでラフカディオはつかんだでせう　十分程後に私共は家を出た。これが私共の交際の初まりでした。それから或ビーアハウルに入つて翌朝一時まで話しこんだ。それから翌年の春、日本へ出發するまでは毎週二三晩は必ず遇つた。朝出がけにラフカディオの宿に出かけて、晩の約束などをした。そのうちにラフカディオがどんな人が好きで、又どんな人が嫌ひかと云ふ事も分つたので、なるべく注意して、よい人には遇はせるが、生意氣に氣取つた人と、どこか冷酷なやうな人の二種類だけは、大嫌ひであつたから、そんな人々の居るところへは、連れ出さぬやうにした。……

ニユ・ヨークに於て、ラフカディオが最後の夜を如何に過したかはつきり覺えてゐ

ない。それから私はさきに行つて、ラフカディオを待ち受けて、途中オルバニーに立ち寄らせた。私の父の家はオルバニーから八哩程離れたところにある立派な家ですそこで、ラフカディオが泊つたか、どうか覺えてゐない。覺えて居るのは、私の兄がラフカディオの承諾を得て午餐に數人の客を招いた事であつた。兄はいよいよ日本に向つて立つて行くラフカディオのために『ニュ・ヨークでの最後の御馳走』と云ふので、大に歡待した事を覺えて居る。しかし私がラフカディオと別れるのが悲しかつたのと、又ラフカディオは日本の事が氣がかりで心配であつたのとで、この日の會は沈んでゐた。しかし兄は中々人を喜ばせる手腕はあつた。それから兄と私はラフカディオと共に停車場に赴いて……彼が汽車に乘つて日沒の方へ行くのを見送つた。……

ヘンドリック自ら語るところによれば、彼は一八六一年ニュ。ヨーク州オルバニーに生れ、一八七七年獨逸に渡り十七歳の時チュリヒの大學に入つて化學を學んでオルバニーに歸つて應用化學の工場を設けて、一八八一年——一八八四年の間營業したが失敗に歸したので中止した。それから一八八四年からニュ。ヨークに出て火災保險の事業に從事した。ラフカディオに遇つたのはこの頃であつた。後一八九〇年ロンドンの或會社のためにアト

ランタ、リッチモンド等に赴任して一八九六年にはボストンに赴任した。一九〇〇年親戚の人々と共に銀行、株式仲買の事業に從事して今日に到つて居る。化學に興味を有する外、貧民に音樂を敎ゆる團體、盲人敎育の團體等に關係して居る。共和黨員である。文藝の素養もあつて「大西洋評論」の寄稿家である。結婚して新夫人の寫眞をヘルンに送つた時、その寫眞についてヘルンは飾りのない批評を書いて送つた。返事が少し後れた時、ヘルンは怒られたと考へて、『人間は妻帶すれば友人を捨てる者だ、私も又ボストンの親友を失ふに到つたか』（全集第十一卷四一四）と嘆息したが、ヘンドリックは、事實そんな事には頓着しなかつたので、最後まで文通は續いたのであつた。大正十一年この人の娘が日本に遊んでヘルンの遺族を訪問した。

エリザベス・ビスランド（ウエットモーア夫人）は南北戰爭のために破產したルージアナ州の大地主トマス・ビスランドの娘として一八六一年二月十一日に生れた。健氣にも家計を助けるために進んで新聞記者となつて、當時ヘルンが記者をしてゐたニユ・オルリアンスの「タイムス・デモクラット」社に入つた。最初はビー・エル・アール・デーンの文名で詩を作り文を書いてゐた。ヘルンの文章を讀んで感嘆の餘り、進んで交際を求めたのは一八八二年の冬であつた。その後ニユ・ヨークに移つて一八八九年十一月「コスモポリ

タン雜誌』のために、外の雜誌社から出た今一人の婦人記者と世界一週の競走を試みた時日本の横濱に立寄る事二十四時間であつた。この時『グランド・ホテル』に滯在中のマックドーナルドと知るやうになつて、歸米の後ヘルンにこの人を紹介したのであつた。ヘルンが日本に渡つて妻帶してから約一年の後、一八九一年十月チャールス・ウエットモーアと結婚した。ヘルンの死後『傳記及び書簡集』二册『日本の手紙』一册を編纂したのも一は遺族のためであつた。明治四十四年夫と共に世界一週の途中二度目に日本に渡つて東京京都六甲山に半年を送つた。大正四年大正天皇の卽位式拜觀のために三度目に夫と共に日本に來た。夫の死後大正十一年に四度目に日本に來て同じく京阪地方から東京と松島に約半年滯在した。この人の著書は以上の『傳記及び書簡集』の外に、つぎの小說と隨筆と紀行がある。

A Flying Trip around the World

A Candle of Understanding

The Secret Life

At the Sign of the Hobby Horse

Seekers in Sicily

ヘルンはこの人に「日本雜事」を捧げて居る、ヘルンとこの人との友情をヂャン・デャック・アンペールとマダム・ミカエルとの關係に比したり、又さらに進んでダンテとビアトリスに比したりする傳記家がある。

ヘルンの友人はヘルンの感化によりて何れも大の日本びいきである。記者は明治四十四年小泉家で始めてウヱットモーア夫人に遇つた時、夫人が日本料理の午餐を刺身は勿論漬物までも殘さなかつたのを見た。この時夫人は滯在中の時間を利用して茶の湯生花等の日本藝能を習得した。歸國の後オイスター・ベイにある宏壯なる邸宅を賣り拂つて英國サレイ州ウヱスト・パイフリートに移住し、そこの邸宅の一室を「千鳥の間」と名づけて日本の美術品や骨董品で裝飾した事を記者は聞いた。一年餘りの後、ワシントンに歸つてウッドランド・ドライヴ二八〇〇に大邸宅を造つて、『音無庵』と云ふ名をつけて日本風の室內裝飾をして居る事を聞いた。玉露の茶と羊羹（ビーン・ペースト）と水飴を好んで小泉家を通じて、日本橋の山本と本郷の藤村から折々取りよせて居る事も聞いてゐた。日本製の模樣のある短冊形の封筒や長い卷紙もつねに使用して居る事も承知してゐた。日本の桐簞笥も重寶だと云つて使用して居る事も聞いた。夫の歿後やはりその大邸宅に居住して日本大使館の人々を時々

招いたり、軍縮會議の當時加藤德川兩全權その他の人々を呼んだりしてゐた。

大正十年六月並木の綺麗なワシントンの町を螢の飛び交はす頃記者は夫人に招かれて數日客となつて逗留した。蜂雀のさへづりの外に聞ゆる物は餘りない閑靜な場所であつた。門を入つて玄關にさしかかつて、大理石のモザイックで Otonashi-An と出してあるのに氣がついた。『音無』は適當だが『庵』は不似合と思つた。鐵道會社長のチャールス・ウエッモーアが存命中は二十人の男女の召使があつたさうだが、その當時は八人に減じてゐた。室內裝飾などその外凡て聞いてゐた通りであつた。食事のあとで何を飮むかと聞かれて何心なく珈琲と答へた。同じ逗留客に夫人の妹メラニー・オウエンとその娘があつた。記者に向つて『おかげでこの家で珈琲を飮まれます。私達ばかりの時には姉は日本の綠茶をしか飮ませません』と云つた。氣がついて見ると夫人だけは日本の茶を飮んでゐた。それから記者は夫人に自分には別に好みがない事、問はれたから出まかせに答へた事、實は自分は一切の食物に對して好惡のない事を云つて辯解した。數日の滯在の間に記者は夫人の日本趣味の氣まぐれでない事、日本の事物に對する深き理解と同情のある事を深く感じたのであつた。大正十三年に排日の法案が通過してから夫人はワシントンを去つて瑞西チェネヴに移住して約一年餘の後、今故鄉ヴァヂニア州にかへつて新築した邸宅に移つて居る。

大正十二年頃の『中央公論』に出た徳川夢風の「文人趣味提唱」と題する随筆に「或合関ある外交官から聞いたが、何事も日本でなければならないと云ふ熱心な日本びいきの米人は中々多いが、ワシントンにもこんな貴婦人が二人ある。これは皆ラフカディオ・ヘルンの感化によるのださうだ」と云ふ意味の一節がある。この外交官とはこの頃の米國大使幣原男の事。二人の貴婦人と云ふのは一人はミス・シドモア。今一人はウエットモーア夫人の事である。

ヘルンが『知られぬ日本の面影』と『影』とを捧げたマックドーナルドにはビスランド女史からの紹介狀を携へて横濱『グランド・ホテル』で面會して食事を共にしたのが、この二人の交際の初まりであつた。一八五三年九月、ペンシルヴエニア州スクールキル・ヤウンティに生れた。兩親はアイルランドから移住した人々であつた。米國海軍の主計大佐であつた。（アメリカでは主計少將が最高の地位）日本に駐在する事數年づつ前後五回、〔一八八八――一八九一、一八九七――一九〇〇、一九〇二――一九〇五、一九一一――一九一四、大正九年――大正十二年〕退職の後日本に永住のつもりで大正九年横濱『グランド・ホテル』の社長となり、ホテルの建物と運命を共にしたのであつた。この人の第二回の共に室內に入ると同時に、大正十二年九月一日の震災の時、散歩から歸つて從者と駐在中はヘルンの富久町時代であつたが、ヘルンは東京から遊びに行つて『ホテル』に泊

つた事もあつた。最初は食堂でマックドーナルドはヘルンを多くの人に紹介したが、ヘルンは『見せ物でない』と云つて機嫌を惡くしたので止めた。第三回（明治三十五年——三十八年）の滯在中にヘルンが歿くなつたが、この頃はヘルンから進んで横濱を訪ふ事はなく、ただマックドーナルドの訪問を受けるだけであつた。殊にヘルンが大學を止めた當時は殆ど每日曜日にマックドーナルドは横濱から出て西大久保邸を訪問して書齋にヘルンの陽氣な笑聲がたえず聞えた。マックドーナルドはヘルンの天才を信じ、百方これを庇護する事を怠らなかつた。ハーパー書肆からの送金を受取らうとしなかつた時に處した方法はすでに述べた。記者がこの人の經歷を聞かうとした時に、彼は謙遜して『自分は一生こんな事務官として、きまつた仕事を永くやり來つた事の外に、何も語るに足る事はない。ただ誇るべき事はヘルンの友人であつた事だけ』であると云つた。ヘルンの死後、外國に於ける出版版權等の事について遺族の後見人たるべき人を求めた時、梅謙次郎の說によつてマックドーナルドに依賴する事になつた。彼は快諾してそれから遺族の利益のためにあらゆる工夫を講じた。版權の一部を書肆に賣渡した時交涉の任に當つたのも、自分で訴訟を起してヘルンの藏書原稿をグールドから取戾したのも、草稿の一部分を高價に賣つたのも、皆彼の力であつた。ヘルンは生前平均一割以上の印稅を得なかつた。中には僅かに七分五

厘の物さへあつた。こんな事はヘルンは書肆まかせてあつた。ヘルンの歿後の『書簡集』その他は彼の力によつてその二倍以上になつて居る。グールドから取戻した『聖アンソニーの誘惑』の翻譯を彼自らの費用で出版した。それから講義筆記出版に關する記者等の進言を容れて、當時の學生達の筆記帳を借り受けて、自ら、或はタイピストを使つて、原稿をタイプにしたのであつた。事實その當時の彼は米國東洋艦隊の主計長としてよりも遙かに多くの時と氣力を、ヘルンの講義筆記の整理のために費したのであつた。ヘルンが晩年「自分の死後遺族がどうなるだらう」と云つた時いつも彼は『大丈夫、心配に及ばない』と云つた。ヘルンは又夫人に向つて「あの人は親切な頼もしい友人、敵としては強い恐ろしい人、喧嘩をして負けた事のない人」と云つたさうである。頼もしい味方、恐るべき敵、弱を助け強を挫き、正を愛して不正を憎む律義な義俠なケルトの熱情がこの二人の友情の根柢をなしたのであつた。彼が『グランド・ホテル』の社長時代、火災保險契約の際地震をも加へるのが正當と考へてその通り契約したので、この會社に取つては震災のための損害は餘りなかつた。歿後遺言狀を開いて、ヘルンの相續人にも多額の遺産を與へた事が發見された。彼の日本びいきは云ふまでもない。米國にありても日本にありても、飲料としては日本の『ウィルキンソン炭酸水』をしか飲まなかつた。これを不死不老の泉と稱して

日本のために宣傳する事を忘れなかつた。

彼が第二回の滯在中の事であつた。ヘルンの愛讀者にシャム駐在米國公使チョン・バレットがあつた。ヘルンの著書は細大洩らさず讀んでゐた。日本に立ちよつてヘルンに遇ふ事を東京の米國公使館に謀つたが絶望であつた。ただ一縷の望みとして當時横濱にゐたマックドーナルドに相談する事を勸められた。バレットは彼に頼んだ。紹介はヘルンの嫌ふところ、ただ偶然落ち合つたやうにつくるより外はなかつた。そこでマックドナールドはバレットに向つて『ヘルンはこの金曜日に大學の講義の終り次第横濱に來て、日曜まで滯在する事になつて居る。そこで土曜の午前に來て、私の部屋の戸をたたきなさい。私は、「カムイン」と云ふ。それから偶然のやうに、紹介と云はずに「これはミスタ・チョン・バレット」と云はう』と約束した。筋書通りに事件は進行して、遂にその部屋でヘルンはバレットと二時間談話に耽つて甚だ樂しさうであつた。蓋しバレットは博覧の人、談話演説の達人であつた。バレットは歸國して大統領ルーズウェルトにこの話をして共に興じたと云ふ事である。マックドーナルドは『私がヘルンを騙したのは前後唯一回、この時だけであつた』と云つた。

ヘルンが最後まで交際文通を續けたのは以上少數の人々であつた。談話は上手だが交際の下手なヘルンは友人を多く作らなかつた。ただこれ等少數の人々はシドネイ・コルウィンやエドマンド・ゴッスのスティヴンスンに於ける如く、サー・レスリー・スティヴンの舅サッヤレイに於ける如く、ヘルンの生前より死後に到るまで盡したのであつた。

ヘルンが多くの友人を次第に捨てたと云ふ事は、ヘルンの傳記家によつて一般に認められ、又その理由も說明されて居る。捨てたと云ふのはヘルンの場合では多く文通しなくなつたと云ふ意味である。ヘルンのやうな長い親切な手紙を書いた人は一度書かなくなると、その對照は著しく目立つ點もあつた。記者はこの點に於て日本の年賀狀と云ふ便利な習慣に思ひ及ぶ。如何に交際が絕えたやうな間柄でも、この年賀狀と云ふ簡單な習慣で絕えざる事縷の如く、淡き事水の如き關係を維持する事ができる。この習慣のないところでは、文通しない事、文通に對して返信をしない事卽ち絕交のやうに見なされる。しかしヘルンの場合に對するチェムバレンの說明がある。これが恐らく最も至當な、又同情のある物と思はれる。その大意はつぎのやうである。

……私の知人のうちにはこれを忘恩だと云つて深く憤つて居る人もある。私は少しもさうは思はない。しかし私はヘルンの如き天才と交際を絶つに忍びないで、幾度も舊交を暖めようとしたが駄目であつた。初めに冷かな丁寧な返事が來て、つぎからは全く返事がなかつたので、仕方がなく斷念した。私が深くこれを咎めないのは、この友人を捨てると云ふ事の根本はヘルンの著作の最大長所をなす所以の性質、卽ちヘルンの「理想主義(アイデアリズム)」と云ふ事に存して居るからである。ヘルンに取つては始めての友人はあらゆる美德を具備した人間以上の物であつた。ヘルンの美はしい主觀的色彩でこの偶像は着色されてゐた。……しかしヘルンは感情的であると同時に、一方鋭敏なる科學者の洞察をもつてゐた。間もなく自分の偶像も要するに只の人間である事を發見する。それから欺かれたやうに憤る。更に加へて、ヘルンは、自分の熱烈なる哲學上宗敎上の意見と一致しない人を赦さなかつた點がある。……しかし、こんな友人を捨てた場合に、捨てられた友人よりも、小兒のやうに人なつこい同情に富んだヘルン自身の方が、どれ程苦しんだか分らない。……

次第に文通しなくなつた一二の例を述べて見る。

シンシナーティ時代の友人に音樂批評家クレイビエルがあつた。音樂に關する著述多く、そのうち日本語に譯されて居る物もある。ヘルンがニユ・オルリアンスに行つてから、彼は『ニユ・ヨーク、トリビユン』の記者となつた。ヘルンはニユ・オルリアンスからたえず讀書修養、感想、日常生活について彼に書き送つて居る。ヘルンがニユ・オルリアンスを引き上げて、ニユ・ヨークに出た時、彼はヘルンを出迎へて自分の家に泊めた。久しく田舍にゐた文人が滿十年ぶりに都の友人――文壇樂壇の流行兒となつて居る友人――の家庭に來て見る。滿十年積つてもゐた友情を吐露しようと思つて來た文人は、忙しいニユ・ヨーク生活を背景にした流行兒の周圍の空氣に少し不安を感ずる。手紙の上て見たのは昔の友人、遇つて見た友人は變つて居る。話さうと思つた十分の一も話す氣分になれない。冷かに聞える。幻滅を感ずる。この人も自分の友人として占有する事はできなくなつたと感ずる。ヘルンがクレイビエルと離れたのは二人の世界が十年のうちに次第に離れたのであつた。その間にヘルンを喜ばなかつたクレイビエル夫人があつた。ヘルンの無頓着な身なりを賤んで取りつがない女中が來たりした　クレイビエルへの文通は日本時代にはなかつた。しかしヘルンの歿後クレイビエルは美はしい思出の記を書いた。

フィラデルフィヤのドクトル。グールドは眼科醫であると同時に醫學、文學等の著書多

く、詩集も出して居る。ヘルンがヘンドリックに書いた手紙につぎの一節がある。

君は覺えて居るだらう、私はフィラデルフィアでヂョーヂ・グールドと云ふ醫者の家に約五ケ月ゐた事がある。この人は私に來てくれ、一夏を一緒に過したいからと賴んで來たので行く氣になつた。その間に宿料を取つてくれなどと云ひ出すと、そんな事を云ひ出すのは侮辱だ。ただ君の世話をしたいだけだと云つて相手にしなかつた。どうも私には北方の人の性質は餘り分らない――昔から分らなかつた、いつでも人の云ふ事を眞面目に取つてゐた。ところがたうとうこの人は私に妻が友人の嫉妬をして、ゐて貰ひたくないと云ふから出てくれと云ひ出した。それから金をくれて――實はその頃窮してゐたから――「ニュ・ヨークに行つて、もう一度熱帶地方へやつて貰へるかどうか、相談して來給へ。それから歸つてその結果を報告してくれ給へ」と云つた。

ヘルンはこの人から借りた八十弗のために藏書を預けた。日本に來てからグールドから催促された時、藏書を賣り拂つてくれるやうに云つてやつた。フィラデルフィア滯在中グールドのために著述の助けもしたのであつた。グールドの近視に關する論文に自分は利用されて居る事を考へても見た。それからさきの事は、記者が序文のうちでグールドの著書

『ラフカディオ・ヘルンに關して』の解題で述べた通りであつた。

日本にある外人の同棲して居る日本婦人に對する態度を、ヘルンは憤慨してそれから交際しなくなつた二三の例は第一章ですでに述べた。アメリカ時代のヘルンは知らないが、日本に於て妻子のあつたヘルンに取つては人生は嚴肅な眞面目な物であつた。ピエル・ロティの文章には敬服したが、『お菊夫人』には不快を感ずるやうになつたであらう。世界に於ける最高最美の思想をもつて養はれた人の精神の傾向はかくあるべきであらう。

短所を捨てて長所だけて、卽ち人のただ一方面だけで交際する事はヘルンにはできなかつた。『全部か、然らざれば無』と云ふのがヘルンの行き方であつた。一方面のために全體を理想化して後に煩悶した事はチエムバレンの解釋の通りであつた。『人と人との關係は多くは軋轢になる。そこで昔の賢人は交際(ソサイチイ)を捨てて孤獨(ソリテユド)を選んだ』(全集第十三卷四三二)とヘルンは云つた。少數の例を除き、多數の友情に對する失望は更に大なる原因卽ち著作に對する熱心と相待つて、晩年のヘルンをして一切の人事關係を絶つて、專心一意著作に刻苦精勵せしむるに到つたのであつた。

一四　趣味と修養、刻苦精勵

忙しき一生――二度半の眼一つ――たえざる推敲――孤獨寂寥――寸陰を惜む――義務に忠實――手紙――凡ての印象を深く受ける――一心不亂――夫人の助力――娛樂――趣味――蟲の愛――草木の愛――進化論と輪廻の說――夢文體――文章――『刻苦精勵卽ち天才』

『クレオパトラの一夜、その他』（一八八二年）の出版以來、小說、紀行、飜譯等、アメリカ時代（一八八九年まで）に出版せられた書物八部、雜誌に出た小說一つ、引受ける書肆がなかつたのでそのままになつた飜譯二部、平均一年一冊以上になつて居る。日本時代の分は四冊の日本お伽噺を除いて十二部十三冊。明治二十三年から三十七年までの十四年間、同じく一年一冊の平均になつて居る。しかもヘルンは教師として或は新聞記者としていつも多忙であつた　松江でも、熊本でも、殊に熊本では著述の暇が思ふやうにないの

て神戸に出たが、ここでも毎日一欄の記事を作らねばならなかつた。東京では大學の受持時數一週十二時間のうち過半は講義であつたので、その準備に要する時間の少くなかつた事はすでに述べた。

思ふやうに暇がない、随つて思ふ様に旅行ができない、述作ができない。これがヘルンの絶えざる不滿であつた。更に一のハンディキャップがあつた、卽ちヘルンの眼の不自由であつた。近視それ自身は自然の觀察に於て大なる障害にはならない。健全な眼の人には自然は寫眞の如く、近視の人には繪畫の如く映ずるとさへ云はれる。ただヘルンの左の眼は前に述べたやうに失明し殘る一眼は極めて强度の近視であつた。使用してゐた片眼鏡(モノクル)は二度半であつた。この二度半の眼鏡の力をかりて物象を辛うじて寫さうとする網膜の一部は更に缺損してゐたのであつた。角膜が凸出して來たので、眼鏡を始終かけて居る事もできなくなつたのはニユ・オルリアンス時代であつた。それからは特別に物を見る時の外は使用しなかつた。(客間に出て初對面の人に接する時は、この眼鏡を取り出し、庭園を眺め、床の間を眺め、隙を見て電光石火の如くその人を瞥見して、のち容貌風采衣服等の觀察を家人に語る事頗る詳しかつた)その上一年に平均一度は眼のために讀書著作を廢して休養せねばならなかつた。眼科醫グールドは『ヘルンのあの弱い眼が、あれだけの著作に

たへたのは生理學上の奇蹟である』と云つた。（『ラフカディオ・ヘルンに關して』一〇六）

その上ヘルンは遲筆であつた。筆は滯り勝ちであつたといふ意味ではない。ヘルンの文章にむしろ一氣呵成になつたものが多い。インスピレーションは書齋にある時ばかり來るわけはないと云つて散歩の時でも放さなかつた備忘錄（ノート・ブック）に『靈の日本』にある「吠」の一篇（牛込富久町の犬の記事）が、もとより出版になつた物と餘程變つて居るが鉛筆で走り書きに書いてある。ただヘルンの推敲が長かつた。『經驗のある文士でも、三度は書き直し（リライト）、思ひ直し（リコンシダー）、作り直し（リコンストラクト）、改め直し（リコルレクト）、せねばならない。始めて文章を世間に出す人は、少くともこの三倍即ち九度（詩歌ならば五十度）直しても充分とは云へない』（全集第十三卷一七〇）と云ふのが學生に對する教訓であつた。『かくの如く推敲しこれを篋底に收めて、少くとも半年を經て忘れられた時分に改めて讀み直せ。この時は既に作者でなく、讀者批評家になつて居る。そのうちに自分を動かすところがあれば、必ず天下の讀者を動かすに相違ないと信じてもよい』（全集第十三卷三五二）とヘルンは云つた。ヘルンは自らの經驗を語つたのであつた。推敲添削して第一回の原稿を作つてから、側にある百味簞笥やうの抽斗に入れて半年以上もそのままにした。添削推敲の時は室内を徘徊して朗讀するを常とした。その上校正の時、さらに添削した。『印刷になつて後に直すのが、最後の仕上げである』（全集

第十一卷四六六）と云つた。

書齋に閉ぢこもつて一心不亂になつて居るヘルンの感興を妨げまいとして家人は一方ならぬ苦心をした。掃除をするにも音を立てぬやう、緣側を歩くにもつま立をした。僅かに五分の約束で夫人に書齋の掃除を許す間でも緣側を歩きながら文章を練つてゐた。

「觀察を以て生命とする客觀詩人は、好むと好まざるとを問はず、博く人と交際し、人の行爲動作を見てこの活動の世間を知らねばならない。メレデイス、ブラウニングはかくした。これに反してテニスン、ローセッティ、スウィンバーンの如き主觀詩人は孤獨寂寥の生活を送つた。かかる詩人は世人の注目の焦點となつて、しかも自らに忠實である事はできない。かかる詩歌は多くの時間と多くの思想と、沈默の勞働と、あらん限りの眞面目を要する。世間と交はる事少い程その人の技術（アート）のためによい。所謂世間の娛樂は全く避けねばならない。それができぬやうならその人は詩人にはなれない」これがヘルンの講義の一節であつた。（全集第十三卷一五四）ヘルンに隨へば、主觀詩人を交際社會へ引き出さうとするのはその人の最善なる物を破壞する所以である。ヘルンが晚年次第に交際を避くるに到つたのをヘルンの奇癖とばかり見るのは正當でない。その原因の一つは寸陰を惜んだのであつた。日本の大學教授が公私の會合に多く引き出される事を悲しんだ手紙は既に掲げた。

日本では未だ時間の價値が認められてゐないと歎いた。二つには、交際を博くし、度量を大きくし、清濁併せ呑むやうに圖々しくなり、神經を遲鈍にする事を修養と云ふのなら、ヘルンの如き主觀詩人に取つてはこれは修養でなく、恐るべき墮落であつた。善なる物美なる物に對する感受性を鋭敏にして置く事を何よりも努め、これを失ふ事を何よりも恐れたヘルンに取つては、どうでもよい談話のうちに入る事は、俗惡なる趣味の感染であるかのやうに思はれた。大學で後に教官室に入らなくなつたのも、その一原因はここにあつた。ヘルンは松江及び熊本の時代に多くの人に接し多くの會合にも出た。『知られぬ日本の面影』『東の國から』から續いて『心』と『佛の畠の落穗』は客觀的叙事的の物が多い。東京時代になつてからの著書『異國情趣と回顧』以後の物は次第に内省的主觀的になつて、日常の見聞を記入した備忘錄を使用する事が少くなつた事を示して居る。同時に交際もなくなつて居る。

著作に一心不亂であつたヘルンも同時に職分には忠實であつた。自分の學生を『私の子供』と云つて、その訪問に應ずる事を一種の義務と心得てゐた。困るやうな有難いやうな心持ちで會ふ事を常とした。『帝國文學、小泉八雲號』に「留任」と題する小山内薫の文

中に、留任運動に行つた委員が二度行つて面會謝絶され、三度目に漸く會ふ事を得たとあるのは傳へた人の誤りである。當時の委員、安藤、石川、落合の三人は一度も謝絶されずに會つたのであつた。土井晩翠の如きも「只今散歩に出ました」と云はれてそのまま上つて待つてゐて會つた事もあつた。熊本時代の學生安河内麻吉の來訪した時、その人とは知らずに取つぎの者が斷つた事が分つて、あとを追ひかけさせて漸く呼び戻した事は既に述べた。記者の如きも三十六年金澤から上京の際訪問して斷られ、名刺を殘して去らうとして呼び戻された事があつた。學校で學生が「先生の御宅へ參りたいが如何ですか」と聞けば「用があればこそ來て云つてくれ。宅へはなるべく來てくれるな」と云ふのが普通であつた。しかし富久町乃至西大久保を遠しとせずして訪問する程の熱心な學生があれば、ヘルンは之を歡迎したのであつた。これは多くの學生の經驗したところであつた。

しかし、これは學生にだけ例外で、一般殊に外人に對してはさうではなかつた。松江時代熊本時代には訪ひ來る外人も多くはなかつたので大概は會つた。東京では後に親しくなつたフェノロサでも、米國公使でも初對面の人は悉く拒絶して會はなかつた。『私に面會を求むる者は私を動物園の動物視する好奇心を以て見物に來るのだ。眞に同情の心を抱いて來るのではない』と云ふのであつた。ヘルンが「グランド・ホテル」に於てマックドー

ナルドに誰彼に紹介されるのを嫌つた事は既に述べた。好意を以て天長節の夜會の招待劵を贈つた大學の清水書記官に對して『自分のやうな風采の上らぬ者を、そんな晴れの場所へ引出してなぶつてはいけない』と云つて當惑させた事があつた。ヘルンの愛讀者でヘルンの著書を送つて署名を求むる者には喜んで與へたが、もしそのうちに利益（ゲーン）の目的の現れた時にはヘルンの著書全部を送つて署名を求めても、そのまま送りかへした例はあつた。この點ではヘルンは頗る一國者であつた。

交際を避け、寸陰を惜んだが、多くの手紙には直ちに返事を出して澁滯する事はなかつた。返事だけではない。進んで一面識のない人にも手紙を出した例はある。明治三十六年、木澤醫師から聞いて、胃癌で病んでゐた尾崎紅葉へ、病氣見舞の手紙を出した。ヘルンは『朝日』と『讀賣』の愛讀者で、紅葉の小説や半古の繪を知つてゐた。年若くして不治の病にかかつたこの文人に同情を表し進んで慰問の手紙を送つたのであつた。後『書簡集』を出す時この手紙を紅葉の遺族から借らうとしたが、その當時見出されなかつた。

蓋し、ヘルンには多くの人のする通り、面會日や面會時間などを定めて多くの人に會ひ、それを濟して再び述作に耽る事のできるやうな事務的方面はなかつた。遠方から昔の學生

が訪ねて來る事があれば、歸つたあとまでも喜んでその對話を繰り返してゐた。さうなると最早その日は終日何事も手につかない。ヘルンは常人の想像のできぬ程、凡のていかいかい印象を深く受ける人であつた。それ程敏感であつた。訪問客のある時、家人がヘルンに取つがないて一應『時間がないから御免を蒙りたい』と言譯した理由はここにあつた。

日本に於てヘルンが天職を自覺してから、又長男二男の出生以來自分の責任を感じてから、ヘルンの勇猛心は全力を以て働いた。『自分は長生はしないから急ぎます』或は『人生の半ば以上を空費したから、これから取りかへさう』これはヘルンの口癖であつた。アメリカ時代に南洋へ行くための準備としてスペイン語を研究した事もあるが、日本では日本語の研究などは間に合はないと云つて、日常の談話のできる程度の日本語（自らヘルンの言葉と稱した物）と、假名と少數の漢字の知識で滿足し、あとは夫人の助けを藉りた。ヘルンの行つた道は初めからチエムバレン、アストンその他の人々と異なつてゐた。

少し脇路に入つて、ヘルンの著作に對する夫人の助力について述べよう。

ヘルンの日本に關する作は大別して先づ三種類に分ける事ができる。論文と隨筆、考證、及び物語、これてある。論文と隨筆の多くはヘルン自らの觀察、推理、或は感想默想から

出た物。考證の多くは大谷正信その他から供給された材料によつた物。而して物語は全部夫人から、或は夫人を通じて傳へられた物である。このうち論文と隨筆、及び物語は考證よりも遙かに貴く、物語は論文と隨筆よりも更に貴いと云ふ論者は中々多い。夫人がヘルンから萬葉などに關するむつかしき質問を受けて、程度の高い女學校を卒業しなかつた事、及び、自由に英語を話す事のできないのを殘念に思ふと云つた時、ヘルンは自分の著書を入れてある戸棚の前に夫人を連れて行つて『これだけの書物は、だれの骨折てできましたか。あなたに學問があれば、こんな面白い話をしてくれません』と云つた。夫人が裁縫や掃除をする事があれば、『あなた、女中ではありません。そんな事は女中にさせなさい。そんな暇があれば、本を讀んで話を聞かせて下さい』と云つた。書物を讀んでその話を夫人自身の話にして話せと云つた。讀書ばかりでなく、植木屋、女髮結、女中、屑屋、羅宇屋、誰にでも話を聞け、御馳走をして話を聞くやうにと頼んだ。世の所謂劣敗者のうちに美はしいさとりとあきらめがある、それを聞けと命じた。かくして諸種の物語、「女の日記」「門三味線」「人形の墓」等の名篇、それから各種の傳説、それから日本の古い物語から取つた奇談怪談ができたのであつた。これ等の奇談怪談の多くは翻譯であることとわつてあるが、事實はやはり夫人の助けを藉りたヘルンの創作であつて、『外國に於て見出され

た英文學の最大の寶の一つ』と云はれて居る。日本に何の同情もない西洋の讀者も、そこに現れた美はしさと光明、やさしさと恐ろしさを感ぜずには居られない。これ程靈魂の力を信ずる民族、これ程『最期の願に超自然の力のある』事を信ずる人種に興味を感ぜずには居られない。ヘルンも純日本趣味の夫人に負ふ事の大なるを知つてゐたので、或書物の如きは、特に夫人の名で出版しようと云ひ出したのを、夫人の反對で思ひ止まつた事があつた。

夫人の固有名詞の讀方などに稀れに誤つた例はある。しかし日本固有名詞は日本の大學者でも誤つた例はいくらもある。『我が死後再び娶り給ふ事なかれ』『否必ず娶らじ』と誓つた夫が、妻の死後間もなく娶つて、先妻の亡靈のために後妻の取り殺される出雲の話があつた。ヘルンは『これはひどい話、破約の怨みは夫に報ゆるこそ至當だが、何も知らぬ後妻こそ氣の毒だ』と云つた時『でも、女はさうは思ひません』と答へて、この話全部に生命を與へた夫人は少くともこれ等の物語に於て、ヘルンの名聲の半ばを分つべきではなからうか。（『日本雜事』「破約」參照）

ヘルンがその講義『文學と輿論』に於て、『フランス人が、あれ程のロシヤ國債を有して居るのは、ロシヤ政府でなくロシヤ人民に對するフランス人の同情が原因である。この

同情は爲政者の力でも外交官の力でもない。ツルゲニエフ、ドストエフスキー、トルストイ等文人の力である。これ等の小說がフランス語に譯せられ、フランス人の眞情に「ロシヤ人も我等と同じ喜怒哀樂、同じ人情を有せる同胞である」事を訴へた結果である」と云つた。夫人がヘルンを通じてなした事はこれと同じであつた。

西印度マルティニークでは娯樂に寫眞をやつた。そこで寫した寫眞は今も何枚か殘つて居る。日本では暇がないと云ふので止めた。ヘルンは煙草を日本のきせるで喫つた。キセルは百本ばかり集まつて居るが、自ら進んで集めたのではない。悉く夫人が用向のため外出した時みやげに買つたのである。三十四年の暮、西大久保に於て邸宅を購うて建増をした時の如きも、一切の事夫人に任せて顧みなかつた。全く日本風にする事、書齋は西向きにする事、あとは一切夫人に任すとの約束であつた。その後、夫人が餘儀なく相談を求めても『約束に違ひます』と云つて取合はなかつた。その後內外の友人で、邸宅、建築及びその費用等の事について質問する者があつても、ヘルンは『私は知りません、私は養子です』と常談のやうに云つた。皮肉のやうに聞えたかも知れぬが、事實ヘルンは知らなかつたのであつた。或は夫人の報告を聞いても忘れてゐたのであつた。ヘルンはこの邸宅の持

主の華族の名を知つて、この邸宅を賣るに到つた人事に興味を感じただけてあつた。
種々の印材で種々の印章を造らせて藏書などへ押して見た事はあつたが、多くの文人に通有の文房具に對する贅澤もなかつた。夫人と令息のために、萬年筆を買つた事はあるが、自分ではかつて使用した事はなかつた。原稿を淨書して外國に送る際タイプライターを使用する事もなかつた。アメリカから三本のペン軸とポケットに入れてもよい二重蓋のインキ壜とを持つて來たのを始終使つてゐた。丸善でポンド入りのインキを買つてこのインキ壜に入れて到るところで使用した。ペンはスペンセリアンばかりを使つた。原稿用紙は日本橋の榛原から雁皮紙を取よせて使つただけが贅澤であつた。ステユデント・ランプの下に特別に高く造つた机の上で著作に耽つて、時々降りて座蒲團に坐り、きせるて煙草を吸つた。（この机と椅子は今年松江市へ寄贈された）
食物や衣服にも何の好惡もなかつた。大きなビフテキを毎日かく事がなかつたのとプラムプーデン（『日本人は甚だ賢い人種だがプラムプーデンを理解しない』とヘルンは云つた）を好んだ外は、日本食でも何でも選ぶところはなかつた。衣服には勿論頓着しなかつた。フランネルのシャツを一度に一ダス程横濱へ行つて誂へて交る交る着たに過ぎない。熊本時代には夏は小倉の白木綿の洋服を着た。東京時代には夏は紺、冬は鼠の脊廣を、フ

ランネルのシャツの上に形ばかりのネクタイを結んで着ただけであつた。もとより白シャツは僞善的西洋文明の標本、フロツクコートや高帽や手袋やステッキは無用の長物と罵つて用ひなかつた。靴はいつも兵隊靴であつた。殘つた物を長男が中學へはいて行つて一同に笑はれた。帽子だけは最上等のものを買つたが、前にも述べた通りに鍔の廣い中折帽で夏冬の區別はなかつた。西印度から歸つてニュ・ヨークの波止場へ上つた時とも、フィラデルフィヤの町の中とも云ふが、（或は兩方かも知れぬ）ヘルンが奇態な熱帶地方の大きな鍔廣の帽子を被つて平氣で歩いて居るのを面白がつて一隊の惡童が列をなしてヘルンのあとから

Where, where, where did you get that hat?

「どこ、どこ、どこから、そんな帽子、取つて來た」

と調子をそろへて歌つて來たと云ふ逸事を思ひ出せる。グールドはこれを以てヘルンの滑稽感(ユーモア)の缺乏に歸して居るが、むしろヘルンの簡易質樸主義(ボヘミヤニズム)によると見るべきである　散髪も夫人に幾度か促されて漸く行つた。

卽ちヘルンは夫人の喰べさせる物で滿足し、夫人の着せる物以下で滿足し、建ててくれた家で滿足し、客にも會はず、一心不亂刻苦精勵したのであつた。

ヘルンの晩年の娯楽は散歩であつた。上野の森を好んで、そこにある展覧會は好んで見に行つた。繪はいつもかき手の名に頓着しないで氣に入る物を買つた。ヘルンは繪を描くのが上手であつた事はすでに述べた。ブレークの繪のやうな面白さのある繪を、手帳などに澤山殘した。富久町にゐた頃は瘤寺の森林墓地を書齋の一部のやうにしてゐた。墓地探求はヘルンの少時より好物であつた。西大久保に移つて後、戸山の原、雜司ケ谷、高田の馬場、目白臺、落合、新井、堀の内はヘルンの散歩の區域であつた。それから夏期に於ける燒津の游泳であつた。游泳は近視のヘルンに取つては少年時代からの唯一のスポートであつた。ニュ・オルリアンス時代にはグランド島の漁夫達を驚かし、東京時代には燒津の人々を驚かす程の達人であつた。燒津の漁夫達は今もこの人の流儀を傳へて居ると云はれる。

墓地寺院森林を中心とした散歩、夏期に於ける游泳の外に、ヘルンの一生を通じて變らない趣味は小動物殊に蟲類（インセクト）の愛であつた。

ヘルンに嫌ひな動物はなかつた。西印度の有毒なむかでの記事を『佛領印度の二年間』で書いた（それから靴をはく時中にある物を出すために一つたたく習慣を得た）が、無害

な動物は一切ヘルンの愛するところであつた。ニュ・オルリアンスの友人の說によれば、むしろ大概の人に嫌はれる物を選んだやうであつた。これは或はヘルンに取つては「我のみやあはれと思はん」と云ふ心もちであつたらう。一時コートネー夫人の食堂の床の小さい穴から時々顔を見せる鼠を馴らした事があつた。同じ家の入口の床下にゐた龜を馴らして呼べば出て來る程になつた事もあつた。松江の家の庭で蛙を取らぬためと云つて自ら食物を皿にのせて蛇の出るところに置いて來た事もあつた。ラスキンの講義の際にも蛇の美を說いた。蟇が西大久保の邸内にもよく出た時、令息等にこれを苛める事を禁じて食物を與へてよくなつかせた。西印度で蟇を飼つた或婦人の話をして蟇を愛すべき事を說いた。犬も愛したが猫はさらに愛した。ヘルン自ら「骨董」のうちの「病理上の事」のうちに自白せる通り、洋の東西で飼つた猫だけの記事で大冊の書物ができるのであつた。西印度で一時三十六匹の猫を飼つた事があつた。ニュ・オルリアンスで飼つた猫の話がある。

ヘルンは或午後或小路を通りて歸宅の途中、彼の感じやすき心を痛めた物を見た。一人の男が中庭から水を入れた桶をもち出し、その中へ幾匹かの小猫を投げ込んでゐたのであつた。これを見たヘルンは憤怒に燃えた。ヘルンの考では、動物虐待は殺人よりも惡かつた、殺人には何か理由のある場合もあらうが動物虐待にはそれがあらう筈がないからであ

つた。ヘルンはその男に跳びかからうとしたが、相手は門から中へ消えた。親猫は狂氣のやうに柵をのぞいてさけんだ。ヘルンも泣きながら救ひ出したが、命の脈のあつたのは唯一匹だけであつた。それを上着につつみながら、コートネー夫人の許に驅けつけた。それからこの同情の篤いアイルランド生れの夫人と共に、びしよぬれの小猫を火の前で乾かし、ミルクを與へて毛布に包んでねかせた。灰色の虎猫であつた。ヘルンから「ナンニー」と命名されて大きくなつた。それからヘルンになついてヘルンがコートネー夫人の食堂に現れる毎に送り迎へをした。ヘルンが『タイムス・デモクラット』に猫に關する文章をいくつか書いて居るのは、このナンニーからインスピレーションを得たのであらう。それから五年間ナンニーは忠實にヘルンに仕へた。しかし一八八七年にヘルンがニユ・ヨークに向つてニユ・オルリアンスを去つた時コートネー夫人の許に殘して行つた。それから何年か後にコートネー夫人も住み慣れたガスクエ町から引越さねばならなくなつた。アイルランドに、猫を連れて引越しをすると運が惡くなると云ふ迷信がある。しかしコートネー夫人はナンニーを忘れなかつた。引越してから毎日姪のマーガレットに食物をもたせて、もとのうちへやつたが、或日の事ナンニーは死んで固くなつてゐた。

松江で惡童のために苛められて、びつしより濡れてふるへて居る小猫をそのまま、自分

の懐て暖めて新婚の夫人を驚かした事はヘルンに取つて珍らしい事ではなかつた。燒津ても捨猫を拾ひ或は買つて、それに美食を與へて美しい猫にしてからその邊の人々に與へた事は幾度かあつた。「火の子」「小火の子」などと命名した。拾つた當時はいつも帽子の中に入れて、猫の汚物で汚れがついたのをそのまま平氣で被つてゐた。富久町で飼猫が何者かに蹴られて死産をし、それからしきりに子猫をさがすのを、ヘルンは毎日根氣よく一一押入や戸棚をあけて、その子猫の今ゐない事を示して歩いた事は同じ「病理上の事」に出て居る。

普通の蟲類てヘルンの愛しない物はなかつた。蠅や蚊は拂ふだけて殺した事のないのは東京時代ばかりてなく、ニユ・オルリアンス時代からてあつた。その頃のニユ・オルリアンスは今日のやうに衞生の設備もよくなく、細かい金網の窓をつける事も行はれない頃てあつた。しかも戸や窓を開いて置かねばならぬ暑いニユ・オルリアンスては蠅も蚊も多かつた。ことに蠅は非常に多かつた。しかしヘルンはただそつと拂ふだけてあつた。蟻に對しても同じてあつた。食卓の脚から上つてヘルンの砂糖壺に達した物だけは、そつと取つて床の上に置いた。自分の都合や便利のために他の生物を苛めるのは不正である、蠅も蚊も皆同じやうに生存の權利があるとヘルンは考へたのてあつた。たしかにこの考はヘル

ゝの佛教の研究から來たのであつた。
コートネー夫人の食堂で食事の後、何時間となく手に頭をのせたまま俯して居る事があつた。コートネー夫人は心配して側へ行つて見るとヘルンは一所懸命に蟻の行列を珍らしさうに見てゐた。『御覧なさい、蟻は私共人間よりも高等動物です。互に喧嘩したり、欺き合つたり、悪口を云つたりしませんね。人間が蟻のやうに利己主義を忘れて公共のために働けば、もつとよい世の中になるのですが』と云つた。それから娘のエテを相手にこんな小動物や蟲の話をした。
東京でも同じであつた。
庭で蟻の穴を見れば必ず土の上に坐して令息等を集めて、蟻の出入を見ながら說教した。夫人は新聞紙を携へて來て土の上に敷いた。かくして家族一同時として數時間そのまま見つむる事もあつた。或時枯葉のやうな奇怪な形の蟲を發見して動物學の書物をさがして名を求めたが得なかつた。そこで自ら『アマノジヤク』と命名して、書齋の前の楓樹にとめて每日のぞきに行つた。蛙も好きであつた。青蛙でも書齋のガラス戶にとまれば大騷ぎして、夫人の如何に忙しい時でも呼んで、これを見よと云つた。蜘蛛の網を張る每に、珍らしさうに必ず終りまで佇立して見た。

人の飼ふ蟲、たとへば、鈴蟲、きりぎりす、松蟲、えんまこほろぎ、くつわ蟲、かねたたき、かんたん、かじか、馬追、きんひばり、くろひばり、草ひばり、凡てヘルンの愛養しない物はなかつた。動物の皮、たとへば虎、熊、豹、などの皮は虐殺を聯想するが故に好まないと云つて勸められても買はなかつた。小鳥の形そのまゝになつて居る料理は、殘酷だと云つて手にふれなかつた。それに反してヘルンの手廻りにある物には悉く昆蟲の模様があつた。茶器珈琲器（これ等は凡て大形の物が好きであつた）には蟲の模様があつた。久しい間外國へ出す封筒も日本風の細長い物を使つたが、それには蜘蛛の巣の模様があつた。百本に近い長短のきせるの模様の大部分は蟲、ペン皿文鎭等の模様も蟲。根つけ類もあつたが悉く蟲に關する物であつた。

　ヘルンの著書殊に晩年の物に蟲に關する篇の多い事に氣付く人は先づ、ヘルンが蟲を深く愛した事と、その理由とを理解し置く事が必要である。著書ばかりでなく講義にも蟲に關する物がある。「蟲に關する古ギリシャの詩歌」「蟲に關する詩歌」「蟲に關するフランスの詩歌」等である。ヘルンはこれ等の講義に於て「蟲を愛するギリシャ人は、日本人に似て居る。ローマ人は圓戲場を作つて人間と猛獸とを格鬪せしめた程に性質殘忍だから、蟲を愛するやうな優美なところがない。基督敎では魂を有する物は人間ばかり、その他の

動物の生存は一切人類のためと教ふる程だから蟲の如き微小な物は顧みられない。英國の詩人は鳥について歌つたが、蟲については殆ど歌つてゐない。蟲類を眞に愛する人種は日本人と古代のギリシヤ人だけである。古代のギリシヤ人も蝶を人の靈魂の離れた物と考へた」と云ふ趣意を述べた。

『骨董』のうちに「くさひばり」と題する一篇がある。一細小蟲「くさひばり」の價が、日本ではその目方の黄金よりも以上である事が既に不思議である。

……市場では正に十二錢の價をもつて居る、卽ち自分の重さの黄金よりも遙かに高價である。こんな蚊のやうな物が十二錢……

それからこのくさひばりのなき聲を說明して、最後に『生命の大海ではこの一微細の小蟲のうちに動いて居る魂も自分の魂も同じ』である事を述べたところに、ヘルンの大同情が現れて居る。

……その小さな籠の中なる微塵の魂と私の體内なる微塵の魂とは、實在の大海にあつて永遠に同一不二の物である……

同じく「骨董」のうちの「餓鬼」の一篇は「實際私は再び人間となつて再生する事をこの上もない恩惠とばかり考ふる事ができない。もしかう考へてかう書く事が來世の因緣をつくるものなら、それなら私の望みはかうである、――私は杉の樹に上つて日のあたるところで、極めて小さいシムバルを震動させたり――或は紫石英と黄金の色の翼を音もさせずに飛ばせて蓮池の貴く靜かなあたりを往來したりする蟬か蜻蛉の生涯にせめて生れ代りたい」と云ふ一節で終つて居る。一切の生物も人類のために造られたのでなく、程度は違ふが、人類と同じく進化の階段にあると見る進化論と、「山鳥のほろほろとなく聲きけば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ」（この歌の解釋には異說があらう）と云へる輪廻の說とは同じやうにヘルンを動かしたのであつた。

蟲類ばかりでなく、樹木草木も愛しない物はなかつた。大小無數の樹木花卉、殊に竹叢のあるのが氣に入つて西大久保の邸宅を購ふに到つた事は既に記した。筍を取る事は嫌ひてあつた。植木屋などはよく竹を切つてヘルンの不興を蒙つた。杉、檜も愛した。瘤寺で古い杉が切り倒されてから散歩を廢した事も既に記した。西大久保に移つてから、隣家で境にある櫻の木を切り倒した時も心を痛めた。グラッドストンと云ふ英人は自分の邸內の

樹木を切り倒すのが娯樂やら運動やらになつてゐたと云ふが、一生のうちにどれ程の殺生をしたてあらうか。ヘルンから見れば、世界の偉人もこの點では殺風景を通り越したわけの分らない野蠻人であつた。ヘルンが殊に熱帶地方の思ひ出として好んだ物は、芭蕉と龍舌蘭であつた。芭蕉の若芽の延びて行くのに、毎日見とれてゐた。龍舌蘭を發見するに到つたのは燒津で游泳中の事であつた。ヘルンは珍らしがつて乙吉に尋ねると、乙吉は「これなら、わし等が死んだら埋めて貰ふ御寺の庭に澤山ある」と答へた。その寺で分けて貰つて、西大久保へ持ち歸つてふやした。龍舌蘭は東京にもあるが、燒津には大きなのがある。

ヘルンは草木に到るまで、靈魂を有するが如くに考ふる事を好んだ。神に祭られる老樹のある事や三十三間堂の柳の精の話や、榎の精の傳説を愛してギリシャに於けるサイプレス、水仙、アネモネ、風信子等の傳說その外これに類する物と比べて、かくの如く自然を博く愛しこれに魂を與へたのは、古へのギリシャと日本ばかりであると云つて喜んだ。講義のうちにも「西洋の詩に於ける樹精について」と云ふのがある。ヘルンは動物にも植物にも「あなた」と云つて話しかけた。小さい蛙にも、籔の隅に淋しく咲いて居る花にも、何れも「あなた」と呼びかけた。ヘルンは『日本の面影』の序文のうちに、「多くの公園

に居る鹿の群、神社佛閣に遊んで居る鳩の群、跫音に應じて集る鯉の群、その外日本に行はれて居る放鳥、放龜、これ等は皆日本人の考にUnity of life「一切平等」の現れた事を示して居る」と云つてこれに同情した。しかもヘルン自身は日本人の誰よりも、深くこの考を有したのであつた。(ヘルンは一時洋食を廢して日本食にしてゐたが、慣れないので胃腸を害して、再びビステキなどにかへつた。これは自分の本意でない。罪は祖先にあるのだと云つて居る)

日本人は西洋人よりも動物を虐待すると云ふ非難に對してもヘルンは考へた。「西洋では自分の爲めに造られた食物や器具を保存する意味に於て打算的に愛護し、日本人は同じ魂(佛性、菩提心)を有する物と見て、可愛い子は鞭で育てると云ふ意味で愛護して居る。西洋では足を一本折つた馬をその場に射殺して怪まない。「ブラック・ビユテイ」と云ふ黒馬の事を書いて西洋の動物虐待防止會で推薦されたと云ふ小說のうちにも「使用にたへなくなつたら射殺して埋める」事を餘程有難い事のやうに書いてある。日本では廢馬と云へども愛養して斃れたら厚く葬つてその墓をたてる。(但し、これは舊日本の事。世智辛き世の中の今日では、死馬の皮は公然賣り肉も祕密に賣らねばならない)大食家イカボッド・クレーンは鶩鳥、七面鳥を見、牛羊を見て、直ちに食物の泳ぎ食物の歩くのを見た。

これは西洋の見方である。

樹木草花に對する日本人の趣味愛護は西洋人の到底及ぶところでないと考へた。罰金（西洋では何でも罰金、學校内の所罰までも罰金）で制せられない場合には、西洋人は花や木を妄りに折る。それで日本の公園には特に『樹木折るべからず』と英語で書いてある、（第三卷四六）とヘルンは戯れた。自然石に高價をなげうつて惜しまない日本人、花ばかりをむしり取つて花束などを作らぬ日本人に同情して、その心理をヘルンは充分に理解した。

ここで今一つヘルンの一生に通じて變らない趣味、むしろヘルンの生命とも云ふべき物について一言せねばならない。それは夢の趣味であつた。ヘルンに取つては夢は一切の奇談怪談、想像奇想の源泉であつた。超自然界その物であつた。覺めて居る間は忘れられて居る過去幾萬億年前の記憶がかすかに現れて來るところであつた。凡ての大文學に共通の要素であるべき恐怖の快感を與ふる超自然的分子、これも夢の經驗に基づいて居る。奇拔なる着想も夢の經驗、怪談も夢のうちの魘されの經驗の現れてある。『……比較的美はしい夢の世界では、私共の愛してゐた死人は私共と再會する。父は永く葬られた子供をとりかへし、夫は亡妻をとりかへす。現世で餘儀なく別れた愛人同志は再會する。死人は凡て

ありし昔のやうに若く、愛すべく、さらに實際よりも美しくなつて歸つて來る。……この夢の世界には老も死もない。一切の物は幸福である。卽ち凡ての宗教が善人のために描く完全なる幸福の狀態である天國と云ふ物も、結局最上の夢の世界に過ぎないではないか。……』（本集第十三卷一三九）とヘルンは云つた。處女作から最後の作に到るまで一貫して奇談怪談を生命としてゐたヘルン、夢の話をいくつか書いたヘルンが夢を尊重して家人と夢物語に興じた事、『よい夢（プレザント・ドリーム）を見るやうに』と挨拶して寢についた事は偶然ではなかつた。

以上述べたヘルンの趣味のうちに、もし娛樂があるとすれば、晩年のヘルンの娛樂はそれだけであつた。かくの如く寸陰を惜み交際を避け娛樂を捨てて專心著述に從事したが、出勤、講義の準備、每朝一時間宛長男に敎ふる事、讀書、その外、來書には必ず返事した事などで日中は暇のない事が多いので、さなつて執筆したのは多くは夜であつた。暇さへあれば晝も執筆し推敲もした。

ヘルンは文章の技術に苦心した事は事實であるが、そればかりがヘルンの主張でない事は勿論である。「赤裸々の詩」の講義のうちに『原文は人を動かす力はあるが、飜譯したらその力が失せると云ふ文章には生命がない。そんな字句の形式だけで生きて居る物は、

取るに足らない」と云つた。ヘルンの絢爛な文體は年と共に次第に平淡な物となつて居る。その理由でアンデルゼンやビイヱルンスンその他北方文學の文體を賞讃した。ヘルンの文章には、事實上の誤謬もあらう。主義上の偏見もあらう。しかし肺肝に入りて人を動かさねば止まない魅力のこもれる事は否むべからざる事實である。日本に關する外國の學者は少くない。文學歴史語學各方面の權威は少くない。しかも深き同情と洞察と、竝びに模倣のできない文體を有する點に於て、何人かヘルンに及ぶ者があらう。今日世界に於ける日本人の同情者は、皆ヘルンの著書に感化された者である事も事實である。

浪費した十年を取りかへさうと云ふ意氣を以て一意著作に專心であつたヘルンに取つても、この努力はやはり苦痛であつた。努力しない事は更らに大きな苦痛であつた。この苦痛の努力の刺激となつた物は、ヘルンに隨へば「不平」であつた。不平の起る事、腹の立つ事はヘルンを驅つて著作に向はせた。この點から云へば『自分を害する敵は益友であり、味方は時間を奪ひ靜思默想を妨ぐるが故に惡友』であつた。(全集第十一卷三〇二)グールドはこれを曲解して『晩年ヘルンはインスピレーションがなくなつたので、強ひて他人に怨を抱き、これをもつて著作の刺激とした』と云つた。交友も少く、娯樂もなきヘルンに取

つては、勉めて專心筆を執る事があらゆる不平を忘れる所以であつた。かくの如きヘルンに取つては滑稽雜誌や、フランス風の本能に訴ふる小說は、何の興味も感じなくなり、隣りへ巴里オペラ座が引越して來て優待券があつても行つて見る氣はなくなつてゐたのであつた。(本集第十一卷二九一)同時に又『眞の文學的成功は書肆の要求を拒み、公衆の要求を拒み、注文に應じて書く事を拒み、時流を追ふ事を拒んで、始めて得られる。……たとへ一行百弗でもそんな要求に應じないで眞面目な文學上の努力をなすべきである』と云ふ信念の下に努めたのであつた。

ヘルンの周圍には英語の空氣はなかつた。ギボンは佛語の空氣中にあつて英文を書く事の艱難を訴へた。ヘルンは自ら求めたところであつたが、これも又一つの艱難であつたらう。あれ程覺束なき視力をもつてあれ程の述作をなした事は最も驚嘆すべきである。『手がなくて生れてもラフアエルは大美術家となつたらう』と云つたレッシングの言も思ひ出される。『刻苦精勵卽ち天才』と云つたブッフォンの言も思ひ合はされる。ヘルンにして今少し氣長に、今少し多く交際もし娛樂をも求めたら、五十餘歲の短命ではなかつたらうとも思はれる。しかし、ハムレットはポロニアスになれない。性格の異なるところ、如何ともすべきやうはない。ヘルンの世間的成功は或は確かであつたらうが、著作に於て幽遠

を缺き凄愴を缺いたらう。つねに『長生はしませんから急ぎます』と云つた程に精力を費つたヘルンは心臟病を以て逝くべき原因をつくつたのであらう。

南亞の女詩人オリーヴ・シュライネルの『夢』の一章に、「美術家の祕訣」と云ふのがある。

『一畫工があつた、外の畫工の色よりも不思議に鮮かな紅い色を用ひてゐた。外の畫工の色はあせたが、この人のは永久に鮮かであつた。畫の色が鮮かであると共に、次第に畫工の顏色は蒼白くなつた。一日この畫工は畫の前にたふれた。畫の傍に繪具がなかつた。しかし、葬るために經帷子を着せようとした時、畫工の左胸に創口を發見した。鮮かな紅い色は畫工の胸から取られたのであつた。この畫工の事蹟はその後忘れられたが、畫は忘れられる事はない』

一五　ヘルンの通つた道

文學界のコロムバス——讀書修養の方針——東洋の神話宗教文學——放浪——白人以外の文明——舊日本——新日本——『蓬萊』——日本びいきの意義——ヘルンの通つた道

いつまでも本國の都會生活の描寫に甘んじないで、進んで異なつた珍らしい新天地を開拓してその方面の權威となる事は、文學上の成功の一祕訣である。ウオルタ・ベザントがその自傳に於て、自分の成功の原因の一を「フランスに關する特別の知識」に歸したのは即ちこれである。又或人が現代の文學者の領分を調べて「アンソニー・ホープはルリタニヤを、キップリングは印度を、ブレット・ハートはシーラ山中を、マーク・トウエーンはミスシッピ河の下流を、ヂョーヂ・ケーブルはニユ・オルリアンスを、メーリ・ウイルキンスは新英州を、ギルバート・バーカはカナダを、ラフカディオ・ヘルンは日本を、何れ

も獨占して他人を入れない』と云つたのもこれである。卽ちヘルンはこれ等文學界のコロムバスのうちの著しい一人であつた。

新しい珍らしい物を求めて止まない事はヘルンに取つて一生に通ずる特性であつた。幼時與へられたフランス製の美はしい宗教畫を捨てて、禁を犯してギリシヤ、ローマの神話に讀み耽つた傾向は、最後に西洋の文明を呪うて舊日本にあこがれさせたのであつた。後、未見の友バウルに與へて讀書修養を論じた一節に『想像を强く刺激する物でなければ私は讀まない。珍らしい不思議な、變つた、强い想像のある物なら何でも讀む。無數の落葉で想像の地面が肥されてのち、言語の花は無造作に咲く。想像力を豐富にする物に四種類ある。神話、歷史、小說、詩歌である。殊に詩歌は人間理想の結晶とも、人生の苦痛の壓力でできた金剛石とも云ふべき物である。詩歌には眞によい物が少いから選擇は容易である。歷史では、異常な恐るべき不思議な方面ばかり。神話や小說では、最も刺激の强い變つた物ばかりを求むべきである。しかし文章の鍛錬には科學の研究がよい、天文學、地質學、人種學等の異常な事實を腦中に蓄積する事ができると、必ずその人は無數の比喩、說明、例證を得るに相違ない。これだけの修養を積めば、人を感動させる文體は自然に得られる。……』（全集第九卷一五〇）と云つたヘルンはかくの如く人に敎へ、自らも又かくの如き修養

を積んだのであつた。アメリカ時代に節約し得た時間と金錢を以て鋭意集め且つ讀んだ書物の幾部分は遺族に歸つたがその目錄によつて、ヘルンの壯時の嗜好及び修養の幾分は解し得られる。オーコンネルに與へた手紙に『私には天才らしい物は全然ない事を知つて居るから、又天才のない物は何か變つた種類の勉强によらないでは普通以上に傑出する事ができない事を知つて居るから』（全集第九卷一九〇）その覺悟で勉强して居る事を述べて居る。

この勉强の結果の一つは、大陸文學の紹介であつた。書物となつて現れたのはガウティエの『クレオパトラの一夜、その他』アナトール・フランスの『シルヴエスター・ボンナードの罪』フローベルの『セント・アンソニーの誘惑』の飜譯であつた。ニユ・オルリアンス時代「タイムス・デモクラット」紙上に連載した飜譯紹介であつた。

それよりも更に明かにヘルンが所謂文學界のコロンバスとならうと努めた結果を示した物は「異文學遺聞」「支那怪談」等の創作的飜譯であつた。一つは、北歐、印度、アラビヤ、埃及、ペルシヤ、支那、エスキモー、ポリネシヤ、南洋土人等の神話傳說を飜譯してヘルンの文體にした物。一つは支那の怪談を集めて飜譯した物、何れもヘルンの散文詩であつた。

これ等の飜譯はヘルンの修業時代の物であつた。ヘルンは日本の學生にも、創作の手習

として飜譯をせよと敎へた。『外國文學の飜譯はいつまでも必要である。飜譯して價値を失ふやうな物は、初めから飜譯の價値のない物である。大文學は、飜譯でても、やはり人を動かす力はある。詩歌でさへその通りだから散文は云ふまでもない。……英文學を研究する者は、英語の力によつて世界の文學を味つて、日本文學を豐富にすべきである。……英文學でも外國文學の影響感化を受けなかつたら、極めて貧弱な物になつたであらう。英國のお伽噺でさへ、純粹な英國種のものは何程もない。……』（全集第十三卷九二——九八）

常套陳腐を脫しようとして、各國殊に東洋の神話や宗教を研究したヘルンは、やがて深くこれに同情するに到つた。これ一つは、幼時壓抑を受けた基督教殊にローマ教の權威に對する反抗心の消えないためでもあつた。又、母に對する同情から、東洋の事物を愛し、つづいてその神話宗教に興味を有するに到つたためでもあつた。一八八五年七月、ニユ・オルリアンスでパウルに與へた手紙に『……クラークと云ふ人は基督教と比べて他の宗教をつまらなくしようと云ふ下心でこの書物を書いて居る。このやり方は基督教をつまらなくしようとして態々書いたと同じく不道理な偏狹な考である。私がこれまで及ばずながら比較神話學で研究したところでは、全く異なつた結論になる。偶像教であれ、一神教であ

れ、凡て禮拜と云ふ一般の思想には、愚かな可笑な分子などは少しもなく、何れも凡て人類が絕對無限の方へ進まうとする眞面目な感心な向上心を表はした物である。それ故私は印度の神も、基督敎の神も、何れも一視同仁に考へて別に十字架上の神を特に尊んで、他の神を侮らうと云ふ考は少しもない』（全集第九卷二七九）と云つた。この考はヘルンには終始一貫して居た。『クリストは單に神話として見ても偉大なる物ではない』（全集第十二卷二五七）とさへ云つた事もある。

珍奇な文學を求むる心に、珍奇な事物を見ようとする心は伴ふ。ヘルンは旅行を愛した。歐洲からアメリカへ、シンシナーティからニユ・オルリアンスへ、ニユ・オルリアンスから西印度へ、西印度から日本へと、一生をヘルンは流浪したが、流浪は生活のためでは必ずしもなかつた。安全なる一定の收入と地位とを棄てて不安な新生活に入る事を辭さなかつたのは、新しい刺激とインスピレーションを求めて止まなかつたからであつた。一八八三年十二月、ニユ。オルリアンスからクレイビエルに與へた手紙に云つた。『旅行のできないのが、何よりの苦痛です。……私はバッグダッド、アルヂエルス、イスパハン、ベナーレス、サマルカンド、ニッポー、バンコック、ニンビン、その外どこでも普通の基督敎徒の行くを欲しないところの領事にてもなれるやうならと思ふ。そんなところに私の求め

て居る小說が潛んで居るのであるが、しかし殘念なるかな、それをさぐりに行くだけの物質的資力もなく、それを有功にさぐるだけの語學の才能もない。……せめて靴屋にでもなるか、サンビユク(樂器)でも吹いて旅行したい』(全集第九卷一九六)

珍奇な文學、神話、傳說に同情したやうに、ヘルンは新しい土地に入りて、その奇習異俗に同情した。シンシナーティにては黑人のために、ニユ。オルリアンスでは、土着の佛人に、西印度マルティニークではそこの黑人に、それから最後に日本では次第に消え行く日本の風俗習慣一切の舊日本のために味方となつた。

「コムボー。ゼベス』は黑人に對する同情からできた物であつた。『チタ』はミスシッピ河口にあるグランド島の怒濤暴風を背景として、そこに土着の漁夫の生活を寫した物である。『佛領西印度の二年間』はそこに渡つて、風景、生活、傳說、神話等を寫した物である。『ユーマ』は黑人の乳母の名である。西印度に於て白人の耕作地にある黑奴が暴動を起して少數の白人を虐殺した時の事であつた。ユーマは獨り同胞の黑人に背いて、白人の子供と共に白人の家に籠つた。歸れと味方は勸誘した、應じない。燒打は始まつた。ユーマの戀人は寄手のうちに居る。救はうとしても、ユーマは守り子とてなければ救はれよ

うとしない。火は次第に迫つて來る。戀人は狂氣のやうになつて救はうとする。ユーマの足下に梯子はかけられる。守り子と共なら救はれようと云ふ。狂へる群集は白人の子は棄てよと叫ぶ。ユーマは決然として獨り救はれる事を拒んで、その守り子と共に猛火のうちに死んだ。これはマルティニークに起つた實話である。ヘルンはこれを小說『ユーマ』にて白人の輕視せる黑奴に同情をよせたのであつた。

西の方、印度、支那をへて日本に着いた西洋人が日本を賞諧するのは、ヘルンの當時と雖も珍らしくはなかつた。印度、支那の荒廢したあとを見たあとで、靑々とした日本の山を見るのが樂しいからであつた。重もなる理由はただそれだけであつた。それから歐米の文明を取つて、どうやら成功しさうに見えたからであつた。ヘルンが日本を賞讃したいはそんな理由によるのではなかつた。ヘルンは洋裝をした新日本を讚美しないで、純粹の日本卽ち舊日本を讚嘆したのであつた。松江や隱岐國を愛して熊本や神戶や東京を愛しなかつた理由はこれであつた。ヘルンは白人以外に何等の人道や文明を認めない歐米人に、それと同等もしくはそれよりも優れた文明のある事を敎ふるのを天職と考へた。豫言者や詩人は何時の世にあつても時流に反抗して『さうでない』と云ふのが一つの特質となつて居

るやうに、ヘルンも舊日本の文明を見て「見よここに古へのギリシャの文明のやうな文明をもつた人種がある。私共よりも高い文明をもつた人々がある」と叫んだ。同時に歐米の文明を罵り、又基督教を以てこの國を腐敗させる物と見つたのであつた。ヘルンが支那に赴かないで、偶然日本に來たのは日本に取つて天祐であつた。その故は、もしヘルンが日本に來ないで偶然支那に赴いたとすれば、同じく或點までは支那の風俗習慣の美を發見してその文明を白人に教へたであらうからである。

舊日本の文明を賞讃する事は、今日に於てこそ珍らしくはないが、ヘルンの日本に來た當時は歐米人は勿論日本人の多數と雖も夢想しない事であつた。勿論、繪畫彫刻等の美術に於て或點までは賞讃を惜まない人はあつた。風景を讃する人もあつた。しかしながら文明全體を通じて、殊に或點に於て西洋文明以上に賞讃した人はヘルンを以て初めとし、或は又終りとするのである。新を求めたヘルンは日本の舊を見て滿足した。即ち日本の舊はいいいい西洋の新、西洋の舊は日本の新である。ヘルンは西日のさしこむ書齋をつくり夕燒を愛したやうに、東から西へと赴いて最後に舊日本に落ち着いたのであつた。

ヘルンが日本に上陸した時の第一印象はよかつた。遙かに富士はその美はしき姿を表はしてこの珍客を迎へた。鷗が多く飛んで來てなづいた。父と子で漕いだはしけに乘つた

上陸してから横濱、東京、江の島、鎌倉、さらに松江に於て神社佛閣で參詣者に養はれて居る多くの鴿を見た。池の面に人の跫音をきいて集まる鯉、龜を見た。葬式の儀式の一になつて居る放鳥を見た。佛教思想に同情のあるヘルンは何れにも感じた。樹や花の手入れにも感じた。この國では人は妄りに花ばかりを取つて、襟につけたり花束を造つたりしないで、若し取れば枝ながらに取つて生花にする事を見てこれにも感じた。日本人は古へのギリシャ人の如く樹にも草にも靈魂を與へた事を考へて喜んだ。アメリカあたりではいつの昔に薪になるべき『唐崎の松』は神體として祭られて居るのに感じた。不規則な形をした石にも、日本では數十圓數百圓の價値ある事を知つて驚いた。ここで思ひ出されるのは夏目漱石の『文學論』の一節である。

英人の自然觀は到底我國に於けるが如く熱情的にあらず、詩歌は必ず風露鳥蟲を材として咏出すべしとせまらるゝにあらず、否多數の人は殆んど自然に對して何等の趣味を認めざるが如し、かつて彼地にありし頃、雪見に人を誘ひて笑を招きしことあり、月は哀れ深きものと說いて驚かれたる折もあり、或時は知人に何故庭に石を据ゑざるやと問うて据ゑてくるゝ人があるとも直ちに庭外に運びすてる覺悟なりとの返答を承

はつたることあり、或時は路傍の松樹をさして同行者に時價若干と尋ねたるに其男五磅位と答へたりし故日本にては王侯の邸宅を飾るに足るを、安きものかなと感じたりあとにて聞けば五磅とは庭樹としての價ならず、樹木としての價なりし、蘇國に招待をうけて逗留せるは宏壯なる屋敷なり、或日主人と果樹園を散歩して樹間の徑路悉く苔蒸せるを見て、よき工合に時代がつきて結構なりと賞めたるに、主人は近きうちに園丁に申しつけて此苔を悉くかき拂ふつもりと答へたるを記憶す、これ等は固より文學趣味なき人についての例なれば之を以て一般を評するは過てりと雖も、かゝる種類の人が比較的に我が邦より多きは爭ふべからざる事實なるべし。

これは英國の事である。さればアメリカから來たヘルンは日本の事物を賞讃する毎に、『私共西洋の野蠻人』或は『自ら優勝のつもりで居るがその實この點では日本人に及ばない……』と云ふのをつねとした。

生花や、盆石、造庭等の自然に關する物ばかりでなく、ヘルンの感じた物は甚だ多かつた。何人も嬉しいにつけ悲しいにつけ發句や歌をよむ事や、殊に死ぬ前に辭世の歌をよむ事や、香道や、蟲飼や、何れも感嘆すべきであると思つた。更に進んで、看板や扁額等に

ある漢字（少しくひいきの引倒しの感があるにも拘らず）、紙の障子、ふすまを隔つるばかりて戸締のない家の構造、靴をはかぬ日本人の足、草鞋一足で一日十數里を行く日本の農夫、猛踊、……人に不快な思ひをさせないために悲しい時にも微笑する日本人、最高の感情を沈默て表はす日本人、なほ進んで、老人と子供を中心にする團欒主義、忠孝を基とせる家族制度、祖先崇拜の神道、祖國の爲めに死したる人々を神とする招魂社（かかる美風は古へのギリシャ、ローマ以來にない）、三月、五月の節句に到るまで純日本郎ち舊日本の物は何でもヘルンの賞讃を蒙らない物はなかつた。

ヘルンは忠君愛國主義の主張者であつた。チエムバレンに與へて云つた「……あゝこの日本魂を保存するためには、どんな苦痛が取らるべきであらう。しかも當局者はそれを養成するための何事をもしない。忠君愛國の念を養成する事について文部の當局者が全く愚かで無頓着で居る事を考へると本當に泣きたくなる」（全集第十卷三六二）ヘルンはこの點については當時の文部省をも手緩いと思つたのであつた。ヘルンは『神道』の讃嘆者であつた。初めの『知られぬ日本の面影』から最後の「神國日本」に到るまで、これが辯護讃嘆に努めて居る。忠、孝、義、信、愛、悌、の美德はここに基いて居ると說いた。『日本では、祖先は、いつも生きて居る。もし、「祖先が私共の行を見、言葉を聞き、心を知り、

同情もし、怒りもするやうに、死してもなほ生きて私共と共に居る」と云ふ信仰が、私共に突然起つたら、私共の人生や義務に對する觀念は大變化を來すであらう、私共の過去に對する義務は遙かに眞面目な物になるであらう。日本人に取つては、死んだ人々をもまのあたり生けるやうに考へる事は幾千年の昔からの信仰である。……私の學生の文章に「私共は祖先を辱かしめてはならない」「祖先を尊敬せねばならない」などとある文章を見て、死んだ人々であるから、「祖先」でなく「祖先の紀念（メモリー）」と直さねばならないと云つた事があつた。私の學生は彼等の信仰に干渉したとも考へたであらう。何故なれば、日本人に取つては、祖先は「ただ紀念」となつてはゐない、祖先はいつも生きて居るからである。……』これは『心』のうちの「祖先崇拜に關する考察」の一節である。そして今やヘルンの靈は神道と佛教の空氣のうちに安らかに休んで居る。

日本人の所謂、彼の長を取つて我が短を補ふは宜しい。しかし日本人は我が長を捨てて彼の短を取つてゐないだらうか。彼の學術技藝を學んで參考とするのも宜しい。しかし我と異なつた、或は我よりも劣つた彼の文明、彼の宗教を取る事は斷じて許されない。模倣は自殺である。日本が歐米の文明と同化するのは國をあげて自殺する所以、その精神的獨立を捨つる所以である。スペンサーが金子子爵に與へて日本の取るべき政略として勸めた

のは極端なる保守主義ではなかつたか。日本人の體格を最も深く研究したベルツ博士は、日本人は宜しく日本風の衣食住によるべきを論斷したではないか。この點に於ては西洋は西洋、東洋は東洋でなければならない。否むしろ日本は東洋文明のために、古へのギリシヤが東方ペルシャに對したやうに、西洋文明に對抗しなければならない。これはヘルンの主張であつた。

舊日本は武士、剛健、質實、簡易、素朴、忠孝、信義、禮讓、神道と佛教の信仰である。新日本は壯士、輕薄、虛榮、懷疑、冷笑、洋館、洋服、高帽、白シャツ「貝殼の如く空虛な西洋文明の模倣」である。この舊日本を失ふのは日本の亡びる所以である。そして舊日本を破壞する物は西洋文明殊に基督教である。これヘルンの信仰であつた。

ヘルンが舊日本の代表者と見て尊敬した人々のうちに、籠手田知事、秋月老先生、鳥尾得庵子、濱口梧陵、廣瀨中佐、畠山勇子があつた。その外植木や金十郎、家僕萬右衛門、魚屋乙吉、君子、春、「婦人の日記」の記者、何れもヘルンの見た舊日本であつた。舊日本はやはりヘルンの所謂『偉大なる平民(グレート・コンモン・ピープル)』の間に存してゐた。ヘルンは「八百屋、飴屋、僧侶、神主、占師、巡禮、農夫、漁師、これが自分の世界」であると云つた。卽ち、西洋學問の博士達や、官吏や、大學教授はヘルンの伍すべき仲間ではなかつた。

美はしき理想の實現とも見えた舊日本、時に消えて醜き西洋の模倣の新日本を多く見えた時、ヘルンは日本を嫌つた。これは熊本時代から發作的に起つた。「柔術」の一篇を書いて、形は西洋を取つても心は變らない。西洋文明を取つたのは柔術のやうに敵の力を利用して敵を制したのであると論じて自ら慰めても見た。併し事實はヘルンを不安にさせた。敬虔な美風はなくなつて、懐疑冷笑が代つた。熊本學生の答案に悉く「神のあるかないかは知らない、無宗教だ」と告白した時『私は宗教家が目して何と云ふか知らないが、或意味で非常に宗教的だと思つて居る。この若い人達がこんな事を云ふのは實に情けない事である』と云つた。こんな時偶々雇入れた子守から哀れに、やさしい「人形の墓」の話を聞いて日本を愛する念が再び湧いた。招待されて偕行社に赴いた時、紋附羽織袴の禮装で出かけて、洋裝ばかりの日本人にやや冷笑を以て迎へられたやうに思つて不平であつた。垣一つ隔てた隣りに、情死を企てて自分だけ助かつた若者がゐた。喉の疵のために長らく寢たままであつた。扶養して居るのはその弟であつた。車を曳いて重い病人の快復を祈つて居る。その効もなく病重りて女の跡を追うた時弟は聲を放つて慟哭した。ヘルンは厄介な兄を失ひながら泣いて居る弟のいぢらしさに貰ひ泣きをして、又日本を愛した。楠公社な

どを除いて、殆ど何等純日本の面影の見えない神戸にゐて、時に日本を嫌ひ自らを罵り、世も人も皆憎みたくなつた時、偶々往來を流しゆく三味線引きがあつた。呼び入れた。言葉は通じないがその聲とその調とが無限の悲哀を誘つた。氣がついて見れば盲目の女であつた、酒食を饗して身の上話を聞いた。案外に簡單であつた。しかし日本に對する愛情は再びかへつた。東京に於て日本に對する苦き感情の漲つて居る時であつた。偶々嫁して居る奉公人がこんな物がありました、と云つて十數枚の半紙に細く書いた日記の綴ぢた物を見せた。小使の妻の日記であつた。金錢で買ふ樂みは得られないから日常の生活を記して自ら樂みとせる陋巷の婦人の日記であつた。二十八歲で初婚して三人の子供を擧げたが、代る代る歿くなつて遂に自らも歿くなつたのであつた。悲しさをまぎらす歌もあつた、讀み行くうちに不幸な婦人に同情を注ぐと共に、日本を愛する念は又歸つた。

かくの如き發作はたえずあつた。天秤棒の兩端に箱を下げ、一方に母の位牌を持たせた子供を入れ、一方に道具を入れた羅宇屋を見ても、又三人の子女と夫を捨てて舊主人のために佛門に入らうとしたが、美貌のために拒まれた時、直ちに燒火箸を取つて自ら顏を燒きて救ひの道を求めた了然尼の話をきいても、直ちに又日本及び日本人を愛したのであつた。ヘルンが晚年日本を呪つたと云はれるのは新日本が次第に多くヘルンの目に映じて來

たので、この發作的感情が多く洩らされたからであつた。ヘルンのやうに孤獨の生活を送つて居る者に取つては、手紙を書く事は談笑であり、放言高論であり氣休めであつた。こんな時には何人も深く愛して居る人や物に對して、心にもない罵倒をする事がある。しかし他人が云へば憤るのである。發作的興奮の時に書いた書簡の文句が大げさに傳へられて米國加州では排日の材料に使はれて居る。（この際でもヘルンは日本婦人だけは昔ながら天使であると云つた）日本の批評家のうちにも『ヘルンは果して日本を愛したか』の奇問を發したり、『ヘルンは著書に於て日本を肯定し、書簡に於て否定して居る』と云つたりした人もある。しかし、これはヘルンの本志でない。ヘルンにもし妻子がなかつたなら、熊本時代にこの發作的感情の命ずるがまゝに日本を去つたであらう。そして日本は大損失を受けたであらう。しかし妻子のあるヘルンに取つては日本は到底切る事のできない愛着の絆であつた。明治二十六年一月二十九日熊本からチエムバレンに送つた手紙の一節に、

もし私の周圍に私が作つた小世界がなかつたら、凡ての歐洲人から離れて暮らす事は中々苦しいでせう。或者は未だ松江にゐますが、ここでも私が生命であり食物であり色々の物であると云ふ人達が殆ど十二人ゐます。外ではどんなに堪へ難くても、う

ちては私は古い習慣と思想と禮儀の小さい微笑の世界に入ります、――そこでは一切の物は眠りのうちで見た物のやうに柔和で靜かです。時々それがただ夢のやうに思はれる程それ程柔和て、それ程觸れても分らないやうに穩かでやさしく自然です。それでそれが消えて行かないかと云ふ恐怖が起ります。それが私となつてゐます。私が喜んで居るとそれが笑ひます、私が愉快でないと、一切の物が沈默します。そのやうにその力が輕くて蒸氣のやうですが、必死の强さをもつてゐて、たえず私の良心に訴へます。私はそれを離れたらどうなるか想像がつきません。どこか外で朽ちるよりは、ここのどこか古い佛教の墓地へ入る方がよい。卽ちせめて人は一親子は一世、夫婦は二世、主從は三世」と云ふ古い佛教の諺の實現を漠然と認める事ができるからです。

……（全集第十卷一七五）

とあるのはこれであつた。ヘンドリックにも同じ意味の手紙を送つて居る。（同上四〇）明治三十七年日露の戰役の始まつた當時東郷大將の寫眞にキスして日本の戰勝を祈つたのはこれがためであつた。しかし「蓬萊」の一篇は愛する舊日本は遂に亡びるであらうと慨いたヘルンの嘆息であつた。

……蓬萊には不思議な物がある。……それは蓬萊の大氣である。……そのために蓬萊に於ける日光は、どこの日光よりも白い、――乳のやうな光ではあるが、目をまぶしくさせる事はない、――驚く程澄み渡つて居るが、甚だ柔かである。……この大氣は私共人間時代の物でない、それは非常に古い――どれ程古いか考へようとすると恐しくなる程古い、――そしてそれは窒素と酸素の混合物ではない。それは全く空氣でできて居るのではない。それは精靈――幾萬億の幾萬億の靈魂――私共の考へ樣と少しも似てゐない考へ樣の人々の靈魂の本質が混合して一つの大きな半透明體となつた物である。どんな人でもその大氣を呼吸する人は、その血液のうちにその靈感を取り入れる。そしてその魂はその人の內部の感覺を變へる――時空の觀念をつくり直す――そしてその人は、それ等の魂が見た通りに見、感じた通りに感じ、考へた通りに考へるやうになる。これ等の感覺の變化は眠りのやうに柔かである。……

蓬萊では邪念の何たるかを知らないから、人々の心は決して老ゆる事はない。そして心はいつも若いから、蓬萊の人々は生れてから死に到るまで――神々が彼等の間に

悲しみを送る時、その時にはこの悲しみのなくなるまで顏は覆はれる、その時の外は――いつも微笑して居る。蓬萊の凡ての人々は一家族のやうに互に相信じ相愛して居る、――それから婦人の心は鳥の魂のやうに輕いから、言葉は鳥の歌のやうである、――そして戲れに乙女の袖のゆれる時は、柔かな廣い翼のひるがへるやうである。蓬萊では悲哀の外、隱される物は何もない、恥づべき理由はないからである、――それから盜みはないから鍵はない、――恐れる理由はないから夜も晝と同じく、どの戶口にも閂はさされない。それから人々は――不死ではないが――神仙であるから、蓬萊にある一切の物は龍王の宮殿を除いて、凡て小さくて奇妙で奇態である、――そしてこの神仙の人々は甚だ小さい椀で米飯を喰べ、甚だ小さい杯で酒を飲む。……

――西の國から邪惡の風が蓬萊を吹き荒んで居る、靈妙な大氣は、悲しいかな、薄らいで行く　今はただ日本の山水畫家が描く風景の上の長い雲の帶の如く、切れとなり、帶となつて僅かに漂うて居る。その帶と切れの下にだけ、蓬萊はなほ存して居る。しかし外にはない　蓬萊は觸れる事のできないまぼろしと云ふ意味の蜃氣樓とも云はれる。そしてこのまぼろしは、ただ繪と歌と夢のうちでなければ、再び現れないやう

に消えかかつて居る。……

日本時代に於ける著作を列擧して見ても、ヘルンの日本に關する熱情の次第に變つて行つた事が分る。『知られぬ日本の面影』と『東の國から』は、見る物聞く物、珍らしく新らしくない物はなかつた時代の、凡ての印象を悉く同情と洞察とをもつて書き下した物であつた。『心』と『佛の畠の落穗』は同じくその續きてはあるが、これを説明し解釋しようとする傾向が多くなつて居る。『異國情趣と回顧』『靈の日本』『影』『日本雜事』及び『骨董』『怪談』『天の河緣起』に到つては材と場所とを日本に取つてヘルンの主觀を詠じ、ヘルンの創作的翻譯をなした物が多かつた。處女作ガウテイエの翻譯から始まつて、『異文學遺聞』『支那怪談』に到つたものが、ここて材と場所を日本に得て大成したのであつた。蟲に關するもの、進化論を基にした美文『回顧』や『影』の中の「幻想」にある物、メーテルリンクのこの種の論文よりも優れたと云はれる「病理上の事」「草ひばり」等の小品は日本に關係のない物である。ただ最後にあらはれた『神國日本』に到りて精神的日本の解釋となつて日本固有の宗教道德の研究から日本の將來にまで論究してヘルンの日本研究は大成をつげて居る。

ヘルンが日本を愛したのは追従輕薄でも醉狂でも、遊戲でもなかつた。口で唱へて身に實行しない空想(ロマンス)ではなかつた。(ヘルンに取つては空想と實生活はいつも一つであつた)ヘルンの所謂舊日本は悉く實行したのであつた。人は原始的(プリミテイヴ)な物を見て賞讚する事がある。この賞讚は一面に於て侮蔑を含む事がある。ヘルンの日本びいきはこれとは違ふ。ギリシヤの文明は現代の文明よりも優れて居ると云ふ意味に於て日本をひいきしたのであつた。ヘルンは養父母に孝養をつくした。遺稿のうちに「おばあさんの話」と日本の題をつけて養母を讃美した一篇がある。『神國日本』に於て日本の古き女を讃美した時にはヘルンは眼前夫人と養母をモデルにしたのであつた。燒津より每日夫人に送つた手紙に『おばばさまに宜しく』もしくは『おばばさまに可愛い言葉』のない事はなかつた。熊本では外國敎師のために建てた官舍に入らないで別に家を借りた。西大久保の自邸は百餘坪の宏壯な家であつたがその以前の富久町の借家と共に、洋館は勿論洋風にできた室もない。書齋には特別製の高い寫字臺と簡單な椅子とあるだけ、及びストーヴのたけるやうな設備があるだけであつた。衣服も外出の時、洋服をつけただけ、家に在る時はいつも日本服を着て、座蒲團に坐り、日本風に蒲團を着て寢た。食物も一時全く日本食を取つてゐたが、腸胃を害

して洋食を併用する事にした。日本食は何でも、刺身も香の物も喰べた。燒津に於ける一ケ月の如きは全く日本食であつた。ヘルン傳記家の一人ケンナード夫人は明治四十二年の春來朝して遺族を訪うたが、何等の西洋趣味なきヘルン起居のあとを見たあとで、庭にあつた西洋草花を見出して鬼の首でも取つたやうに、これぞ故人が結局故國を忍ぶための物であつたと述べて居るが、事實これはヘルン歿後子供等の庭いぢりの料に過ぎない。ヘルンと雖も故國を思ひ出した事はあらう。しかしヘルンの日本びいきは遙かに深い強い感情に根ざして居るのであつた。

あれだけ旅行をしながら日光へは遂に行かなかつた、これは西洋人の餘り多く行くところとなつて居るからである。輕井澤へは無論行かなかつた。箱根へはチェムバレンを訪ふために宮の下まで一度行つた。出雲大社を始終神々しいと云つてゐた。その後伊勢參宮をして、そこには現代的のホテルと云ふ物餘りに多くて伊勢の神聖をけがす事甚だしいと云つた。

ヘルンが日本のために基督教を憎んだのは『日本の面影』の序文や「お大の例」によつて明らかである通り、全く基督教は日本の國體や美風を破壞すると云ふ考からであつた。燈籠流しや盆踊を禁じたり、開港地で精靈船を流す事を禁じたりするのは皆日本政府が基

督教徒に反抗された結果である。日本の美風良俗を破壊する物は基督教であるとして憤つた。一向宗などは初め日本の神を禮拜する事を許さなかつたが、後之を許して神道と和解したやうに、基督教ももし日本風に化したらヘルンも赦したであらう。散歩の途中「ヤソ坊主」などの罵りを惡童から受けた場合には、ヘルンは喜んで歸つて家人に物語つた。明治三十七年ヘルンの死に先だつこと二月程前、七月十八日、早稲田大學の鹽澤博士の通譯で、大隈伯から求められて會見した時、大隈伯が從來日本が他の宗教を同化したやうに基督教をも同化するに相違ないと云つたのに對して、ヘルンは『基督教は同化しない宗教である。マホメット教と基督教は最も侵略的の宗教で決して外の物と調和も同化もしない。基督教は日本の文明制度、習慣を破壊せねば止まないから危険千萬である』と斷言した。Edmund Buckley（エドマンド・バツクレー）と云ふ宣教師で、同志社の教師があつた。この人妓樓などから陰陽石など云ふ物を買ひ集めてこれをシカゴに於いて Shinto-Cultus-Implements（神道禮拜器）として普く世人に展覽を許し、同時にこれに關する小冊子を發行した。ヘルン憤りてその駁撃の文を『ジャパン・メイル』に引續いて三回出した。西田千太郎に與へた手紙にこの事を記して『由來同志社はこんな奸計をやる者の巣窟である』と云つて居る。『惡魔』や『とりかへ兒』の迷信を持つて居る西洋の人は日本の『狐』に關する迷信を笑ふ資格は少しもない

と云つた。堺妙國寺に詣でて土佐十一人の武士の墓に詣でた時、かかる勇士の再生して日本について途方もなき虚言ばかり云ふ外人を今少し殺してくれる方がよいと云つたのはこの時の事であつた。日本の商業道徳の腐敗をさへ辯解して相手が悪いからこんなになつたのだと云つた。ヘルンは津田三藏をさへ辯護して『その行は愚だが、この人の心は高尚で正直である。境遇が境遇なら一英雄にもなれたであらうに』と云つた。日本畫に影のないのは日本人の精神に影のない證據である。日本の家屋に本當の意味の戸締りなく、室と室との間にも鍵一つないのは罪惡のない證據であるとまで云つた。

日本はヘルンに取つて美しき夢の世界であつた。この世界を破壊する事はヘルンの堪へないところであつた。熊本で佐久間信恭と同僚であつた。初めは非常に親しく、佐久間の娘の病氣の時の如きは痛く心配して一日に何回となく使をやりて病狀を問はせた事もあつたが、その後次第に疎くなつた。これヘルンの說明によれば、ヘルンがフランス革命當時の慘狀などを說いて西洋の暗黑面を語るに對して、佐久間は、嫁を苛める姑の實例の話などして日本の暗黑面ばかりをきかせてヘルンの美はしき世界を打ち破るからであつた。ケーベルが異教徒は焚殺すべきだと云つてヘルンを驚かした事は前に述べたが、理科大學の御雇教師英人ダイヴアースについてもこれに類した話があつた。これもヘルンと初めは親

しかつた。のち折りにふれて、ダイヴアースがヘルンに向つて『君は何故あんなに日本人に御世辭を云ふのです、もし御世辭てなければ、君は全く日本人を解しないのだ』と云つた。日本の辯護は求むるところあつての事と邪推せられるのを最も嫌つたので、ヘルンは怒つて再びダイヴアースと交らなかつた。のちダイヴアースの銅像を大學境内に建てた時ヘルンの寄附を求めたが、ヘルンは『否』と答へて應じなかつた。ヘルンはダイヴアースの言を赦さなかつたのであつた。さきに云つた通りヘルンも發作的興奮の時には或は手紙の上て日本の或物を罵倒する事もあつたらう。しかしヘルンはこの特權と資格は自分だけにあると考へたのであらう。他人のはヘルンは赦さなかつた。ヘルンの日本びいきは追從輕薄でも遊戲でも假定でもなく、全くヘルンの生命であつたからであつた。ヘルンは自ら云つた通り「日本人以上に日本を愛してゐた」のであつた。『只愛によりてのみあらゆる物は理解せらる』とワグネルは云つた。チエムバレンの云つた通り、ヘルンは何人よりもよく日本を解し、又讀む者をしてよく日本を解させたのは、彼自身何人よりもよく日本を愛したからである。

若し日本の文人にして、いつまでも都會生活の描寫に甘んじないて、或は日本海の青生

島や、越中の有峯、飛驒の白川に越年し、アイヌの部落や特殊部落に滯在して、そこの傳說やロマンスを尋ね、さらに朝鮮や臺灣に入りてそこでも又特殊の文明や信仰をさぐり、高慢なる內地人に向つて『武士道や愛國心は卿等の占有物ではない、ここにもさらに進んだ道德や文明がある』と說破すると共に、又かく信ずる義俠の人があれば、もとより內容や性質でなく形式だけはこれ世界大のラフカディオ・ヘルンを日本小にしたやうである。

ヘルン夫人への手紙

「茲に紹介するのはヘルンが、明治三十五年及明治三十七年の夏、静岡の焼津海岸から留守宅の夫人に宛てた書簡の大部分である。ヘルン夫妻の日常の會話は二人の間だけで通用する「ヘルンさん言葉」なる一種獨特の日本語であつた。此の手紙の原文も「ヘルンさん言葉」を以て、殆ど全部片假名で記されてあるが其の儘では分りにくいから、分り得る程度に、そして原文の味を傷り損はぬ程度に、處々訂正した――譯記す」

一[註一]

小[註二]サイママ。

今日ハ少シオ日サンガアタリマシタ。一雄ハ海デ水雷艇[註三]遊ビヲシマシタ。一雄ハ毎日泳ギガ上手ニナリマス。

昨日運動[註四]シマシタ。アノ猫[註五]ニ小サイ手鞠ト小サイ小サイ鈴ヲ買ツテヤリマシタ。

今焼津ノ石屋ガ地藏[註六]ノ像(ソウ)ヲカイテ私ニ見セテ居マス。アノ

佛像ノ上ニ『小泉一雄カラ』ト、ホラセマセウ。燒津ノ人ハ大喜ビスルデセウ。

ココニハ蚤ガ澤山居テ刺シマス。アナタノ來ル時、蚤取リノ藥ヲ少シ持ツテ來ルヤウ願ヒマス。然シアノ小猫ノオ蔭デ蚤ノ事モ忘レマス。ソレ程ヲカシイ猫デス。私ハアノ小サイ烏猫(カラスネコ)ヲ『ヒノコ』ト呼ビマス。

パパカラ

燒津　七月十二日

巖ト淸ニ接吻。

註一　一——四は明治三十五年の分。五以下は三十七年夏、ヘルンの死ぬ一二ヶ月前の手紙である。

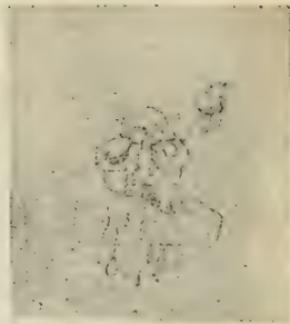
註二　小サイは可愛イといふ意を含む。

註三　パパの泳いで居る所を下から潜つてお腹を突いたり足を引張つたりすること。

註四　ヘルンの謂ふ『運動』は二三時間に亙る長い散歩のこと。

註五　前の飼主に捨てられに行く途中ヘルンに貰ひ取られた黑い子猫。

註六　防波堤の上に浪切り地藏（浪除け地藏とも言つた）と言ふ小さい地藏があつた。頭は缺け落ち體も毀れた儘になつて居たのをヘルンが造り直さうとして石屋を呼び寄せ、顏の下圖を描かせた。これは何度もかきかへかきかへさせたが結局ヘルンの氣に入らなかつたとのことである。

二

小ママ。

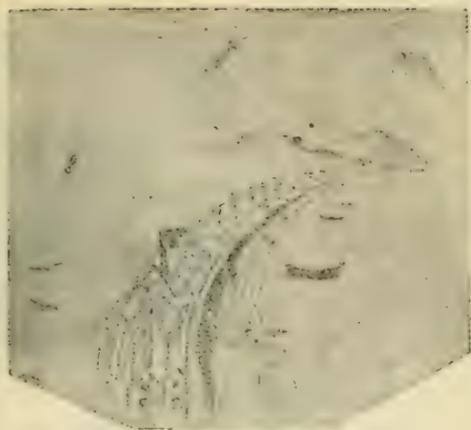
ゴメンゴメン。アナタヲ少シ喜バセルト思ヒマシタ。アノ地藏ハ墓場ノ地藏デハナイ。波ヲ馴ラシテ靜カニスル地藏デス。惡イモノデハナイ。然シアナタハ好カナイ。ソレナラ一雄ノ名モ私ノ名モドンナ名モ書キマセン。

パパカラ、ゴメン――ゴメン。

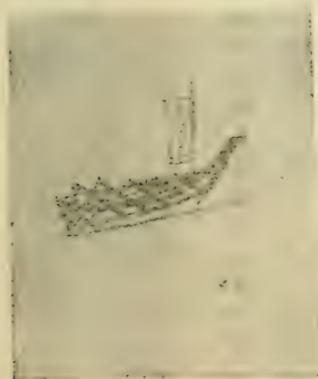
唯私ノ考ガ馬鹿デシタ。地藏樣ハアナタノ疑フノヲ聞イタ時大泣キシマシタ。私ハ唯海ヲ大事ニスル地藏ダト言ヒマシタ。『仕方ガナイ、アノ子供ノ母ガアナタヲ疑フ』ト私ハ地藏ニ言ヒ聞カセマシタ。デスカラ今デモ泣イテ居マス。

石ノ涙ヲコボシテアノ地藏ハ泣イテ居マス。

註　地藏さんは子供の死んだ時でなければ作らぬ。一雄の名を刻らせるのは緣起がよくない。見合せたがよからうと夫人から言つて來た。二はそれに對する返事。

三

小ママ。アナタノ可愛イ手紙今受取リマシタ。梅[註一]サンガ新ラシイ家ヲ建テタノヲ私喜ビマス。私トアナタト二人デイツカ見ニ行カウデハアリマセンカ。

一雄ハ昨日始メテ深イ海ニ入リマシタ。五度モ一雄ハ沖ニアル船マデ泳イデ行キ泳イデ歸リマシタ。日ニ日ニ一雄ハ丈夫ニナリ、泳ギガ上手ニナリマス。今ハ大層黒イデス。天氣ハ良クテ而モ涼シイデス。

一雄ノモッテ居ル小舟ニ名前ヲツケマシタ。ヒノコ丸ト呼ビマス。オ咲[註二]サンガ其ノ舟ニ小サナ旗ヲ立テマシタ。アノ小サイ鳥猫ニモ名前ヲツケマシタ。ヒノコト呼ビマス。小サイ眼ガ火ノ子ノヤウ

デスカラ。

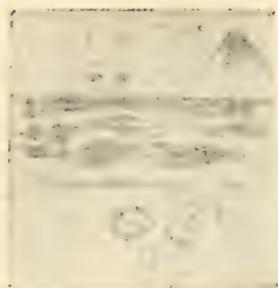
燒津ノパパカラ

可愛イママニ。

七月二十五日。二十五日。二十五日。二十五日。二十五日。

註一　法學博士梅謙次郎。

註二　宿の主人乙吉の娘。

四

小ママ。

昨日大キナ土用波ガアリマシタ。ソレデ乙吉サンハ一雄一人デ泳グノヲ許シマセンデシタ。然シ乙吉ハ手ヲ引イテ一雄ヲ海ニ入ラセマシタ。午後カラ海ガウナリ始メマシタ。晩ニハ波ガ堤防マデ押シ寄セマシタ。今朝モ波ガアルカラ泳グ事ハ出來マ

セン。然シ午後カラオトナシクナルデセウト思ヒマス。

アノ小雀ノ子ハ三日ノ間丈夫ニ見受ケラレマシタ。然シ昨晩天氣ガ變ツタ爲メニ病氣ニナリマシタ。

昨晩乙吉ガ二匹ノ鮫ヲ買ヒマシタ。ソレデ一雄ハ始メテ鮫ノ形ヲヨク覺エマシタ。少シデシタガ鮫ノ肉ノ料理モ上手ニ出來マシタ。白イ肉デ善イ味デシタ。

此ノ頃ハパパモ朝乳ヲ飲ミマス。

パパカラ

燒津　八月一日

五[注一]

小サイママ。[注二]ステーションデ澤山待ツ時ハアリマセンデシタ。子供ニ[注三]ICE CREAM ヤル暇(ヒマ)ガナカツタ程デス。

少シノ心配モアリマセンデシタ。一雄ハ十時カラ汽車デヨク眠リマシタ。シカシ巖ハ十一時マデ笑ヒマシタ。ソシテ喜ビマシタ。ソレカラ眠リマシタ。汽車ノ中ハ大層涼シイデ

シタ。

五時[註四]。今乙吉サンノ家ニ着キマシタ。

註一　明治三十七年八月二日。東京を立つて燒津に着いた時の手紙。

註二　新橋驛——舊の東海道線、始發驛。

註三　驛の階上に壺屋と云ふ西洋料理屋があつた。新橋に行けばヘルンは其處でアイスクリームを食べるのを常とした。

註四　朝の五時。其の頃は新橋から燒津まで七八時間を要した。

六[註]

小サイ可愛イママ。

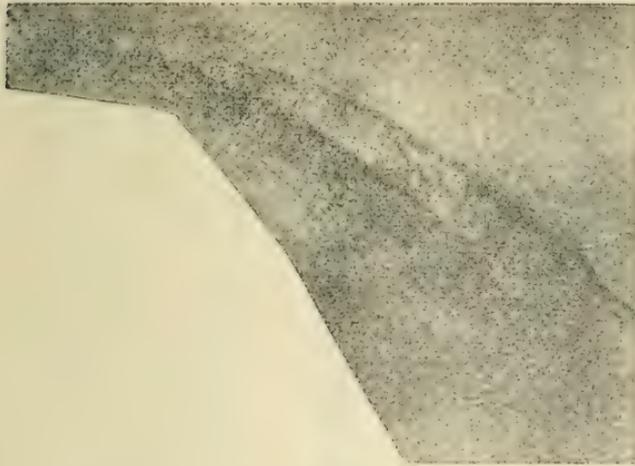
天氣ハ申分ナイ。一雄ハ良ク勉强シマス。

變ツタ事ハアリマセン。

燒津　八月五日

パパカラ

註 [illegible]人の手紙の註釋參照。

七

小ママサマ。今日良イ天氣。子供ハ泳ギマシタ。乙吉サンガ澤山菓子ヲ呉レマシタ。モウ二三日スルト祭ガアリマセウ。ソレカラ盆踊ガアルデセウ。一雄大喜ビ。今泳ギニ行キマス。然シ少シ水ニ恐レル。深イ所ニ參ルノハ好カナイ。然シ今年一雄ハ慄ヘナイ。水ニ入ツテモ元氣ニナリマシタ。

パパ大變手紙書クノガ無精。御無沙汰。然シ丈夫デスヨ。

サヨナラ。オババサマニ可愛イ言葉。

清トスズ子ニ接吻。

小泉八雲

註　[illegible]。

八

八月十日

小ママサマ。

今日朝、海デ泳ギマシタ。水ガ温カッタカラ面白カッタ。一雄ハ泳ギガ少シ下手ニナリマシタ。前ノヤウニ上手デナイ。然シモウ二三日タッタラ上手ニナリマセウ。海ニ入ルトキ一雄ハ小サイ護符ヲ着ケマス。私ガナゼダト聞キマシタラ一雄ハ言ヒマシタ。「海ニ入ル時コレヲ着ケナサイトママサマガ私ニ言ヒマシタ」

巖ガ少シ泳ギマシタ。上手ニナルデセウ。

傳[註]ハ大キナ男ニナッテ居マス。妻モアリマス。ソノ妻ハ可愛イクテ氣ガ利イテ大變ヨロシイ。

今年乙吉ハ少シ年ガ寄ッタヤウデス。アノ堤防ハ皆コハレタノデハナイ。アノ新ラシイ堤防バカリコハレマシタ。

一昨年居タ家鶏ヤ鳩ハモウ居マセンヨ。可哀サウニ。

パパカラ

オモシロイママサマニ。

オババサマニカワイイ言葉。

天氣ハ良イ。

小泉八雲

註　乙吉の長男梅吉。

九

一番可愛イ小ママサマ。

アナタノ可愛イ手紙今參リマシタ。私ハアナタノ言葉ヲヨク守リマセウ。少シモ心配ハ要リマセン。

蚤ガ居ナクナッテ子供ハ喜ビマス。巖ハ大變善イ行儀デス。

客ガ前ノ部屋ニ居マス。面白クナイ。然シ今日歸ルデセウト思ヒマス。私ハ今アナタニ

註二 KELLY & WALSH ニヤル手紙ヲ送リマス。其ノ手紙ヲ横濱ニヤッテ下サイ。私ガ燒津ニ居ル事ヲ人ニ知ラレルノハ私ハ好カナイ。デスカラ其ノ手紙ヲ郵便デ今アナタニ送ル。ソシテアナタハ其ノ手紙ヲ横濱ニヤッテ下サイ。

アノ人等ハ私ニゴメンヲ言ヒマシタ。註三『アヤマチヲシマシタ、私等ノ書記ガ死ンダカラデス』ト言ヒマシタ。

儂ハ今少シ淩ゲマス。勇マシイデスヨ。

パパカラ

註一 同じ宿に泊つて居た祭り當て込みの商人。

註二 横濱の本屋。

註三 會計係の書記が死んだ爲め本屋が手違ひしてヘルンに註文書の支拂を二重に請求したことあり。ヘルンの抗議によつて本屋が詫びて來た。其の報告。

一〇

小ママサマ。

天氣ハイツモノヤウニ綺麗。客ガ漸ウ行ッテシマヒマシタ。喜バシイ。

乙吉サンノ妻病氣デス。オテツ[註一]ノ家デ泊ッテ居マス。然シ少シナホリマシタ。

[註二]オトヨガ私ヲ訪ネテ來マシタ。オトヨノ亭主兵隊ニ取ラレマシタ。アノ煙草屋モ取ラレマシタ。燒津カラ十七人戰爭（イクサ）ニ取ラレマシタ。

今日波ハ高イ。大潮。然シ靜カデス。一雄ト巖泳ギマシタ。巖ハ少シ覺エマシタ。今浮ク事ヲ上手ニシマス。ソレガ出來レバ皆何デモ學ビ易イデセウ。パパハ初メノ二日ハ少シ苦カッタノデ、ダルクテ無精デシタ。然シ今ハ元氣ニ返リマシタ。パパノ大キナ布袋腹ガ少シ小サクナリマシタ。

今日、祭リガアリマス。『ヤレイ、ヤレイ、ハヤ』ト御神輿樣（オミコシサマ）ガ午後マチヲ通ルデセウ。

巖ハ此ノ頃大變アカガネ色ニナリマシタ、口デハ言ヘナイ程デス。一雄ハ大層丈夫。

パパカラ

清ニ可愛イ言葉。

アバアバ[註三]ニ接吻シテ下サレ。

オババ様ニ可愛イ言葉。

小泉八雲

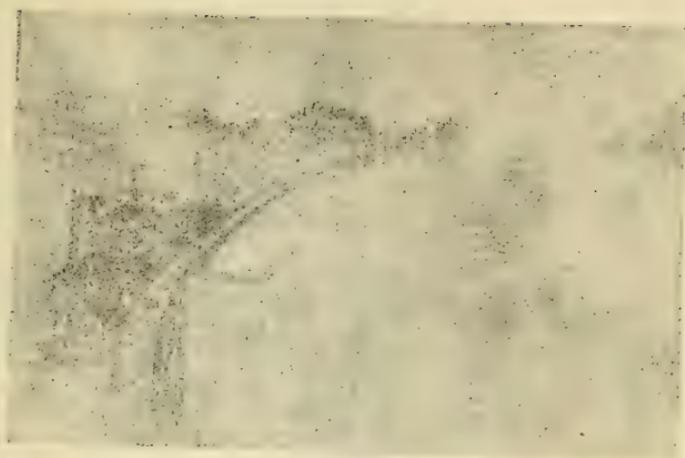
八月十三日

註一　嫁に行つて居る乙吉の娘。

註二　女中として小泉家に來て居た事のある女。

註三　ヘルンの長女壽々子のこと。當時一歳で常に『アバアバ』と言つて居た故。

二

小ママサマ。

祭ハスミマシタ。昨晩面白イデシタ。然シ今年ハ踊リハアリマセン。戰(イクサ)ノ爲メ其ノヤウナ金(カネ)ハ出マセンデシタ。

アナタノ可愛イ手紙昨晩參リマシタ。パパニ嬉シサヲ呉レマシタ。

今朝波ガ大キクナリマシタ。乙吉サンガ私ノ海ニ入ルノヲ手傳ヒマシタ。然シ子供ヲ海ニ連レテ入ル事ハ出來マセンデシタ。午後和田ニ行キマス。天氣ハ大變ヨロシイ。子供ハ毎日勉强ヲシマス。私ハ一雄ニ讀ム事バカリ教ヘマス。朝ハ新美(ニイミ)ガ巖(註二)ニ教ヘテ私ガ一雄ニ教ヘマス。午後ハ新美ガ一雄ニ教ヘテ私ガ巖ニ教ヘマス。

燒津　八月十四日

パパカラ

可愛イママサマニ。

スズ子ニ

清サンニ　　　セツプン

オババサンニ

註一　ヘルンのいつも泳ぐ所から半里程南の海岸。波の靜かなる所。

註二　小泉家の書生。

一二

小サイ可愛イママサマ。昨晩號外ガ出マシタ。大キナ勝戰（カチイクサ）ノ事デ。私等ハ氷トラムネデ祝ヒマシタ。然シモウ變ツタ號外ハ出マセン。

今日ハ波ガ少シアリ。クラゲガ居マス。一雄ト新美ト私ガ刺サレマシタ。スグナホリマシタ。然シクラゲハ面白クナイ。

昨晩運動シマシタ。日本武尊ノオ社ヲ訪ネマシタ。ソシテ黒トンボヲツカマヘマシタ。

蚤ガ刺シマス、然シ蚊ハ澤山居マセン。

乙吉サンハ朝、海ニツイテ行キマス。子供ハ喜ビマス。私ハ思フ、巖ハ直キニ泳ギヲ覺エマセウ　然シ此ノヤウナ波ノアル時、子供ノ泳グノハムツカシイ。和田ニ行ク路ガ波デ澤山コハレマシタ。私等ハ未ダ和田ニ參リマセン。然シモウチキ行クデセウ。大蟬ガウタッテ[註一]ゴザリマス。

パパカラ

燒津　二月十五日

アバアバニパパカラセップン

[註二]カワイサウナ淸、サミシイデセウ。

小泉八雲

註一　ゴザリマスはヘルンのよく使ふ冗談口調。

註二　パパも兄等も不在故淋しからうといふ意。

一三

註　畫は和田海岸。

小ママサマ。

天氣ハイツモノヤウニヨロシイ、然シ波ガ少シ大キイデス。子供ハ喜ビマス。オテツノ子ハ今大ヘン大キクソシテ丈夫デス。コロンダリ飛ンダリ。大蟬ハ朝ニバカリウタヒマス。若イ時ハウタヒマセン。大久保村ノ蟬ノヤウデハナイ。

パパト子供ハ鶯色トナリマシタ。今大久保村ノ家ハ面白イデセウ。芭蕉ハ澤山新ラシイ葉ガ出タデセウ。新ラシイ竹ノ葉モ出タデセウ。ツクツクボウシガウタフデセウ。

パパカラ

皆、家ノ可愛イ人ニ好イ言葉。

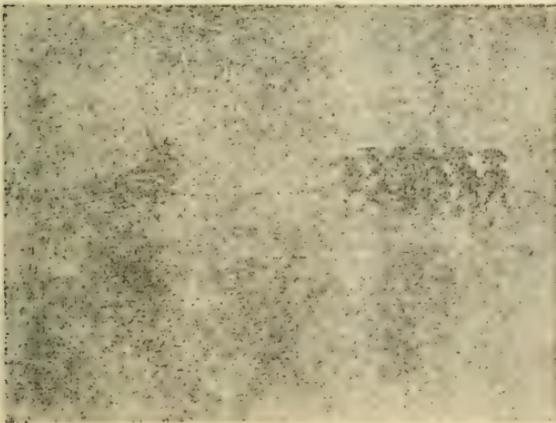
燒津　八月十六日

一四

小サイ可愛イママサマ。

ヨク來タト申シ度イアナタノ可愛イ手紙今朝參リマシタ。口デ言ヘナイ程喜ビマシタ。

ママサマ、少シモアブナイ事ハアリマセン。ドウゾ案ジナイデ下サイ。今年ハ一度モ夜(ヨル)ノ海ニ行キマセン乙吉ト新美ノ二人ガ子供ヲ大事ニ氣ヲ附ケマス。一雄ハ深イ所デ泳イデモ危イ事ハアリマセン。此ノ夏ハクラゲヲ大變恐レマス。然シヨク泳ギソシテ遊ビマス。アノ成田樣ノオ護符(マモリ)ノ事ヲ思フ。アノイハレハ可愛ラシイモノデス。

私少シ淋シイ。今アナタノ顏ヲ見ナイノハ。未ダデスカ。見タイモノデス。

蚤ガ群ッテ集マルノデ眠ルノハ少シムツカシイ。然シ朝、海デ泳グカラ、皆、夜ノ心配ヲ忘レマス。

今年私ハ小サイタライノオ風呂ニ二三日毎ニ入リマス。

燒津　八月十七日

パパカラ

可愛イ子ニ、ソレカラ皆ノ人ニヨロシク。

小泉八雲

註　畫の說明——走つて居る二人の子供は大きいのが一雄小さいのが巖のつもり。網を曳く漁夫共の冠つて居るのは『やいづ笠』といふ此の地の漁夫特有のもの。

一五

小サイ可愛イママサマ。

今朝成田樣ノオマモリガ參リマシタ。パパハ乙吉ニヤリマシタ。スルト大變喜ビマシ

タ。今アノ妻ハ少シナホッテ家ニ歸ッテ來マシタ。

シヤツヲ送ッテ下サッテ有難ウ。然シパパ少シモ寒クアリマセン。今ハ丈夫ニナリマシタ。ソシテ新ラシイ皮膚（カハ）ヲ海デ拵ヘマシタ。

ママサマニ願フ。自分ノ身體（カラダ）ヲ可愛ガルヤウニ。今アナタ忙ガシイデセウネ。大工ヤ壁屋ヤ澤山ノ仕事デ。[註] デスカラ身體ヲ大事ニスルヤウニクレグレモ願ヒマス。

私今日ハ忙ガシカッタ。本屋ガ校正ヲ寄コシマシタカラ。然シモウ皆スマセマシタ。

巖ト一雄丈夫デ可愛ラシイ。海デ澤山遊ビ、黑クナリマシタ。乙吉ハ二人ヲ大事ニシテクレマス。勉强毎日シマス。

サヨナラ、可愛イママサマ

オバパサンニ可愛イ言葉

子供ニ接吻。

小泉八雲

燒津　八月十八日

註　當時ヘルンの留守宅は修繕中であつた。大工や左官の見廻り其他種々の仕事で忙しいだらうといふ意。

一六

燒津　八月十九日

小ママサマ。

アナタノ大層可愛イ手紙參リマシタ。大工ト壁屋ガ來テ居ルト聞イテ大層喜バシク思フ。

今朝海ハ大層荒クテ泳グ事ガ少シムツカシイ。デスカラ乙吉サント和田ニ參ラウト思フ。アナタ覺エテ居マスカ。燒津ニ小サイ娘ガアリマシタ。ビッコノ娘。可哀サウデシタネ。今ハ大キナ娘トナリマシタ。隣リノ小サイ息子ハ敬（ケイ）ト言フ名前デス。今大キサハ巖程デ、學校ニ行ツテ居マス。ソシテ學問ガヨク出來マス。二年ノ間ニ若イ人ガ大キクナルノハ何ト早イ事デセウ。巖ハモウ少シデ初メテノ英語ノ本ヲスマスデセウ。今ハ唯、四五ペーヂ（此ノ字ハ一雄ガ書キマシタ）殘ツテ居マス。一雄ニハ私ガツイテホンノ少シ勉强ヲサセマス。少シデスケレドモヨクシマス。古[註]イモノバカリ。新ラシイモノハ歸ツテカラヤリマス。然シ日記ヲ書ク、字ヲ書ク、手紙ヲ書ク、ソシテ英語ヲ讀ム、大層勉强デスネ。デスカラ私無理ハシ

マセン。一雄バカリデナク巖ニモ無理シマセン。唯毎日半時間程。巖ハヨク覺エル頭ヲ持ツテ居マス。ソシテ可愛イ時ハ珍ラシク可愛イ。今私等ノ窓ニ澤山小石ガ集リマシタ。毎日パパノ袖ヲ石デ一杯ニシマス。子供ハ如何ニ可愛イ、ソシテ可哀サウナモノダラウ。少シノ罪モアリマセン。

サヨナラ。ママノ可愛イ顏ガ間モ無ク見ラレルノヲ樂シンデ居マス。

小泉八雲

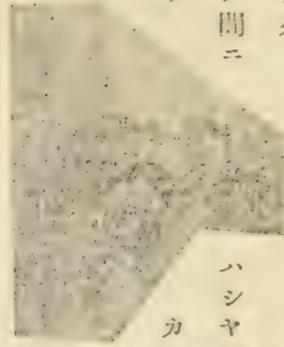
註　今は復習だけ。東京に歸つてから先へ進まうとの意。

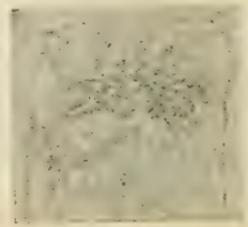
一七

小サイ可愛イママ。

昨日午後和田ニ行キ辨當ヲ食ベマシタ。ソシテ和田デ子供ニ本ヲ敎ヘマシタ。ソレカラ盥ヲツカマヘマシタ。巖ハ少シ泳ギガ出來マシタ。和田ニアルアノ小家ハ少シ手入レヲシマシタ。一昨年ト同ジ年寄リノオ婆サンガ居マス。オ茶ハイツモノヤウニ良イ。アノオ

茶ハ自分ノ庭デ作ルカラ良イノデス。昨日夕方富士山ガヨク見エマシタ。今日波ガ大キイデスカラ朝ハ泳ギマセンデシタ。昨晩ハ大層暑イ夜デシタ。窓ヲ閉テナカッタ程ニ。然シ天氣ハイツモヨロシイ。巖ハ自分ノ蟹ヲ乙吉ノ家ノ屋根ニ放シマシタ。スルト歩イテ歩イテ歩キ廻リマシタ。

夜ノ間ニ　ハシヤボンヲカヂリマス。然シアノ針金ノシヤボン箱ヲアケルノハムヅ　カシイ。可哀サウニ。

パパカラ

燒津　八月二十日

註　蟹の畫に就いて。――ヘルン夫妻が京都に旅行したとき滯留した宿の一室に懸つて居たのが、大きな蟹の畫に「橫行世界」といふ賛を添へたものだつた。二人は之を興がつて其後「橫行世界」を蟹の代名詞にして仕舞つた。

一八

小ママサマ。

昨日乙吉ガ大キナ盃ニ一杯梨子ヲ呉レマシタ。ママサマカラノ不動様ノオ護符(マモリ)ノ御禮トシテ。

前日ニ行ッテ辨當食ベマシタ。僕少シ泳ギヲ覺エマシタ。然シアノ僕少シモ恐懼(オソレ)ヲ知リマセン、深イ所デ泳グノガ好キデス。モウ少シシタラ能ク泳ゲルヤウニナリマセウ。泳ギヲ學ブ時、パパト乙吉ト新美ト三人デ世話ヲシテヤリマス。

今日大波ハアリマセン。海ハ靜カデ空ノ色ト富士山ガ綺麗ニ見ラレル。一ツノ雲サヘモアリマセン。

乙吉ノ家ニ面白イ息子ガ手傳ヒニ來テ用ヲシテ居ル。熊吉ト呼ブ。可愛イ子デス。

僕ハ今ハ口デ言ヘナイ程黑イ。アナタハ今アノ男子(ダンシ)ヲ見分ケル事ガ出來ナイ。

子供等ハトンボヤバッタヲツカマヘル。笑フ。石ヲ集メル。カルタデ遊ブ。良ク食ベル。良ク眠ル。

パパモ大層丈夫。然シ砂利(イシ)ノ上ヲ歩クノニハ足ガヤハラカスギマス。デスカラ相間ニ歩イテ行ク時ゾウリヲハキマス。泳グ時珍ラシイワラデヲハキマス。乙吉ノ作ツタモノデス。

パパカラ

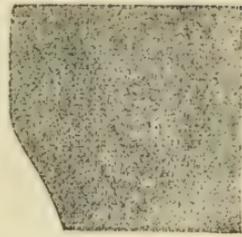
焼津　八月二十一日

オババ様ト子供ニ可愛イ言葉。

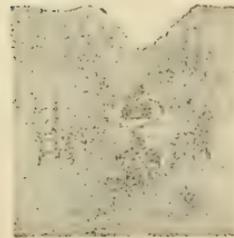
一九

小ママサマ。

一ナヤノ可愛イ十手紙ト新聞ト雑誌ト皆參リマシタ。有難ウ。昨晩アメリカカラ來タ校正ト高田サンノ校正ヲ讀ミマシタ。ソシテ今朝皆郵便デ返シマシタ。

昨晩少シ運動ヲシマシタ。ソシテ射的場(註一)ニ子供ト一所ニ參リマシタ。アノ射的場ノ的(マト)ニ[illegible]目ト言フノガアリマス。露國ノ兵隊ノ顔ノ形デシタ。巌ハソレニ當テマシタ。ソシテ

旅順口ヲ取リマシタ。『僕ハ、僕ハ旅順口ヲ取リマシタ』ト大キナ聲デ言ヒマシタ。ソレカラ氷屋ニ參リマシタ。アノ氷屋ニオトヨサンガ女中（シモベ）ノ仕事ヲ今シテ居マス。椅子ト机ガアッテ店ノ前ノ往來ニ出シテアリマス。

サヨナラ。パパハ此ノ手紙早ク書キマシタ。郵便ニ間ニ合フ様ニ。

ゴメン。[註二]

小泉八雲

燒津　八月二十二日

註一　玉轉がしの店。

註二　早く書いて字がぞんざいだからゴメン。

二〇

小ママ。

昨晩大變鰹ガ獲レマシタ。日暮ニオテツノ亭主ノ船ガ歸リマシタ。ソレカラホカノ五ツノ船モ。皆ノ人ガ出テ來テ手傳ヒマシタ。オテツノ亭主ノ船ニ千七百鰹ガアリマシタ。魚一ツ二十錢デス。松明ノアカリデ其ノ魚ヲ船カラ運ビ出シマシタ、面白イデシタ。然シ今朝ハクラゲガ大變デシタ。パパハ刺サレマシタ。海ハ今クラゲノ爲メ等活地獄ノヤウデス。私ハクラゲヲ可愛ガル氣持ハ少シモナイ。然シ天氣ハ面白イ。昨晩運動シマシタ。子供ト一所ニ。ソシテ蛙ノ歌ヲ聞キマシタ。子供ハ可愛イデス。新美ハ大層親切デ良イ人デス。何モカモ面白イデス。クラゲヲノケレバ。

サヨナラ。

可愛イママサマ。

皆ノ人ニヨロシキ言葉。パパカラ。

小泉八雲

燒津

八月二十四日

二一

燒津　八月二十四日

小ママサマ。

昨日暑イ日、九十一度アリマシタ。ソシテ少シモ風ガアリマセンデシタ。夜ノ間ニ風ガ海カ參リマシタ。ソレデ今朝ハ大層波ガ荒イノデ運動ダケシヨウト思ヒマス。

オトヨガ昨晩子供ニ梨子ノ進物ヲクレマシタ。晩ニ一雄ト巖ガ射的場ニ行ッテ打チマシタ。面白イ。昨晩ハ氷トラムネト薑水ヲ飲ンダ程暑イデシタ。

今巖ハ一年ノ英語ノ本ヲスマシマシタ。アノ小サイ頭ニハドンナ仕事モ皆ムツカシクナイ。コチラデ大變勉强シマシタ。新美サンニ習ッテ澤山字ヲ書キマシタ。

只今アナタノ重イ手紙ガ參リマシタ。アノ蛇ノ話ハ面白イ。蛇ノ訪問ハ吉事デシアハセノモノデス。アナタ善イ言葉ヲ言ヒマシタ。娘等ガ蛇ヲ恐レルノハ唯蛇ノ事ヲ知ラナイカラデ

ス。蛇ハ少シモ悪イ事シマセン。ソシテ蛇ハ籔ノ神様ノ友達デセウ、面白イ。

パパモ皆ノ人モママノ可愛イオ顔ヲ見ルノヲ楽シンデ居マス。

パパカラ可愛イ言葉ヲ皆ノ人ニ。

小泉八雲

註　小泉家の臺所の梁に或晩一匹の蛇が訪問した。女中共が恐がつて大騒ぎをした。夫人が出て来て「蛇は餌を取りに来たのだからかまつてはいけない。放つて置けば何も悪い事はしないで帰つて行くから」と皆をなだめた。果して蛇は暫くしてから居なくなつた。其の事を夫人が詳しくヘルンに報告した。之はそれについての感想である。

當時小泉家には大きな竹籔があつた。其の一隅に鬼門さんの小祠が在つて其の附近によく蛇が居た。蛇は籔の神様の御使だ、御友達だとヘルン夫妻は常に語り合つた。

ヘルン文庫目録

POETRY

		Vol.
1.	The Oxford Book of English Verse	1
2.	Stedman—A Victorian Anthology	1
3.	„ An American Anthology	1
4–13	British Anthologies	10
14.	The Early Poems of Tennyson	1
15–21.	Tennyson—Works	7
22	„ Idylls of the King	1
23.	Alfred Gatty—A Key to Tennyson's In Memoriam	1
24.	Austin Dobson—Old World Idylls	1
25.	„ At the Sign of the Lyre... ...	1
26.	Andrew Lang—Rhymes à la Mode	1
27.	F. Locker—London Lyrics	1
28.	B. Taylor—Poems	1
29.	Longfellow—Poetical Works...	1
30.	„ Poems	1
31.	Lowell—Poetical Works	1
32.	Chaucer—Poetical Works	1
33.	Shelley—Poetical Works	1
34.	Wordsworth—Complete Poetical Works	1
35.	Spencer—The Works	1
36.	M. Arnold—Poetical Works...	1
37.	Dryden—Poetical Works	1
38.	A. Pope—Poetical Works	1
39.	Coleridge—Poetical Works	1
40.	Tennyson—Poetical Works	1
41.	Sheridan's Dramatic Works and Life	1
42	Milton	1
43.	Burns	1
44.	Shakespeare	1
45.	„	1

		Vol.
46.	Morte d'Arthur	1
47.	Virgil	1
48.	Horace	1
49.	Arthur O'Shaughnessy—Lays of France	1
50.	,, Music and Moonlight ...	1
51–53.	R. Buchanan—Poems	1
54.	C. S. Calverley—Verses and Flyleaves	1
55.	,, Translations into English and Latin	1
56.	F. Locker—Lyra Elegantiarum	1
57.	Stevenson—Songs of Travel	1
58.	William Bell Scott—Poems	1
59.	J. A. Symonds—Wine, Women, and Song ...	1
60.	Thomas Carew—The Poems and Masque	1
61.	Yeats—The Wind among the Reeds	1
62.	W. Watson—Poems	1
63.	J. A. Symonds—Vagabunduli Libellus	1
64.	Sir Walter Scott — Minstrelsy of the Scottish Border	1
65.	Scott's Poetical Works, ed. by W. M. Rossetti...	1
66.	Southey—Poetical Works	1
67.	E. Gosse—New Poems	1
68.	,, Firdausi in Exile	1
69.	Aldrich—Unguarded Gates	1
70.	,, Poems	1
71, 72.	James Thomson—Poetical Works...	2
73.	Lyrics from Elizabethan Song Books	1
74.	Lyrics from Elizabethan Dramatists	1
75.	American Sonnets	1
76.	D. G. Rossetti—House of Life	1
77.	Thomson's Seasons and Castle of Indolence ...	1
78.	English Miracle Plays	1

		Vol.
125.	O. W. Holmes—Complete Poetical Works... ...	1
126.	E. Cosse—In Russet and Silver	1
127.	Arthur Clough—Poems	1
128, 129.	Thomas Hood (British Poets)	2
130–133.	Ballads (British Poets)	4
134.	G. Ellis—Early English Metrical Romances ...	1
135, 136.	Percy—Reliques of Ancient English Poetry ...	2
137.	D. G. Rossetti — Blessed Damozel and other Poems	1
138.	R. M. Milnes—Poems	1
139.	Bret Harte—Poetical Works...	1
140.	Whittier—Poetical Works	1
141.	Byron—Poems and Dramas	1
142.	,, Poetical Works	1
143.	Stephen Philips—Paolo and Francesca	1
144, 145.	W. S. Gilbert—Original Plays	2
146, 147.	,, Eight Original Comic Operas ...	2
148–154.	D. G. Rossetti—Poems	7
155–159.	Milton—Paradise Lost	5
160.	Meredith—A Reading of Earth	1
161.	,, The Empty Purse	1
162.	,, Modern Love...	1
163.	,, Ballads and Poems of Tragic Love ...	1
164.	,, Poems and Lyrics of the Joy of Earth	1
165.	Lord de Tably—Poems, Dramatic and Lyrical...	1
166.	C. Patmore—The Angel in the House	1
167.	,, Unknown Eros...	1
168.	Cory—Ionica Kakuzo- -The	1
169.	Kipling—Seven Seas	1
170.	,, Departmental Ditties and other Poems	1
171.	,, Barrack Room Ballads	1
172.	,, Collectania	1

		Vol.
173.	Kipling—The Five Nations	1
174.	,, Absent-Minded Beggar	1
175, 176.	Owen Meredith—Poems...	2
177.	G. Crabbe—Poetical Works	1
178.	W. S. Gilbert—Bab Ballads...	1
179.	Sisters Brontë—Poems	1
180.	E. Fitzgerald—Omar Khayyam	1
181.	Francis Thomson—Poems	1
182.	Jean Ingelow—Poems	1
183.	Swinburne—Poetical Works	1
184–186.	,, Poems and Ballads	3
187.	,, Songs before Sunrise...	1
188.	,, Songs of the Springtides...	1
189.	,, Songs of Two Nations	1
189.	,, Songs of Two Nations	1
190.	,, Miscellaneous	1
191.	,, Essays and Studies	1
192.	,, Poetical Works	1
193.	Moore—Poetical Works...	1
194, 195.	R. Bridges—Poetical Works...	2
196.	Longfellow—Evangeline...	1
197, 200.	Chaucer	4
201.	Campbell	1
202.	Pope—Essay on Criticism	1
203.	M. Arnold	1
204.	Dryden—Hind and Panther	1
205–207.	Palgrave—Golden Treasury	3
208.	Scott	1
209.	Longfellow—Hiawatha	1
210–217.	Tennyson	8
218.	Aytoun—Lays	1
219.	From Blake to Arnold	1

		Vol.
220.	E. Gosse—Hypolympia	1
221.	The Globe Poetry Reader	1
222.	C. Kingsley—Poems	1
223.	Arcadius Yonge—Fantasma	1
224.	George Theodore Welch—An Age Hence... ...	1
225–255.	Longfellow—Poems of Place	31
256–288.	Macmillan's Golden Treasury Series	33
289.	William Watson—Lachrymae Musarum and other Poems	1
290, 291.	Corpus Poeticum Boreale, the Poetry of the Old Northern Tongue	2

China

292.	J. D. Ball—Things Chinese	1
293.	Arthur Smith—Chinese Characteristics	1
294.	Williams—Middle Kingdom	1
295, 296.	Giles—Strange Stories from Chinese Studio ...	2
279.	The Travels of Marco Polo...	1
298.	R. K. Douglas—The Life of Jenghiskhan... ...	1
299.	Porcelaine Chinoise...	1
300.	Chinese Mother Goose Rhymes	1
301.	S. Julien—Le Livre de la Voie et de la Vortu	1
302.	E. J. Eitel—Feng Shui or the Rudiments of Natural Science in China	1
303.	C. F. Neumann—Translations from the Chinese and Armenian	1
304.	China, Pictorial and descriptive	1
305.	Judith Walter—Le Livre de Jade	1
306.	Camille Imbault-Huart—Les Instructions Familieres du Dr. Tchou Po-Lou...	1

Japan

307.	Conder—Landscape Gardening in Japan	1

		Vol.
308.	Chamberlain—Kojiki	1
309, 310.	Aston—Nihongi	2
311.	J. J. Rein—Japan	1
312.	,, The Industries of Japan	1
313.	O. Edwards—Japanese Plays and Playfellows ...	1
314.	W. E. Griffis—Mikado's Empire	1
315.	E. Morse—Japanese Homes	1
316.	Catalogue of Japanese and Chinese Paintings in British Museum	1
317.	Aston—Grammar of the Japanese Written Language	1
318.	Aston—Japanese Literature	1
319.	Leon de Rosny—Anthology Japonaise	1
320, 321.	Annales du Musée Guimet	2
322.	T. Gollier—Essai sur les Institutions Politiques du Japan	1
323.	S. Gulick—Evolution of the Japanese...	1
324.	Murdock and Yamagata—A History of Japan ...	1
325.	Mitford—The Bamboo Garden	1
326.	Mitford—Tales of Old Japan	1
327.	J. La Farge—An Artist's Letters from Japan ...	1
328.	Florenz—Scenes du Theatre Japonais...	1
329.	E. F. Strange—Japanese Illustration	1
330.	Fenollosa—Masters of Ukiyoe	1
331.	William Bramsen—Japanese Chronological Tables	1
332.	Chamberlain—Handbook of Colloquial Japanese	1
333.	,, Things Japanese	1
334.	Florenz and Lloyd—Poetical Greetings from the Far East	1
335.	Isabella Beid—Unbeaten Tracks in Japan	1
336.	Charles Lanman—Leading Men of Japan	1
337.	F. Martin—Le Japon Vrai	1

		Vol.
338.	Satoh—Agitated Japan	1
339.	Suyematsu—Genjimonogatari...	1
340.	Chamberlain—The Classical Poetry of the Japanese...	1
341.	Nihon Seikokwai Kitobun	1
342–344.	Romanized Japanese Readers	3
345.	De Forest—Some Japanese Verbs	1
346.	Dr. M. Toyama—The Okuma Cabinet and Education	1
347.	G. Yoshida—Bells-du-Matin	1
348.	Dickins—Chusingura	1
349.	Percival Lowell—The Soul of the Far East ...	1
350.	,, Occult Japan	1
351.	Léon de Rosny—Les Coreens	1
352.	Hir et Ranjhan—Mythologie Japonaise	1
353.	Léon de Rosny—Traité de L'Education des Vers a Soie au Japon	1
354.	Astrologia Giapponese	1
355.	Batchelor—The Ainu of Japan	1
356.	Murry and Chamberlain—Handbook of Japan ...	1
357.	David Murray—Japan	1
358.	Aston—A Grammar of the Japanese Spoken Language	1
359.	C. Balet—Grammaire Japonaise	1
360.	Alice Mabel Bacon—A Japanese Interior	1
361.	Andre Bellessort—La Société Japonoise	1
362.	W. Griffis—Japanese Fairy World	1
363–366.	Dening—Japan in Days of Yore...	4
367.	Okakura Kakuzo—The Ideals of the East... ...	1
368.	Dening—Life of Toyotomi Hideyoshi...	1
369.	Nitobe—Bushido	1
370.	F. Turettini—Atsumegusa	1

No.	Title	Vol.
371.	F. Turettini—Atsumegusa	1
372.	Mythologie des Esquimax et de Japonais	1
373–375.	The Japan Society, London	3
376.	The Original Letters of the English Pilot Willlam Adams	1
377.	Nobushige Hozumi — Ancestor - Worship and Japan Law	1
378.	P. J. Penney—Japanese Popular Stories	1
379.	E. Satow—Kinsé Shiriaku, a History of Japan...	1
380.	Chamberlain—Mistress An's Narrative	1
381.	„ Notes on Some Minor Japanese Religious Practices	1
382, 383.	Arthur May Knapp—Feudal and Modern Japan	2
384.	A Dictionary of Principal Roads, Chief Towns, etc. of Japan	1
385.	The Official Guide to Kyoto and Allied Prefectures	1
386.	The Great Disasters in Japan, June 15th, 1896	1
387.	Chamberlain—The Japanese Language	1
388.	„ The Luchu Islands and their Inhabitants	1
389.	J. F. Lowder—The Legacy of Iyeyasu	1
390.	Fenolosa—A Catalogue...	1

Prose

(History, Fiction, Essays, Biographies, etc.)

No.	Title	Vol.
391–402.	Emerson—Complete Works	12
403–408.	E. A. Poe—Works...	6
409.	W. Irving—The Alhambra	1
410.	C Borrow—Lavengro	1
411–422.	De Quincey—Writings	12
423–432.	A. Dobson—Works	10

		Vol.
433.	W. Pater—Appreciations	1
434.	„ Renaissance	1
435.	„ Marius the Epicurean...	1
436.	J. M. Barrie—Sentimental Tommy	1
437.	Lewis Carol—Alice's Adventures and Through the Looking Glass	1
438.	„ Rhyme and Reason	1
439.	Kipling—Stalky & Co.	1
440.	„ The Day's Work	1
441.	„ Kim	1
442.	„ Jungle Book	1
443.	„ Second Jungle Book	1
444.	„ Soldiers Three	1
445.	„ Wee Willie Winkie	1
446.	„ Phantom Rikishaw	1
447.	„ Under the Deodars	1
448.	„ The Naulaka	1
449.	„ The Light that Failed	1
450.	Thomas Moore—The Epicurean	1
451.	Meredith—The Shaving of Shagpad	1
452.	R. L. Stevenson—The Wrecker	1
453.	Du Marier—Trilby	1
454.	„ Ibetson	1
455.	W. Beckford—Vathek	1
456.	C. Kingsley—Water Babies	1
457–463.	Gibbon—History of the Decline and Fall of the Roman Empire	7
464–465.	Macaulay—History of England	2
466.	„ Essays and Lays of Ancient Rome...	1
467.	Bacon—Essays	1
468, 469.	Lowell—Biglow Papers	2
470.	Carlyle—French Revolution	1

		Vol.
471.	Carlyle—Hero Worship	1
472.	,, Sartor Resurtus, Illustrated	1
473.	C. Kingksley—At last	1
474–477.	Melmoth the Wanderer, by the Author of "Bertum"	4
478.	Laurence Sterne—Works	1
479.	Du Maurier—The Martian	1
480.	E. T. Bullen—Deep Sea Plunderings	1
481.	,, Cruise of Cachalot	1
482.	,, The Log of a Sea-Waif	1
483–495.	English Men of Letters...	13
496–507.	Macmillan's English Classics	12
508–513.	Periods of European Literature Series	6
514–515.	R. Browning—Life and Letters	2
516.	Lamb—Tales from Shakespeare	1
517.	Stedman—Victorian Poets	1
518.	Ten Brink and Kluge—The Language and Metre of Chaucer	1
519.	William Sharp—Dante G. Rossetti, a Study ...	1
520.	Hall Caine—Recollections of D. G. Dante ...	1
521.	Bucke—Walt Whitman	1
522.	M. Bell—Sir Edward Burnes Jones	1
523.	S. Brooke—English Literature (Primer)	1
524.	Boswell—Life of Johnson	1
525.	Saintsbury—A Short History of English Literature	1
526.	,, Elizabethan Literature	1
527.	,, History of the 19th Century Literature	1
528.	,, Corrected Impressions	1
529.	,, Short History of French Literature...	1
530.	,, Specimens of French Literature ...	1

		Vol.
531.	Saintsbury—Miscellaneous Essays...	1
532.	E. Cosse—The 17th Century Literature	1
533.	„ The 18th Century Literature	1
534.	„ Gossip in a Library	1
535.	„ Questions at Issue	1
536.	„ Critical Kit-Kats	1
537.	Frederick Harrison—Studies in Early Victorian Literature	1
538–541.	H. Hallam—Literary History	4
542–543.	S. Brooke—History of Early English Literature	2
544.	Palgrave—Landscape in Poetry	1
545.	S. Brooke—English Literature from the Beginning to the Roman Conquest	1
546, 547.	Taine—History of English Literature...	2
548.	Charles Richardson—A Primer of American Literature	1
549.	Taine—Notes sur L'Engreterre	1
550–552.	Mrs. Oliphant—The Literary History of England	3
553.	E. J. Mathew—History of English Literature ...	1
554.	A. W. Ward—Geofrey Chaucer	1
555.	Dowden—Shakespeare (Primer)	
556.	„ French Litierature	1
557, 558.	Mrs. Oliphant — Victorian Age of English Literature	2
559–561.	Ten Brink—English Literature	3
562.	„ Five Lectures on Shakespeare	1
563.	E. Gosse—Modern English Literature	1
564.	John Morley—Studies in Literature	1
565.	Stephen Gwynn—Masters of English Literature	1
566.	F. Ryland—Chronological Outlines of English Literature	
567.	W. P. Ker—Epic and Romance	1

		Vol.
568.	F. Harrison—Choice of Books	1
569.	W. E. Rossetti—Ruskin, Rossetti and Pre Raphaelitism	1
570.	Anne Ritchie—Record of Tennyson, Ruskin and Browning	1
571.	Arthur Symons—Symbolist Movement in Literature	1
572.	V. D. Scudder—The Life of the Spirit in the Modern English Poets	1
573.	H. G. Keen—The Literature of France	1
574.	Dowden—New Studies in Literature	1
575.	J. Carret Underhill—Spanish Literature in the England of Tudors	1
577–579.	C. Ticknor—History of Spanish Literature... ...	3
580.	J. W. Nollett—An Illustrated Dictionary of Art and Archaeology...	1
581–590.	Grote—History of Greece	10
591.	J. B. Bury History of Greene	1
592.	F. Harrison—Meaning of History	1
593–599.	J. A. Symonds—Renaisssance in Italy	7
600–603.	Riess—Universal History	4
604.	„ Methodology of History	1
605.	„ An English Constitutional History	1
606–608.	Presecott—Conquest of Meico	3
609, 610.	John Fiske—Discovery of America	2
611.	Freeman—General Sketch of European History	1
612.	Green—A Short History of English People ...	1
613.	Froude—History of Spanish Armada	1
614.	„ English Seamen in the 16th Century ...	1
615–617.	Buckle—History of Civilization	3
618.	Fred. Kohlrsu ch—A History of Germany... ...	1
619–625.	Foreign Statesmen	7

		Vol.
626–628.	Cayarre—History of Louisiana	3
629.	Historical Sketch Book and Guide to New Orleans...	1
630.	The Atlantic Ferry...	1
631.	Dill—Roman Society	1
632.	Main—Ancient Law	1
633, 634.	J. Winckelmann—History of Ancient Art	2
635.	J. Heatley—A Visit to the West Indies	1
636.	S Laing—Human Origine	1
637.	S. Laing—Modern Science and Modern Thought	1
638.	„ Problems of the Future	1
639.	„ A Modern Zoroastrian	1
640.	Y. Hirn—The Origins of Art...	1
641–643.	J. G. Fraser—The Golden Bough	3
644.	G. T. Ferris—The Great Violinists and Pianists	1
645.	„ The Great Singers...	1
646.	Max Müller—Auld Lang Syne	1
647.	James Darmester—Selected Essays	1
646, 649.	Ennemoser's History of Magic	1
550.	C. Z. Gray—Children's Crusade	1
651.	F. Locker—Patch Work...	1
652.	W. F. Collier—Outlines of General History ...	1
653.	Saintsbury—The Flourishing of Romance	1
654, 655.	M. Arnold—Essays in Criticism	2

Philosophy

656, 657.	Lewes—History of Philosophy	2
658–662.	„ Problems of Life and Mind	5
663.	Bain—Mind and Body...	1
664.	„ Emotions and will	1
665.	C. K. Franklin—Socialization of Humanity ...	1

		Vol.
666.	Galton—Hereditary Genius	1
667.	Frince—Nature of Mind	1
668.	Clodd—Pioneers of Evolution	1
559.	Clifford—Lectures and Essays	1
670.	Wundt—Human and Animal Psychology	1
671.	L. Stephen—The Science of Ethics	1
672, 673.	Edward Tylor—Primitive Culture...	2
674, 675.	Lecky—The Rise and Influence of Rationalism in Europe	2
676, 677.	Lecky—History of European Morals	2
678.	Ribot—Heredity	1
679.	„ German Psychology of To-day	1
680.	„ Psychology of the Emotions	1
681.	„ Psychology of Attention	1
682.	„ Diseases of Personality	1
683.	„ Diseases of the Will	1
684.	„ English Psychology	1
685.	Grant Allen—Falling in Love, etc.	1
686.	„ Physiological Aesthetics	1
687.	„ Postgraduate Philosophy	1
688.	Draper—Intellectual Development of Europe. ...	1
689, 690.	Sully—Human Mind	2
691, 692.	James—Psychology...	2
693.	Galton—Natural Inheritance	1
694.	Bidwell—Curiosities of Light and Shade	1
695.	Sully—Studies of Childhood...	1
696.	Chamberlain—Child and Childhood in Folk Thought	1
697.	Finck—Primitive Love and Love Stories	1
698.	W. Smith — Kinship and Marriage in Early Arabia	1
699–701.	Schopenhauer—The World as Will and Idea ...	3

		Vol.
702.	Schopenhauer—Two Essays	1
703–705.	Nietzsche	3
756, 707.	Spencer—An Autobiography...	2
708–720.	„ Synthetic Philosophy	13
721.	„ Study of Sociology	1
722.	„ Factors of Organic Evolution	1
723.	„ Essays	1
724.	„ Education	1
725.	„ Social Statics...	1
726.	„ Recent Discussions in Science	1
727.	„ Factors of Organic Evolution	1
728.	„ Facts and Comments	1
729.	„ Illustrations of Universal Progress ...	1
730.	„ Various Fragments	1
731–733.	„ Essays, Moral, Political and Speculative	3
734.	„ Social Statics and Man versus State ...	1
735.	Collins—Synthetic Philosophy	1
736.	H. MacPherson—Herbert Spencer	1
737.	Herbert Spencer, His Life, Writings and Philosophy	1
738.	Aphorisms from the Writings of Herbert Spencer	1
739.	Maudsley—Pathology of Mind	1
740.	„ Physiology of Mind	1

Mythology

Religion, Foreign Literature etc.

741.	Andrew Lang—Custom and Myth	1
742.	F. H. Groome—Gypsy Folk-Tales	1
743.	Lady Charlotte Guest—The Mabinogion	1
744.	Burckhardt—Arabic Proverbs	1
745–756.	Records of the Past	12
757.	The Mesnevi of Jelalu-'d-din	1

		Vol.
758.	Speeches of Mahomed	1
759.	Ancient Arabic Poetry	1
760.	Mallet—Northern Antiquity	1
761.	The Saga of King Tryggwason	1
762.	F. Lenormant—Chaldean Magic, etc.	1
763.	F. Hueffer—The Troubadours	1
764.	The Cuchullin Saga in Irish Literature	1
765.	Mediaeval Tales	1
766, 767.	Modern Egyptians	2
768.	The Edda of Saemand	1
769.	Practical Philosophy of the Muhammadan People	1
770.	Handbook of Proverbs	1
771.	Domenieo Comparetti—The Traditional Poetry of the Finns	1
772.	G. W. Dasent—The Story of Burnt Njal	1
773.	Bahar-danush, or Garden of Knowledge : an Oriental Romance	1
774.	C. W. King—The Gnostics and their Remains...	1
775.	Knightly Legends of Wales	1
776.	Baring-Gould—Curious Myths of the Middle Ages	1
777.	A. Chodzko—Specimens of the Popular Poetry of Persia	1
778.	The Illiad of Homer	1
779.	The Odyssey of Homer	1
780.	Xenophon—The March of Ten Thousand	1
781.	E. Myers—The Odes of Pindar	1
782.	A. Lang—Theocritus, Moschus	1
783.	Aeschylus—Literally translated	1
784.	Lucretius	1
785.	Greek Anthology	1
786.	M. Aurelius Antonius	1
787–788.	Smith—Dictionary of Greek and Roman Geography	2

		Vol.
789.	Smith—Dictionary of Greek and Roman Biography, Mythology and Antiquity	1
790.	„ Classical Dictionary	1
791.	„ A Concise Dictionary of Greek and Roman Antiquities	1
792.	Keightley—Classical Mythology	1
793.	„ Fairy Mythology	1
794–796.	Ovid—Works	3
797, 798.	Euripides—Plays	2
799.	Greek Romance	1
800.	Sapho—Memoirs, Text Selected, Renderings from, a Literal Translation	1
801.	Pindar in Prose by Turner, in Verse by More ...	1
802.	Lucretius	1
803.	Herodotus	1
804.	Holy Bible	1
805.	Cruden Concordance to the Old and New Testament	1
806.	Job, Psalme etc.	1
807.	The History of the Christian Church...	1
808.	Gallery of Bible Illustrations...	1
809–822.	Goethe	14
823.	Goethe—Faust	1
824.	Heine	1
825, 826.	Jean Paul F. Richter—Titan...	2
827.	„ Flower, Fruit and Thorn Pieces	1
828.	Jean Paul F. Richter—Levana and Autobiography	1
829.	Lessing—Laocoon	1
830.	Dante—Divine Comedy (Longfellow)	1
831.	„ Divine Comedy (Cary)	1
832.	E. Gardner—Dante's Ten Heavens	1

		Vol.
833.	Balzac—Droll Stories	1
834, 835.	Rabelais—Works	2
836.	Fugene Benson—Gaspara Stamps...	1
837.	Juan Valera—Pepita Jimenez...	1
838.	A. Chamisso — Peter Schlemihl, the Shadowless Man	1
839.	Little Flowers of St. Francis of Assi...	1
840.	The Pocket Ibsen	1
841.	Amiel's Journal	1
842, 843.	Maeterlinck—Plays	2
844.	„ Ruysbroeck and the Mystics	1
845.	„ Aglavaine and Selisette	1
846–866.	Sacred Books of the East	21
867.	Nalopakhyanam—Story of Nala	1
868.	Buddhism in Translations	1
869.	Kalilah and Dimnah, or the Fables of Bidpai ...	1
870–873.	Mahabharata of Krishna-dwaipayana Vyasa ...	4
874–877.	Jataka Fables	4
878.	A Classical Dictionary of Hindoo Mythology ...	1
879.	The Baital Pachisi, or Twenty-five Tales of a Demon	1
880.	Oriental Annual 1839	1
881.	Oriental and Linguistic Catalogue	1
882–883.	Max Müller—Sacred Books of the Buddhist ...	2
884.	„ Biographical Essays	1
885.	Rhys Davids—Buddhism	1
886.	R. Spence Hardy—A Manual of Buddhism ...	1
887.	„ Eastern Monarchism	1
888.	Paul Pierret—Le Livre des Morts	1
889.	„ Le Panthéon Egyptien	1
890.	Max Muller—Systems of Indian Philosophy ...	1
891–892.	Samuel Beal—Buddhist Records	2

		Vol.
893.	Samuel Beel — Texts of the Buddhist Canon, Dhammapada	1
894.	Olcott—A Buddhist Catechism	1
895.	Nanjo Fumio—A Short History of Twelve Japanese Buddhist Sects	1
896.	E. J. Eitel—Three Lectures on Buddhism	1
897.	" Handbooks of Chinese Buddhism ...	1
898.	Buddhism	1
899–902.	Pamphlets on Buddhism (Edmunds and others)...	4
903.	Rhys Davids— Yogavacara's Manual of Indian Mysticism	1
904.	" Buddhist Birth Stories	1
905.	Weather Proverbs	1
906.	The Moallakat or Seven Arabian Poems	1
907–909.	Arabian Nights	3
910–924.	J. C. Margus—Le Livre des Mille Nuits et Une Nuit	15
925.	Mai-Yu Lang-Tou-Tchen-Hoa-kouei	1
926.	J. Arene—La Chine, Familliere	1
927.	Le Livre des Recompenses et des Peines	1

Natural Science

928–936.	Huxley—Collected Essays	9
937–953.	International Scientific Series...	17
954.	Huxley—Physiography	1
955.	" Lessons in Elementary Physiology ...	1
956–960.	Darwin's Works	5
961, 962.	Haeckel—History of Creation	2
963, 964.	John Fiske—Outline of Cosmic Philosophy	2
965.	" Unseen World	1
966.	" Critical Period of American History	1
967.	" Excursions of an Evolutionist ...	1

		Vol.
968.	John Fiske—Beginnings of New England	1
969.	,, Myth and Myth-makers	1
970.	,, Civil Government in U. S. A. ...	1
971.	,, The Idea of God	1
972.	,, The Destiny of Man	1
973, 984.	The Humboldt Library of Science	12
985	Tait—Recent Advances in Physical Science ...	1
986, 987.	Hinton—Scientific Romances...	1
988.	Wallace—Darwinism	1
989.	,, The Wonderful Century	1
990, 991.	Haeckel—Evolution of Man	2
992.	,, Riddle of the Middle Ages	1
993.	,, Epidemics of the Universe	1
994.	Marsh — The Earth as Modified by Human Action	1
995.	Aldous—Physics	1
996.	Humboldt—Views of Nature...	1
997, 998.	J. Beckmann—A History of Inventions, Discoveries and Origins	1
999–1004.	The Cambridge Natural History	6
1005.	Natural History of Selbourne...	1
1006.	P. Lowell—Mars	1
1007.	,, The Solar System	1
1008.	Flammarion—Astronomy Populaire	1
1009.	Pouchet—The Universe	1
1010.	Howard—Insect Book	1
1011.	Holland—Butterfly Book	1
1012.	Blanchan—Nature's Garden	1
1013.	,, Birds that Hunt and Are Hunted ...	1
1014.	Beddard—Mammalia	1
1015.	Romaness—Mental Evolution in Animals	1
1016.	Clarence M. Weed—Nature Biographies	1

		Vol.
1017.	Step—Plant Life	1
1018.	Howard—Mosquitoes	1
1019–1022.	Buckland—Curiosities of Natural History	4
1023.	Wallace—Natural Selection	1
1024.	„ Island Life	1
1025.	„ The Malay Archipelago...	1
1026.	G. Allen—Flowers and their Pedigrees	1
1027.	„ Flashlights on Nature	1
1028.	Robinson—In my Indian Garden	1
1029.	Suckley—Through Magic Glasses...	1
1030.	„ Fairy Land of Science	1
1031.	„ Life and Children	1
1032	„ Winners in Life's Race...	1
1033.	Fabre—Insect Life	1
1034.	Lubbock—British Wild Flowers	1
1035.	„ Origin and Metamorphoses of Insects	1
1036.	Louis Figuier—Primitive Man	1
1037.	„ Mammalia	1
1038.	Badenoch—Romance of the Insect World	1
1039.	Miall—Aquatic Insects	1
1040.	Midart—Elementary Insects	1
1041.	Chevreu—On Colour	1
1042.	Geikie—Physical Geography	1
1043.	Lockyer—Astronomy	1

Language

1044.	Skeat—Primer of English Etymology...	1
1045, 1046.	„ English Etymology	1
1047.	Craik—English Prose, 19th Century	1
1048.	Bardsley—English Surnames...	1
1049.	Sydney Lanier—Science of English Verse... ...	1
1050.	Orthometry	1

		Vol.
1051.	O. F. Emerson—A Brief History of the English Language	1
1052.	Henry Bradlet—Making of English	1
1053.	John Forsyth—Practical Elocutionist	1
1054.	Brachet—Etymological French Dictionary	1
1055.	Smith—Smaller English-Latin Dictionary	1
1056.	Grammar of French Grammars	1
1057–1064.	Baldwin's Readers	8
1065.	Campbell—Higher English	1
1066–1068.	Macmillan's Progressive French Course	3
1069–1071.	The Teacher's Companion to the Above	3
1072–1076.	Dening—English Readers	5
1077–1086.	Macmillan's Literary Readers...	10
1087–1089.	Sonneschein and Michael John—English Method of Teaching to Read	3
1090.	Nesfield—English Grammar, Past and Present ...	1
1091.	" Historical English and Derivation ...	1
1092.	" Senior Course of English Composition	1
1093.	" Errors in English Composition	1
1094, 1095.	Ollendorf—Spanish...	2
1096.	Public School Latin Grammar	1
1097.	Sweet—Anglo-Saxon Primer...	1
1098.	Morris—Historical English Grammar	1
1099.	Harper's Fifth Reader	1
1100.	Anthon—Latin-English and English-Latin Dictionary	1
1101.	Globe Readings	1
1102.	M. S. Aldis—The Great Giant Arithmos	1
1103.	Bradshaw—A Course of Easy Arithmetical Examples	1
1104.	J. M. Rice—The Rational Spelling Book	1
1105.	Club Concordia—Bücher-Verzeichnis	1

		Vol.
1106.	Italian Life in Town and Country	1
1107.	Dutch Life	1

French Books

1108–1158.	Balzac	51
1159–1179.	Anatole France	21
1180–1201.	Pierre Loti	22
1201.	,, Le Mariage de Loti	1
1203–1252.	Michelet	50
1253.	Leopardi—Poésies	1
1254–1256.	Racine	3
1257, 1258.	Tolstoi	2
1259, 1260.	Tolstoi	2
1261, 1262.	M. Gorki	2
1263, 1264.	Maupassant	2
1265, 1266.	Alfred de Musset	2
1267–1269.	Andre Bellesort	3
1270.	Louis Bouilhet—Poésies...	1
1271.	Paul de Saint Victor—Hommes et Dieux	1
1272.	Beaumarchai—Le Mariage de Figaro	1
1273–1281.	Alphonse Daudet	9
1282.	,, Port Tarascon	1
1283.	Dannunzio—Triomphe de la Mort	1
1284.	Merejkowsky—La Resurrection	1
1285.	Flammarion—Uranie	1
1286.	Demolins—A Quoi tient la Supériorité des Anglo-Saxons	1
1287.	Ludovic Halévy—Karikari	1
1288–1307.	Jules Lemaitre	20
1308.	Verlaine—Choix de Poésies	1
1309–1312.	Anthologie des Poètes Francais du XIXème Siécle	4
1313.	Bouinais et Paulus—Le Culte des Morts	1

		Vol.
1314.	Coulanges—La Cite Antique...	1
1315.	E. Rostant	1
1316.	Coarney les Anciennes Villes de Nouveaux Monde	1
1317.	Atlas de Geographie Militaire	1
1318–1357.	Victor Hugo	40
1358.	Jules le Maitre	1
1359.	Chanson de Béranger	1
1360–1361.	Maspero—Histoire Ancienne...	2
1362, 1363.	T. Bentzon	2
1364, 1365.	Taine...	2
1366–1370.	,, ...	5
1371–1383.	H. Heine	13
1384–1386.	Molière	3
1387, 1388.	Boileau	2
1389–1391.	Paul et Saint Victor—Les Deux Masques	3
1392–1396.	Sacher-Masoch	5
1397–1402.	Jusserand—Histoire Littéraire du Peuple Anglais	6
1403, 1404.	D'Apulée	2
1405, 1406.	Anthologie Grecque	1
1407.	Poètes D'Aujourd'hui 1880–1900...	1
1408.	Dostoievsky—Les Etapes de la Folie	1
1409.	André Theuriet—Contes de la Majolaine	1
1410.	Longus—Daphnis et Chloe	1
1411.	Renan—Dialogues et Fragments	1
1412.	Bunetiérre—L'Art et la Morale	1
1413.	C. Nodier—Nouvelles	1
1414.	Bazalgette—Le Problème de L'Avenir Latin ...	1
1415, 1416.	Voltaire	2
1417.	W. Van der Vlugt—Pour la Finlande...	1
1418, 1419.	Cahier de Couriers	2
1420.	Causeries d'un Savant	1
1421.	José—Marine de Heredia	1

		Vol.
1422.	Paul Bourget—Voyageuses	1
1423.	Custave Mathieu—Parfums, Chants et Couleurs...	1
1424, 1425.	C. Baudelaire	2
1426.	V. Hugo—Les Chansons	1
1427, 1428.	V. Hugo—Les Quatre-Vents...	2

Miscellaneous

1429–1512.	Riverside Literrture Series (Smaller)	84
1513–1526.	„ (Larger)	14
1527.	C. Graham—The Ipane...	1
1528.	Hugh Clifford—In a Corner of Asia	1
1529.	C. Dibdin—Songs	1
1530.	Dalmon—Song Favours...	1
1531, 1532.	Shienkiewicz—The Knights of the Cross	2
1533.	Mary Fenollosa—Out of the Nest	1
1534.	Albert J. Edmunds—Hymns of the Faith (Dhammapada)	1
1535.	Claude F. Bragdon — The Golden Person in the Heart	1
1536.	Oscar Loew— The Energy of Living Protoplasm	1
1437.	Clwer Hertford—Artful Anticks	1
1538.	Exposition Reginal Filipins	1
1539.	The Victorian Anthology	1
1540.	Steidhen—L'Insurrection de Shimabara	1
1541.	Whim.	1
1542.	The Philistine	1
1543.	Hana, a Daughter of Japan	1
1544.	Aesop—Fables...	1
1545.	Andersen—Tales	1
1546.	Olive Shreiner—A Story of an African Farm ...	1
1547.	Mill—Subjection of Women	1
1548.	Shakespeare—Measure for Measure (Rolfe)... ...	1

Vol.

1549. Anton M. Jenson—Ere Life's Garden Lost ... 1
1550. Kingsley—The Greek Heroes 1
1551. Notes for the Guidance of Authors 1
1552. M. Challaye—La Distribution des Prix 1
1553. 200 Jeux d'Enfants... 1
1554–1556. Songs of England 3
1557. A Dally—Les Armées Etrangères 1
1558. Los Amorios de Juana 1
1559. Finlande Pittoresque 1
1560. Earnest Crosby—Edward Carpenter 1
1561. Carlyle—Sartor Resurtus 1
1562. J. W. Lloyd—Dawn Thought 1
1563. Croque-Mitaine—Legende Héroïque, Contée par Quatrelles, Illustrée par G. Doré 1

Dictionaries

1564. Dictionary Terms 1
1565. Brown—Grammar of English Grammars 1
1566. Hepburn — Japanese-English-Japanese Dictionary 1
1567. Seoane—Spanish Pronouncing Dictionary 1
1568. Harper—Latin Dictionary 1
1569. Webster—International Dictionary 1
1570. Cassel—French-English and English-French Dictionary 1
1571. Brewer—Dictionary of Phrase and Fable 1
1572. Satow—English-Japanese Dictionary 1
1573. Roget—Thesaurus of English Words 1
1574. Satow—English-Japanese Dictionary of the Japanese Language 1
1575. Skeat An Etymological Dictionary of the English Language I
1576. Brewer—Readers' Handbook... 1

	Periodicals	Vol.
1577.	Statesman's Year Book	1
1578, 1579.	Whitaker's Almanac	2
1580–1583.	Russo-Japanese War	4
1584, 1585.	Buddhism	2
1586–1599.	Review of Reviews (America)	14
1600–1611.	The World's Work	12
1612–1627.	Atlantic Monthly	16
1628–1631.	Revue de Paris	4
1632–1681.	Transactions of the Asiatic Society of Japan	50

French Book

(Collected during New Orleans Days)

1682–1724.	Bibliothèque Orientale Erzevirienne	43
1125–1747.	Littérature Populaire	23
1748–1762.	Maupassant	15
1763–1773.	Gautier	11
1774–1776.	Flaubert	3
1777–1781.	Loti	5
1782–1784.	Tourgueneff	3
1785.	„ Mémoires d'un Seigneur Russe	1
1786–1789.	Dozy—Histoire de Musulmans D'Espagne	4
1790–1792.	Tolstoi	3
1793.	Les Cosaques	1
1794–1798.	Proeper Mérimée	5
1799–1803.	Michelet	5
1804, 1805.	Grimm—Traditions Allemandes	2
1806, 1807.	Zola	2
1808, 1809.	Sébillot—Légends de la Mer	2
1810, 1811.	Dozy—Histoire de la Littérature de L'Espagne	2
1812–1815.	Fontaine—Histoire Universelle	4
1816–1822.	Voltaire	7

		Vol.
1823.	Balzac—Les Contes Drolatiques	1
1824.	Maupassant—Mont Oriol	1
1825–1833.	Talmud	9
1834–1836.	Dostoievsky	3
1837, 1838.	Histoire de la Médècine Arabe	2
1839.	Perse—Juvédal...	1
1840–1842.	Alfred de Musset	3
1843.	Prevost—Manon Rescault	1
1844, 1845.	Paul Regnard—Mythologie Zoologique	2
1846, 1847.	Contes Cruels	2
1848, 1849.	Chants Populaires des Serviens	2
1850–1854.	Bibliothèque Orientale	5
1855, 1856.	Melusine	2
1857, 1858.	Catulle—Les Poésies de Catulle	2
1859, 1860.	Zaborowsi—Origines	2
1861.	Le Folklore de L'Île Maurice	1
1862, 1863.	A. Reville—Les Religions des Peuples Mon-civilisés	2
1864.	Léon Gautier—La Chanson de Roland	1
1865, 1866.	La Finlande	2
1867.	Alfred Barbou—Victor Hugo et son Temps ...	1
1868, 1869.	Angelo de Gubernatis—La Mythologie des Plantes	2
1870, 1871.	Carlo Landberg—Proverbs et Dictions du Peuple Arabe	2
1872.	Winckelman—Vol. 2	1
1873, 1874.	Les Cent Nouvelles	2
1875, 1876.	Gogol	2
1877.	Zola—Germinale	1
1878.	Flammarion—Mondes Imaginaires et Les Mondes Réels	1
1879.	Maspero — Histoire Ancienne des Peuples de L'Orient	1

		Vol.
1880.	Emille Verhaeren—Poèmes	1
1881.	Anatole France—Clio	1
1882.	Michelet—La Femme	1
1883.	Daudet—Lettres de mon Moulin	1
1884.	La Fontaine—Contes	1
1385.	Récits Creoles	1
1886.	Les Aventures d'Antar	1
1887.	Le Mahabharata	1
1888.	Le Kalevala	1
1389.	Huysmans—En Ménoge...	1
1890.	Mirabeau—Le Calvaire	1
1891.	Anthologie Arabe	1
1892.	De Stendhal—De L'Amour	1
1893.	Ovid—L'Art D'Aime	1
1894.	Jules Lemaître—Dix Contes...	1
1895.	A Book of French Song for the Young	1
1896.	Perron—Femmes Arabes	1
1897.	Dumas—La Vie Arabe	1
1898.	Percival—Les Principaux Musiciens Arabes ...	1
1899.	Les Antilles	1
1900.	Les Races Sauvages	1
1901.	Le Diwan d'Armro 'Lkais	1
1902.	Garnier—Voyage d'Exploration en Indo-Chine...	1
1903.	Goethe—Faust...	1
1904.	Races et Nations	1
1905.	L. Cruveilhier—Hygiène et Médecine	1
1906.	Leon Brother—La Terre et L'Air	1
1907.	Jules Bastide—La Réforme	1
1908.	Robinet—Philosophie Postive...	1
1909.	La Prusse et L'Italie	1
1910.	Catalan—Astronomie et Geographie	1
1911.	Fillias—L'Algérie	1

		Vol.
1912.	Charles Richard—Astronomie	1
1913.	Frederick Morin—La France au Moyen Age ...	1
1914.	G. Delawney—Histoire Naturelle du Devot ...	1
1915.	Lettres de Mll. de Lespidasse	1
1916.	Victor Tissot—Russes et Allemands	1
1917.	Heine—Poèmes et Légendes	1
1918.	Aicard—Poèmes de Provence	1
1919.	Oriental and Liguistic Catalogues...	1
1920.	Saint-Hilaire—Le Buddha et sa Religion	1
1921.	Julien Tiersot—Histoire de la Chanson Populaire en France	1
1922.	Renan—Le Cantique des Cantiques	1
1923.	Les Chants Historiques de 'Ukraine	1
1924.	Senart—Légendes des Buddha	1
1925.	Voyage au Ouaday...	1
1926.	Jusserand—Le Romain au Temps de Shakespeare	1
1927.	Basset—Contes Arabes	1
1928.	Mahomet et le Coran	1
1929.	Le Coran	1
1930.	Theodore de Banville—Mes Souvenirs...	1
1931.	Les Niebelungen	1
1932.	Sacher-Masoch—Sascha et Aschka	1
1933.	Physiologie du Goût	1
1934.	E. Daumas—Les Chevaux du Sahara...	1
1935.	Quatre Années au Congo	1
1936.	Baudlaire—Petits Poèmes en Prose	1
1937.	Mendes—Monstres Parisiens	1
1938.	Almanach des Traditions Populaires	1
1939.	Flammarion—Les Terres du Ciel...	1
1940, 1941.	Maxim du Camp—Souvenirs Littéraires	2
1942.	La Bhagavad Gita	1
1943.	Hanoteau—Grammaire Tomachek	1

		Vol.
1944.	Caius Velleius Paterculus	1
1945.	P. Pierret—Le Panthéon Egyptién	1
1946.	Histoire Generale des Races Humaines...	1
1947.	Osman Bay—Les Imans et les Derviches... ...	1
1948.	Les Mœurs des Indo-Chinois	1
1949.	P. A. Lesson—Vanikoro et ses Habitants... ...	1
1950.	St. Edme—Dictionnaire de la Penalite	1
1951.	Code des Jesuites	1
1952.	Le Romancero du Pays Basque	1
1953.	La Bibliographie de L'Escrime	1
1954.	Rameau—Une Colonie Féodale en Amérique ...	1
1955.	M. Pasteur—Histoire d'un Savant	1
1956.	Contes Populaires de la Senegambie	1
1957.	A. Réville—Histoire des Religions	1
1958.	Pantchatantra ou les Cinq Livres...	1
1959.	Barzar Breiz — Chants Populaires de la Britanne	1
1960.	Poèsies Magyares	1
1961.	Les Romains d'Orient	1
1962.	David—La Langue Grecque Moderne...	1
1963.	A. De Quatrefages—Hommes Fosiles et Hommes Sauvages	1
1964.	Caroin de Tassy— Allégories de L'Arabe, du Persan, etc.	1
1965.	L'Algérie Traditionelle	1
1966.	Hermes Trismegiste	1
1967.	F. Mistral—Oeuures	1
1968.	Les Faux Demetrius	1
1969.	Mercier—Saint-Ybars	1
1970.	A. C. Moreau de Jonnés—L'Océan des Anciens	1
1971.	Gérald de Nerval—Les Filles de Feu...	1
1972.	Bassaic—Patois Créole	1
1973.	Biart—Les Aztéques	1

		Vol.
1974.	Hugo Schuchardt—Kreolischen Studien	1
1975.	Trente Stances du Bhamini-Vilasa	1
1976.	Gerard Nerval—Voyage en Orient	1
1977.	Diedrot—La Religieuse	1
1978.	Mantique Uttair, ou Le Langage des Oiseaux ...	1
1979.	Le Diwan de Nabiga Dhobyani	1
1980.	Les Saints de L'Islam	1
1981.	Dictionnaire Etymologique des Mots Français d'Origine Orientale	1
1982.	Bidasari—Poème Malais...	1
1983.	Luzel—Veillées Bretonnes	1
1984.	R. Dozy—Glossaire des Mots Espagnols et Portugais dérivés de L'Arabe...	1
1985.	L'Ethnographie Générale	1
1986.	P. L. Jacob—Vaux-de-Vire D'Olivier Basselin et de Jean le Houx...	1
1987.	Léon Rodet—La Littérature Javanaise	1
1988.	Zaborowski—Les Grands Singes	1
1989.	Le Monde des Plantes	1
1990.	Paul Meyer—Girart de Rousillon...	1
1991.	A. Reville — Les Religions du Mexique, de L'Amérique et du Pérou	1
1992.	L. Collas —Histoire de L'Empire Ottoman... ...	1
1993.	Eugene Peletan—Décadence et Révolutions ...	1
1994.	Poésies Populaires du Sud de L'Inde	1
1995.	Introduction à L'Histoire de Cayenne...	1
1996.	Vies de Dames Gallnts	1
1997.	Le Sahara Algérien	1
1998.	Léon Gautier—La Chanson de Roland	1
1999.	Henri Duveyrier—Les Touarges du Nord	1
2000.	Mémoires sur les Noms Propre et les Titres Musulmans	1

		Vol.
2001.	Théodore Pavie — Choix de Contes et Nouvelles	1
2002.	Sauzay—La Verrerie	1
2003.	Buchez—Histoire de la Formation de la Nationalité Français	1
2004.	Vinsor et Leon De Rosny — L'Inde Français et les Etudes Indiennes	1
2005.	Charles Yriarte—Française de Remini	1
2006.	Les Scènes de Haidari	1
2007.	Lucien Adam —Du Parler des Hommes et du Parler des Femmes dans la Langue Caraibe...	1
2008.	Mémoire de la Religion Musulmane dans L'Inde	1
2009.	Vigeant — Un Maitre d'Armes sous la Restauration	1
2010.	A. L. Apudy—Anthologie Erotique d'Amarou...	1
2011.	Brosselard—Voyage de la Mission Flatters ...	1
2012.	A. Tourmagne—Histoire de Servage	1
2013.	H. Fauche—Le Govinda et le Ritou Sanhara ...	1
2014.	Pirret—Les Livres des Morts	1
2015.	Planches—Voyage au ouaday	1
2016.	Contes et Apologues Indiens...	1
2017.	„ „	1
2018.	Flammarion—La Pluralité des Mondes Habités...	1
2019.	France D'Outre-Mer	1
2020.	Renan—Le Livre de Job	1
2021.	Les Peuplades de la Senegambie...	1
2022.	Le Kalevala	1
2023.	Le Kalevala	1
2024.	Les Cent Nouvelles	1
2025–2033.	Spencer	9
2034.	Taine—English Literature	1
2035–2039.	Longfellow—Poems of Places	5
2040.	Molluscs and Brachiopods	1

Addenda

		Vol.
2041.	The Holy Bible	1
2042, 2043.	John Fiske—Outlines of Cosmic Philosophy ...	2
2044.	Bret Harte—Poetical Work	1
2045.	Grant Allen—Physiological Aesthetics...	1
2046.	Green — A Short History of the English People	1
2047.	Spencer—Data of Ethics	1
2048–2063.	Writings of Lafcadio Hearn	16
2064, 2065.	Interpretation of Literature	2
2066.	Appreciations of Poetry...	1
2067.	Life and Literature...	1
2068.	Essays in European and Oriental Literature ...	1
2069.	Talks to Writers	1
2070, 2071.	Shinkoku Japan (in Manuscript)	2

	書名	冊數
1.	騷動實記	1
2.3.	通俗三國志	2
4.	膝栗毛	1
5.6.	南總里見八犬傳	2
7.	源平盛衰記	1
8—11.	眞書太閤記	4
12—14.	珍本全集	3
15—16.	人情本傑作集	2
17.18.	其磧自笑傑作集	2
19.	大岡政談	1
20.	俠客傳全集	1
21.22.	滑稽名作集	2
23.24.	西鶴全集	2
25.	通俗吳越軍談、通俗漢楚軍談	1
26.	淨瑠璃名作集	1
27.	馬琴傑作集	1
28.	仇討小說集	1
29.	佛教各宗高僧實傳	1
30.	近松時代淨瑠璃	1
31.	近松世話淨瑠璃集	1
32.33.	四大奇書	2
34.	水滸傳	1
35.	落語全集	1
36.37.	日本歌謠類聚	2
38.	俗曲大全	1
39—43.	當日奇觀	5
44—48.	翁草	5
49—53.	猿著聞集	5

	書　　名	冊數
54.55.	白石先生鬼神論	2
56—61.	玉すだれ	6
62—71.	繪本寫寶袋	10
72.	新選百物語	1
73—77.	列仙全傳	5
78—85.	夷堅志	8
86.87.	古事大全	2
88.	怪談諸國物語	1
89—96.	遠山奇談	8
97—101.	新沙石集	5
102—107.	北越奇談	6
108—113.	古今奇談繁野話	6
114—119.	三歳因緣辨疑	6
120—129.	小夜嵐物語	10
130.	郡名異同一覽	1
131—138.	新著聞集	8
139—143.	百物語評判	5
144.	神恩記	1
145.146.	歌舞音樂略史	2
147—151.	繪本二島英勇記	5
152.	怪化百物語	1
153.154.	今昔物語	2
155—157.	古今妖魅考	3
158—160.	梅花心易掌中指南	3
161—170.	木耳雜話	10
171.172.	夜窓鬼談	2
173—186.	正法念處經	14
187.	盆供施餓鬼問辨	1

	書　　名	冊數
183 191.	近代百物語	4
192—203.	日本百將傳一夕話	12
204—208.	怪物輿論	5
209.	出雲大社造營沿革圖辨	1
210—212.	往生要集	3
213—215.	狂歌百物語	3
216—220.	臥遊奇談	5
221—235.	古今著聞集	15
236.	諸國怪談實記	1
237.	百物語	1
238. 239.	孝子善之丞感得傳	2
240—242.	佛教百科全書	3
243. 244.	富士の人穴物語	2
245—250.	聲曲類纂	6
251—253.	十訓抄	3
254—258.	北國巡杖記	5
259—263.	長崎夜話草	5
264.	神語	1
265—272.	除睡抄	8
273—275.	化競丑滿鐘	3
276.	大道問答	1
277—283.	北越雪譜	7
284—289.	善惡因果經和談圖會	6
290—294.	怪異前席夜話	5
295—299.	相生玉手箱	5
300.	諸陀羅尼	1
301—306.	群書一覽	6
307—316.	近世畸人傳及續編	10

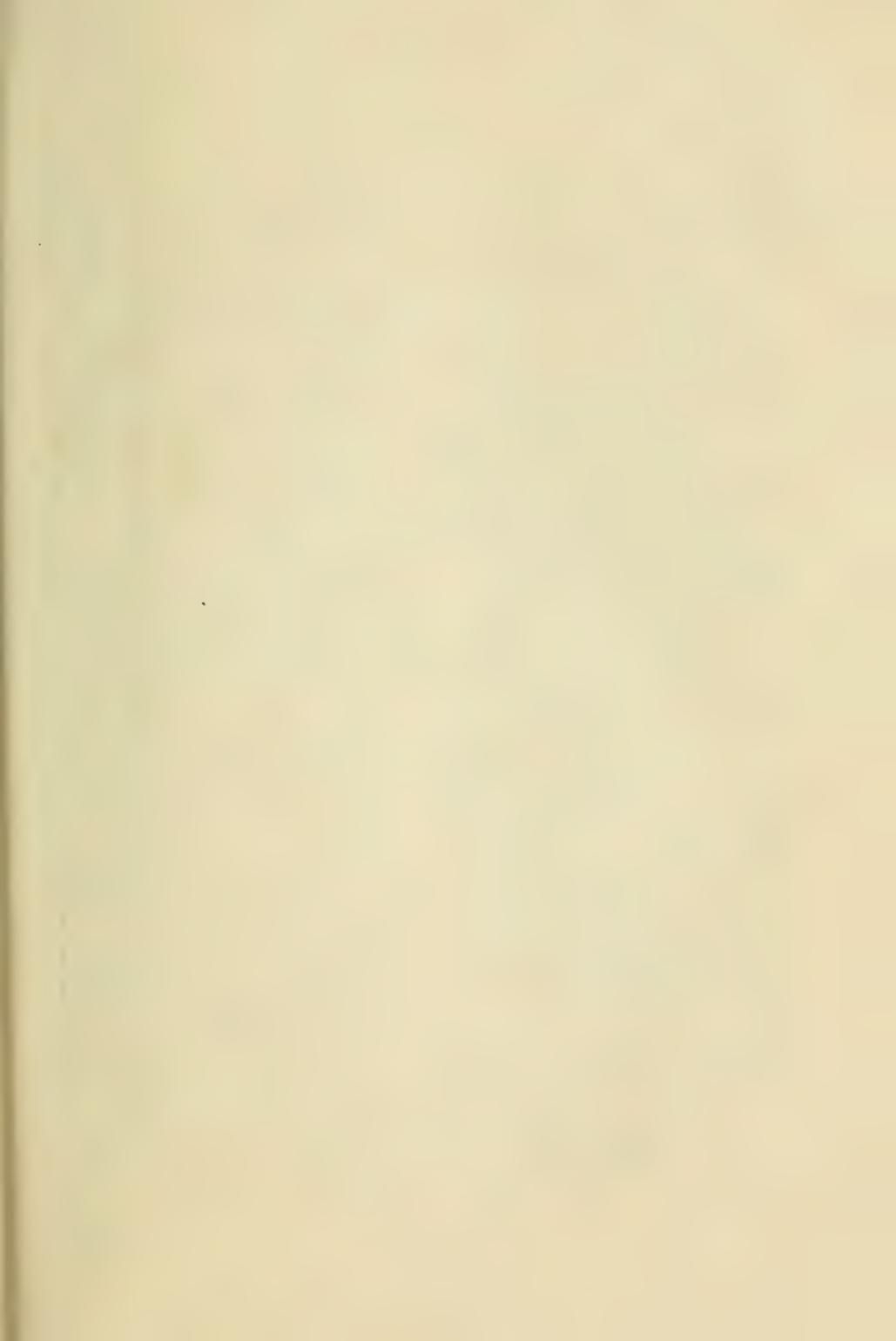
書　名	冊數
317. 318. 用捨箱	2
319. 諸国宿直草	1
320—329. 沙石集	10
330—333. 骨董集	4
334—337. 世事百談	4
338—342. 想山著聞奇集	5
343. 親鸞上人御一代記圖會	1
344—348. かさね物語	5
349—354. 金毘羅参詣名所圖會	6
355. 356. 宇治拾遺物語抄	2
357—361. 近世異說奇聞	5
362. 王心鈔	1
363. 螢の話	1
364—367. 各宗必携佛學三書	4
368. 土井晩翠譯 カーライル英雄論	1
369. 小林文七 浮世繪展覽會目錄	1
370—372. 日本大玉篇	3
373. 太平百物語	1
374. 御伽厚化粧	1
375. 朝鮮人大行列記	1
376. 琉球人大行列記	1

合　計

洋書　二千七十一冊

和書　三百七十六冊

總　計

二千四百四十七冊

年譜（生涯、著作及び遺稿）

一八五〇年六月二十七日　ギリシヤ、リユカディアに生る。
一八五一年七月　愛蘭土に歸る。
一八五六年　父母離婚。
一八六三年九月　英國アショウ學門に入學。
一八六六年　アショウ學校退學。
一八六七年（?）　佛國イーヴトウ學校に入學。
一八六九年　渡米、ニユヨーク著。
一八七四年　『シンシナーティ・インクワイラー』の記者となる。
一八七四年六月　日曜新聞『イー・ジグラムプス』を刊行して八號まで續く。
一八七六年　『シンシナーティ・コムマーシアル』へ轉勤。
一八七七年十月　シンシナーティを去る。
同年　十一月　ニユ　オルリアンズに著、當分『シンシナーティ・コムマーシアル』へ通信。
一八七八年六月　『デイリー　アイテム』の記者となり、後副主筆となる。
一八七九年三月　小料理店開業、直ちに廢業。
一八八一年　『タイムス　デモクラ　ト』社に轉じ、その文學部長となる。
一八八二年　翻譯『クレオパトラの一夜その他』　One of Cleopatra's Nights, and other Fantastic

Romances 出版。

一八八四年　『異文學遺聞』Stray Leaves from Strange Literature 出版。

一八八五年　『ゴムボー・ゼベス』Gombo Zhebes 出版。

同年　『ラ・クジーヌ・クリオール』La Cuisine Creole 出版。

同年　『ニユ・オルリアンズの歴史的スケッチ及び案内記』The Historical Sketch Book and Guide to New Orleans 出版。

一八八五年五月　フロリダ旅行

一八八七年　『支那怪談』Some Chinese Ghosts 出版。

同年六月　ニユ・オルリアンズを去り、ニユヨークに行く。

同年七月　マルティニークへ行く。

同年九月　ニユヨークに歸る。

同年十月　再びマルティニークへ行く。

一八八九年五月　ニユヨークに歸る。フイラデルフイアに行く。

同年　『チタ』Chita 出版。

同年十月　フイラデルフイアよりニユヨークに歸る。

一八九〇年　『ユーマ』Youma『佛領西印度の二年間』Two Years in the French West Indies 翻譯『シルヴエストル　ボンナールの罪』The Crime of Sylvestre Bonnard 出版。

同年三月五日　ニユヨーク出發、モントリール、ヴアンクーヴア線によりて日本に來る。

同年（明治二十三年）四月四日　横濱著。

同年八月　姫路をへて松江に赴任。材木町の宿屋に落ちつく。

同年十月　末次本町に借家。

同年十二月　小泉節子と結婚。

一八九一年（明治二十四年）五月　北堀町鹽見繩手に轉居。

同年八月　杵築の大社、日御崎に參拜、伯耆に遊ぶ。

同年十一月十五日　松江出發、熊本に轉任。手取本町三四に寓居、のち外坪井西堀端町三五に轉居。

一八九二年（明治二十五年）四月　太宰府に遊ぶ。

同年八月　博多、神戸、京都、奈良、門司、境、隱岐、美保關、福山、尾の道に遊ぶ。

一八九三年（明治二十六年）四月　博多に遊ぶ。

同八月　長崎に遊ぶ。

同十一月　長男一雄出生。

一八九四年（明治二十七年）『知られぬ日本の面影』Glimpses of Unfamiliar Japan 出版。

同年四月　金比羅に詣づ。

同年八月　東京に出づ。

同年十一月　熊本を去つて神戸に來る。初め下山手通四丁目七。中頃下山手通六丁目二六、後に中山手通一七に住居。

一八九五年（明治二十八年）『東の國より』Out of the East 出版。

同年春　京都大博覽會見物。

同年十月　京都に遊ぶ。

一八九六年（明治二十九年）『心』Kokoro 出版。

同年二月　伊勢參宮旅行。

同年四月　　京阪地方旅行。
同年八月　　美保の關と松江に遊ぶ。
同年八月二十日　　神戸を去つて東京帝大文學部の講師となるために上京。
同年九月　　市ヶ谷富久町二一に寓居。
一八九七年（明治三十年）　『佛の畠の落穗』 Gleanings in Buddha Fields 出版。
同年二月十五日　　二男巖出生。
　夏、燒津滯留、歸途富士登山。
一八九八年（明治三十一年）　『異國情趣と回顧』 Exotics and Retrospectives 出版。
同年　　夏、鵠沼に遊ぶ。
一八九九年（明治三十二年）　『靈の日本』 In Ghostly Japan 出版。
同年　　夏、燒津に逗留。
一九〇〇年（明治三十三年）　『影』 Shadowings 出版。
同年十二月二十日　　三男淸出生。
一九〇一年（明治三十四年）　『日本雜事』 A Japanese Miscellany 出版。
同年　　夏、燒津に逗留。
一九〇二年（明治三十五年）　『日本お伽噺』 Japanese Fairy Tales 四册出版。
同年　　『骨董』 Kotto 出版。
同年三月十九日　　市外西大久保二六五に新築して移轉。
同年　夏、燒津に逗留。
一九〇三年（明治三十六年）三月　　帝大講師を止む。

同年九月十日　長女壽々子出生。

一九〇四年（明治三十七年）四月より　早稲田大學文學部に出講。

同年　夏、燒津逗留。

同年九月二十六日　逝去。

同年九月三十日　葬式。

同年『怪談』Kwaidan 出版。

同年『日本』Japan : an Attempt at Interpretation 出版。

一九〇五年（明治三十八年）『天の河緣起その外』The Romance of the Milky Way, and Other Studies and Stories 出版。

一九〇六年（明治三十九年）エリザベス・ビスランド（ウェットモア夫人）編『書簡集』二冊 Life and Letters of Lafcadio Hearn 出版。

一九〇八年（明治四十一年）ヘンリー・ワトキン編『鳥の手紙』Letters from the Raven 出版。

一九一〇年（明治四十三年）エリザベス・ビスランド女史編、『日本の手紙』Japanese Letters 出版。

同年　アナトール　フランス『聖アンソニーの誘惑』の翻譯 Temptation of St. Anthony 出版。

一九一一年（明治四十四年）グリーンスレット編『印象派作家の日記』Leaves from the Diary of an Impressionist 出版。

一九一四年（大正三年）ハットソン編『氣まぐれその外』Fantastics and Other Fancies 出版。

一九一五年（大正四年）アースキン編講義筆記『文學の解釋』二冊 Interpretations of Literature 出版。

一九一六年（大正五年）アースキン編講義筆記『詩の鑑賞』Appreciations of Poetry 出版。

一九一七年（大正六年）アースキン編講義筆記『人生と文學』Life and Literature 出版。

一九二一年（大正十年）　モーデル編『因果』Karma and Other Stories and Essays 出版。
一九二二年（大正十一年）　日本お伽噺 The Fountain of Youth 日本東京長谷川出版。
同年　ハウトン・ミフリン書肆より全集 The Writings of Lafcadio Hearn 十六冊出版。
同年　『神戸クロニクルの社說』マックドーナルドによりて出版。
一九二三年（大正十二年）モーデル編、『東西文學評論』 Essays in European and Oriental Literature 出版。
一九二四年（大正十三年）　モーデル編、マウ・パッサン飜譯 St. Anthony and Other Stories 出版。
同年　モーデル編『アメリカ雜纂』An American Miscellany 出版。
一九二五年（大正十四年）　モーデル編『西洋落穗』Occidental Gleanings 出版。
同年　市河三喜編『小泉八雲書簡集』Some New Letters of Lafcadio Hearn 出版。
一九二六年（大正十五年）　ハットソン編『社說』Editorials 出版。
一九二七年（昭和二年）落合・田部共編講義筆記、英文學史二冊 History of English Literature 日本東京北星堂出版。
同年　講義筆記、田部編『英文學畸人傳』　Some Strange Literary Figures in the Eighteenth and Nineteenth Centuries 北星堂出版。
一九二八年（昭和三年）　講義筆記、稻垣編『沙翁論』Lectures on Shakespere 北星堂出版。
一九二九年（昭和四年）　講義筆記、落合編『作詩論』Lectures on Prosody 北星堂出版。
一九三〇年（昭和五年）　講義筆記、田部編『ヴィクトリア朝思想』Lectures on Victorian Philosophy 北星堂出版。
同年　モーデル編『アメリカ文學論』Essays on American Literature 北星堂出版。

附記

コロムビヤ大學のアースキン教授は講義筆記の大冊四卷を出版したのち、さらに Talks to Writers (1920) Books and Habits (1921) Pre-Raphaelite and Other Poets (1922) の三冊（四六版）を出版したが、何れも前記四卷のうちから、別の分類によつて集めたものである、しかし Books and Habits のうちにある十五篇のうち、 The Ideal Woman in English Poetry, The New Ethics, Note on the Influence of Finnish Poetry in English Literature の三篇は新しいものである。

北星堂より出版したものは前記の外に Life and Literature （大正十四年）Stories and Sketches（同年）Lands and Seas（同年）Poets and Poems（大正十五年）Japan and the Japanese（昭和三年）Romance and Reason（同年）Facts and Fancies （昭和四年）がある。これ等は講義筆記からも著作からも取つてあるが、そのうち Stories and Sketches にある『をばさんの話』Poets and Poems にある Poems about Children 及び Sea-Limits の二篇、Romance and Reason にある A King's Romance. それから Facts and Fancies 中の『了然尼』は新しいものである。ただこの『了然尼』は以前ロンドンの日本協會雜誌に現れた。北星堂からは未發表の講義筆記は引き續いてなほ數種出版される筈である。アメリカ時代の新聞にのせた翻譯などもモーデル氏の編纂によつて同じ家から出版される筈である。先生の弟チエームスに與へた手紙（アトランティック・モンスリーに發表されたもの）、及びオスマン・エドワーヅに送つた手紙（日本協會雜誌に現れたもの）は未だ單行本には含まれてゐない。

傳記の方面では私がこの書物の序文に書いたあとで幾種か出たやうである。出雲の根岸磐井氏は『出雲に於ける小泉八雲』（昭和五年）を公けにした。

先生の遺品のかずかずは、その後小泉夫人より松江の八雲會に寄贈された。なほ殘つてゐた數種の原稿は岸精一博士これを小泉家より讓り受けて八雲會へ寄贈した。

小泉家系譜

Daniel James Hearn 曾祖父 牧師
Richard Holmes
Robert 祖父 大佐—Elizabeth Holmes
Sally Brenane
Charles Bush—Rosa Tessima 希臘の女……—Mrs. George Crawford
+1866
(先妻)
(後妻)
Patricio Lafcadio—小泉節子
1850—1904
James
1854—
Mrs. Elizabeth
Mrs. Atkinson
Mrs. Allan
3 children
一雄
巖
清
壽々子
Richard 畫家
Mrs. Elwood
Mrs. Stewart
Miss. Susan 外妹一人

第十二回配本

小泉八雲全集別册

第一回豫約菊判背革裝　大正十五年八月配本開始　昭和三年一月配本完了

第二回豫約菊判總布裝　昭和四年六月配本開始　昭和五年十一月配本完了

第三回豫約學生版　昭和五年十月配本開始　昭和七年三月配本完了

最初申込金五十錢（これは最後の會費に充當）

豫約者に限り毎月一圓五十錢

家庭版【第四回豫約】

昭和十二年十一月十五日印刷

昭和十二年十一月二十日發行

小泉八雲全集刊行會代表

著作者　田部隆次

東京市麹町區三番町一

刊行者　長谷川巳之吉

東京市麹町區三番町一

刊行所　第一書房

振替東京六四二二三

電話九段三三四四

牛込區山吹町一九八

印刷者　萩原芳雄

（家庭版）小泉八雲全集　全十二巻　内容

第一巻
異文學遺聞。
支那怪談。
チタ。ユーマ。

第二巻
佛領西印度の二年間

第三巻（上）
知られぬ日本の面影

第四巻（下）
知られぬ日本の面影

第五巻
東の國から。
心。

第六巻
佛の畠の落穗。
異國情趣と囘顧。
日本お伽噺。

第七巻
靈の日本。
影。
日本雜錄。

第八巻
骨董。
怪談。
天の河緣起。

第九巻
神國日本。

第十巻
文學論。

第十一巻
きまぐれ。
クリーオール小品。
神戸クロニクル社說
隨筆八種。

別册
小泉八雲。